岐阜県文化財保護センター調査報告書　第24集

下　巾　上　遺　跡

国道156号線道路拡幅工事に伴う

緊急発掘調査報告書

1995

建設省　中部地方建設局
岐阜国道工事事務所

財団法人　岐阜県文化財保護センター

（上）下巾上遺跡遠景（航空写真―北東より）
（下）下巾上遺跡近景（航空写真―真上より　左が北）

序

本報告書は、平成６年度に実施した国道156号線道路拡幅工事に伴う事前の発掘調査をまとめたものです。対象は岐阜県美濃市大字松森字下巾上地内に所在する「下巾上遺跡」です。

本遺跡は美濃市と関市の境に位置し、周辺には重竹遺跡や山王遺跡など中世の館跡・集落跡と推定される遺跡が多数存在し、また、近世においては現在の岐阜市と八幡町を結ぶ郡上街道が遺跡付近を通っていました。現代においても遺跡北方で国道156号線と東海北陸自動車道が交差し、交通の要所としての機能が高まっています。

検出された遺構は中世から近世にかけての掘立柱建物12棟、井戸５基、柵列、集石墓、溝、土坑などです。そして、それらの遺構から集落内における建物と柵列、井戸などの在り方、および居住空間と墓域の空間配置などが明らかとなりました。

また、遺跡は周辺に広がる可能性が高く、その全容は明らかではありませんが、この地が中世から現代に至るまで長い間集落として営まれ、歴史的に重要な役割を果たしてきたことは、周辺の遺跡の分布から考えても想像に難くありません。本報告書では周辺地域と本遺跡との関連性を十分に追及できませんでしたが、今後の調査次第では関市から美濃市にかけての中近世集落の在り方、およびそのネットワークが解明されることと思われます。

なお、本報告書が刊行されるまでには、関係諸機関ならびに関係者各位、美濃市教育委員会、関市教育委員会、地元地区の皆様から、終始多大なご援助、ご協力を賜りました。

末尾ではありますが、お世話になりました方々に改めて厚く御礼申し上げます。

平成７年10月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　吉　田　　豊

例　　言

1．本書は美濃市大字松森字下中上地内に所在する下中上遺跡（G27M08717）の発掘調査報告書である。

2．本調査は国道156号線道路拡幅工事に伴うもので、建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は平成6年度に実施し、小野木学が担当した。

4．本書に記載した遺物の実測は次の者が行った。

佐野　康雄・川部　　誠・高島　俊美・権田　絵里・長坂　　薫・竹内　恒子・直井江里子
小田富士子・今尾さち子・国井　悦子・小野木　学

5．実測図等のトレースは次の者が行った。

高嶌　桂子・竹内　恒子・傘木　文恵

6．木製品の写真撮影は武藤貞昭が行い、その他の遺物はスタジオ・ベガに委託して行った。

7．本書の執筆は石器・石製品を佐野康雄が、縄文土器を藤田英博が、その他を小野木学が行った。また、編集は小野木が行った。

8．水準測量、地形測量、空中写真撮影は（株）イビソクに委託して行った。

9．自然科学分析はパレオ・ラボ、財団法人岐阜県公衆衛生検査センターに委託して行った。

10．発掘調査および報告書の作成にあたって次の方々からご助言、ご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、順不同）

高木　宏和・篠原　英政・内堀　信雄・田口　昭二・渡辺　博人・山内　伸浩
横幕　大祐・尾野　善裕・山田　昌久・長瀬　　仁・中川　　一・山内　克典

11．発掘調査作業ならびに調査記録および出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た。

・補助調査員

加藤　君彦・長坂　　薫・権田　絵里・高島　俊美

・発掘作業員

藤川　君子・林　みつえ・古田ときえ・井上さなえ・荻　　佐市・古田　　功
上田　　幹・交告　　馨・山田　敏春・幅　　昭男・渡辺　孝文・平田　　守
高井　清子・市原　常一・後藤　書広・福井八十二・高橋　　章・小野木文代
山口みさと・遠藤麻里子

・整理作業員

浅野紀美代・伊藤　節子・江間香代子・加納　恭子・酒向　邦子・佐藤まさみ
進藤有美子・高嶌　桂子・竹内　恒子・豊田　圭子・服部みどり・山岡　頼美
米津　光枝・小田富士子・直井江里子・傘木　文恵

12．本報告書で使用した土層の色調は財団法人日本色彩研究所 1993『標準土色帖』を目測にて表記した。

13．調査記録および出土品は財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第1節　発掘調査に至る経過……1
　第2節　発掘調査の経過と方法……2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
　第1節　遺跡周辺の地形・立地……3
　第2節　周辺の遺跡……4
第Ⅲ章　層序……7
第Ⅳ章　遺構と遺物……10
　第1節　第2次・第3次遺構面の遺構と遺物……14
　第2節　第1次遺構面の遺構と遺物……70
　第3節　その他の遺構出土の遺物、包含層出土の遺物……89
第Ⅴ章　自然科学分析……115
　第1節　下巾上遺跡のプラント・オパール……115
　第2節　下巾上遺跡の植物遺体群集……118
　第3節　黒色塊および山茶碗付着顔料の蛍光X線分析……122
　第4節　便所様遺構の土壌分析について……124
第Ⅵ章　まとめ……136
　第1節　遺構の変遷について……136
　第2節　遺物について……138
　第3節　まとめ……143

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺の地形
第３図　周辺の主要遺跡
第４図　１区西壁・南壁セクション図
第５図　３区トレンチ・セクション図
第６図　山茶碗、土師皿、鉢・擂鉢分類図
第７図　第２次・第３次遺構面　遺構配置図
第８図　根石・支え石検出状況
第９図　ＳＢ１実測図
第10図　ＳＢ２実測図
第11図　ＳＢ３実測図
第12図　ＳＢ４実測図
第13図　ＳＢ５・６実測図
第14図　ＳＢ７・８実測図
第15図　ＳＢ９実測図
第16図　ＳＢ10実測図
第17図　ＳＢ11実測図
第18図　ＳＢ12実測図
第19図　杭列分布図
第20図　ＳＡ１－１実測図
第21図　杭列実測図
第22図　遺構出土遺物（１）
第23図　遺構出土遺物（２）
第24図　遺構出土遺物（３）
第25図　ＳＥ１実測図
第26図　ＳＥ２実測図
第27図　ＳＥ３実測図
第28図　ＳＥ４実測図
第29図　ＳＥ５実測図
第30図　遺構出土遺物（４）
第31図　遺構出土遺物（５）
第32図　遺構出土遺物（６）
第33図　遺構出土遺物（７）
第34図　遺構出土遺物（８）
第35図　ＳＫ90・91・92・99実測図
第36図　ＳＫ108実測図
第37図　ＳＫ109実測図
第38図　ＳＫ122実測図
第39図　ＳＫ133実測図
第40図　ＳＫ134・135・136実測図
第41図　ＳＫ143実測図
第42図　ＳＸ27・ＳＫ139実測図
第43図　ＳＫ87・ＳＸ28実測図
第44図　ＳＸ30実測図・遺物分布図
第45図　ＳＸ33・36実測図
第46図　遺構出土遺物（９）
第47図　遺構出土遺物（10）
第48図　遺構出土遺物（11）
第49図　Ｐ927実測図
第50図　遺構出土遺物（12）
第51図　溝分布図
第52図　溝セクション図
第53図　遺構出土遺物（13）
第54図　ＳＫ３実測図
第55図　第１次遺構面　遺構配置図
第56図　ＳＫ16実測図
第57図　ＳＫ17・21実測図
第58図　ＳＫ42・46実測図
第59図　ＳＫ73実測図
第60図　Ｆ４グリッド付近遺構実測図
第61図　ＳＸ６実測図
第62図　ＳＸ８・９実測図
第63図　ＳＸ11・24実測図
第64図　ＳＸ17実測図
第65図　ＳＸ20・21・22実測図
第66図　遺構出土遺物（14）
第67図　遺構出土遺物（15）
第68図　遺構出土遺物（16）
第69図　遺構出土遺物（17）
第70図　その他の遺構・包含層出土遺物（１）
第71図　その他の遺構・包含層出土遺物（２）
第72図　その他の遺構・包含層出土遺物（３）

第73図　その他の遺構・包含層出土遺物（４）
第74図　その他の遺構・包含層出土遺物（５）
第75図　その他の遺構・包含層出土遺物（６）
第76図　その他の遺構・包含層出土遺物（７）
第77図　試料採取地点の地質柱状図
第78図　プラント・オパール分布図
第79図　花粉化石分布図
第80図　ＳＸ36出土黒色塊の蛍光Ｘ線スペクトル図
第81図　山茶碗の内面に付着する赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図
第82図　試料採取位置図
第83図　ステロール組成
第84図　脂肪酸組成
第85図　動植物等の脂肪酸組成
第86図　遺構変遷図
第87図　時期別総個体数
第88図　山茶碗個体数
第89図　鉢・擂鉢個体数
第90図　時期別用途組成
第91図　時期別産地組成

表　目　次

第１表　土坑一覧表（１）
第２表　土坑一覧表（２）
第３表　土坑一覧表（３）
第４表　遺構出土遺物破片数（１）
第５表　遺構出土遺物破片数（２）
第６表　遺構出土遺物破片数（３）
第７表　遺構出土遺物破片数（４）
第８表　遺構出土遺物破片数（５）
第９表　遺物計測表（１）
第10表　遺物計測表（２）
第11表　遺物計測表（３）
第12表　遺物計測表（４）
第13表　遺物計測表（５）
第14表　遺物計測表（６）
第15表　木器計測表
第16表　石器計測表
第17表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数
第18表　花粉化石一覧表
第19表　種実一覧表
第20表　ステロール存在部位
第21表　脂肪酸存在部位
第22表　ステロールおよび脂肪酸分析結果
第23表　ステロール組成および脂肪酸組成
第24表　一般性状分析結果
第25表　主成分組成
第26表　時期別総個体数
第27表　山茶碗個体数
第28表　鉢・擂鉢個体数
第29表　時期別用途組成
第30表　時期別産地組成

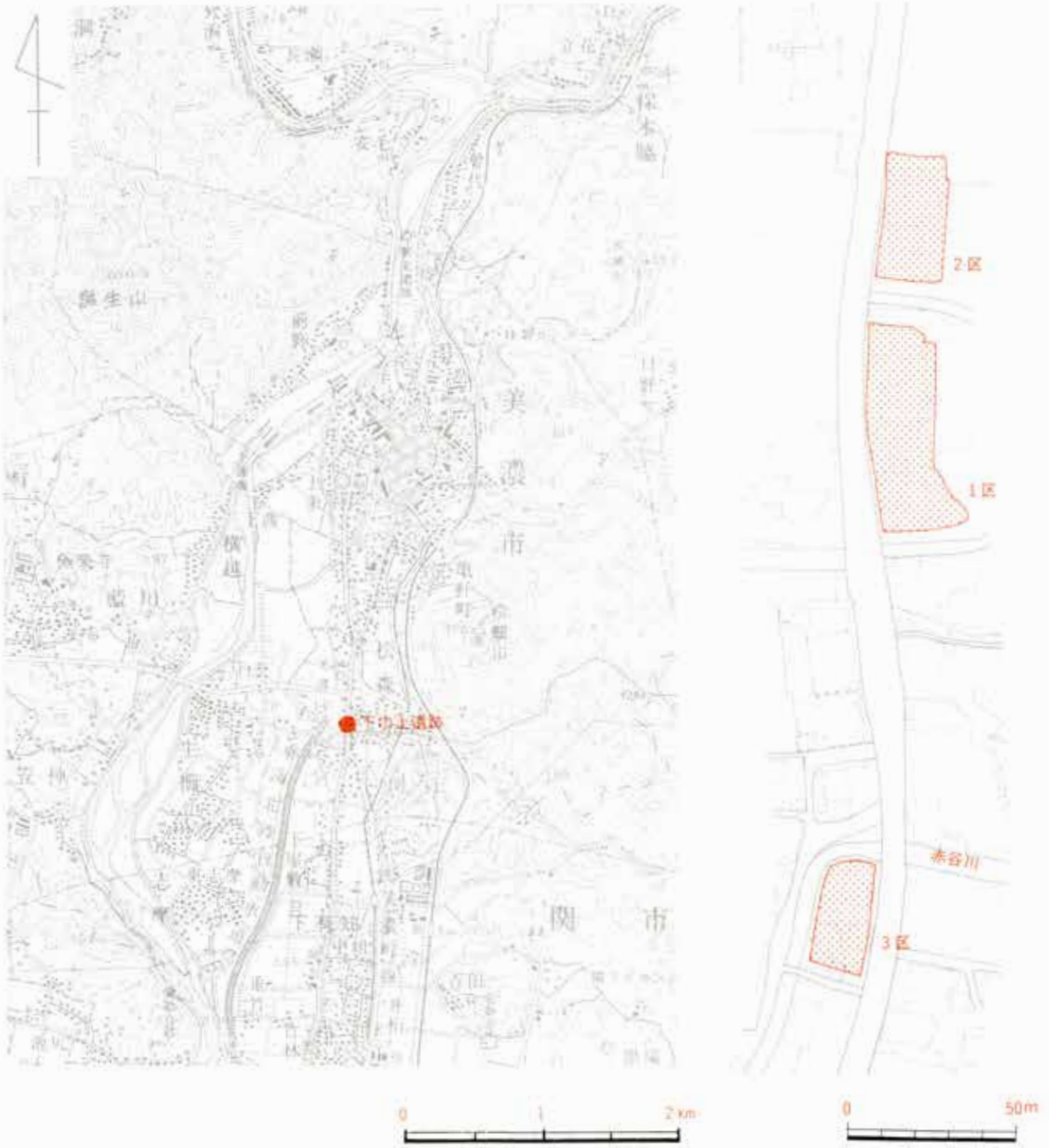
図　版　目　次

図版１　遺跡近景
図版２　第２次・第３次遺構面
図版３　第１次遺構面土坑群
図版４　Ｐ794　柱根・ＳＥ１
図版５　ＳＥ２・ＳＥ３
図版６　ＳＥ４・ＳＥ５
図版７　ＳＫ108・ＳＫ109
図版８　ＳＫ122・ＳＫ133
図版９　ＳＫ143・ＳＸ27・ＳＸ28
図版10　ＳＸ30・ＳＸ33・36・ＳＤ16
図版11　内耳鍋出土状況・ＳＫ３
図版12　ＳＸ６・ＳＸ17・ＳＸ７遺物出土状況
図版13　調査前風景・作業風景
図版14　出土遺物
図版15　出土遺物
図版16　出土遺物
図版17　出土遺物
図版18　出土遺物
図版19　出土遺物
図版20　プラント・オパール
図版21　花粉化石
図版22　花粉化石
図版23　花粉化石
図版24　出土種実
図版25　出土木材樹種の顕微鏡写真
図版26　出土木材樹種の顕微鏡写真
図版27　出土木材樹種の顕微鏡写真

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

下巾上遺跡は美濃市大字松森字下巾上地内に位置する。美濃市は岐阜県のほぼ中央に位置し、古くは郡上街道が通り、高賀街道の起点であった土地である。現在においても一般国道156号線が通り、東海北陸自動車道が昭和61年に岐阜各務原 IC から美濃 IC 間が開通し、平成６年に美濃 IC から美並 IC 間が開通しており、交通の要所となっている。国道156号線は岐阜市内を起点として関市、美濃市、



第１図　遺跡位置図

郡上を経て富山県高岡市内に至る東海と北陸を結ぶ主要幹線道路のひとつである。近年、東海北陸自動車道と交差する美濃 IC 付近の交通渋滞の緩和や通勤、通学の安全性を図るため国道の拡幅工事を行うこととなった。

下巾上遺跡は国道156号線沿いに位置し、改訂版岐阜県遺跡地図（平成２年３月）には記載されていない。国道の拡幅工事に先立ち、岐阜県文化財保護センターが岐阜国道工事事務所からの委託を受け、拡幅工事区域内の遺跡の有無を確認するために試掘調査を平成６年４月21日に行った。その結果遺物包含層および遺構面が確認されたため、新しく認定された遺跡である。

第２節　発掘調査の経過と方法

調査区は赤谷川をはさんで南北に分かれ、さらに北側は市道を挟んで２つに分かれるので、市道の南側を１区、北側を２区、赤谷川の南側を３区として調査を行った。

また、岐阜国道工事事務所より１区と２区の東側５ｍの範囲のみ、電話線と下水道の取り付け工事を早期に行いたいという要請があったため、その区間のみ９月上旬に引き渡すという契約のもと調査を開始した。

調査は平成６年６月９日に開始し、平成６年12月20日に終了した。

まず、試掘調査の確認と遺跡の広がりを確認するために１区東側において0.5ｍ幅でトレンチ調査を行った。そして、その成果をふまえ、バックホウにより地表面から約0.5ｍ下まで削平し、杭打ちを実施した。グリッドは、建設省が設置した国土座標に基づく道路幅杭を基準にして、４ｍグリッドを設定した。そして、南北方向に南から１、２、３…とアラビア数字を付し、東西方向に東からＡ、Ｂ、Ｃ…とアルファベットの大文字を付した。

７月上旬には１区の第１次遺構面の遺構検出を終了し、順次遺構掘削を開始した。また、並行して２区の表土剝ぎをバックホウで行った。２区は調査区全域にわたり第１次、第２次遺構面が攪乱され、消滅していたので、第３次遺構面に伴う包含層上面までバックホウで掘削した。

７月下旬には１区の第１次遺構面の遺構掘削を完了し、図面作成、写真撮影を７月末に仕上げた。そして、８月上旬に１区を第３次遺構面に伴う包含層上面までバックホウで掘削した。それ以降は９月上旬に引き渡す範囲内の遺構検出、遺構掘削に労し、その範囲内のみ９月９日に空中写真撮影を実施した。なお、８月下旬にバックホウにより３区のトレンチ調査を実施した。その結果、江戸時代末期の遺物が少量出土したが、遺物包含層および遺構面は認められず、トレンチの位置と層位を図化し、３区の調査を終えた。

９月中旬以降は第３次遺構面の残りの範囲の遺構検出と遺構掘削に労した。２区は遺構が密集しており、遺構の切り合い関係を把握するためにサブトレンチを多用した。また、杭穴などの小さな遺構検出のために精査を幾度か行った。そして、11月17日に２回目の空中写真撮影を実施し、調査納め式を行った。それ以降は残りの図面作成に労し、図面が完了した後にバックホウにより井戸の半截を行った。そして、12月20日に現場事務所を撤去し、発掘調査を終了した。

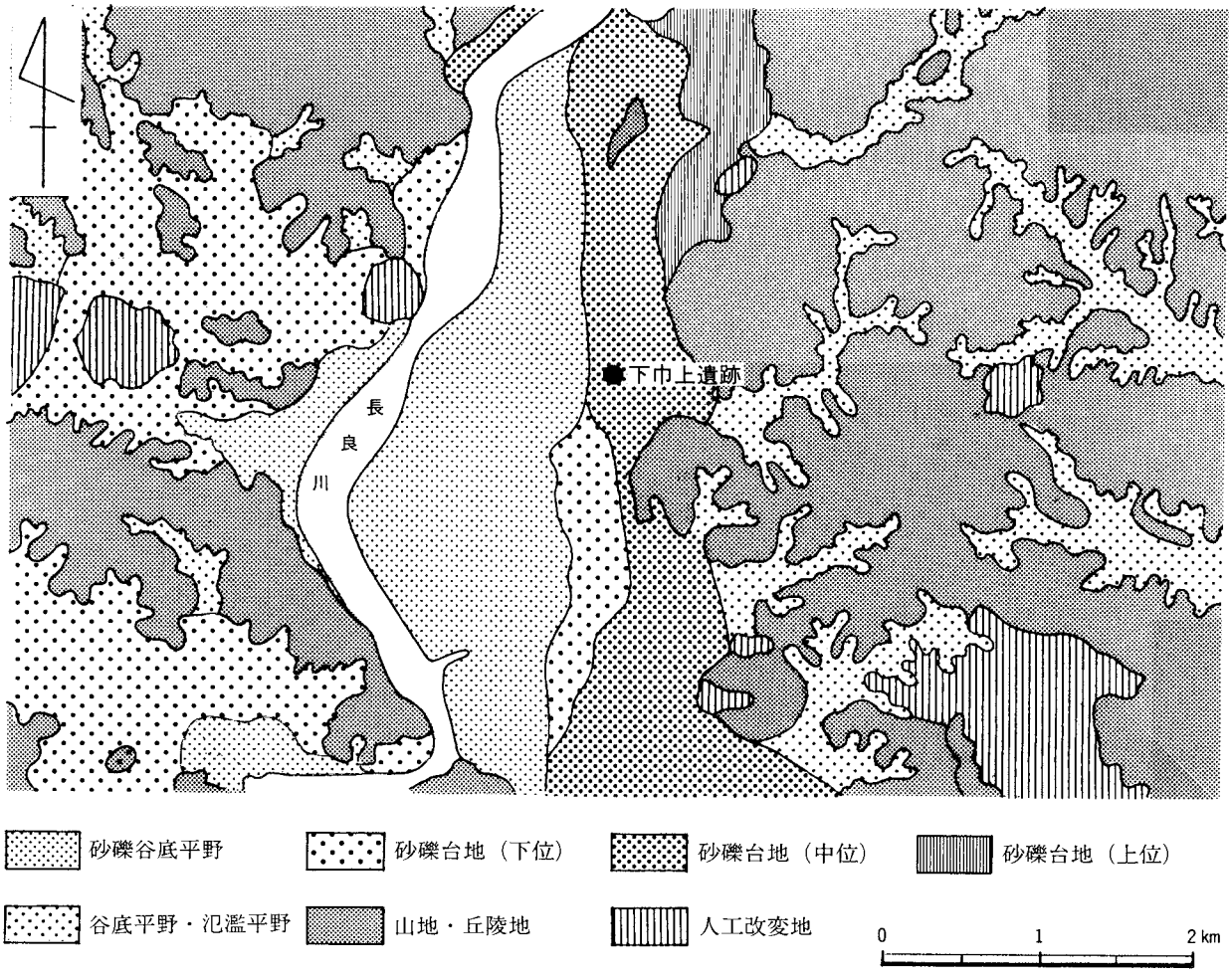
なお、最終的な調査面積は2200㎡である。

第II章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡周辺の地形・立地[1)]

下巾上遺跡の所在する美濃市から関市にかけての地形（第２図）は、長良川によって形成された３段の河岸段丘からなる砂礫台地、美濃加茂市蜂屋に分布する蜂屋層と呼ばれる浸蝕面と土岐砂礫層相当層と考えられる堆積物からなる丘陵、東部に位置する北高南低の標高600ｍ未満の山地、西部に位置する北西から南東方向に高度を漸減する山地に大きく区分される。

下巾上遺跡は上述した砂礫台地の中位面上に位置する。標高は65ｍ前後であり、遺跡より西に約100ｍの地点で中位面と扇状地面が明瞭に分かれる。遺跡周辺の地質は長良川と遺跡東部に位置する松鞍山の支谷に埋積して分布する沖積層および河岸段丘堆積物である。地表面より約1ｍ～1.5ｍの間は溶結凝灰岩が多くみられ、それ以下はチャートが多くみられる。これは上部が長良川による堆積層であり、下部が松鞍山からの流れ込みによる層であることを示す。[2)]



第２図　遺跡周辺の地形

第2節　周辺の遺跡[3)]

下巾上遺跡周辺は遺跡がまとまって分布している地域である。それらは主に長良川流域の扇状地・台地上および周辺の山すそに位置し、特に古墳の存在が目立つ。以下、時代毎に主な遺跡について述べたい。

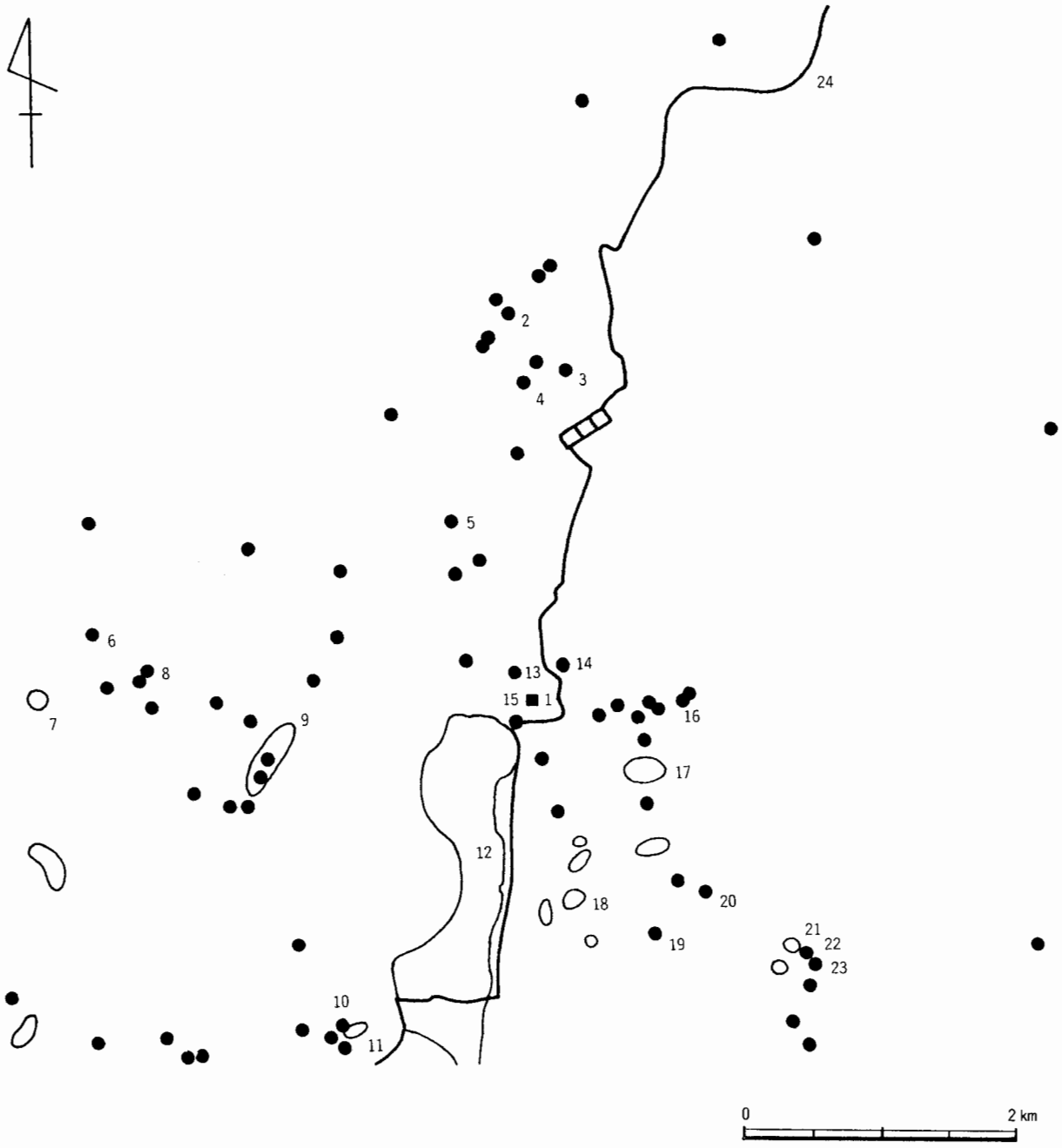
旧石器時代の遺跡として向中野遺跡が挙げられ、ナイフ形石器10点などが表採されている。また、向中野遺跡の南南西約1㎞に位置する松ヶ洞遺跡からは旧石器時代のもの思われる握斧状石器が出土している。

縄文時代の遺跡として重竹遺跡、松ヶ洞遺跡、港町岩陰遺跡、前野遺跡などが挙げられる。重竹遺跡A地点では縄文中期の竪穴住居3軒、B地点では縄文中期の埋甕1基が検出されている。松ヶ洞遺跡では縄文時代と思われる竪穴住居1軒が検出されている。港町岩陰遺跡は奥行8m、横幅20mの岩陰としては大規模とされる遺跡である。縄文草創期から後期まで使用されており、特に前期の遺物出土量が多いとされている。前野遺跡では試掘により縄文中期の土器片約50点、石器7点が出土している。

弥生時代の遺跡として重竹遺跡、松ヶ洞遺跡、南青柳遺跡が挙げられる。重竹遺跡A地点では竪穴住居8軒、埋甕1基、方形周溝墓1基などが検出されている。竪穴住居の時期は中期中葉から後期前葉に位置付けられている。松ヶ洞遺跡では竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、屋外炉3基などが検出されている。出土遺物より中期後葉から後期前葉に位置付けられている。南青柳遺跡では後期後葉の竪穴住居2軒が検出されている。そのうち2号住居は火災にあった可能性があるとされている。

古墳時代の遺跡としてまず古墳の存在が挙げられる。それらのうち大部分が後期古墳であり、下巾上遺跡に隣接する赤谷川流域には7つの古墳が確認されている。このうち、下巾上古墳は今回調査した3区から約50m西に位置し、現在は墳丘がわずかに残り、石室に使用されたと思われる石材が散乱している。また、赤谷川上流に位置する塚穴古墳群のうち、1号墳は畿内系の横穴式石室を有すると報告されている。[4)]なお、集落の存在も多々知られている。古村遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓17基、竪穴住居4軒の他に祭祀に伴う竪穴状遺構4基が検出されている。また、古城跡城下町遺跡では古墳時代後期の竪穴住居31軒が検出され、竈を伴わない竪穴住居からは西日本地域産と推定される須恵器大甕が出土している。[5)]

古代には集落、寺院、古窯などの存在が挙げられる。集落では重竹遺跡、榿ノ木洞遺跡などがある。重竹遺跡B地点では77軒の竪穴住居、4棟の掘立柱建物などが検出され、出土遺物には粗塩を焼くのに使用されたと考えられる土師器の手づくね土器や「美濃（国）」刻印須恵器と推定される坏などがある。また、榿ノ木洞遺跡では5世紀～9世紀初頭の竪穴住居94軒と10世紀前半の竪穴住居3軒、溝1条が検出され、出土遺物には琴柱形石製品、「美濃（国）」刻印須恵器などがある。寺院では弥勒寺跡が挙げられる。弥勒寺はいわゆる法起寺式の伽藍配置であり、美濃市丸山古窯跡出土の瓦と同一のものが出土している。なお、弥勒寺跡、丸山古窯跡は国指定史跡である。古窯では榿ノ木洞1・2号窯、砂行古窯跡などがある。榿ノ木洞1号窯は10世紀前半の灰釉陶器焼成窯である。出土遺物にはヘラ書き文字により献供の意味を表すと考えられるものもあり、窯業と御厨の関連性が示唆される。榿ノ木洞2号窯は8世紀前半の須恵器焼成窯である。



1　下巾上遺跡
2　前野遺跡（縄文）
3　小倉城跡（近世）
4　港町岩陰遺跡（縄文・近世）
5　古城跡城下町遺跡（古墳～中世）
6　亀蔵庵窯跡（近世～近代）
7　丸山古窯跡群（古代）
8　権蔵窯跡（近世～近代）
9　古村遺跡（弥生～近世）
10　弥勒寺跡（古代）
11　弥勒寺東遺跡（古代～中世）
12　重竹遺跡（縄文～近世）
13　上巾上遺跡（古代～中世）
14　樅ノ木遺跡（縄文～中世）
15　下巾上古墳（古墳）
16　塚穴１号古墳（古墳）
17　向中野遺跡（旧石器～弥生）
18　松ヶ洞遺跡（縄文～古代）
19　南青柳遺跡（弥生）
20　砂行古窯跡群（古代）
21　檀ノ木洞遺跡（縄文・古墳～古代）
22　檀ノ木洞２号窯跡（古代）
23　檀ノ木洞１号窯跡（古代）
24　郡上街道（近世）

第３図　周辺の主要遺跡

中世には集落の存在が多々挙げられる。そのうち代表的な遺跡として重竹遺跡、上巾上遺跡などがある。重竹遺跡では鎌倉初期から室町期にかけての約560基の土坑群、室町期から安土桃山期にかけての鍛冶屋敷跡などが検出されている。土坑群のなかには『□家合子記』の銘がある青白磁の合子が出土したものや六道銭などを共伴遺物とする火葬墓も検出されている。上巾上遺跡では山茶碗が伴う掘立柱建物や土坑が検出されており、昭和62年の調査において検出された第1号住居址は下巾上遺跡におけるSK122と類似性があると思われる。[6]その他、古村遺跡では土坑約250基、溝状遺構12基、大溝1基、掘立柱建物3棟、古城跡城下町遺跡では土坑90基、[7]段遺跡では掘立柱建物3棟、土坑35基が検出されている。[8]なお、下巾上遺跡より東に約100mに位置する白髭神社境内には五輪塔が置かれている。

近世には金森長近により築城された小倉山城や城下町上有知がある。また、加納宿（現、岐阜市加納）から石徹白村（現、郡上郡白鳥町石徹白）に至る郡上街道が下巾上遺跡の東側を通っていたと推定されている。[9]なお、江戸末期から明治初頭にかけての陶磁器窯である権蔵窯、亀蔵庵窯が下巾上遺跡の西約3kmに位置し、その製品と思われる遺物が下巾上遺跡で幾つか出土している。[10]

なお、第3図には位置が記載されていないが、重竹遺跡の南端から南約0.8kmに位置する山王遺跡では縄文晩期と弥生中期の遺物が多く出土し、室町時代の屋敷跡が検出されている。下巾上遺跡の出土遺物の時期と類似しているので付記しておく。

1）岐阜県企画部地域振興課　1993　「岐阜県土地分類基本調査　美濃」を主に参考とした。
2）中川　一氏の御教示による。
3）美濃市　1979　「美濃市史　通史編上巻」、関市教育委員会　1994　「新修関市史　考古・文化財編」を主に参考とした。
4）美濃市教育委員会　1993　「塚穴古墳群発掘調査報告書」
5）美濃市教育委員会　1994・1995「美濃市古村遺跡現地説明会資料」「美濃市古城跡城下町遺跡発掘調査　発表要旨」
6）美濃市教育委員会　1987・1988　「上巾上遺跡」「上巾上遺跡II」
7）註5）文献
8）1995「月刊文化財発掘出土情報　7」ジャパン通信社
9）岐阜県教育委員会　1982　「郡上街道」『歴史の道調査報告書第二集』
10）美濃市教育委員会　1989　「美濃市西南部古窯址群」

第Ⅲ章　層　　序

今回の調査地点は国道の拡幅部分であり、以前は宅地であった場所である。そのため、地表面より80cm程下までは大部分が攪乱を受けていた。しかし、１区の南側は畑として使用されていたらしく、攪乱をあまり受けておらず比較的安定した層序であったので、第４図には１区南側の西壁と南壁のセクション図を掲載した。基本的に１区と２区は攪乱状況および土の堆積状況が類似している。３区は赤谷川の氾濫原にあたり、現地表面から約2.5ｍ下までは礫層と砂層がみられ、それ以下は赤褐色の礫層を呈する河岸段丘面であった。３区の最も上層である黄褐色砂礫層から近世陶磁器が少々出土したが、包含層および遺構面は確認されなかった。なお、１区、２区の基本層序を以下に記す。

Ⅰ層（10YR3/2、黒褐色砂質土）

腐食や植物遺体が多くみられる表土層である。１区南壁において残りがよく、最も厚い堆積箇所で0.5ｍ～0.6ｍを測る。西壁においては0.1ｍ程度みられただけである。なお、２区では確認されなかった。

Ⅱ層（2.5YR5/2、暗灰黄色砂質土）

第１次遺構面の包含層である。Ⅰ層と同様に腐食や植物遺体が確認され、また、径1cm前後の小礫がわずかに混じる。比較的安定した層であり、0.1ｍ～0.6ｍの堆積を測る。１区においてよくみられたが、２区では確認されなかった。

Ⅲ層（10YR5/3、にぶい黄褐色砂質土）

第２次遺構面の包含層となる層であるが、遺物はあまり含まれていなかった。また、Ⅲ層上面は第１次遺構面となる。堆積は0.1ｍ～0.2ｍ程度で、弱粘性であり腐食や植物遺体がわずかにみられた。また、径0.5cm程度の小礫が混在している。２区においては確認されなかった。

Ⅳ層（10YR3/1、黒褐色砂質シルト）

上面が第２次遺構面となる。弱粘性であり、空隙や小礫がわずかにみられる。ほぼ水平に堆積しており、最も厚いところで0.3ｍ～0.4ｍの厚さを測る。２区においては確認されなかった。

Ⅳ′層（10YR4/4、褐色砂質シルト）

小礫がわずかに混じる弱粘性のシルト層である。Ⅳ層との区別がつけにくいが、主に鉄分の沈着がみられる層をⅣ′層とした。0.1ｍ前後の堆積であり、２区においては確認されなかった。

Ⅴ層（10YR2/1、黒色粘土）

強粘性の粘土層である。最も厚く堆積している箇所は0.2ｍ～0.3ｍを測り、上面はほぼ水平である。礫はほとんど混じらない。１区・２区において確認された。

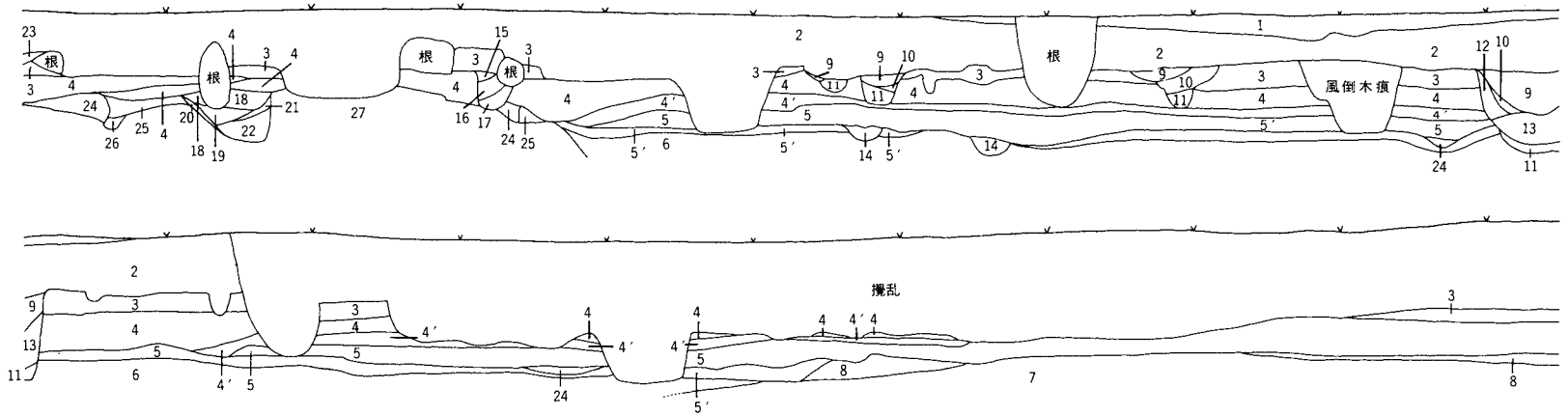
Ⅴ′層（10YR2/3、黒褐色砂質粘土）

Ⅴ層とⅥ層の漸移層である。強粘性の粘土層であり、第３次遺構面の包含層であるが、遺物はわずかに含まれる程度であった。0.1ｍ前後の堆積であり、１区・２区において確認された。

Ⅵ層（10YR6/6、明黄褐色砂質土）

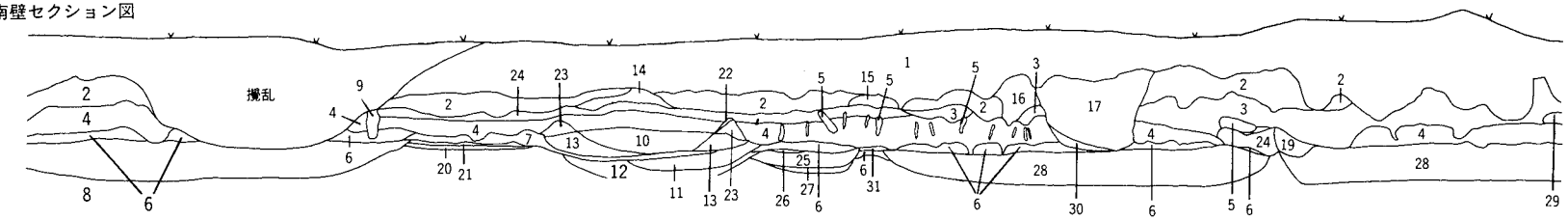
上面が第３次遺構面となる弱粘性の砂質土層である。径0.5cm程度の小礫や植物遺体を含み、0.1ｍ～0.3ｍの堆積を測る。１区・２区において確認された。

1区西壁セクション図



1	I層		
2	II層		
3	III層		
4	IV層		
4′	IV′層		
5	V層		
5′	V′層		
6	VI層		
7	VII層		
8	10YR5／6	黄褐色土	径10～20㎜の礫を含む
9	10YR3／3	暗褐色土	径5～10㎜の礫を含む
10	10YR6／6	明黄褐色土	弱粘質土
11	10YR3／2	黒褐色土	粘質土
12	10YR4／4	褐色土	弱粘質土
13	10YR3／4	暗褐色土	径40～300㎜の礫および炭化物を含む
14	2.5YR5／2	暗灰黄色土	粘性が高い
15	7.5YR5／8	明褐色土	弱粘質土
16	10YR4／4	褐色土	小礫を含む
17	10YR6／1	褐灰色土	径10～50㎜の礫を含む
18	7.5YR3／2	黒褐色土	黄褐色ブロックが混じる
19	7.5YR2／1	黒色土	弱粘質土
20	10YR5／4	にぶい黄褐色土	小礫を含む
21	10YR2／2	黒褐色土	弱粘質土、炭化物を含む
22	5B2／1	青黒色土	粘質土
23	5B4／1	青黒色土	黄褐色ブロックが混じる
24	5B3／1	暗青灰色土	径5～15㎜の礫をまばらに含む
25	10YR5／3	にぶい黄褐色土	小礫を含む
26	10YR6／1	褐灰色	粘質土
27	2.5Y4／6	オリーブ褐色	径10～15㎜の礫を含む

1区南壁セクション図



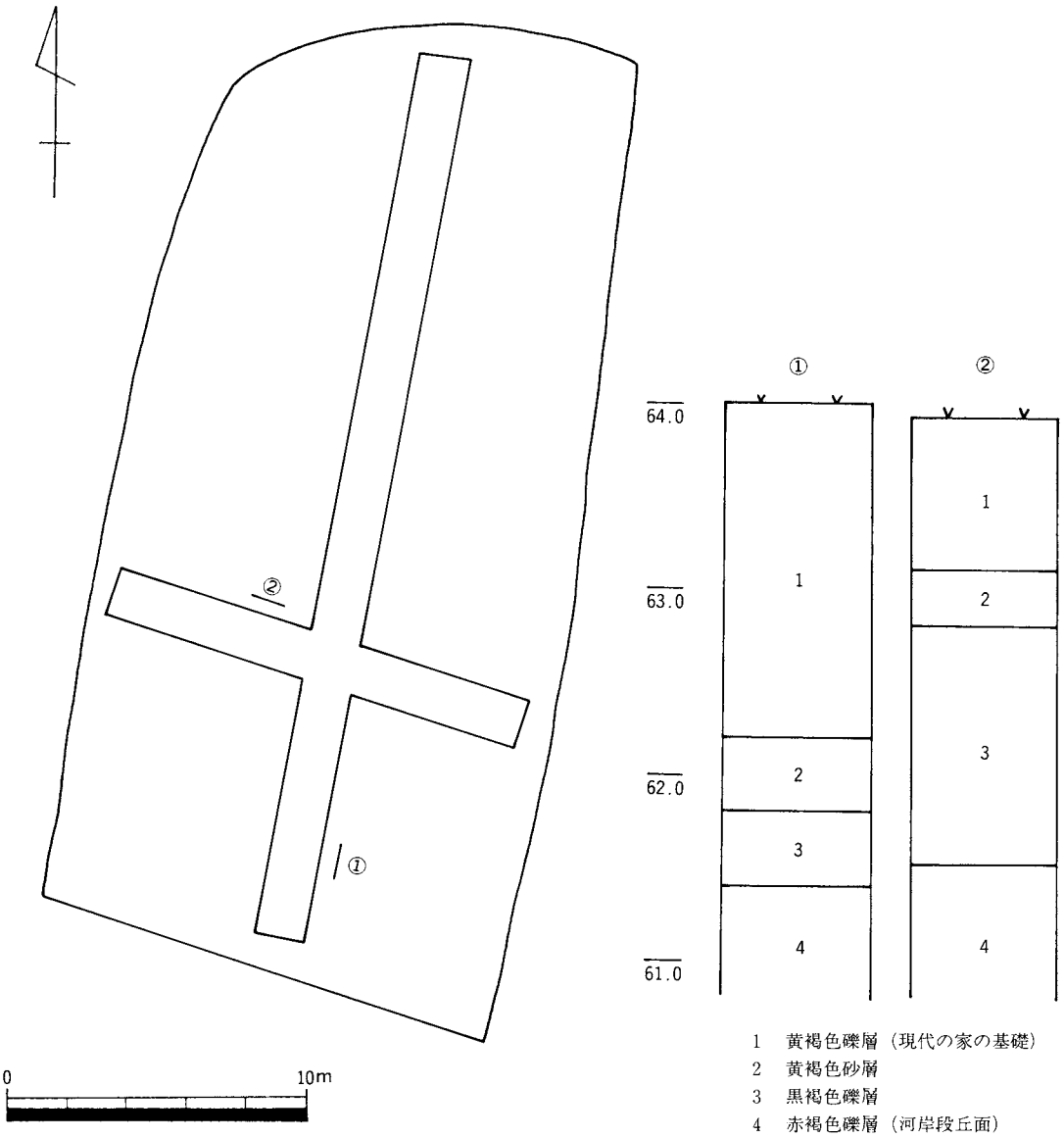
1	I層		
2	II層		
3	2.5Y4／2	暗灰黄色土	弱粘質土、小礫を含む
4	5B1.7／1	青黒土	弱粘質土、鉄分が多量に含まれる
5	5B4／1	暗青灰色土	黄褐色ブロックが混じる
6	N6／0	灰色土	粘性が高い
7	5B4／1	暗青灰色土	粘質土
8	5B5／1	青灰色土	径20～30㎜の礫を含む
9	N6／0	灰色土	粘質土
10	5PB1.7／1	青黒色土	黄褐色ブロックが混じる
11	5PB1.7／1	青黒色土	黄褐色ブロックが混じらない
12	10YR5／3	にぶい黄褐色土	砂礫層
13	10YR5／4	にぶい黄褐色土	砂礫層
14	2.5Y4／1	黄灰色土	粘質土
15	2.5Y6／4	にぶい黄色土	弱粘質土
16	7.5YR3／1	黒褐色土	径10㎜程度の礫を含む
17	7.5YR2／2	黒褐色土	径40～120㎜程度の礫をまばらに含む
18	10YR6／3	にぶい黄褐色土	黒色土が筋状に混じる
19	7.5YR3／2	黒褐色土	粘質土、小礫を含む
20	5B6／1	青灰色土	径10～40㎜の礫を含む
21	N4／0	灰色土	粘土層
22	10Y6／4	にぶい黄褐色土	弱粘質土
23	N3／0	暗灰色土	弱粘質土、径5～20㎜の礫をまばらに含む
24	10YR5／3	にぶい黄褐色土	砂質土、鉄分が多量に含まれる
25	N2／0	黒色土	径10～30㎜の礫を含む
26	N4／0	灰色土	粘性が高い
27	N7／0	灰白色土	砂層
28	N3／0	暗灰色土	径20～70㎜の礫を含む
29	10YR6／6	明黄褐色土	褐色の小ブロックが混じる
30	7.5YR2／3	極暗褐色	弱粘質土
31	7.5Y6／2	灰オリーブ色土	粘土層

0 1 2 3 m

第4図　1区西壁・南壁セクション図

Ⅶ層（2.5Y4/6、オリーブ褐色砂礫）

砂礫台地の最も上面となる層であり、今回の調査で地山とした層でもある。径1.0cm～5.0cmの角礫を多量に含む砂礫層である。



第5図　3区トレンチ・セクション図

第Ⅳ章　遺 構 と 遺 物

・遺構概要

今回の調査で検出された遺構面は３枚である。現地表面より約50㎝下に19世紀の土坑群、約70㎝下に井戸を伴う18世紀の集落跡、約１ｍ下に建物、柵列等を伴う15世紀を中心とする集落跡が確認され、それぞれ第１次遺構面、第２次遺構面、第３次遺構面と本報告では呼称する。なお、第２次遺構面の遺構は調査期間の都合上調査を割愛したため、第３次遺構面を調査した際、包含層（第Ⅴ層）中に確認された遺構のみ報告する。

個々の遺構の時期比定は、遺構面、遺構の切り合い関係、出土遺物等から判断した。しかし、複数の遺構が切り合っている場合や遺構面の認識が不十分であった箇所は出土遺物に頼らざるを得なかった。また、出土遺物に関しても一つの遺構から多時期にわたる遺物が検出されることが少なくなく、そのような場合は出土遺物全点を対象として主体となる時期の遺物と混入や流れ込みに伴う遺物とを分別して遺構の時期を決定した。このような観点から本遺跡の遺構の時期区分を行うと

Ⅰ期・・・美濃窯山茶碗編年明和１号窯式以前

Ⅱ期・・・美濃窯山茶碗編年明和１号窯式～美濃窯山茶碗編年脇之島３号窯式

Ⅲ期・・・美濃窯山茶碗編年脇之島３号窯式～瀬戸美濃窯編年大窯第５段階

Ⅳ期・・・本業焼編年Ⅰ段階～Ⅱ段階

Ⅴ期・・・本業焼編年Ⅲ段階

と区分できる。

なお、遺構の種別は次のとおりの原則を用いる。

ＳＡ（柵列）・・・・ピットあるいは土坑が一列に並ぶもの。

ＳＢ（建物）・・・・ピットあるいは土坑が対をなして並ぶもの。

ＳＤ（溝）・・・・・細長い形状をもつもの。

ＳＥ（井戸）・・・・湧水層を掘り抜く土坑。

ＳＫ（土坑）・・・・ピット以外の穴。

ＳＸ（その他）・・・形態が特殊なもの。遺構検出時において礫がまとまって出土したもの。

Ｐ（ピット）・・・・径0.8ｍ以下で、平面形はほぼ円を呈する穴。

このうち、ピット内（土坑内）の柱の残存を「柱根」、柱根の下に据えられたと想定される礫を「根石」、柱根の周縁に据えられたと想定される礫を「支え石」と本報告では呼称する。また、柱、杭が存在していたと想定される穴をそれぞれ「柱穴」、「杭穴」と呼称する。なお、自然流路と想定されるものもすべてＳＤ（溝）とした。

・遺物概要

今回の調査で検出された遺物総数は4641点である。遺物の種類は縄文土器、須恵器、土師器、中近世陶磁器、石器・石製品、木製品、鉄製品等であり、なかでも中近世陶磁器が大半を占め、縄文土器や須恵器は明確に遺構に伴わず、周辺からの流れ込みと推定される。

縄文土器は208点出土した。いずれも残存する破片が小さく、磨耗が激しいことから大別的な器種分類のみを行った。なお、いずれも粗製土器であり、時期は突帯文の形状からいずれも晩期後葉の五貫森式前後と考えられる。

須恵器は114点出土した。時期は７世紀後半～８世紀代に比定されるものが多く、いずれも、美濃須衛産である。

古代以前の土師器は１点のみ出土した。

中世の遺物（陶磁器、土師器）は1628点出土した。山茶碗、古瀬戸、常滑、中国磁器、瀬戸美濃（大窯）、土師器、産地不明の瓷器系陶器などである。時期はいずれも13世紀以降である。

近世の遺物（陶磁器、土師器）は2537点出土した。瀬戸美濃、伊万里、唐津、信楽系、土師器、土師質陶器、瓦などである。

石器・石製品は46点出土した。打製石斧、石錐、未製品、剥片、砥石[1]、石臼、温石などである。打製石斧、石錐、未製品などはおそらく縄文時代晩期に属するものであり、石材としては長良川流域の縄文時代に属する遺跡で多くみられるチャートの他、サヌカイト製が１点みられる。また、打製石斧には流紋岩、ホルンフェルス、安山岩が用いられている。砥石、石臼は中世～近世の長い年代幅を考えることは可能であるが、遺構出土の一部を除き時期を限定することはできない。砥石は砂岩が、石臼は花崗岩が石材として多く利用されている。

木製品は52点出土した。柱痕、杭、建築部材、板材、下駄などである。樹種はスギ、ヒノキ属、アカマツ、マツ属複維管束亜属、モミ属、ハンノキ属、クリ、アカガシ亜属、サクラ属の９分類群である。時期はいずれも中世～近世であり、針葉樹木材が多い。[2]

鉄製品は47点出土した。農耕具、調理具、建築部材、鉄滓などである。時期はいずれも中世～近世と考えられる。

なお、出土量の多い中近世陶磁器については「瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅴ～Ⅹ」（1986～1991）で用いられた分類、名称に基本的に従っている。また、山茶碗（東濃型）と土師皿、鉢・擂鉢については細分したので以下に記す（第６図）。

山茶碗、碗

１類・・・体部の立ち上がりが強く、口縁端部を尖らせる。高台周辺の調整は丁寧。

２類・・・体部の立ち上がりがやや緩く、高台周辺の調整が丁寧。

３類・・・体部の立ち上がりがやや緩く、高台周辺が未調整。

４類・・・体部の立ち上がりが緩く、高台周辺が未調整。なお、高台は底部外面外縁よりやや内側に貼り付けられる。

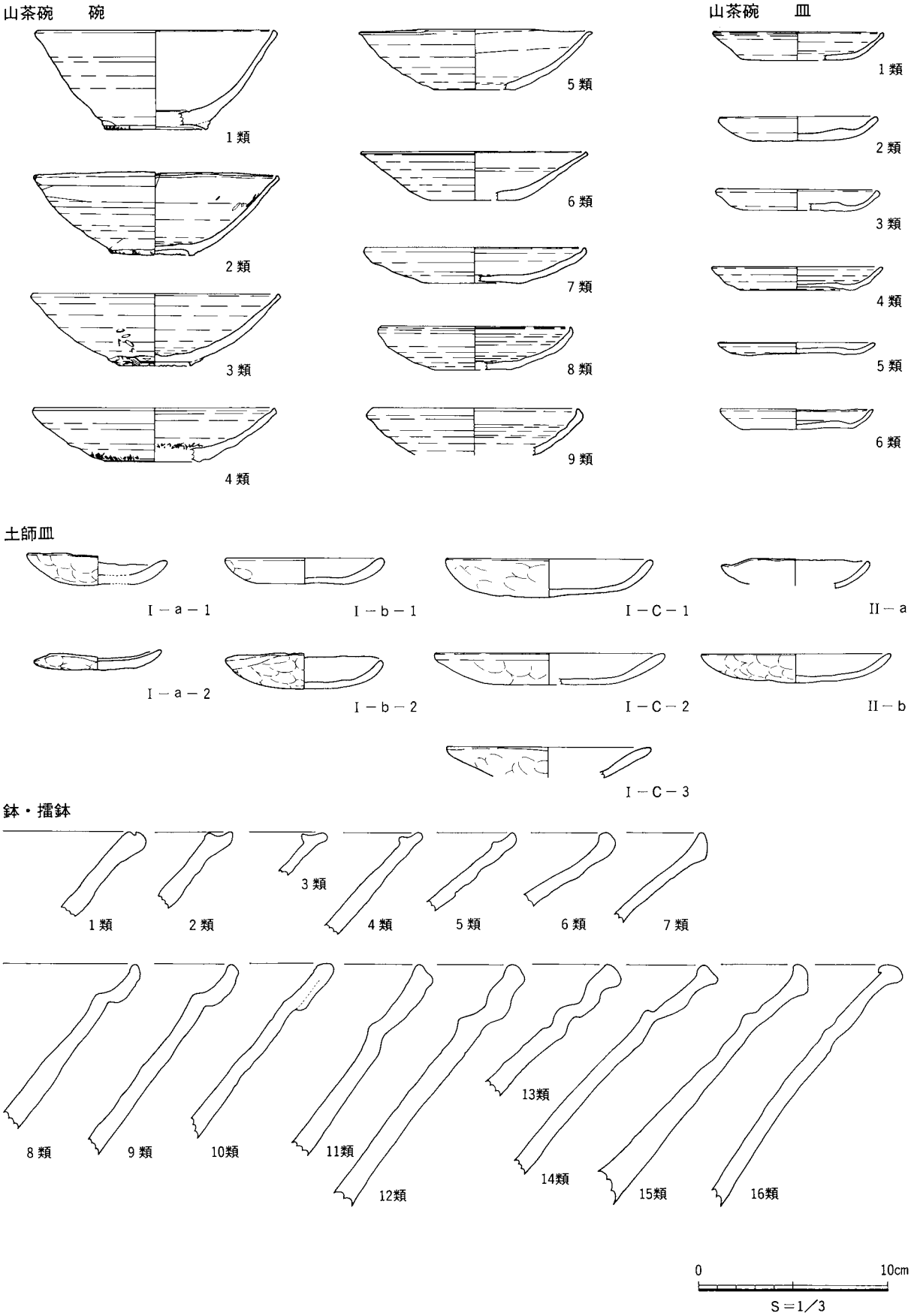
５類・・・体部の立ち上がりが緩く、平底。底部内面が全体的に明確に凹む。

６類・・・体部の立ち上がりが緩く、平底。底部内面が中央に向かって緩やかに凹む。

７類・・・体部の立ち上がりが非常に緩く、平底。体部内面の轆轤痕は顕著に残る。

８類・・・体部の立ち上がりが緩く、平底。口縁端部を上方につまみあげる。また、体部内面に轆轤痕が顕著に残る。なお、非常に軟質である。[3]

９類・・・８類と形態は類似しているが、胎土中に鉄分が多く、硬質である。



第6図　山茶碗、土師皿、鉢・擂鉢分類図

なお、底部内面の静止指ナデ調整、高台端部の籾殻痕が確実に認められるのは１類～４類である。また、白泥が認められるのは１類～８類である。

山茶碗、皿

１類・・・やや厚手で、口縁端部が尖がり気味。
２類・・・やや厚手で、底部内面周縁が緩やかに凹む。口縁端部は丸いものが多い。
３類・・・やや厚手で、底部内面周縁が明確に凹む。口縁端部は断面四角形気味に面取りするものが多い。
４類・・・薄手で、体部が緩やかに立ち上がる。
５類・・・薄手で、体部の立ち上がりがわずかしかない。
６類・・・薄手で、体部の立ち上がりが強く、内弯気味である。

なお、１類と２類は底部内面に静止指ナデ調整、底部外面に板目が認められ、３類には両者があるものとないものが共存する。４類～６類にはみられない。また、白泥が認められるのは２類～６類である。

土師皿

いずれも製法は非ロクロ成形であり、体部外面には指圧痕が残る。胎土、法量、口縁形態から分類が可能である。

胎土分類　Ⅰ類・・・軟質（本遺跡では山茶碗と古瀬戸後期の遺物に伴う）
　　Ⅱ類・・・硬質（本遺跡では18世紀の瀬戸美濃陶器に伴う）
法量分類　ａ類・・・口径7.5cm以下
　　ｂ類・・・口径7.6cm～口径10.0cm
　　ｃ類・・・口径10.1cm以上
口縁部分類　１類・・・底部に比べ口縁部が肥厚する。端部は丸いものが多い。
　　２類・・・底部と口縁部の厚さがほぼ同じである。
　　３類・・・端部が開き気味である。

なお、本文中では胎土分類がⅠ類、法量分類がａ類、口縁部分類が１類のものはⅠ－ａ－１類と記述する。また、Ⅰ－ａ～ｃ－１類は体部外面に指圧痕による凹凸が認められるものが多く、Ⅰ－ａ～ｃ－２類は体部外面が比較的滑らかである。

鉢・擂鉢

本遺跡ではⅡ期～Ⅴ期まで普遍的に出土し、その口縁部形態から細分が可能である。

１類・・・端部が丸く収まり、上面が浅く凹む。
２類・・・口縁部が外反し、端部が面取りされる。内面の小突起は大きく、高い位置にある。
３類・・・口縁部が外反し、端部は丸く収まる。内面の小突起は三角形を呈し、高い位置にある。
４類・・・口縁部が外反せず、端部は丸く収まる。内面の小突起はやや位置が下がる。
５類・・・端部が内弯気味であり、内面の小突起が形骸化される。

6類・・・端部が折り返され、丸く収まる。
7類・・・端部が断面三角形を呈する。縁帯は形成されない。
8類・・・口縁部内面が丸みを帯び、受け口状となる。
9類・・・口縁部内面が丸みを帯び、受け口状となる。また、端部が面取りされる。
10類・・・端部が外側に折り返され、幅広の縁帯が形成される。
11類・・・端部が面取りされ、口縁部と体部の境が屈曲する。
12類・・・端部が面取りされ、口縁部中程と口縁部と体部の境が屈曲する。
13類・・・端部が肥大し、口縁部中程と口縁部と体部の境が屈曲する。
14類・・・端部が肥大し、口縁部と体部の境が屈曲し、口縁直下外面が凹む。
15類・・・端部が肥大し、口縁部と体部の境の屈曲が形骸化し、内面のみ段が形成される。
16類・・・端部が肥大し、内面に折り返される。口縁部と体部の境は稜のみとなる。

遺物の年代観、および用語は各生産地における既存の報告や研究に従っている。[4)]

遺物の図化に際して、遺構内出土の遺物は混入や流れ込みを問わずなるべく掲載するよう心掛けた。また、展開図は遺物の残存が良く、しかも左右対称でない模様が施されている場合に用いた。

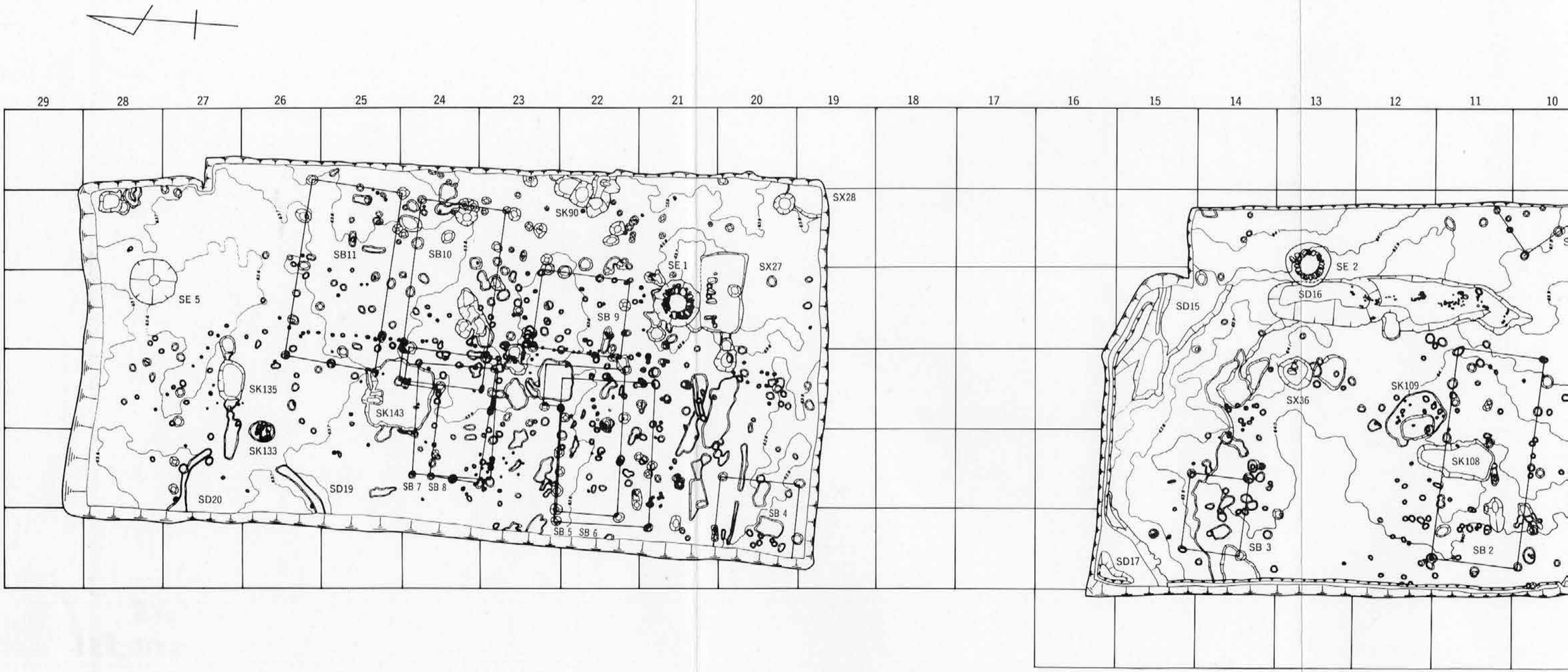
遺物の計量は個々の遺構、および本遺跡の様相を他の遺構、遺跡と比較して明確にするために試みた。計量方法は破片数計測法と口縁部計測法に基づいている。[5)]

第1節　第2次・第3次遺構面の遺構と遺物

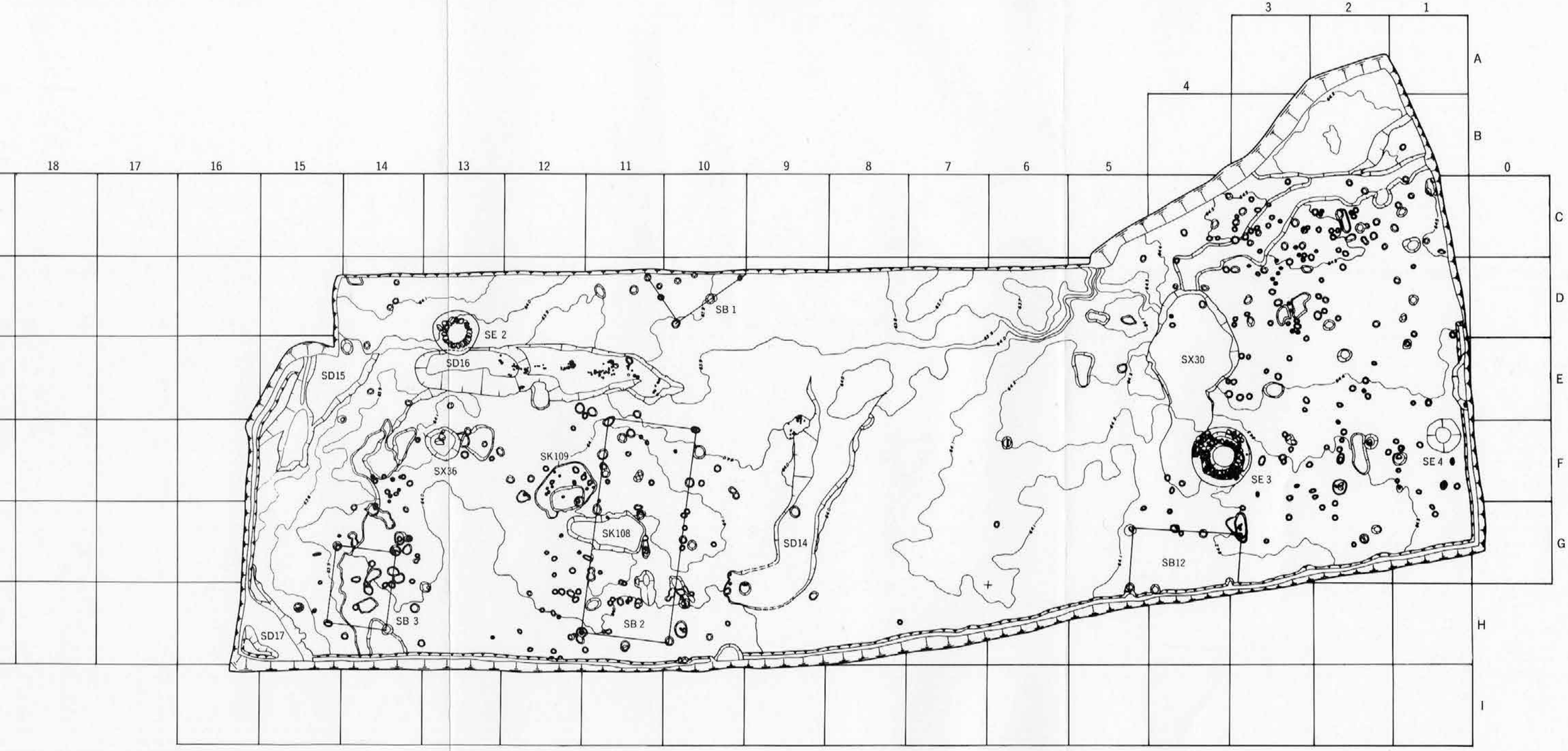
本遺構面では土坑56基、ピット923基、掘立柱建物12棟、柵列7基、自然流路を含む溝状遺構8基、井戸5基、不明遺構11基、合計1021基の遺構を検出した。なお、第2次遺構面の調査は割愛したが、第2次遺構面の遺構で、第3次遺構面まで掘り込んでいる遺構のみ調査を行ったため、それらの遺構も含めて主要な遺構のみを以下に記す。

建物（ＳＢ）

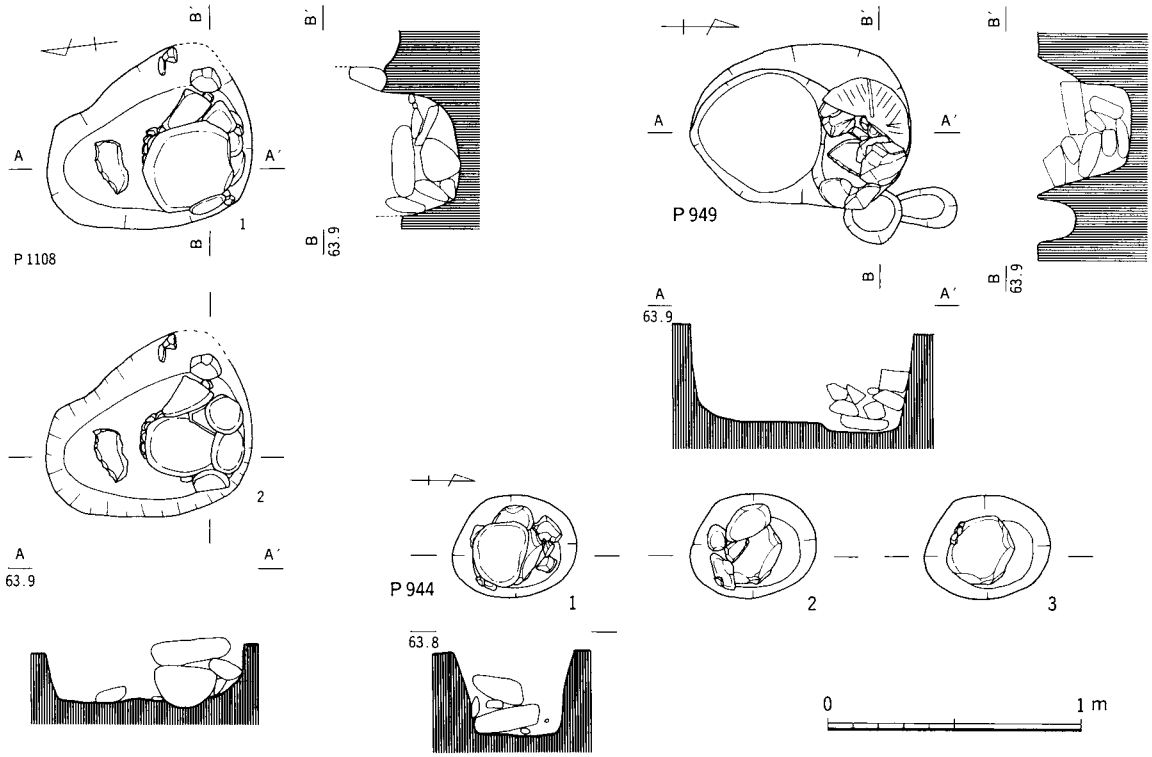
今回検出された建物は2区に集中しており、ＳＸ30より南にも幾つかのピット群がみられるものの中世の建物は想定されなかった。また、建物に伴うピット内には根石・支え石を有するものが幾つかみられた。根石・支え石を有するピットは70基以上を数え、そのうち、27基のピット内の石が加熱により原型をとどめておらず、根石が接合可能なものは3例みられた。[6)]また、建物はいずれも建て替えのたびに改めて掘り返すことを前提としているが、なかには第8図に示したように根石と想定される石が一つのピット内に2個レベルを違えて据えられており、その間に小礫を挟むものが存在する。このようなピットはあるいは建て替えの時に同じピットを使用した可能性があることを示唆しているのかもしれない。なお、柱痕が検出されたことによりやや強引に建物としたものも存在することを明記しておきたい。



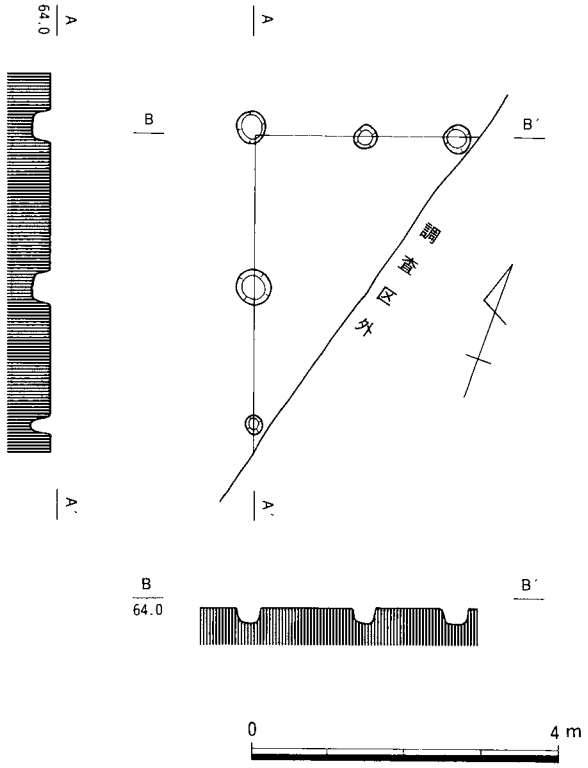
第７図　第２次・第３次遺構面　遺構配置図



第７図　第２次・第３次遺構面　遺構配置図



第８図　根石・支え石検出状況



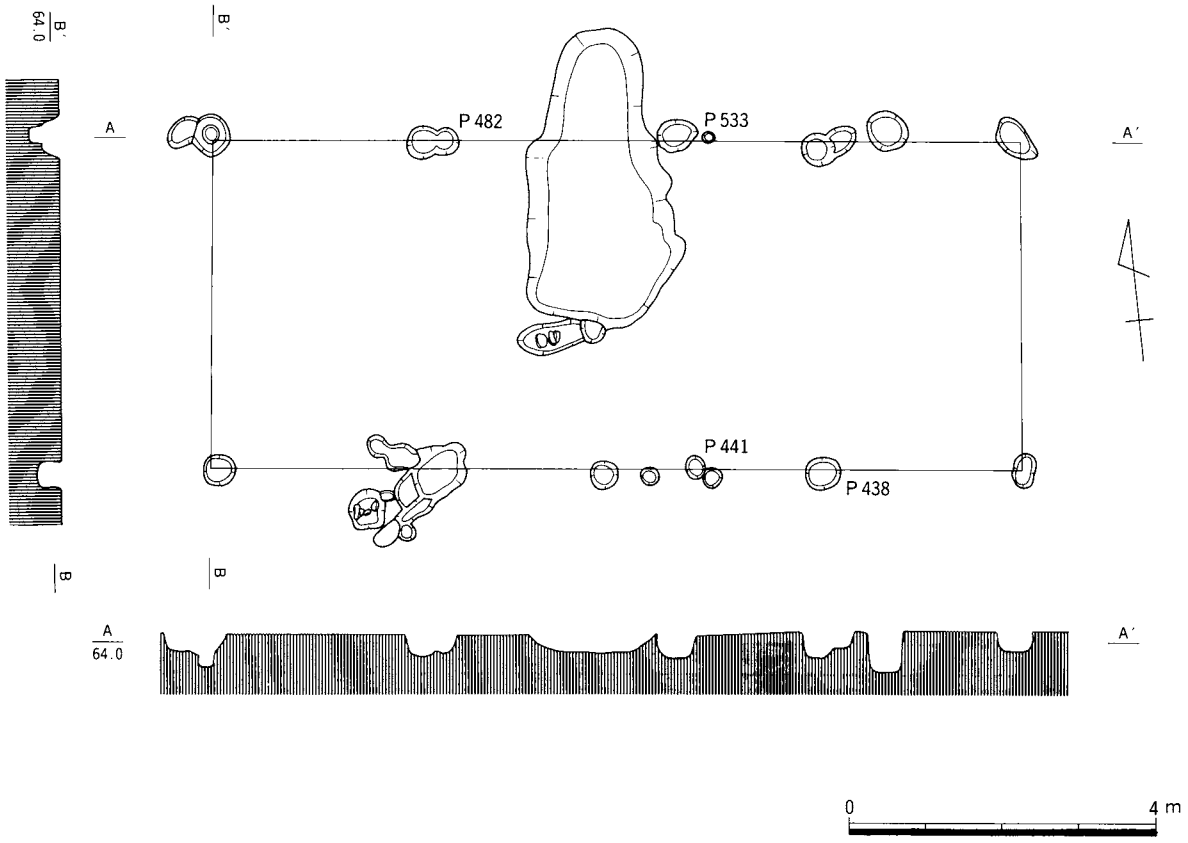
第９図　SB 1 実 測 図

ＳＢ１

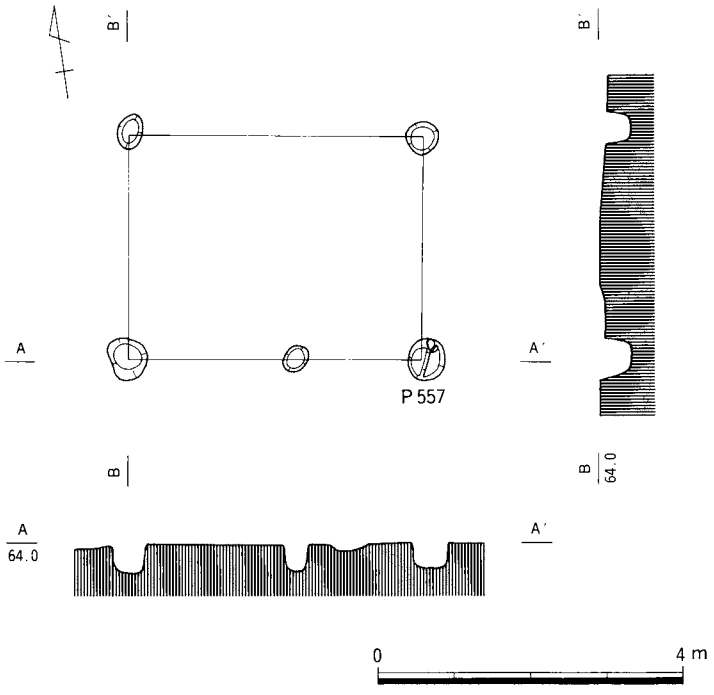
Ｄ10区～Ｄ11区にかけて位置する、桁行２間以上×梁行２間以上の掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.2ｍ～0.5ｍ、深さ0.2ｍ×0.3ｍを測る。建物の規模は桁行4.21ｍ以上×梁行2.94ｍ以上であり、南面の東西方向の柱間距離は西から2.00ｍ、1.81ｍ、北面の東西方向の柱間距離は西から1.52ｍ、1.20ｍを測る。柱穴内に根石、支え石は存在しない。桁行の方位はＮ40°Ｗである。建物の方位が他の建物と違うことや出土遺物がないことから建物の時期は不明である。

ＳＢ２

Ｆ10区～Ｈ12区にかけて位置する、桁行４間×梁行１間（２間？）の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.3ｍ～0.6ｍ、深さ0.3ｍ～0.6ｍを測る。建物の規模は桁行10.65ｍ×梁行4.27ｍであり、南面の東西方向



第10図　SB 2 実測図



第11図　SB 3 実測図

の柱間距離は東から2.62m、2.84m、2.15m、3.04m、東面の南北方向の柱間距離は4.27mを測る。柱穴内に根石、支え石は全く存在しない。桁行の方位はN87°Wであり、建物の大きさ、方位等からIII期の建物と考えられる。

（出土遺物）

P438より山茶碗4、P441より山茶碗1、P482より常滑1、P533より須恵器1、山茶碗1、瀬戸美濃（連房）2、合計10点が出土したが、いずれも細片のため図示していない。

SB 3

G14区～H15区にかけて位置する、桁行2間×梁行1間の東西掘立柱建物である。この建物を構成

する柱穴群は径0.4ｍ～0.6ｍ、深さ0.3ｍ～0.5ｍを測る。建物の規模は桁行3.89ｍ×梁行2.96ｍであり、南面の東西方向の柱間距離は東から1.68ｍ、2.21ｍ、東面の南北方向の柱間距離は2.96ｍを測る。P557の壁面において支え石と考えられる半分割れた円礫が検出された。桁行の方位はN89°Eであり、III期の建物と考えられる。なお、ピットから遺物は出土していない。

ＳＢ４

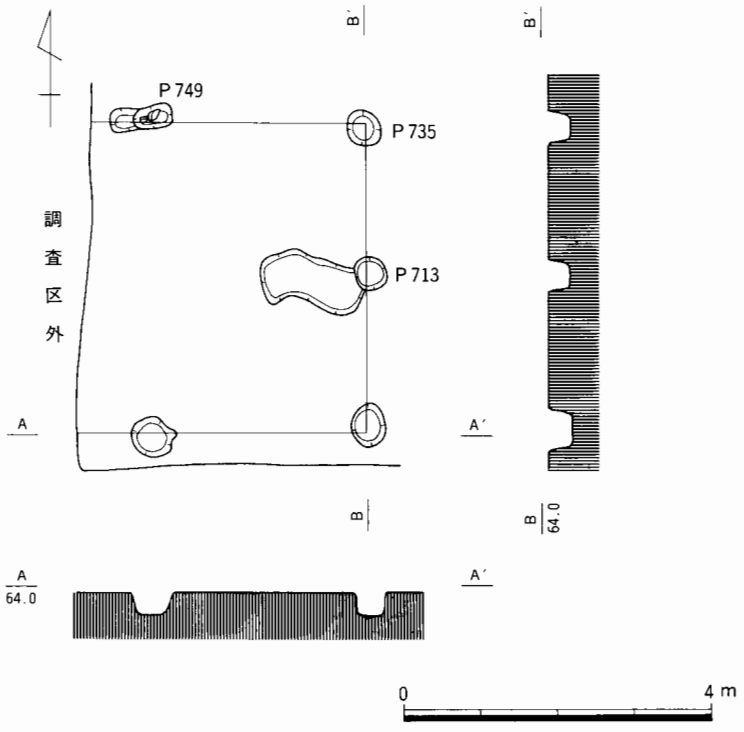
G19区～H20区にかけて位置する、桁行２間以上×梁行２間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.4ｍ～0.5ｍ、深さ0.3ｍ～0.4ｍを測る。建物の規模は桁行3.77ｍ以上×梁行4.03ｍであり、南面の東西方向の柱間距離は2.80ｍ、東面の南北方向の柱間距離は南から2.07ｍ、1.96ｍを測る。根石はP749で確認され、円礫が底面に２つ、平坦面を上に向けて置かれていた。桁行の方向はN88°Wであり、出土遺物、建物の方向からIII期の建物と考えられる。

（出土遺物）

P713より山茶碗１、P735より山茶碗４、合計５点が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

ＳＢ５

F21区～H22区にかけて位置する、桁行３間～４間×梁行２間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.4ｍ～0.6ｍ、深さ0.3ｍ～0.5ｍを測る。建物の規模は桁行7.28ｍ×梁行4.56ｍであり、南面の東西方向の柱間距離は東から2.08ｍ、2.52ｍ、1.51ｍ、1.17ｍ、東面の南北方向の柱間距離は南から2.30ｍ、2.26ｍ（推定）を測る。また、P753、P755、P811から根石、支え石が出土した。P753では西壁に縦位の方向で径21.8㎝の円礫が支え石として検出され、P811からは柱穴の底面に径5㎝前後の角礫が４つ据えられており、その周縁に支え石と思われる円礫、角礫がいくつか検出された。北側の柱穴には根石、支え石が検出されなかった。桁行の方向はN89°Eであり、出土遺物からII期の建物と考えられる。



第12図　SB 4 実測図

（出土遺物）

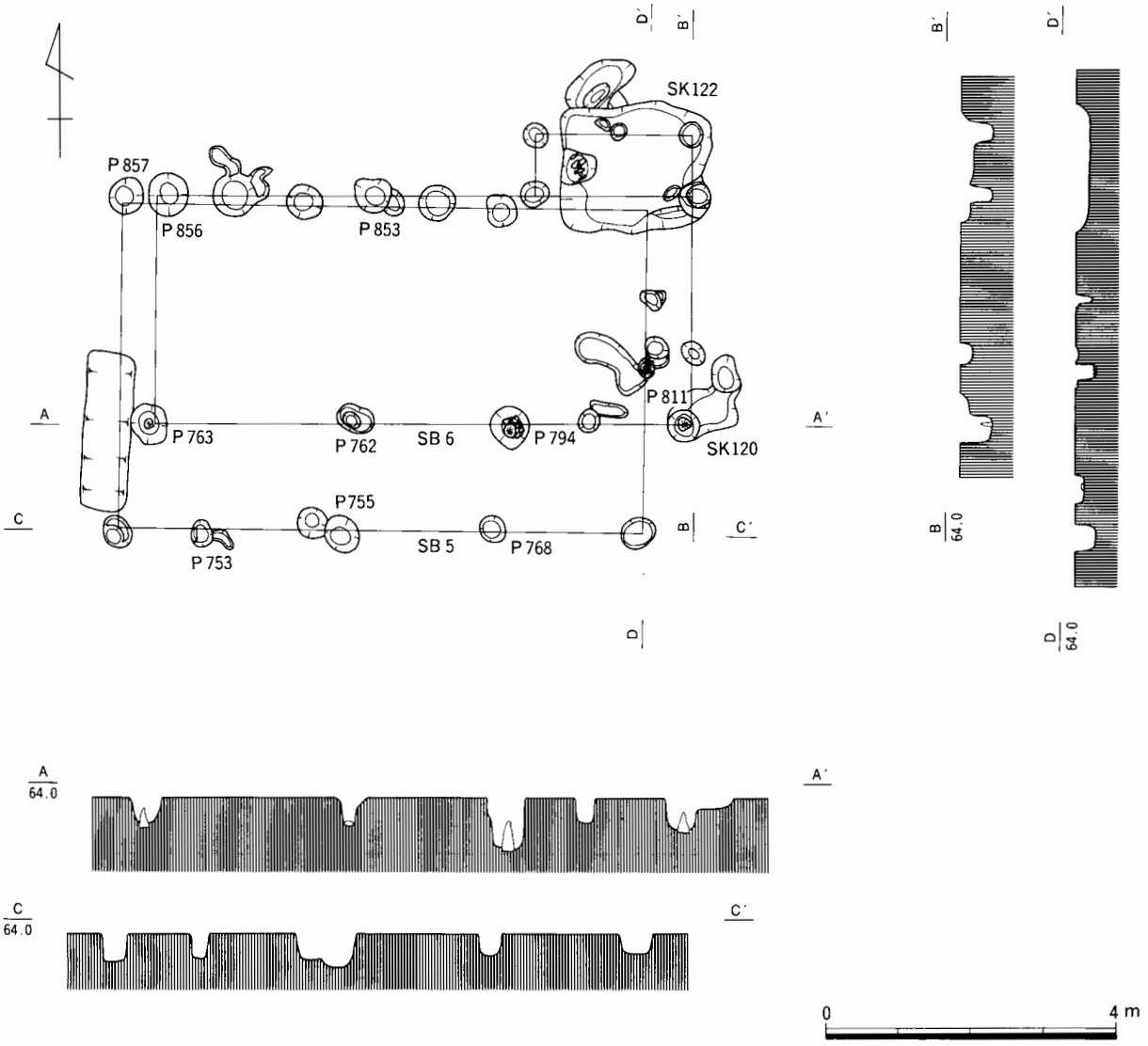
P768より山茶碗２、土師皿５、P857より山茶碗４、合計11点が出土している。そのうち２点を図示した。

山茶碗（１、２）

１、２は碗である。１は２類の体部破片である。２は４類の底部破片である。

ＳＢ６

Ｆ22区～Ｈ22区にかけて位置する、桁行３間～４間×梁行１間の東西掘立柱建物であり、身舎の北面に２間×１間(2.22ｍ×0.85ｍ)の付随施設が存在する。この建物を構成する柱穴群は径0.4ｍ～0.6ｍ、深さ0.4ｍ～0.8ｍを測る。建物の規模は桁行7.53ｍ×梁行3.20ｍであり、南面の東西方向の柱間距離は東から1.44ｍ、1.06ｍ、2.23ｍ、2.80ｍ、西面の柱間距離は3.20ｍを測る。また、Ｐ763、Ｐ794、ＳＫ120の底部には柱根が残存していた。最も残存がよいものはＰ794出土の柱根であった。根石、支え石はＰ762、Ｐ794で検出された。Ｐ762は柱穴の底面中央からやや西寄りの位置に根石が置かれており、Ｐ794は柱穴の底面で柱根の周辺に支え石が３個、柱穴の壁面に支え石が１個検出された。なお、３本の柱根の下にはいずれも根石が存在しなかった。また、ＳＫ122と付属施設の柱穴の埋土は同一であり、柱穴がＳＫ122の底面を掘り込んでいることから両者の時期関係は同時期、あるいは柱穴の方が古いと推定できる。しかし、遺物からは前後関係は見出せないため両者を同時期と考えて差し支えないと思われる。桁行は方向はＮ89°Ｅであり、出土遺物からⅡ期の建物と考えられる。



第13図　ＳＢ５・６実測図

（出土遺物）

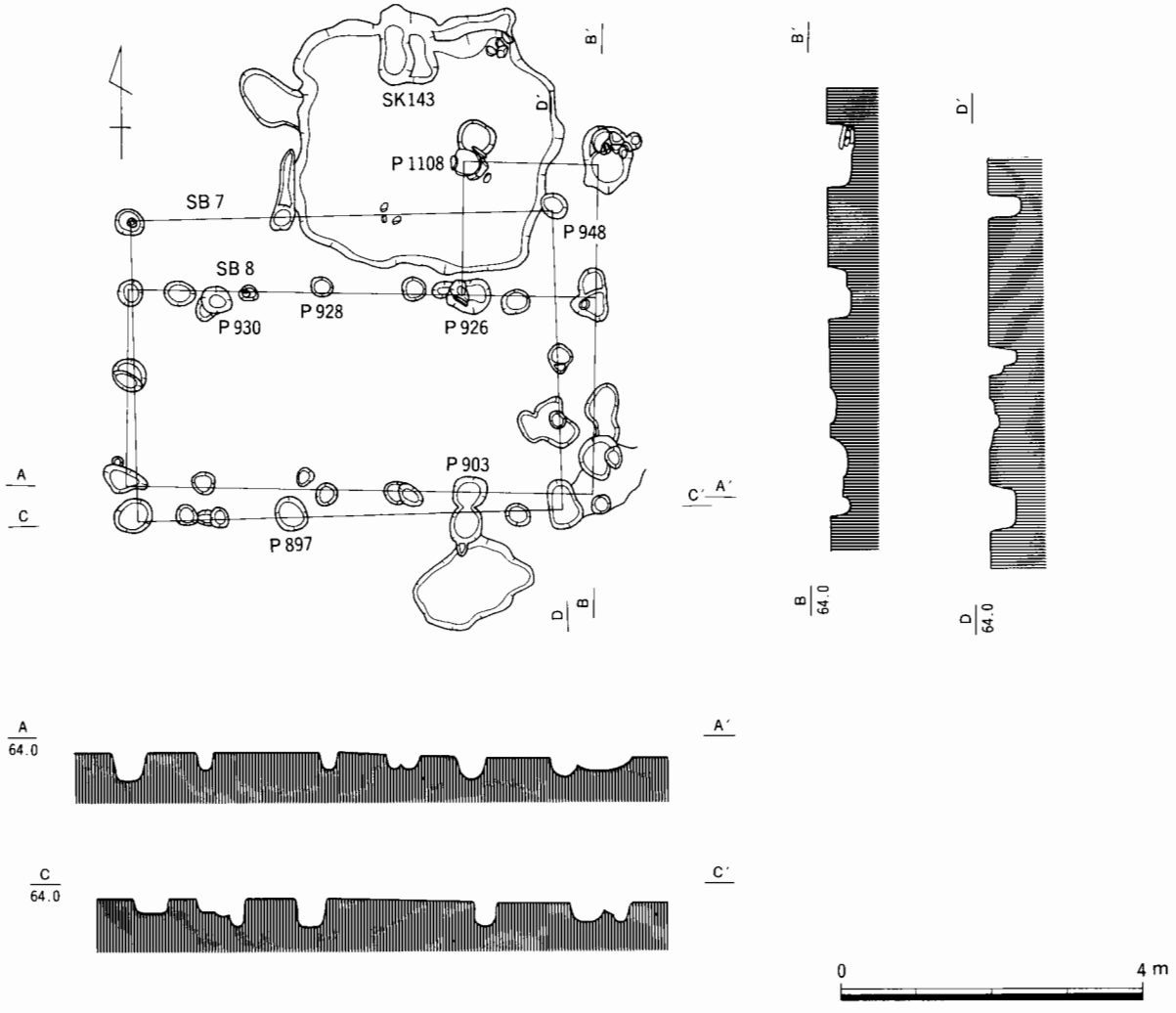
P762より土師皿１、P763より土師皿１、P794より山茶碗4、瀬戸美濃（連房）１、P853より山茶碗１、P856より山茶碗１、古瀬戸１、ＳＫ120より山茶碗５、木器１、合計16点が出土している。そのうち２点を図示した。

山茶碗（３、４）

３は碗２類に属する。4は皿４類に属し、静止指ナデ調整と板目がみられる。底部外面には「Ｚ」字状の墨書がみられる。

柱根（14～16）

14はＰ794より出土した。分割材を使用していると思われる。底面は一方向からのちょうな痕が幾重にも切り合っている。側面の最下部には幅４㎝の面が２面あることから側面下部は多角形に丁寧に調整されていたと推定される。現残長43.8㎝、最大幅17.3㎝を測る。樹種はヒノキ属の可能性が高い。15はＳＫ120より出土した。分割材を使用しており、底面に一方向からのちょうな痕がみられ、それを切るように２方向からののこぎり痕が認められる。また、側面の加工痕は不明である。なお、本遺跡から出土した柱痕６本のうち、底面にのこぎり痕が認められるものは１本だけである。現残長28.7㎝、



第14図　SB７・８実測図

最大幅21.5cmを測る。樹種はヒノキ属である。16はP763より出土した。分割材を使用しており、底面にちょうなによる加工痕が認められるが腐食が激しいため判然としない。また、側面の加工痕は不明である。現残長27.0cm、最大幅18.5cmを測る。樹種はヒノキ属の可能性が高い。

SB7

F23区～G24区にかけて位置する、桁行3間×梁行2間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径40cm～50cm、深さ30cm～50cmを測る。建物の規模は桁行5.64m×梁行4.01mであり、南面の東西方向の柱間距離は東から1.28m、2.33m、2.03m、西面の南北方向の柱間距離は南から1.90m、2.11mを測る。柱穴には根石、支え石は存在しない。桁行の方向はN88°Wであり、出土遺物からII期の建物と考えられる。

(出土遺物)

P897より山茶碗1、P948より山茶碗1、合計2点が出土している。そのうち、1点を図示した。

山茶碗（5）

碗6類に属する。

SB8

F23区～G24区にかけて位置する、桁行4間×梁行1間の東西掘立柱建物であり、身舎の北面に1間×1間（1.80m×1.80m）の付随施設が存在する。この建物を構成する柱穴群は径0.3m～0.4m、深さ0.3m～0.4mを測る。建物の規模は桁行6.23m×梁行2.62mであり、南面の東西方向の柱間距離は東から1.67m、1.90m、1.63m、1.03m、西面の南北方向の柱間距離は2.62mを測る。P926、P1108からは偏平な円礫を使用した根石、支え石が検出されている。P926の支え石はピットの南西方向に縦位に据えられていた。また、P1108の東壁上部には縦位に円礫が存在し、底面の根石は最下部に長軸29.0cmの円礫を据え、その上面南側周縁に径15cm前後の円礫を並べ、最後に長軸37.0cmの巨大な円礫を置くという構造であった(第8図)。これについては、建物の建て替えのため、あるいは柱の高さを調節するため等の理由が想定されるがいずれにせよ複雑な根石の在り方である。付随施設とSK143の関係は不明であるが、出土遺物からほぼ同時期に存在していたと思われる。桁行の方位はN87°Wであり、出土遺物からII期の建物と考えられる。

(出土遺物)

P903より山茶碗3、古瀬戸1、土師皿1、P928より山茶碗5、P930より山茶碗3、P1108より石製品1、合計14点が出土している。そのうち1点のみ図示した。

石製品（6）

花崗岩製の石臼の下臼と思われる。磨滅が激しく溝の判別ができない。

SB9

E22区～E23区にかけて位置する、桁行3間×梁行3間の掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.3m～0.8m、深さ0.2m～0.3mを測る。建物の規模は桁行4.35m×梁行3.99mであり、南面の東西方向の柱間距離は東から1.23m、1.46m、1.30m、西面の南北方向の柱間距離は南から1.22m、

1.73m、1.40mを測る。P837から柱根が検出された。また、P125およびP831から角礫が検出されたが、根石か否かは不明である。桁行の方位はN89°Wであり、出土遺物からIII期の建物と考えられる。

（出土遺物）

P822より山茶碗11、古瀬戸1、瀬戸美濃（大窯）1、土師皿2、瀬戸美濃（連房）1、不明1、P837より土師皿1、P108より山茶碗5、P125より山茶碗1、P1080より山茶碗2、合計26点が出土した。そのうち2点を図示した。

山茶碗（7、8）

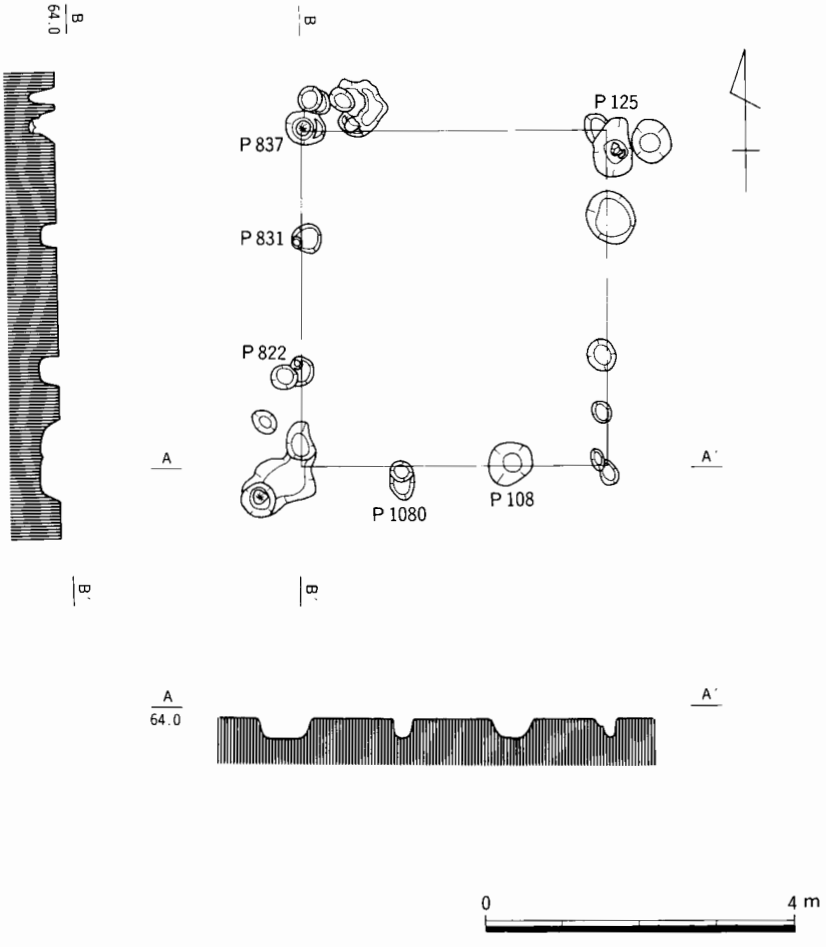
7は碗1類に属する。また、8は皿5類に属する。

柱痕（17）

丸木材をそのまま柱として使用したと思われる。底面は2方向からちょうなで加工してある。なお、側面の加工痕は不明である。現残長14.5cm、最大幅19.0cmを測る。樹種はヒノキ属である。

SB10

D23区～F25区にかけて位置する、桁行4間×梁行2間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.3m～0.6m、深さ0.3m～0.5mを測る。建物の規模は桁行9.22m×梁行4.29mであり、北面の東西方向の柱間距離は東から2.25m、2.53m、2.74m、1.70m、西面の南北方向の柱間距離は南から2.09m、2.20mを測る。SX29の底面には遺構面より約30cm下で偏平な円礫を使用した根石が2個検出された。また、P949では径20cm前後の円礫がいくつか出土し、その上面に石臼（13）が擂り面を上にむけて検出された。根石として石臼を代用しているとも考えられるが、建物を構成する他のピットの底面のレベルと合致しないため、柱根抜き取り後に廃棄された可能性も考えられる。桁行の方位はN86°Wであり、出土遺物からIII期の建物と考えられる。



第15図　SB 9 実測図

（出土遺物）

P137より山茶碗2、常滑1、P1034より土師皿1、SX29より山茶碗1、古瀬戸1、P949より石製品1、合計7点が出土している。そのうち3点を図示した。

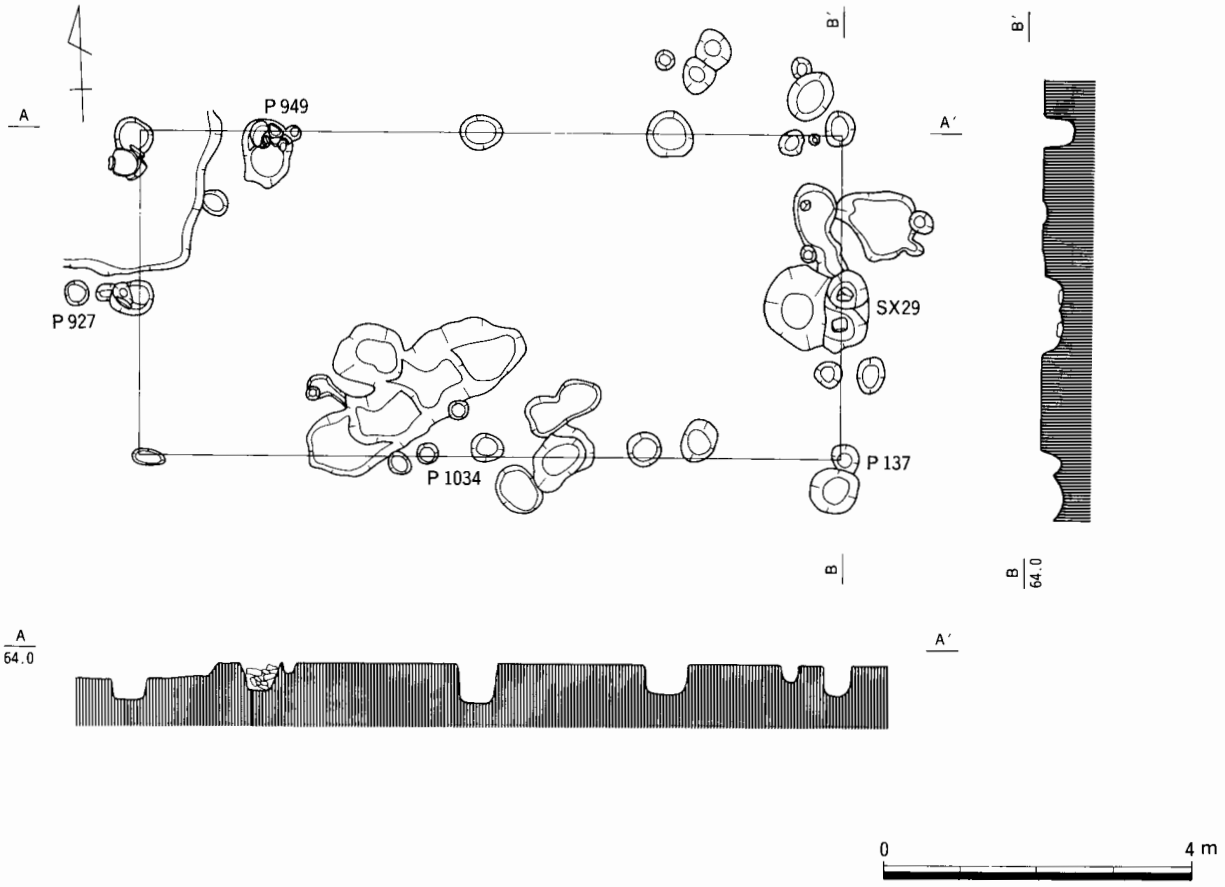
山茶碗（11）

碗3類の体部破片である。

古瀬戸（12）

平碗である。体部は直線的に開き、口縁部は内弯し、端部を尖らせている。また、体部外面下方を除き灰釉が施されている。

石製品（13）　花崗岩製の石臼の下臼である。上面に溝を有するが、区画および溝の単位は不明である。中央に芯棒穴があり、下面の直径約５cm、上面の直径約３cmを測る。



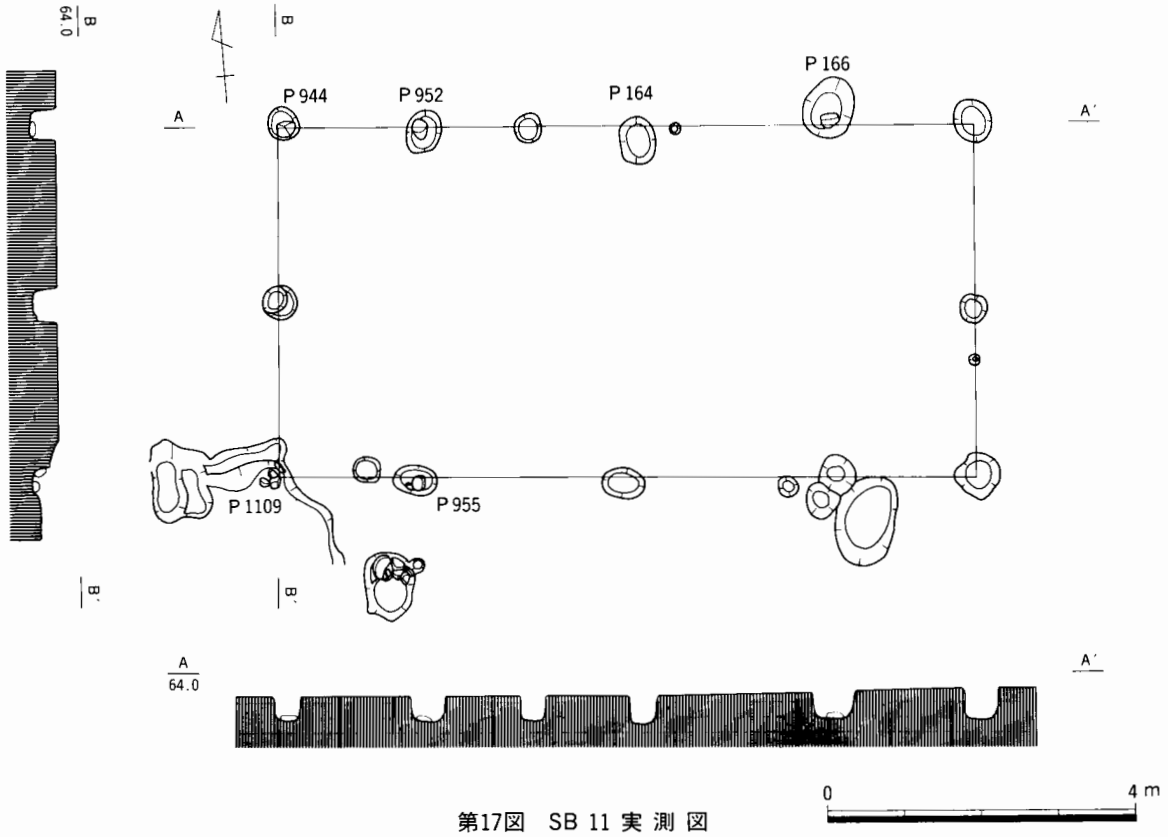
第16図　SB 10 実 測 図

ＳＢ11

Ｃ24区～Ｆ26区にかけて位置する、桁行４間×梁行２間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は径0.3ｍ～0.7ｍ、深さ0.3ｍ～0.4ｍを測る。建物の規模は桁行9.01ｍ×梁行4.63ｍであり、北面の東西方向の柱間距離は東から1.87ｍ・2.48ｍ・2.77ｍ・1.89ｍ、西面の南北方向の柱間距離は南から2.35ｍ・2.28ｍを測る。Ｐ955、Ｐ1109、Ｐ944、Ｐ952、Ｐ166の底面には、遺構面より30cm～40cm下で偏平な円礫を使用した根石が検出された。なお、Ｐ1109の支え石は根石を取り囲んで偏平な面を横位にむけて出土した。桁行の方位はＮ86°Ｗであり、出土遺物よりⅢ期の建物と考えられる。

（出土遺物）

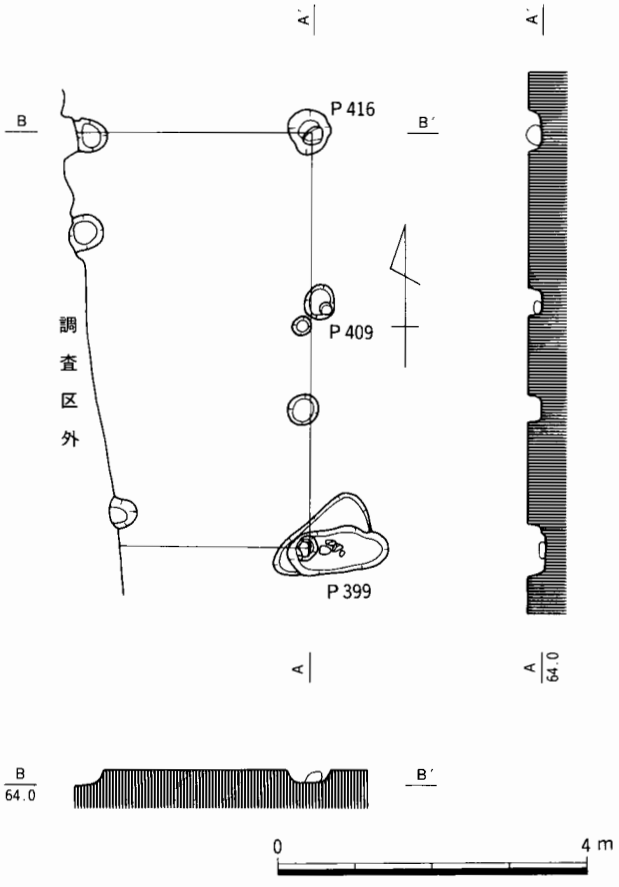
Ｐ164より瀬戸美濃（大窯）１点が出土しているが、細片のため図示していない。



第17図　SB 11 実 測 図

S B12

G３区～H５区にかけて位置する、桁行１間以上×梁行３間の東西掘立柱建物である。この建物を構成する柱穴群は第３次遺構面において径0.4ｍ～0.6ｍ、深さ0.2ｍ前後を測る。建物の規模は桁行3.09ｍ以上×梁行5.46ｍであり、北面の東西方向の柱間距離は2.88ｍ、東面の南北方向の柱間距離は南から1.81ｍ、1.44ｍ、2.21ｍを測る。P399、P409、P416に根石が検出された。P409、P416は円礫のみを根石として使用していたが、P399は円礫と角礫を使用しており、焼化礫もみられた。桁行の方位はN90°であり、柱穴が第２次遺構面からの掘り込みであるため、Ⅳ期の建物と考えられる。なお、遺物は検出されなかった。



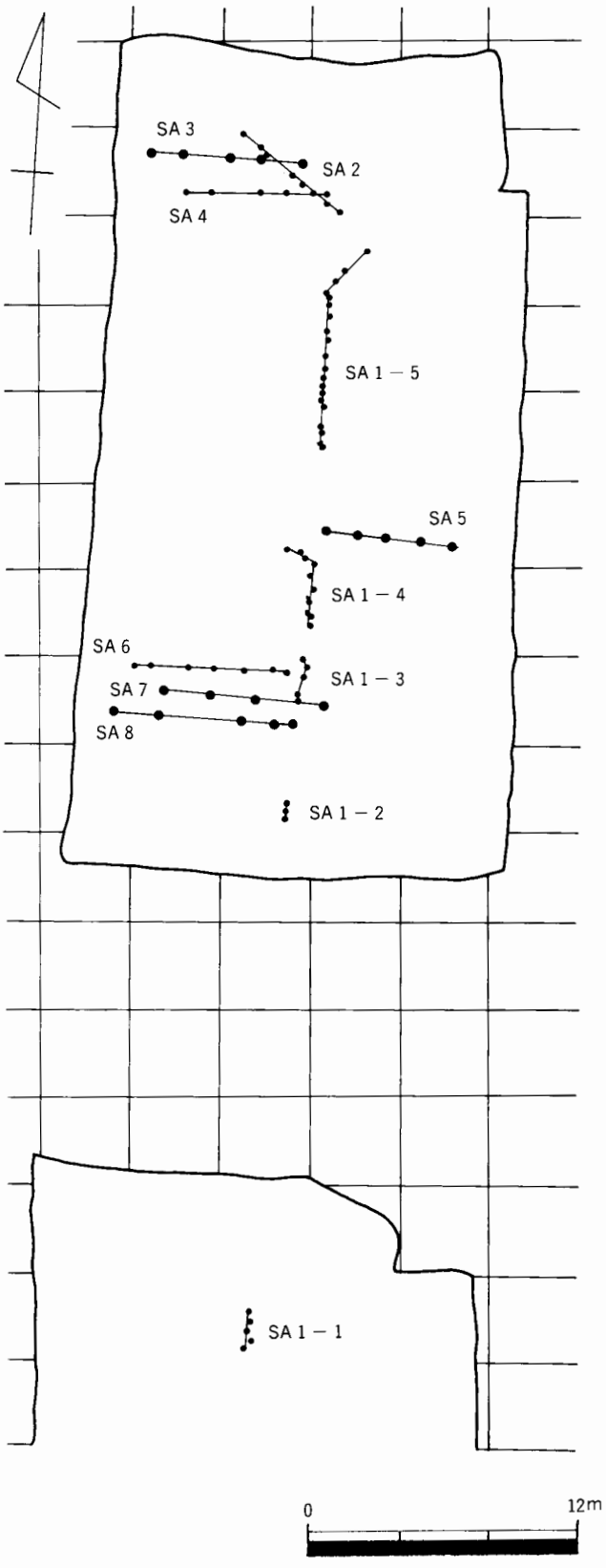
第18図　SB 12 実 測 図

柵列（ＳＡ）

第３次遺構面で検出された柵列はすべて壺掘りによるものである。いずれの柵列も掘立柱建物と方位が同一であり、空間を区画する役割を果たしていたと考えられる。出土した杭は幅５cm前後であるが、杭穴は径10cm以下～50cm前後のものまであり一様ではない。

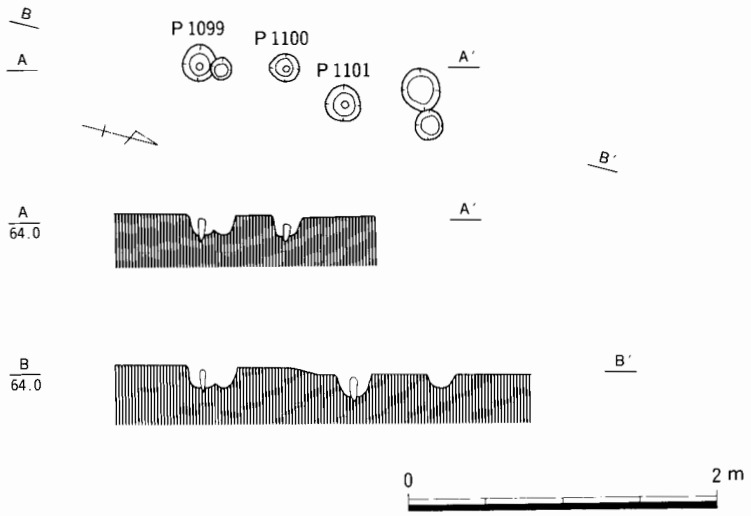
ＳＡ１

Ｆ13区～Ｅ26区にかけて位置する、主軸の方位がＮ０°（真北）である柵列である。調査区を２分する市道の下にも柵列が存在すると仮定すると、全長約50ｍとなる。なお、柵列が途中でとぎれる箇所が４ヵ所あるため、南からＳＡ１－１、ＳＡ１－２、ＳＡ１－３、ＳＡ１－４、ＳＡ１－５とする。ＳＡ１－１では杭穴が６個検出され、そのうちＰ1099、Ｐ1100、Ｐ1101から杭の先端部が出土し、遺構確認面より約0.2ｍ下まで打ち込んであった。なお、杭間距離は南から0.56ｍ、0.45ｍを測る。ＳＡ１－２は３個の杭穴が検出されたが、他にも存在したと思われる。杭間距離は南から0.37ｍ、0.32ｍを測る。ＳＡ１－３は４つの杭穴が並び、北から２つめの杭穴辺りでＳＡ６につながる。杭間距離は南から1.00ｍ、1.03ｍ、0.89ｍを測り、ＳＡ１－１、１－２と比べ杭間が広くなる。ＳＡ１－４では12個の杭穴を検出した。柵列を構成する杭穴群は径0.1ｍ前後、深さ0.1ｍ～0.2ｍの規模である。北から４つめの杭穴で西に折れ、あたかもＳＫ122を取り囲んでいるようである。杭穴は直線的に並ばず、ジグザグ状の配置である。杭間は0.3ｍ～0.7ｍの範囲であり、均一でない。ＳＡ１－５では17個の杭穴を検出した。柵列を構成する杭穴は径0.10ｍ～0.20ｍ、深さ0.15ｍ～0.30ｍの規模である。これらは杭間距離0.2ｍ～0.9ｍの範囲で均一ではないが、ほぼ直線上に並ぶ。しかし、北から４つめの杭穴でＮ65°Ｗの



第19図　杭列分布図

方向に若干曲り、さらにN36°Eの方向に曲る。ＳＡ１はＳＢ５～ＳＢ８と関連することからII期の柵列と考えられる。



第20図　SA１－１実測図

（出土遺物）

杭３本が出土した。20はＰ1099からの出土である。丸木杭であると思われ、全周を４面から削り先端を尖らせてある。端部削りの現残長は14.2cm、現残長15.8cm、最大幅4.8cmを測る。樹種はアカガシ亜属である。21はＰ1100からの出土である。丸木杭であり、半周を２面から削り先端を尖らせてある。端部削りの長さ6.4cm、現残長10.9cm、最大幅2.4cmを測る。樹種はクリである。19はＰ1101からの出土である。丸木杭であり、全周を４面から削り先端には平坦面が少し残る。端部削りの長さ5.4cm、現存長14.3cm、最大幅3.5cmを測る。樹種はヒノキ属である。

ＳＡ２

Ｅ27区～Ｆ27区にかけて位置する。主軸の方位はN54°Wであり、ＳＡ１－５の北端の方位に直交する向きとなる。この柵列を構成する杭穴群は８個検出され、径0.1ｍ～0.2ｍ、深さ0.1ｍ～0.3ｍの規模である。全長5.80ｍであり、ほぼ直線上に並ぶ。ＳＡ１と関連しているためII期の柵列と考えられる。

ＳＡ３

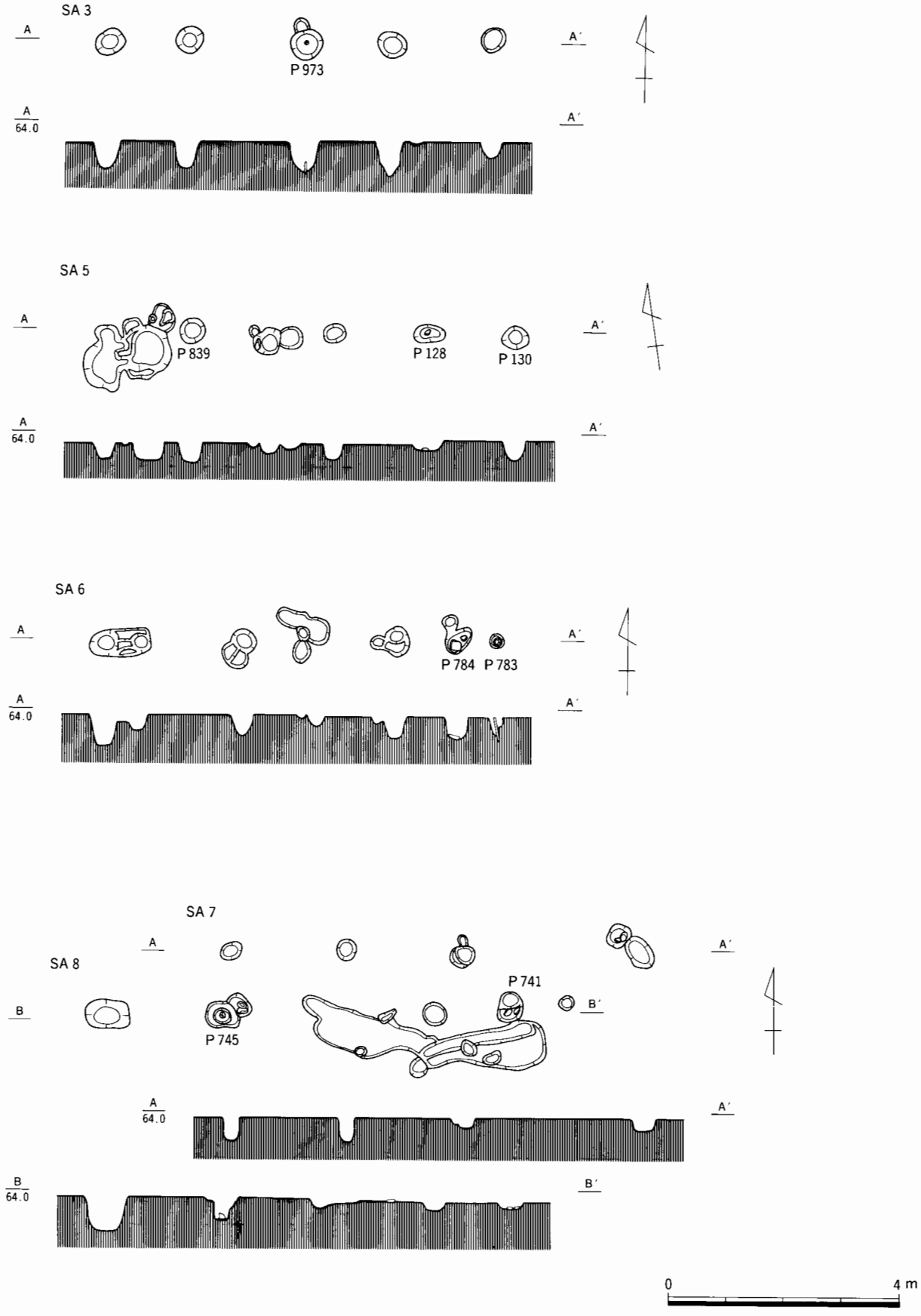
Ｆ27区～Ｇ27区にかけて位置する。主軸の方位はN89°Ｅであり、ＳＢ５とＳＢ６の桁行の方位と一致する。この柵列を構成する杭穴群は５個であり、径0.4ｍ～0.5ｍ、深さ0.3ｍ～0.5ｍの規模である。全長6.73ｍであり、杭間距離は東から1.79ｍ、1.52ｍ、2.02ｍ、1.40ｍを測る。Ｐ973の中央で杭がほぼ直立した状態で検出された。根石、支え石は存在しなかった。主軸の方位からII期の柵列と考えられる。

（出土遺物）

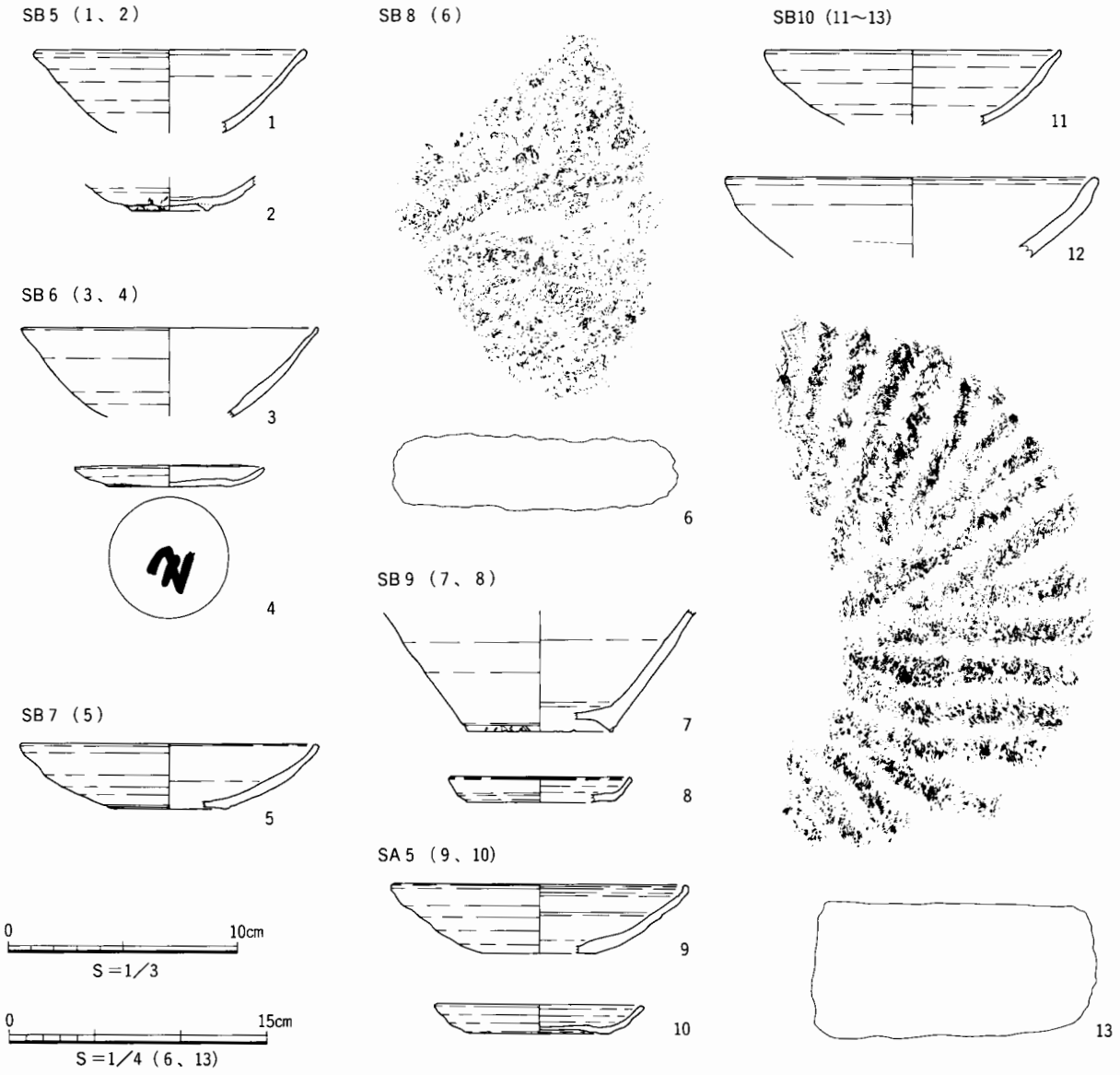
Ｐ973から杭１本（22）が検出された。丸木杭であり、半周を１面から削り先端を尖らせている。端部削りの長さは4.5cmを測る。現存長19.7cm、最大幅4.3cmを測る。樹種はヒノキ属である。

ＳＡ４

Ｆ27区～Ｇ27区にかけて位置する。主軸の方位はN86°Ｅであり、ＳＫ134～ＳＫ136の方位と一致する。この柵列を構成する杭穴群は５個～６個検出され、径0.2ｍ～0.4ｍ、深さ0.15ｍ～0.25ｍの規模である。全長6.8ｍであり、ＳＫ134～ＳＫ136に関連すると想定されることからII期の柵列と考えられる。


SA 3
A
A'
P 973
A
64.0
A'
SA 5
A
P 839
P 128
P 130
A'
A
64.0
A'
SA 6
A
P 784
P 783
A'
A
64.0
A'
SA 7
SA 8
A
A'
P 741
B
B'
P 745
A
64.0
A'
B
64.0
B'
0
4 m

第21図　杭 列 実 測 図



第22図　遺構出土遺物（1）

ＳＡ５

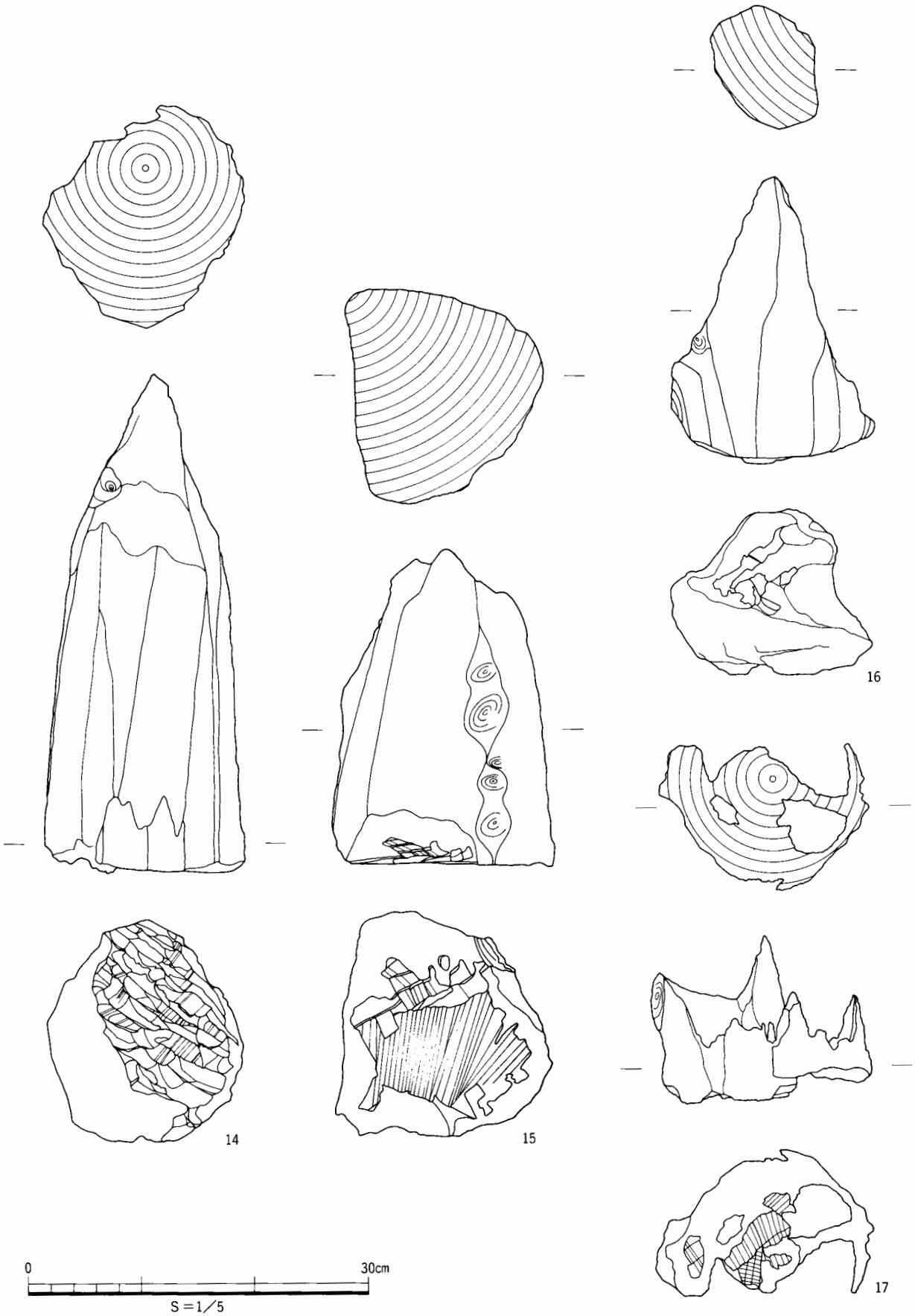
Ｃ23区～Ｅ23区にかけて位置する。主軸の方位はN87°Wであり、ＳＢ10、ＳＢ11の桁行とほぼ一致する。この柵列を構成する柱穴群は６個であり、径0.4ｍ～0.5ｍ、深さ0.2ｍ～0.4ｍの規模である。全長7.56ｍであり、杭間距離は東から1.48ｍ、1.66ｍ、1.14ｍ、1.33ｍ、1.53ｍを測る。Ｐ128の底面には径13.0cmの円礫が根石として使用されていた。主軸の方位よりIII期の柵列と考えられる。

（出土遺物）

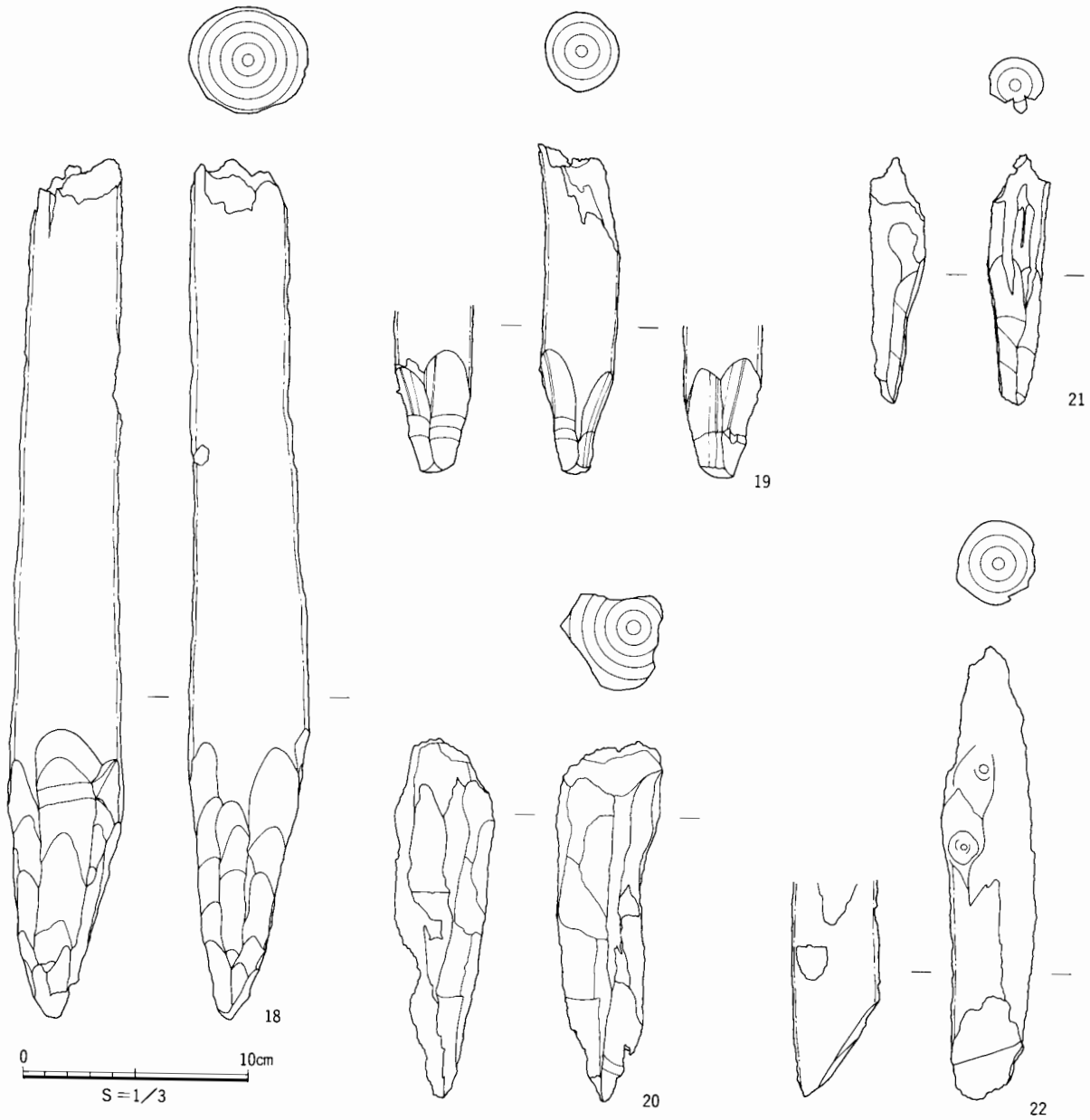
Ｐ130から山茶碗12、Ｐ839から山茶碗1、合計13点が出土している。そのうち２点を図示した。

山茶碗（９、10）

９は碗６類であり、口縁端部が内側に折り返してある。10は皿４類である。回転糸切り痕が残る部分が底部外面周縁より２㎜上がっている。また、底径が6.0cm（推定）であることに対し、回転糸切り痕が残る部分は径4.1cmと径が小さい。



第23図　遺構出土遺物（２）



第24図　遺構出土遺物（３）

ＳＡ６

Ｆ21区～Ｇ21区にかけて位置する。主軸の方位はＮ89°Ｅであり、ＳＢ５、ＳＢ６と一致する。この柵列を構成する杭穴群は６個ないしは７個であり、径0.2ｍ～0.5ｍ、深さ0.2ｍ～0.4ｍの規模である。全長6.29ｍであり、杭間距離は東から0.70ｍ、1.12ｍ、1.34ｍ、1.33ｍ、1.80ｍを測る。Ｐ784の底面には円礫が２個根石として使用されていた。また、Ｐ783では杭がやや西に傾いた状態で検出された。主軸の方位よりⅡ期の柵列と考えられる。

（出土遺物）

杭１本（18）が出土した。丸木杭であり、全周を６面から削り先端を尖らせてある。端部削りの長さ12.7cm、現残長37.6cm、最大幅5.2cmを測る。樹種はクリである。

ＳＡ７

Ｅ21区～Ｈ21区にかけて位置する。主軸の方位はＮ88°Ｗであり、ＳＢ４と一致する。この建物を構成する杭穴群は４つ検出されたが、さらに東西方向に延びると思われる。杭穴群は径0.30ｍ～0.50ｍ、深さ0.20ｍ～0.40ｍの規模である。全長10.94ｍ以上であり、杭間距離は東から3.05ｍ、2.06ｍ、2.11ｍを測る。主軸の方位からⅢ期の柵列と考えられる。

ＳＡ８

Ｆ21区～Ｈ21区にかけて位置する。主軸の方位はＮ89°Ｅであり、ＳＢ５、ＳＢ６と一致する。この建物を構成する杭穴群は５個検出され、東側でＳＡ１－３の南端に結合すると思われる。柱穴群は径0.40ｍ～0.80ｍ、深さ0.20ｍ～0.50ｍの規模である。全長9.00ｍ以上であり、杭間距離は東から1.36ｍ、1.87ｍ、1.84ｍ、2.00ｍを測る。Ｐ745から柱根とともに２個の偏平な円礫を使用した根石、Ｐ741から２個の偏平な円礫を使用した根石が検出された。主軸の方位からⅡ期の柵列と考えられる。

井戸（ＳＥ）

５基のうち３基が井戸側施設として円筒形を呈する石組を有する。２基はいずれも素掘りでそのうち１基は埋土の分析より便所様遺構の可能性が指摘されている。

ＳＥ１

Ｆ22区に位置し、南側でＳＸ27をわずかに切る。掘り方は直径約2.4ｍの円形を呈し、確認面より約0.8ｍ下まで掘り込んでいる。石組は掘り方の最下部において残存しており、現存しているもので円礫を１段、ないしは２段積み上げており、内径が直径約0.9ｍの円形を呈する。ＳＥ３で検出された石組の状態から推定すると、井戸側施設は現存している石組の上部のみに礫を円筒形に組んで成されていたと考えられる。しかし、井戸の埋土中には径30㎝前後の円礫が多くみられたことから、上部に存在していたと思われる礫の大部分が崩落したと推定される。また、現存している礫の上部に小礫を多く含む暗黄褐色の粘質土がみられ、この層が裏込めと思われる。石組より下は掘り方のない素掘りの状態であり段丘礫層をほぼ垂直に掘り抜いていた。確認できた最下部で内径0.8ｍ、深さ6.46ｍを測る。検出した最下部では18世紀後半代の遺物が大部分を占めているため、少なくともⅣ期後半には井戸が存在し、Ｖ期にはごみ穴として機能していたと思われる。

（出土遺物）

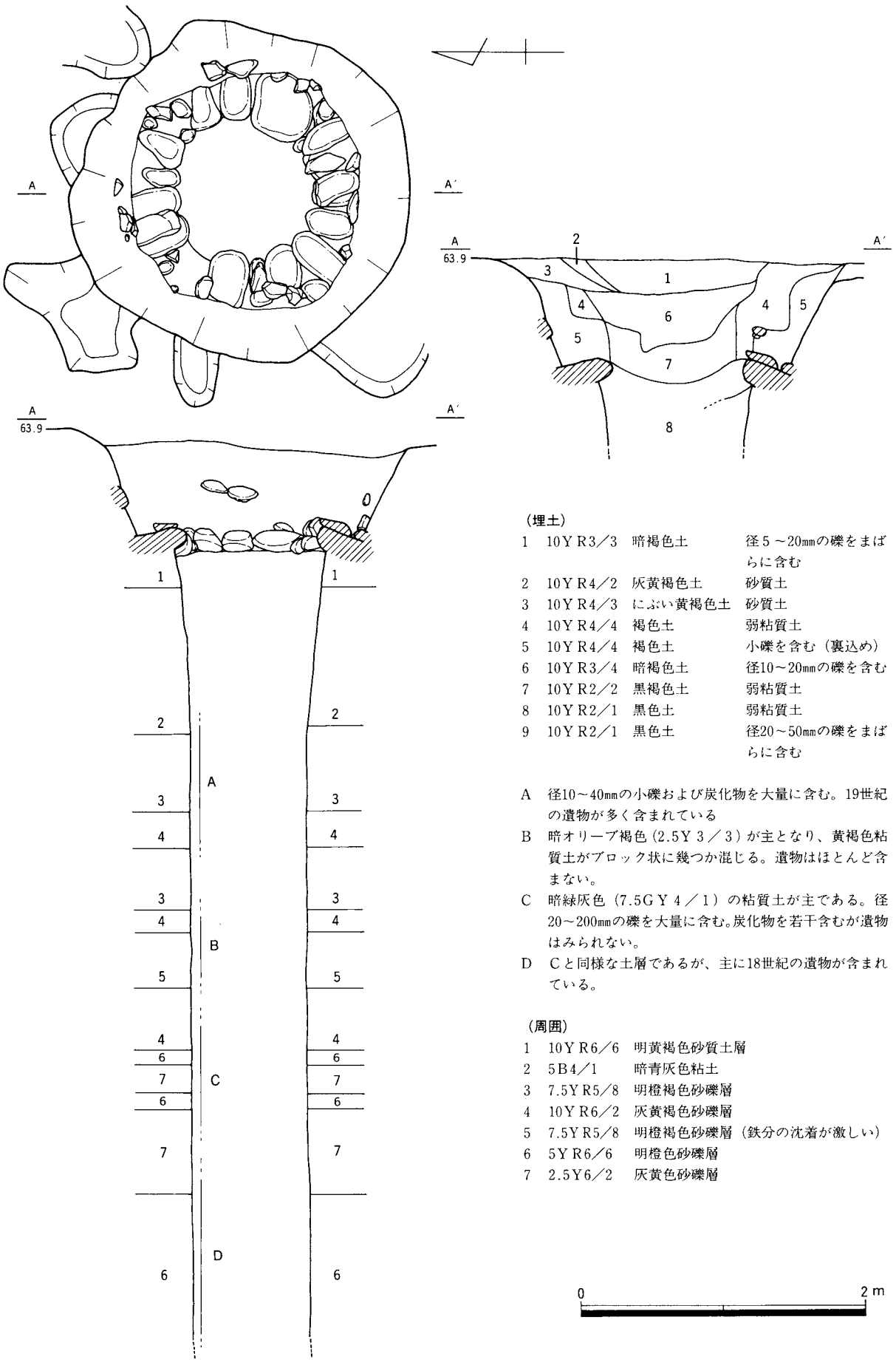
本遺構からは縄文土器１、山茶碗15、古瀬戸１、常滑１、瀬戸美濃（大窯）７、土師皿９、瀬戸美濃（連房）276、伊万里32、信楽10、土師質陶器６、瓦30、合計388点が出土した。

近世の遺物のみ抽出した産地別の組成では、全体に占める割合が瀬戸美濃は85％前後、伊万里は10～15％であり、遺跡全体の組成比とほぼ同一であるといえる。次に用途別の組成では、全体に占める割合が供膳具が60％前後、調理具が20％前後であり、これも遺跡全体の組成比と大差ないといえる。

出土遺物のうち49点を図示した。

瀬戸美濃（23～26、28、29、32～38、40～44、46～55、59～61、63、65～68、70～72）

23～25は紅皿である。23、24は小さな高台を有し、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はほ



（埋土）

1	10YR3／3	暗褐色土	径5～20㎜の礫をまばらに含む
2	10YR4／2	灰黄褐色土	砂質土
3	10YR4／3	にぶい黄褐色土	砂質土
4	10YR4／4	褐色土	弱粘質土
5	10YR4／4	褐色土	小礫を含む（裏込め）
6	10YR3／4	暗褐色土	径10～20㎜の礫を含む
7	10YR2／2	黒褐色土	弱粘質土
8	10YR2／1	黒色土	弱粘質土
9	10YR2／1	黒色土	径20～50㎜の礫をまばらに含む

A　径10～40㎜の小礫および炭化物を大量に含む。19世紀の遺物が多く含まれている

B　暗オリーブ褐色（2.5Y 3／3）が主となり、黄褐色粘質土がブロック状に幾つか混じる。遺物はほとんど含まない。

C　暗緑灰色（7.5GY 4／1）の粘質土が主である。径20～200㎜の礫を大量に含む。炭化物を若干含むが遺物はみられない。

D　Cと同様な土層であるが、主に18世紀の遺物が含まれている。

（周囲）

1	10YR6／6	明黄褐色砂質土層
2	5B4／1	暗青灰色粘土
3	7.5YR5／8	明橙褐色砂礫層
4	10YR6／2	灰黄褐色砂礫層
5	7.5YR5／8	明橙褐色砂礫層（鉄分の沈着が激しい）
6	5YR6／6	明橙色砂礫層
7	2.5Y6／2	灰黄色砂礫層

0　2m

第25図　SE 1 実測図

ぼ水平に面取りされる。23の体部外面には放射状に沈線が施される。また、24の体部外面には任意に凹みを施し文様としている。25はやや大きい高台を有し、体部は丸みを帯びて立ち上がる。体部外面には文様が施されていない。なお、24、25は全面に透明釉が、23は高台周辺を除き透明釉が施される。

26は灯明皿の油皿である。底部外面には回転ヘラ削り痕が残り、体部は丸みを帯びて立ち上がる。また、底部内面にはピン痕がみられる。全面に錆釉が施されるが底部周辺は拭い取られる。

28は反り皿である。高台は断面逆台形の削り出し高台であり、高台脇の削り幅は広い。体部は緩やかに外反し、外面下方のみヘラ削り調整が施される。また、底部内面にはピン痕がみられ、体部外面下方を除き灰釉が施される。

29は丸皿である。高台は精緻な断面逆三角形を呈する。また、底部内面の文様は摺絵で梅文が施されている。高台内面を除き灰釉が施されている。

32は広東茶碗である。高台が高くほぼ直立しており、体部は丸みを帯びて立ち上がる。文様は呉須絵で、体部外面に草花文、底部内面に五弁花が描かれ、横線が高台外面に２本、口縁部内面に２本、体部内面に１本施される。なお、全面に透明釉が施される。

33、34は染付丸碗である。いずれも体部下方は丸みを帯び、上方は開き気味である。文様は呉須絵で33は体部外面に山水文、34は体部外面に花文、底部内面に五弁花が描かれ、いずれも体部外面に２本、体部内面に１本の横線が引かれる。また、全面に透明釉が施される。

35～37は鎧湯呑である。高台は断面方形の付高台であり、やや深い腰部から直線的に立ち上がる体部を形成する。体部外面には回転体施文具により螺旋状の連続文様が施されている。口縁部周辺および内面に飴釉、体部外面に灰釉が施されている。

38は灰釉茶碗である。高台は削り出し高台であり、高台径は小さい。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内弯する。体部外面の文様は鉄絵で、笹あるいは海浜風景が描かれている。高台周辺を除き、緑青色の灰釉が施される。

40、41は柳茶碗である。高台は削り出し高台であり、高台脇の削り込みは広い。体部は40が口縁部で内弯気味となるが、41は口縁部まで直線的に延びる。また、40の体部外面の文様は鉄絵で、柳が描かれている。40に比べ41は調整が丁寧であり、体部の稜がほとんどみられない。また、胎土もきめ細かく炻器質である。なお、いずれも高台周辺を除いて緑青色の透明釉が施される。

42は天目茶碗である。高台は削り込み輪高台で、高台脇の削り込みは広い。体部の立ち上がりは強い。口縁部はほぼ直立し、端部は外反気味である。体部外面下方を除き鉄釉が施されている。本遺構の時期よりやや古い段階に比定されるため、伝世品として後世まで残ったと思われる。

43、44、46は箱型湯呑である。いずれも体部下方が屈曲し、上方が直立する形態である。43、44は高台が断面逆三角形の高い付高台である。文様は呉須絵と鉄絵であり、体部外面に横線が描かれている。また、高台周辺を除き灰釉が施されている。46は高台が断面逆三角形の低い付高台である。文様は呉須絵で、体部外面に５つの菊花つなぎと斜格子、底部内面に花文、口縁部内面と体部内外面下方に横線が描かれている。また、全面に透明釉が施されている。

47～50は擂鉢である。47は回転ヘラ削り痕が残る上げ底の底部から直線的な体部を形成する。口縁形態は15類に属する。底部内面の擂目は周縁に円状に施された後、円内部に不定方向に３方向から施される。擂目は一単位が17条で、幅4.5cmを測る。なお、全面に錆釉が施されているが底部周辺の釉は

拭い取られている。48は口縁形態が11類に属する。擂目は一単位が17条で幅4.7cmを測る。49は口縁形態が14類に属する。擂目は一単位が14条で、幅4.0cmを測る。また、口縁部直下に㊦の押印がみられる。50は口縁形態が11類に属する。擂目は一単位が17条で、幅4.8cmを測る。いずれも錆釉が施されている。

51、52は練鉢である。高台は断面逆台形の削り出し高台であり、高台内の削り込みは浅い。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外側に折り返され丸く成形される。高台内をのぞいて灰釉が施され、また、底部内面は重ね焼きのために一部釉が拭い取られている。

53は片口である。高台は断面長方形の高台であり、高台内の削り込みは浅い。器壁の厚い底部から体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はほぼ水平に面取りされる。底部内面にはピン痕が3ヵ所みられ、また、体部外面下方を除き飴釉が施されている。

54、55は徳利である。54は高台が蛇ノ目高台であり、体部下方に大きな稜を有する。なお、体部外面の轆轤目は顕著であり、体部内面下方に暗茶褐色の付着物がみられる。55も高台は蛇の目高台であり、体部は丸みを帯びて立ち上がる。54は内面を除いて、55は全面に錆釉が施されているが、底部外面の釉は拭い取られている。

59は瓶掛である。底部は台脚を有し、体部は外反して立ち上がる。台脚外面には斜線文の押印帯が施される。なお、底部外面、体部内面を除き緑釉が施される。

60は有耳壺である。肩部には3本の平行沈線が施され、耳を貼り付けた痕跡が残る。体部内外面の轆轤目は顕著であり、体部外面のみ灰釉が施される。

61は十能である。皿部上面は面取りされ、内面には3本の稜がみられる。把手部は筒状であり、中央部に直径0.5cmの上下に貫通する穿孔がみられ、先端部には一条の沈線が施される。また、皿部と把手部の接合面には糸切り痕が残っている。なお、全面に錆釉が施されている。

63は半胴である。体部がほぼ直立し、口縁部は幅の広い平坦な端部を形成している。なお、全面に鉄釉が施されている。

65は秉燭である。台部外面に回転糸切り痕を残し、中央部に深さ0.7cmの未貫通の穿孔がみられる。坏部はほぼ直線的に開き、口縁端部は内弯する。芯部は中央からややはずれた箇所に若干傾いて付けられている。台部周辺を除き飴釉が施されている。

66、67は香炉である。66は体部が直立し、口縁端部は丸く成形されている。また、体部内面の轆轤目は顕著であり、体部外面には呉須による文様が描かれている。底部周辺を除き透明釉が施されているが、口縁端部の釉は拭い取られている。67は高台が削り込み高台であり、高台内の削り込みは浅い。体部は直立し、外面の1ヵ所に丸ノミ状工具により半菊文が施されている。また、半菊文を施した後、体部屈曲部にヘラ削り調整を施し、稜を形成している。高台周辺および内面を除き灰釉が施されている。

68、70は蓋である。68は底部に回転ヘラ削り痕が残る。体部は直立して立ち上がり、口縁部はほぼ水平に外折する。底部上面には粘土塊を貼り付けてつまみとしており、つまみ上部にはヘラ状工具により花文らしき文様が施されている。70は底部外面に回転ヘラ削り痕が残り、中央がやや突出している。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ水平に外折する。つまみは粘土紐の両端を指で押さえて貼り付けている。なお、いずれも底部内面、笠部内面に灰釉が施されている。

71は戸車である。円柱形であり、中央に直径1.6cmの穿孔がある。側面は内外面とも非常に滑らかである。施釉はされていない。

72は加工円盤である。底部内面に摺絵による梅文が施された丸皿の底部を転用している。

土師器（27）

皿である。形態的にはⅠ－B－2類に属する。しかし、内面に指圧痕が残ることや胎土中に水分が少ないためか、底部外面から体部外面にかけて亀裂が幾筋かみられる点で中世の土師皿とは様相が異なる。内外面に油煙がみられ、内面には赤色顔料が一部付着している。

伊万里（30、31、39、45、69）

30、31は広東茶碗である。30は高台が高く薄い。文様は呉須絵で、体部外面に草花文が描かれている。また横線が体部内外面下方にそれぞれ1本、口縁部内面に1本描かれている。31は断面逆三角形で外側が高い高台を有し、体部は内弯気味に立ち上がる。文様は呉須絵で、体部外面には海浜風景、底部内面には五弁花が描かれている。また、横線が口縁部内面に1本、体部内外面下方にそれぞれ1本、高台外面に1本描かれている。

39は小坏である。高台は断面逆三角形の付高台である。体部下方はやや膨らみ、口縁部は外反気味である。体部外面中程の文様は呉須絵であり、笹が3つ描かれている。全面に透明釉が施されているが、高台端部の釉は拭い取られている。

45は箱型湯呑である。底部内面の文様は呉須絵で、五弁花が描かれている。また、横線は底部内面に2本、体部外面下方に1本、高台外面に2本描かれている。なお、全面に透明釉が施されているが、高台端部の釉は拭い取られている。

69は蓋である。つまみはやや外反しており、笠部は上方に稜を形成し、直線的に開く。文様は呉須絵であり、笠部内面中央に五弁花らしきもの、笠部内面先端に斜格子、その間に2本の平行沈線が描かれている。

信楽（64）

仏餉具である。末広がりの脚部と坏部が残存している。坏部先端は下方に折り返されており、内部のねじり込みは坏部外面まで達している。坏部内面および坏部外面下方以外に灰釉が施され、赤色と緑色の上絵が描かれている。

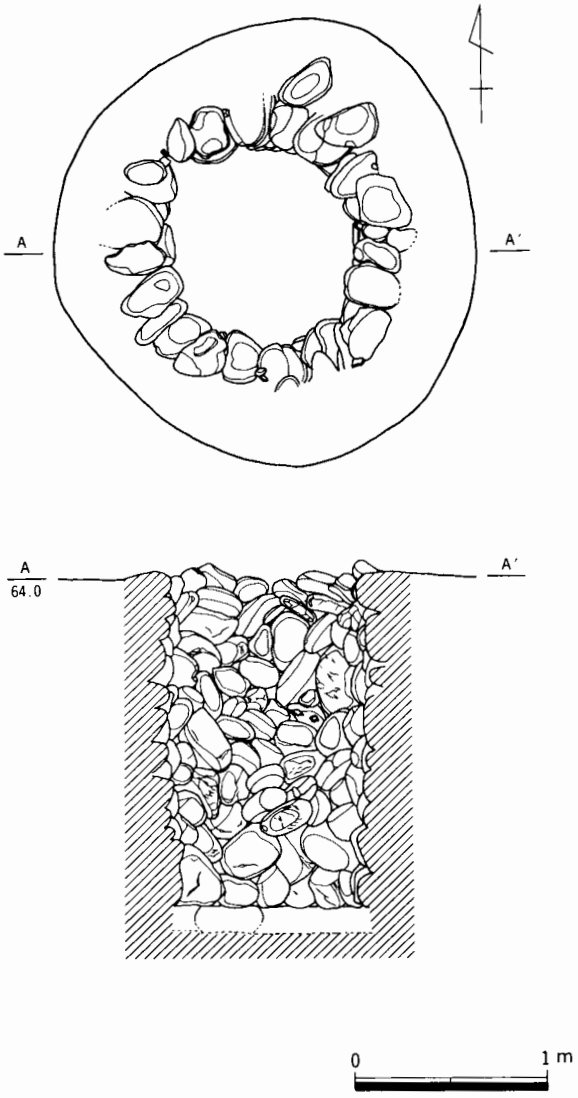
在地産（56～58、62）

56、57は土鍋である。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は屈曲し、さらに外折する。また、口縁端部は垂直方向に面取りされ、中央は若干凹む。58は56あるいは57の把手である。口縁部上面に、半円盤状の粘土帯の両端をヘラ状工具で押さえて貼り付けてある。また、把手中央部には径0.7cmの貫通する穿孔がみられる。なお、いずれも全面に錆釉が施してある。

62は土瓶である。上げ底の底部から、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は短く直立する。把手は粘土紐の両端を指で押さえて貼り付けており、把手内面のみヘラ状工具により面取りされている。注口部は下ぶくれであり、先端はヘラ状工具により面取りされている。また、注口部と体部の接合面には径1.0cm前後の3つの穿孔が施されている。全体的に注口部側が低く、注ぐという用途を加味していると思われる。体部外面下方はヘラ削り調整が施され、炭化物が多量に付着している。なお、体部内面および体部外面下方を除き、鉄釉が施されている。

ＳＥ２

Ｄ13区～Ｅ13区に位置し、西側でＳＤ16を切る。掘り方は長軸2.33ｍ、短軸2.16ｍでほぼ円形を呈し、垂直に掘り込んでいる。掘り方の断ち割り調査は行わなかったが、ＳＤ16の掘削の際に明橙色粘質砂層と径20㎝～30㎝の礫層の互層構造であることを確認している。井戸側施設として９段～10段の円礫を垂直に約1.7ｍ積み上げている。石組はほぼ円形で、上面の内径は長軸約1ｍ、短軸約0.9ｍを測る。石組の下には長さ50㎝前後、径15㎝前後の木材が六角形に組まれていた。出土遺物は角釘のみであり時期は不明であるが、埋土の状態から近代まで使用されていたと思われる。



第26図　ＳＥ２実測図

（出土遺物）

鉄釘１本（107）が石組の間から出土した。断面四角形で現存長は3.7㎝を測る。

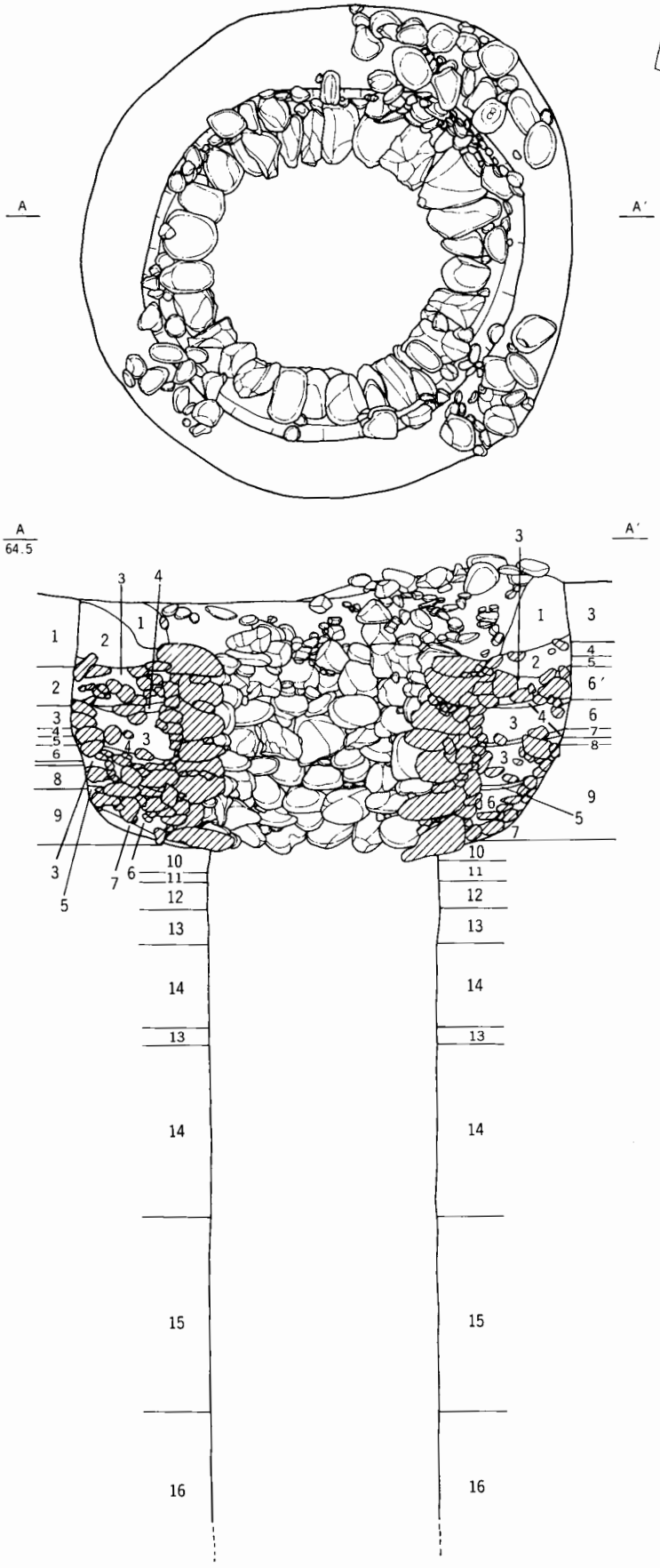
ＳＥ３

Ｆ３区～Ｆ４区にかけて位置し、ＳＸ30を切る。掘り方は径2.9ｍの円形を呈し、擂鉢状に約1.6ｍ掘り込んでいる。掘り方の壁面に沿うようにやや大きめの礫が積まれており、石組の裏側および間には10㎝前後の礫が詰められている。層位は褐色砂礫層と明黄褐色礫混じり粘質土の互層構造がみられ、下部にはシルト層および鉄分の沈着が確認された。井戸側施設として７段～８段の円礫（若干角礫を含む）を垂直に約1.2ｍ積み上げている。しかし、井戸の掘り方や埋土中に径30㎝程度の円礫が幾つかみられたことから実際はもう少し石組が高かったと思われる。石組はほぼ円形を呈し、内径は長軸1.3ｍ、短軸1.2ｍを測る。遺構面より約1.6ｍ下からは掘り方と石組はみられず、素掘りである。水平ラインに対して垂直に掘り込んでおり、確認できた最下部（遺構面より5.5ｍ下）で内径1.31ｍを測る。出土遺物よりⅣ期前半につくられ、Ⅴ期には埋没していたと思われる。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器３、山茶碗11、常滑２、青磁１、土師皿16、瀬戸美濃116、伊万里10、信楽７、土師質陶器６、鉄製品１、石製品２、瓦１、合計176点が出土した。

遺跡全体の18世紀代の出土遺物の様相と比較し、本遺構の特異性を概観すると、１土師皿の比率が高い、２供膳具の比率が高い、３調理具、神仏具が一定量出土しているのに対し、灯火具が一点も出土していない、といった３つの項目が挙げられる。これらが何を意味するのかはわからないが、土師



（堀り方）

1	2.5YR5／4	黄褐色	砂質土
2	10YR2／1	黒色	径10～20㎜程度の礫を含む、弱粘質土
3	10YR4／4	褐色	砂礫層、径30～200㎜の礫を多く含む
4	10YR6／8	明黄褐色	砂礫層の中に粘質土がブロック状に入る
5	10YR6／8	明黄褐色	鉄分の沈着が激しい
6	10YR3／3	暗褐色	シルト
7	10YR5／6	黄褐色	粘土

（周囲）

1	10YR6／6	明黄褐色砂質土層（Ⅵ層）
2	2.5YR6／4	にぶい黄色砂層
3	10YR3／2	黒褐色砂礫層
4	10YR5／4	にぶい黄褐色砂礫層
5	10YR5／4	にぶい黄褐色砂礫層（鉄分の沈着が激しい）
6	2.5Y5／3	黄褐色砂礫層
7	2.5Y5／4	黄褐色砂礫層
8	2.5YR5／4	黄褐色砂質土層
9	2.5YR5／4	黄褐色砂質土層（鉄分の沈着が激しい）
10	5B4／1	暗青灰色粘土
11	10YR6／8	明黄色礫層
12	10YR6／3	にぶい黄橙色砂質土層
13	10YR5／8	黄褐色粘質土層
14	7.5YR5／6	明橙色粘土
15	10YR5／3	にぶい黄褐色粘土
16	5YR6／4	にぶい橙色砂礫層
17	7.5YR5／8	明褐色砂礫層

0　2 m

第27図　SE 3 実測図

皿の存在や供膳具の中で柿釉と灰釉をかけ分けている腰折碗がみられることは、本遺構に遺物を廃棄した人物の嗜好性の高さを示していると思われる。

出土遺物のうち23点を図示した。

瀬戸美濃（76～80、82、83、85、86、89～95）

76、77は丸皿である。76は底部が削り込み高台であり、高台内の削り込みは浅い。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部直下でかるく指ナデ調整を施す。底部周辺に煤が付着しており、また、体部外面を除き飴釉が施されている。77は断面逆三角形の付高台を有し、体部外面の轆轤目は顕著である。底部内面にはピン痕が4ヵ所みられる。底部周辺を除き灰釉が施されている。

78は菊皿である。口縁部はヘラで切り込みをいれて花弁を施しており、体部内面は型打ちにより菊花を表している。体部外面下方を除き、灰釉が施されている。

79は香炉である。体部下方で屈折し、上方は直立する。また、口縁部は内傾して面取りされる。体部内面および体部外面下方を除き灰釉が施されている。

80は小坏である。高台は断面逆三角形の削り出し高台である。体部は下方が丸みを帯び、上方は開き気味に立ち上がる。底部周辺を除き灰釉が施される。

82は尾呂茶碗である。体部下方は丸みを帯び、上方は直線的に開く。体部外面下方を除き飴釉とうのふ釉が施される。

83は腰折碗である。体部中程で屈折し、ほぼ直立して口縁部に至る。なお、体部内外面ともに灰釉と柿釉を左右にかけ分けている。

85は折縁碗である。高台は断面方形の付高台であり、細くて高い。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外折し、端部を上方につまみあげる。体部内外面の調整は非常に丁寧であり、底部内面には直接重ねて焼成したと推定される痕跡が残る。体部外面、口縁部周辺、および底部内面中央に灰釉が施されている。

86は染付丸碗である。体部内面の文様は呉須絵で、草花文が描かれている。なお、全面に透明釉が施されている。

89、90は加工円盤である。89は灰釉丸碗の底部の転用であり、90は底部内面に摺絵で梅が描かれている丸皿の底部を転用している。

91は染付大皿である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外折する。口縁部上面は指ナデのため浅く凹み、端部は丸く収まる。体部内面の文様は呉須絵で、全面に透明釉が施される。

92は笠原鉢である。高台は断面方形の付高台であり、体部は緩やかに立ち上がる。底部内面の文様は鉄絵であり、底部外面を除き長石釉が施される。

93、94は練鉢である。93は断面方形の削り出し高台であり、高台接地面の幅が広い。体部外面にはヘラ削り調整が施され、底部周辺を除き灰釉が施されている。なお、底部内面は重ね焼のため、一部釉が拭い取られている。94は断面逆台形の削り出し高台であり、高台接地面の幅は狭い。体部には轆轤目が顕著に残り、底部外面周縁を除き灰釉が施されている。

95は擂鉢である。底部外面の糸切り痕は掻き消されており、体部外面はヘラ削り調整が施されている。体部内面は磨滅しており、非常に滑らかである。擂目は一単位が18条で、幅4.8cmを測る。なお、全面に錆釉が施されている。

土師器（73～75）

皿である。73、75は硬質で黄橙色を呈するが、74はやや軟質で黄白色を呈する。形態は73がII－a類、74、75がII－b類である。なお、75は体部内外面に煤が付着している。

常滑（87）

甕である。頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は折り返され縁帯を形成する。縁帯は下方に長く伸ばし、上方は短く貼り付けられる。また、縁帯と頸部の境には狭い隙間がみられる。

伊万里（81）

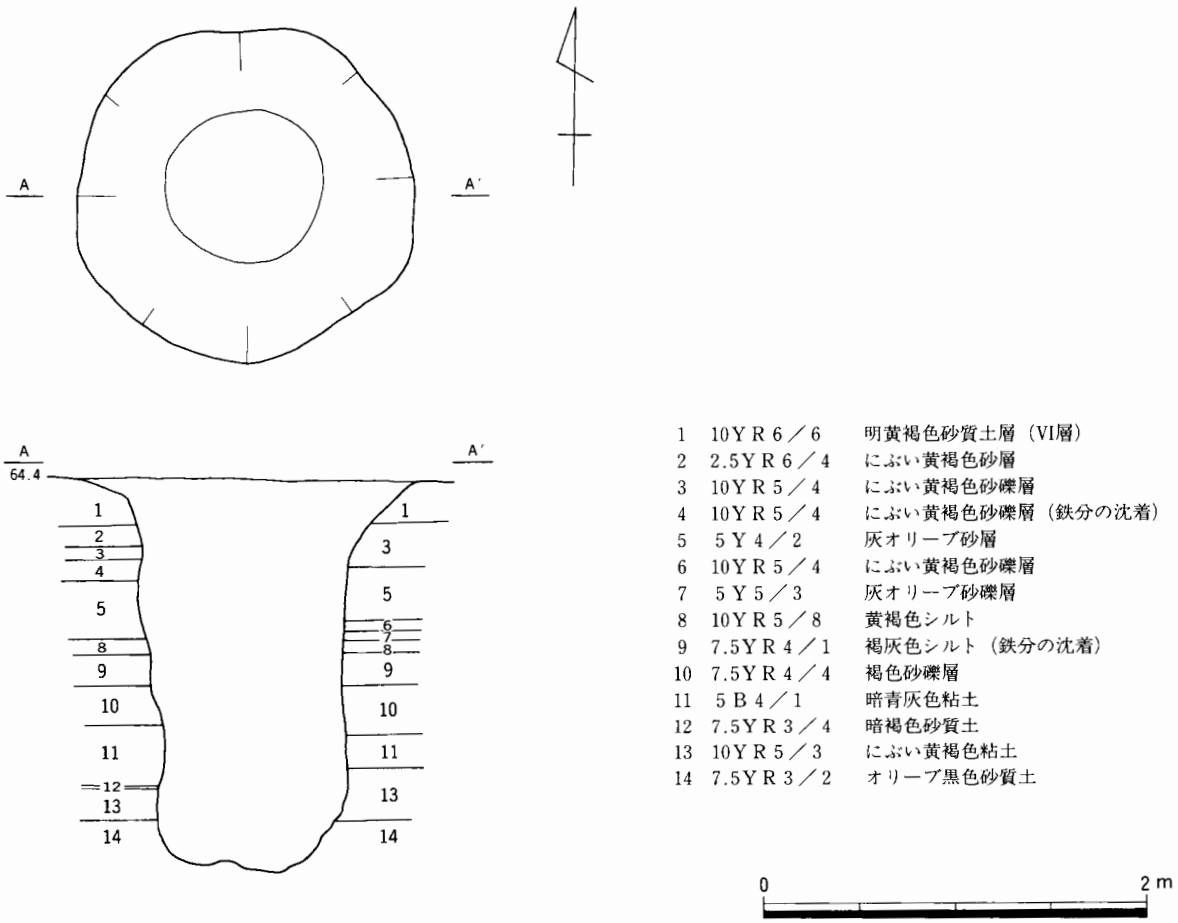
染付碗である。体部は丸みを帯びて立ち上がり口縁部に至る。体部外面の文様は呉須絵で、草花文が描かれている。また、全面に透明釉が施されている。

中国磁器（84）

青磁端反碗である。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。なお、全面に施釉されている。

石製品（88）

花崗岩製の石臼の上臼である。磨滅が激しく、溝の単位は不明である。



第28図　SE 4 実測図

ＳＥ４

Ｆ１区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、径約1.8ｍ、深さ2.08ｍを測る。垂直に掘り込んでいるが、壁面は凹凸が激しく、他の井戸とは様相が異なる。Ⅳ層中にⅢ層が入り込んだ状態で検出され、埋土中層は黒褐色（2.5Y3/2）の砂質シルトが、下層は灰色（5Y4/1）の砂質シルトが主であった。底面直上には鉄分の沈着が顕著にみられ、鉄分が厚さ2㎜～3㎜の板状の層となっていた。なお、埋土中には多くの植物遺体や昆虫遺体がみられた（第Ⅴ章第２節参照）。また、埋土下層よりコプラスタノールが検出されたことから便所であったと推定されている。おそらく、井戸を便所として再利用したのであろう。[7]出土遺物よりⅣ期につくられ、Ⅴ期には埋没していたと推定される。

（出土遺物）

本遺構からは常滑１、瀬戸美濃（大窯）１、瀬戸美濃（連房）23、伊万里４、土師質陶器８、石器１、木器４、包丁１、瓦４、合計47点が出土した。

瀬戸美濃（連房）と伊万里の内訳は食膳具12、貯蔵具４、灯火具１、火具１、神仏具９であり、神仏具の出土が目立つ。また、土師器のミニチュアや器壁の薄い型押しの製品（玩具？）も出土している。これらの遺物は今回調査した範囲内では本遺構からしか出土しておらず、また、神仏具の出土が目立つことから何か特別な廃棄形態に伴う遺構と思われる。

出土遺物のうち10点を図示した。

瀬戸美濃（96、97、99～103）

96は灯明皿の油皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は若干外反する。口縁部の一部は打ち欠かれており、その直下に煤が付着している。全面に錆釉を施しているが、底部外面周辺は拭い取られている。

97は香炉である。高台は削り出し輪高台であり、高台端部が内側に折り返されている。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は内側に折り返され、端部をほぼ水平に面取りする。高台周辺および口縁端部を除き灰釉が施されている。

99は仏餉具である。脚部は坏部との接合部から内傾して直線的に延び、下方で大きく開く。また、脚端部は短く下方に延び、脚内部はねじり込みの痕跡が残る。坏部は丸みを帯びて開き、内傾気味に立ち上がる。脚部内面および外面下半を除き灰釉が施される。

100～102は仏花瓶である。100、101は同一個体と思われる。底部外面に回転ヘラ削り痕が残り、肩部まで緩やかに開いて立ち上がり頸部に至る。内面は轆轤目が顕著であり、体部外面上方および内面は灰釉が施され、体部外面下方は柿釉が施されている。なお、底部外面の釉は拭い取られている。102は胴部が球状に膨らみ、頸部が外反気味に立ち上がる。また、頸部から胴部にかけてＳ字状の双耳を貼り付けている。なお、全面に鉄釉が施されている。

103は徳利である。体部下半は強いヘラ削り調整により稜を形成しており、底部は上げ底である。また、体部には２ヵ所に凹みを有する。体部内面下方を除き柿釉が施され、底部外面の釉は拭い取られている。

土師器（98）

小型の壺かミニチュアである。底部は丸底であり、口縁部は内弯する。手づくね成形であり、体部外面には指圧痕が一部残っている。

常滑（104）

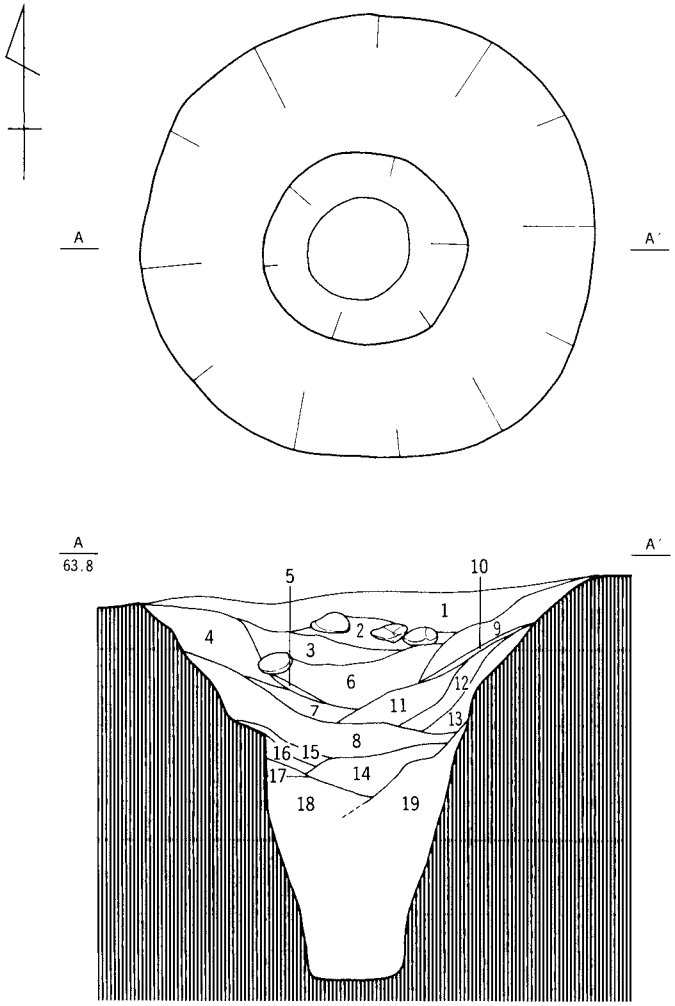
甕である。焼き締まりは悪く軟質で、むしろ素焼きに近い。体部外面には右上方向にヘラ削り痕が残り、内面には指圧痕、および上方へのヘラ削り痕が残る。

瓦（105）

軒平瓦である。内区に上向きと下向きの唐草を配する。

包丁？（106）

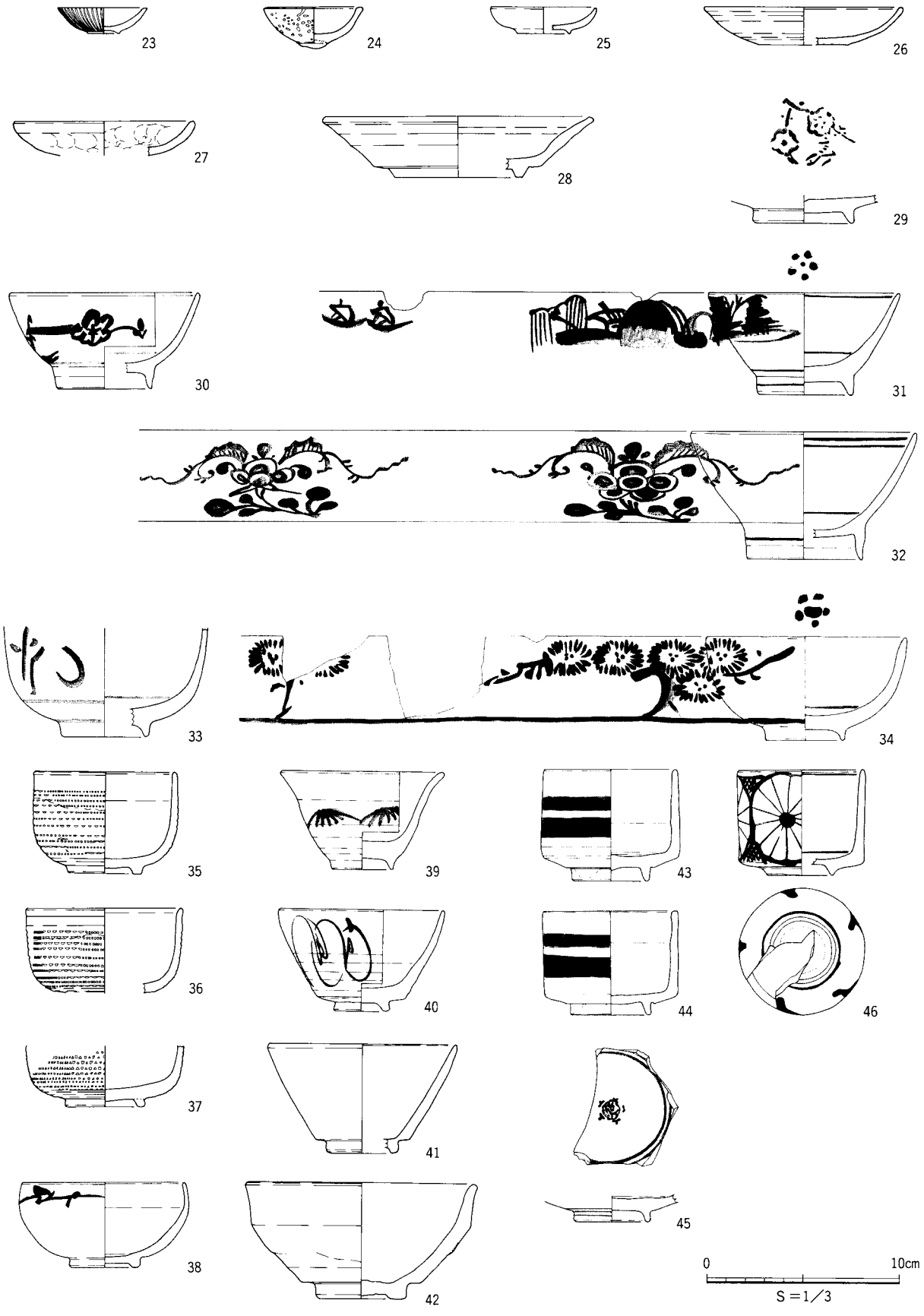
幅3.3～3.6cm、長さ10.8cmの木製の把手部は円柱状を呈し、一側面のみ凹んでいる。刃部は平造りで上反り気味である。把手部の凹みを使用痕とするならば、右利きの人の使用となる。



1	N3／0	暗灰色土	弱粘質土
2	N2／0	黒色土	径10～30mmの礫を含む
3	5B2／1	青黒色土	粘質土
4	5B2／1	青黒色土	粘質土、径30～50mmの礫を含む
5	5B5／1	青灰色土	シルト層
6	5B3／1	暗青灰色	青灰色（5B6／0）が縦方向に筋状にみられる
7	5B1.7／1	青黒色土	粘質土
8	N1.5／0	黒色土	径5～15mmの礫を含む
9	5B3／1	暗青灰色土	径30～50mmの礫を多く含む
10	7.5YR6／6	橙色土	粘質土
11	7.5YR2／1	黒色土	弱粘質土、径30～50mmの礫を多く含む
12	N3／0	暗灰色土	弱粘質土
13	7.5YR1.7／1	黒色土	径10～30mmの礫をまばらに含む
14	5B2／1	青黒色土	粘質土
15	5B1.7／1	青黒色土	粘質土
16	7.5YR4／6	褐色土	砂質土、小礫を多く含む
17	7.5YR1.7／1	黒色土	弱粘質土、小礫を含む
18	7.5YR3／3	暗褐色土	弱粘質土
19	7.5YR2／2	黒褐色土	弱粘質土

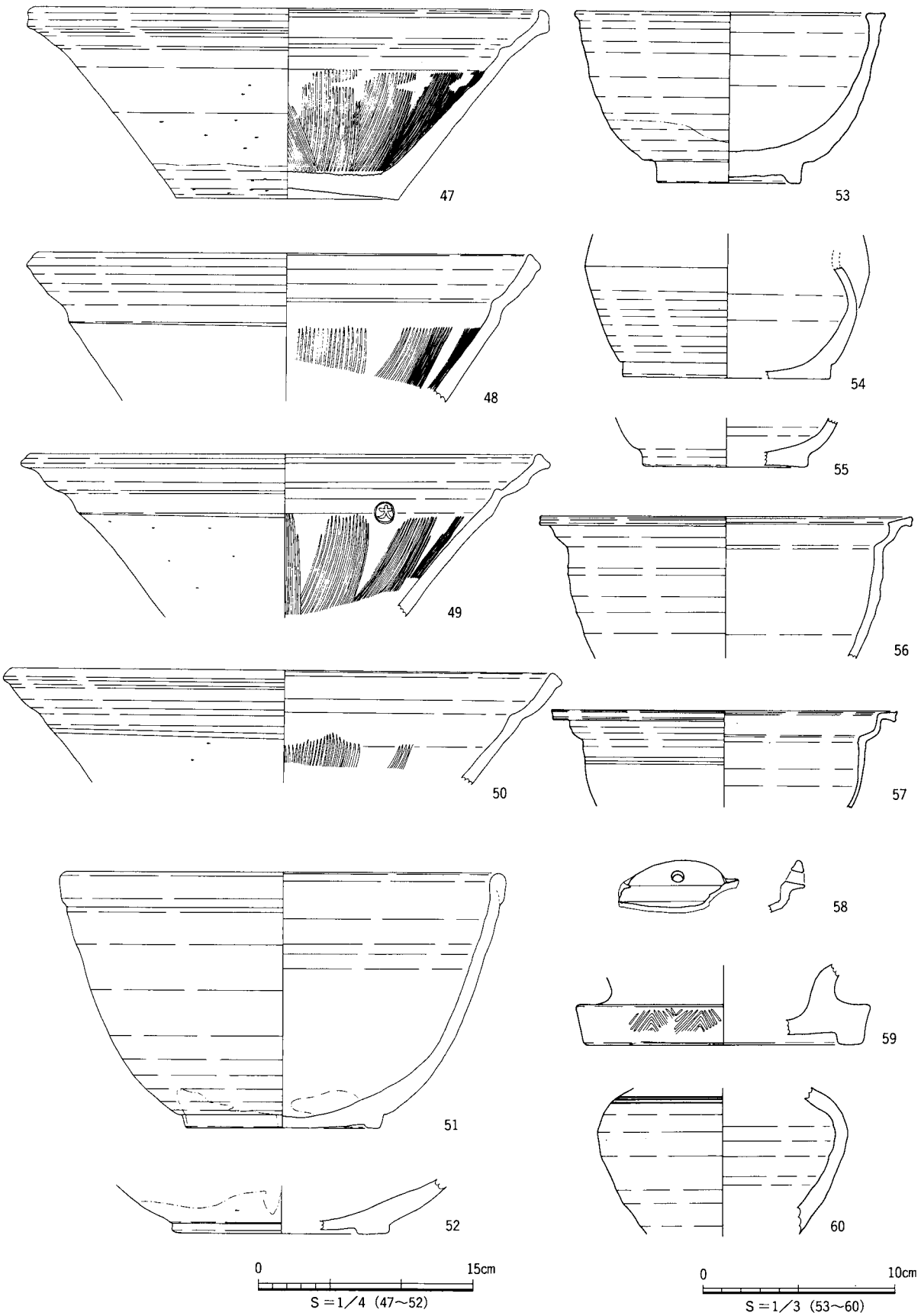
第29図　SE 5 実測図

SEI（23～46）



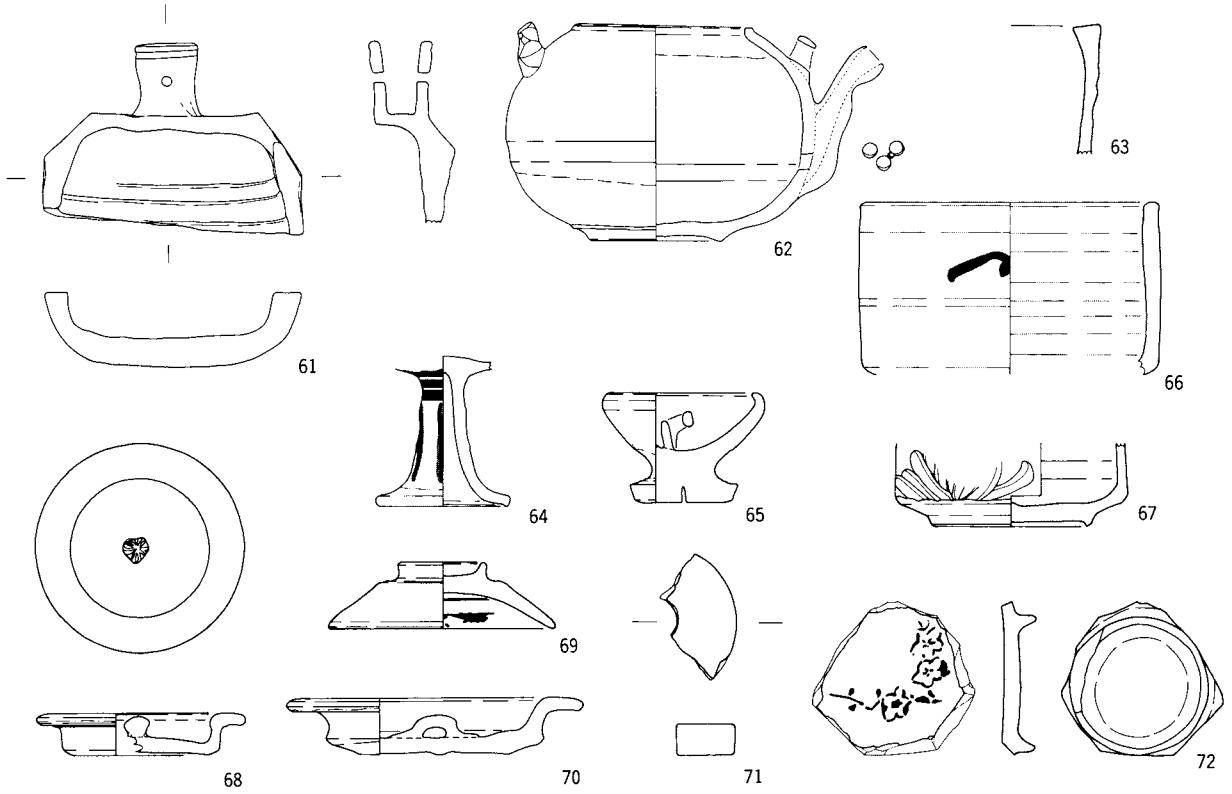
第30図　遺構出土遺物（４）

SE1 (47～60)

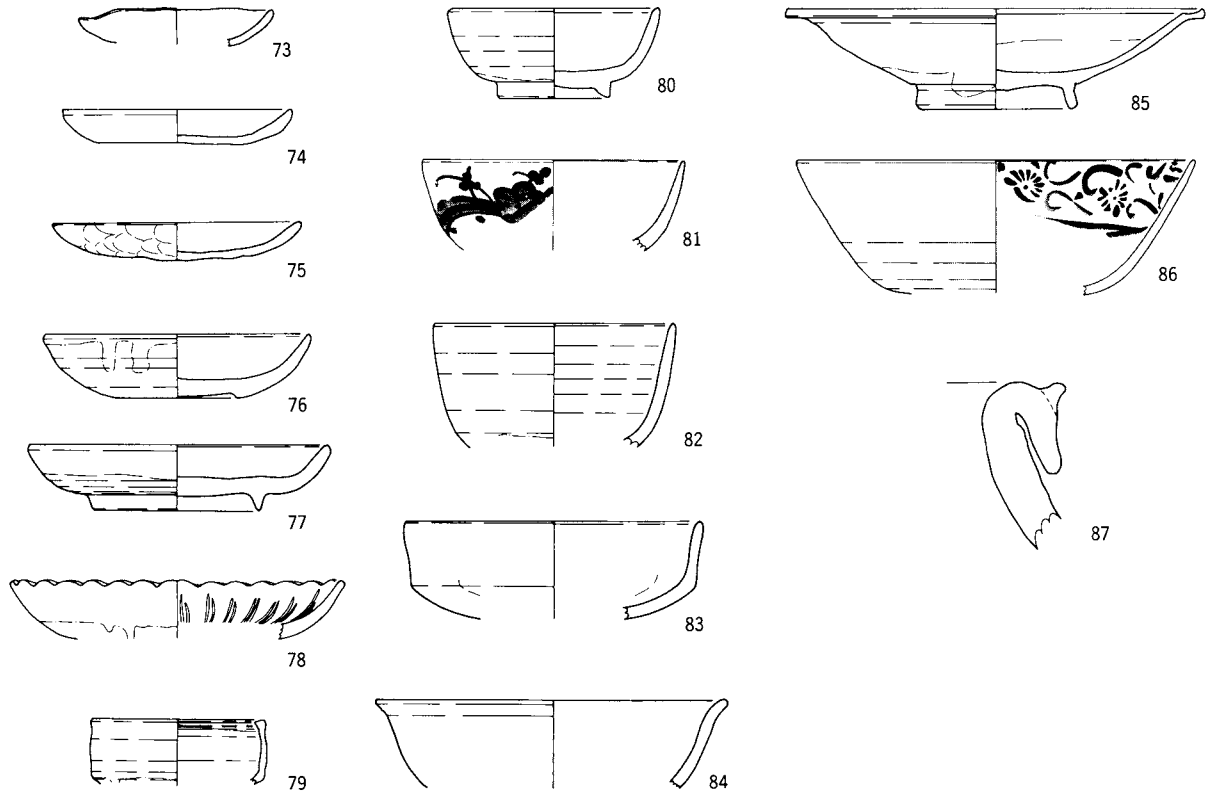


第31図　遺構出土遺物（5）

SE1 (61～72)



SE3 (73～87)

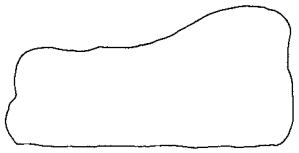


0 10cm
S＝1／3

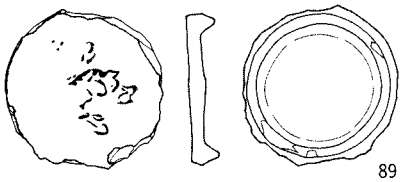
0 15cm
S＝1／4 (61、62)

第32図　遺構出土遺物（6）

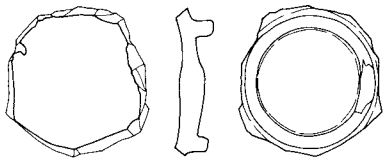
SE 3 (88～95)



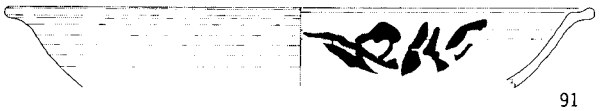
88



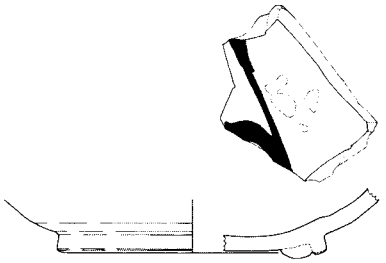
89



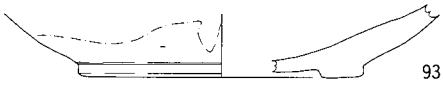
90



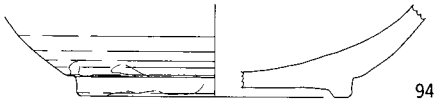
91



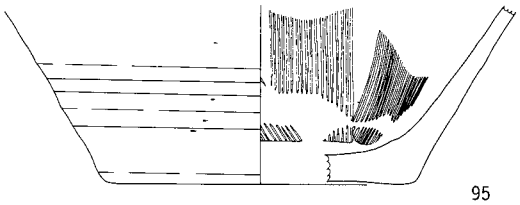
92



93



94

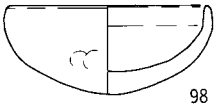


95

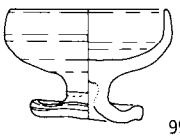
SE 4 (96～104)

96

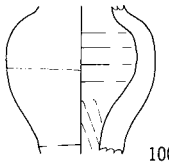
97



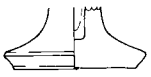
98



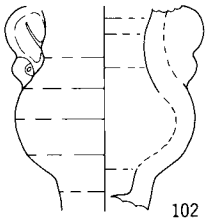
99



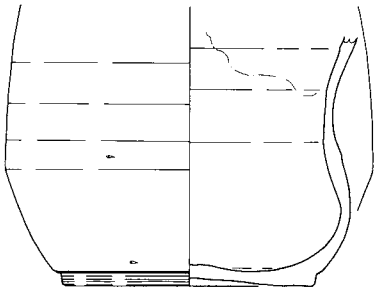
100



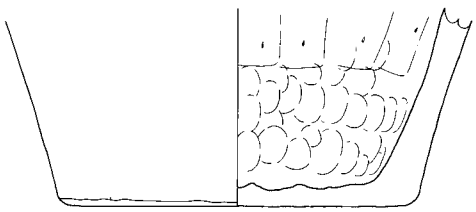
101



102



103



104

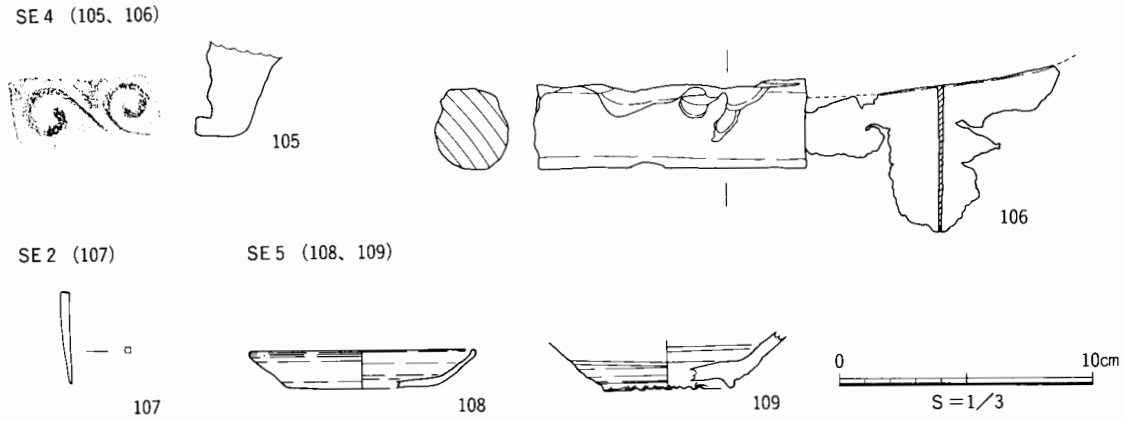
0 10cm

S＝1／3

0 15cm

S＝1／4 (91、92)

第33図　遺構出土遺物（７）



第34図　遺構出土遺物（８）

ＳＥ５

Ｄ28区～Ｅ27区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長軸2.36ｍ、短軸2.28ｍ、深さ2.09ｍを測る。遺構面より0.7ｍ程下までは約45度の角度で、それ以下はほぼ垂直に掘り込まれる。底面はほぼ水平であり、径0.42ｍを測る。石組や掘り方などは確認されず、また、埋土中に径30cm前後の円礫がみられたが、他からの流れ込みとおもわれる。出土遺物からⅠ期～Ⅲ期の遺構と考えられる。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器２、山茶碗12、土師器３、土師質陶器２、石器２、合計21点が出土した。いずれも細片が多く、そのうち２点を図示した。

山茶碗（108、109）

108は皿１類であり、109は碗１類か２類の底部である。

土坑（ＳＫ・ＳＸ）

形状、法量ともに様々な穴が検出されている。これらは、ゴミ穴、肥溜め、建物に関連するもの、粘土採掘坑、鍛冶関連遺構、馬屋、タマヤ、人骨が出土していない墓などの用途が考えられるがいずれも断定できるものはない。

ＳＫ90～92、ＳＫ99

Ｃ22区～Ｄ22区にかけて位置する。いずれも平面形は不定であり、ＳＫ91がＳＫ90、92、99を切り、ＳＫ90がＳＫ99を切る。規模は測量可能な箇所で、ＳＫ90が短軸1.18ｍ、深さ0.34ｍ、ＳＫ91が長軸1.20ｍ、短軸0.98ｍ、深さ0.44ｍ、ＳＫ92が長軸0.95ｍ、深さ0.15ｍ、ＳＫ99が深さ0.32ｍを測る。埋土はいずれも礫を含んでおり、ＳＫ90、ＳＫ91の最下層は炭化物や植物遺体が混入し、非常に粘性の高い土であった。建物の近くに位置し、同じ場所に何度も穴を掘り込んでいることから、これらの土坑はごみ穴であった可能性が高い。出土遺物からⅡ期～Ⅲ期の土坑と考えられる。

（出土遺物）

ＳＫ91より山茶碗３、古瀬戸２、瀬戸美濃（大窯）１、土師皿２、ＳＫ92より瀬戸美濃（連房）１、合計９点が出土している。そのうち２点を図示した。

山茶碗（110）

碗６類に属するが、内面の轆轤目は顕著である。

古瀬戸（111）

折縁深皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外折する。体部外面の轆轤目は顕著であり、回転ヘラ削り調整が施されている。なお、体部内外面上方に灰釉が施されている。

ＳＫ108

Ｇ11区～Ｇ12区にかけて位置する。平面形は不定形を呈し、長軸3.94ｍ、短軸2.03ｍ、深さ0.38ｍを測る。遺構の上部は削平されており、残存している壁の立ち上がりは南面以外は緩やかである。埋土は４層に分かれ、第３層内に遺物および径５㎝～30㎝の円礫、角礫が多量に含まれていた。主軸はＮ０°（真北）である。出土遺物からＶ期の土坑と考えられる。

（出土遺物）

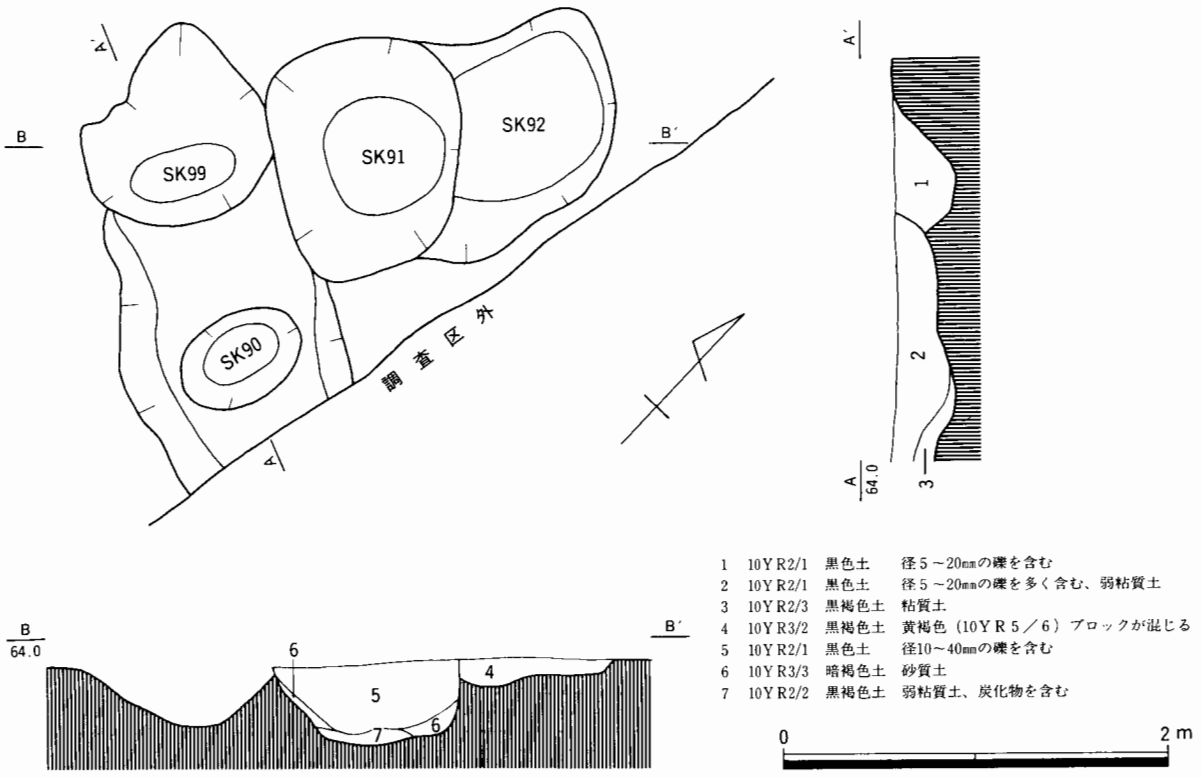
本遺構からは古瀬戸１、瀬戸美濃（連房）19、土師質陶器４、鉄製品６、石製品３、瓦33、木製品29、合計95点が出土している。瓦や建築部材、木端材などが多く出土してことから建物の築造の際に掘り込まれた土坑と思われる。

出土遺物のうち10点を図示した。

瀬戸美濃（123、124、127）

123は蓋である。体部下方に稜を形成し、上方は直立する。口縁部はほぼ水平に外折する。底部内面および笠部内面に鉄釉が施されている。

124は箱型湯呑、あるいは香炉である。底部は円盤状に突出しており、体部は直立して立ち上がる。底部周辺を除き灰釉が施されている。



第35図　SK90・91・92・99実測図

127は擂鉢である。回転ヘラ削り痕が残る上げ底の底部から、開き気味に体部が立ち上がる。口縁形態は16類である。擂目は一単位が19条で、幅5.4cmを測る。底部内面の擂目は周縁に円状に施された後、円内部に不定方向に4方向から施される。なお、全面に錆釉が施されている。

石製品（126）

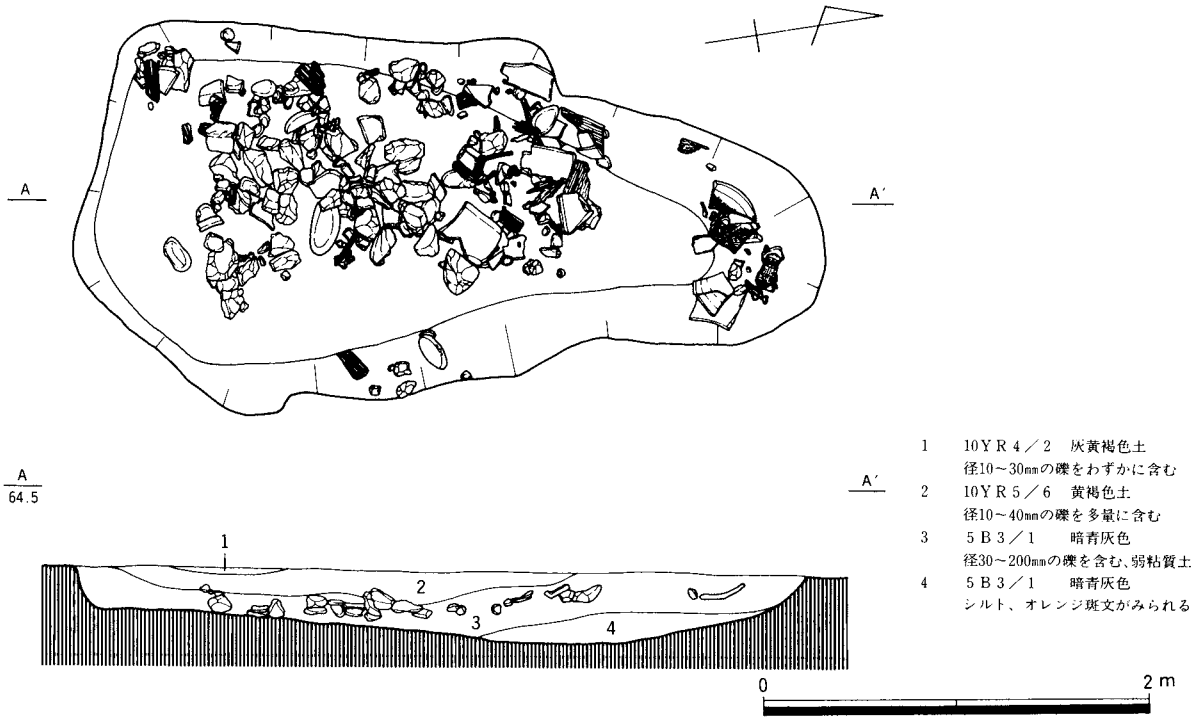
温石である。周縁部の1ヵ所に径0.4cm程度の穿孔を有する。表面は全体的に被熱しており、何箇所かに熱による凹みがみられる。

木製品（128～132）

128は下駄である。連歯下駄で、板目取りである。花緒穴は前後の歯の直前に開けられている。また、平面形は前後端が丸みをもった長方形を呈している。現存長19.5cm、最大幅7.2cm、厚さ1.0cm、歯の高さ2.0cm、歯の幅5.4cmを測る。樹種はスギである。130、131は建築部材であり、いずれも板目板で直線的に挽きとったものである。130は中央に幅2mm程度の穿孔が2ヵ所にみられる。また、一方の端が段になっており、接続部の可能性がある。加工痕はみられない。131はくぎがささった状態で残存しており、のこぎりによる縦挽き痕が認められる。130は現存長17.7cm、最大幅7.0cm、厚さ1.4cmを測る。樹種はアカマツである。131は現存長39.3cm、最大幅10.0cm、厚さ0.9cmを測る。樹種はアカマツである。129、132は板材である。いずれも板目板で直線に挽きとったものである。また、のこぎりによる縦挽き痕が認められる。129は現存長26.2cm、最大幅6.7cm、厚さ1.5cmを測る。樹種はアカマツである。132は現存長26.1cm、最大幅12.0cm、厚さ2.8cmを測る。樹種はヒノキ属である。

SK109

F11区～G12区にかけて位置する。平面形は不正円を呈し、長軸3.12m、短軸2.32m、深さ0.20m



第36図　SK 108 実 測 図

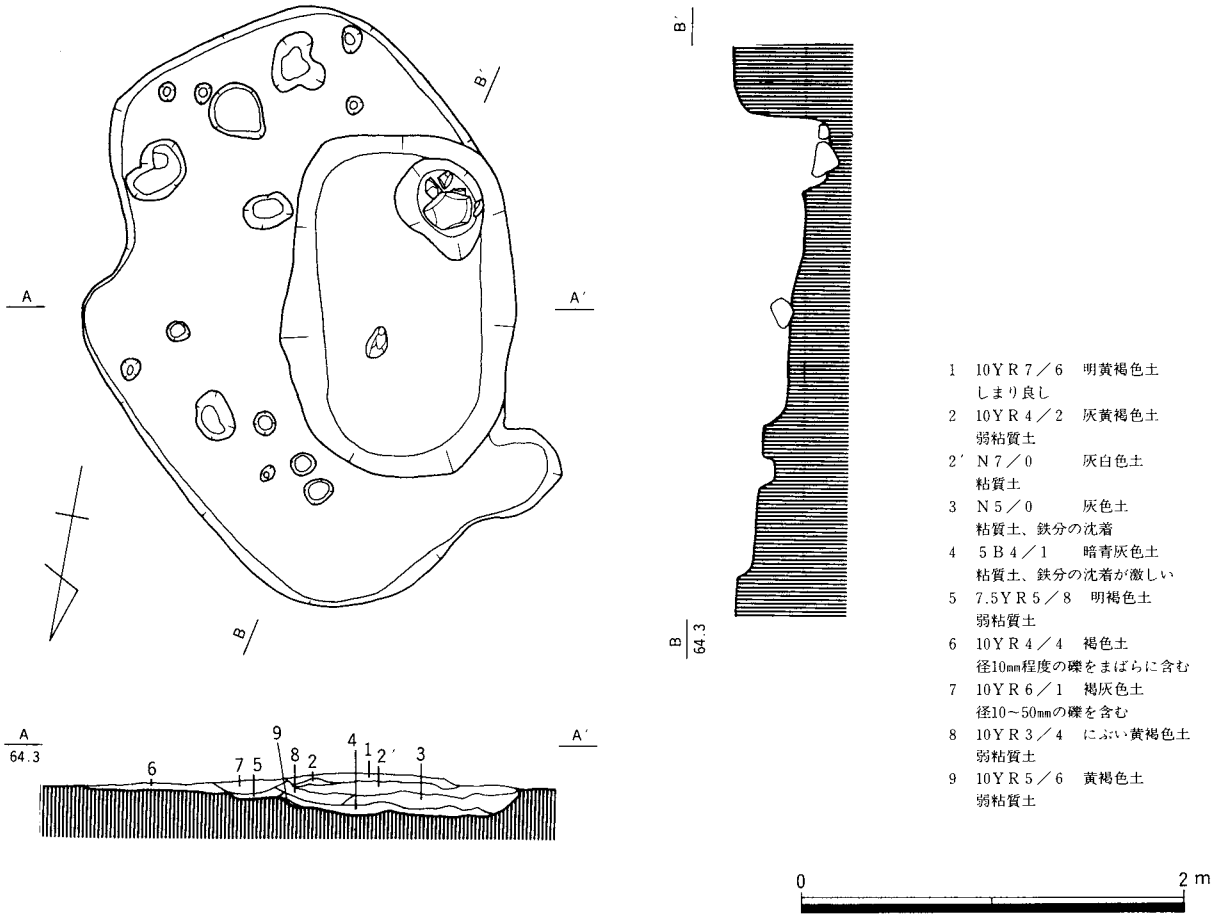
を測る。中央西寄りに隅丸長方形を呈する落ち込みがみられ、その西南角に根石を伴うピットが検出された。出土遺物よりII期～III期の土坑と考えられる。

（出土遺物）

山茶碗（112）が1点のみ出土している。碗4類か5類に属する。

SK122

F24区～F25区にかけて位置し、南側でSK123をわずかに切る。平面形が隅丸長方形を呈し、長径2.07m、短径1.79m、深さ約0.20mを測る。壁は外傾して立ち上がるが西壁南半分は非常に緩やかである。埋土は4層に分かれ、第2層において径5cm前後の角礫が厚さ10cm程詰められていた。最下層である第4層は角礫をまばらに含み植物遺体や炭化物が混入している強粘性のシルト層であった。底面はほぼ水平であり、3個の柱穴が検出された。そのうちP1の底面には根石と思われる角礫が10個検出された。3個の柱穴と土坑の切り合い関係はセクションでは判然としなかったが、土坑検出時において柱穴のプランが確認できなかったことや第2層中の礫が柱穴の上面のみまばらなことなどから柱穴内に柱が存在していた時に土坑内部に礫が敷かれていた可能性が高い。出土遺物からII期の土坑と考えられる。



第37図　SK 109 実 測 図

（出土遺物）

須恵器１、山茶碗26、古瀬戸４、瀬戸美濃（大窯）１、土師皿14、瀬戸美濃（連房）３、石器２、合計51点が出土した。そのうち７点を図示した。

山茶碗（113～115）

113、114は碗である。113は５類、114は６類に属する。

115は皿である。４類に属する。

土師皿（116、117）

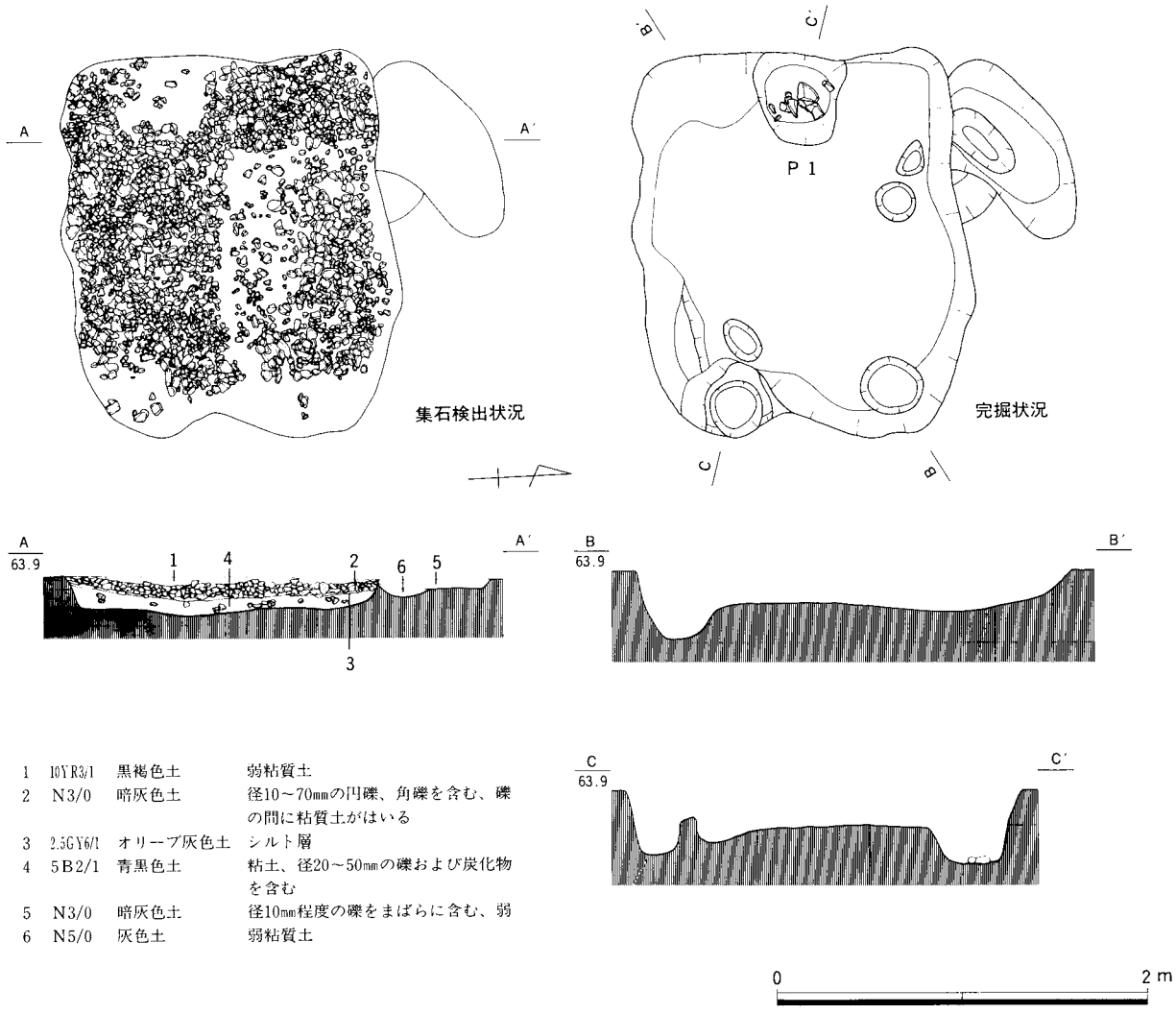
116はⅠ－ｂ－２類、117はⅠ－ｃ－２類に属する。

古瀬戸（118）

壺の肩部破片である。内面に指圧列痕が残り、外面に蕨手文と花文が描かれている。また、外面には灰釉が施されている。

土錘（119）

直線的な体部を形成し、両端は指ナデ調整が施されている。

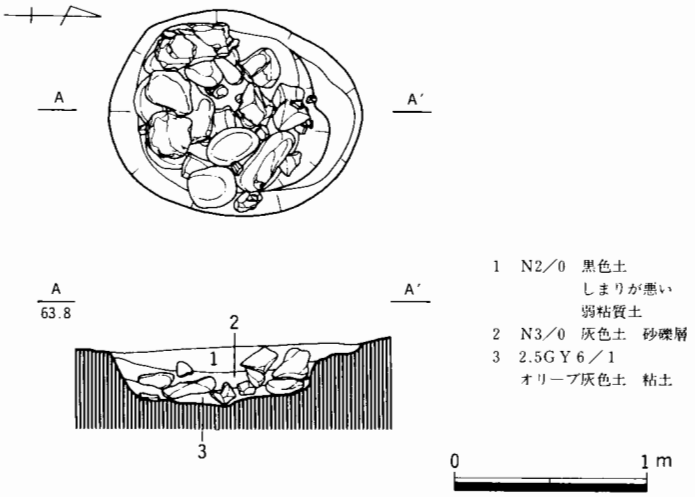


1	10YR3/1	黒褐色土	弱粘質土
2	N3/0	暗灰色土	径10～70㎜の円礫、角礫を含む、礫の間に粘質土がはいる
3	2.5GY6/1	オリーブ灰色土	シルト層
4	5B2/1	青黒色土	粘土、径20～50㎜の礫および炭化物を含む
5	N3/0	暗灰色土	径10㎜程度の礫をまばらに含む、弱
6	N5/0	灰色土	弱粘質土

第38図　SK 122 実 測 図

ＳＫ133

Ｆ26区～Ｇ26区にかけて位置する。平面形が楕円を呈し、長軸1.30ｍ、短軸1.06ｍ、深さ0.31ｍを測る。覆土をわずかに掘り下げると、径20㎝～40㎝の円礫および角礫がドーナツ状に検出され、底面直上においてほぼ同じ大きさの礫が一面に詰められていた。礫の中には被熱したものも若干認められたが、土坑の壁、底面は被熱した痕跡は認められなかった。最下層は強粘性のシルトが貼られたような状態であり、シルト層を掘り抜くと水が湧き出してきたことから本土坑は水溜遺構的な性格をもっていた可能性が高いと思われる。出土遺物からII期～III期にかけての土坑と考えられる。



第39図　SK 133 実 測 図

（出土遺物）

礫の間より土師皿が４破片出土したが、細片であり、図示していない。

ＳＫ134～136

Ｅ26区～Ｇ27区にかけて位置する。平面形はＳＫ134、ＳＫ135が隅丸長方形、ＳＫ136が不正円を呈し、それぞれの遺構の間に接続部ともいうべき溝が検出された。規模はＳＫ134が長軸2.12ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.16ｍ、ＳＫ135が長軸約2.12ｍ、短軸1.36ｍ、深さ0.45ｍ、ＳＫ136が長軸0.88ｍ、短軸0.77ｍ、深さ0.34ｍ、溝は幅0.20ｍ～0.40ｍ、深さ0.05ｍ～0.10ｍを測る。ＳＫ135、ＳＫ136の埋土は、上層は小礫混じりの弱粘質土であり、下層は黒色粘質土であった。主軸の向きがＳＡ３とほぼ同じことからII期の土坑群と考えられ、ＳＤ19、ＳＤ20、ＳＫ133と何らかの関連があると思われる。なお、埋土の分析よりＳＫ135は便所の可能性が示唆されている。

（出土遺物）

ＳＫ134より山茶碗2、ＳＫ135より中国磁器1、ＳＫ136より山茶碗4、合計７点が出土している。そのうち３点を図化した。

山茶碗（120、122）

いずれも碗である。120は碗４類、122は碗６類に属する。

中国磁器（121）

白磁の皿IX類に属する。底部外面には回転ヘラ削り痕が残り、体部の立ち上がりは強い。全面に施釉されている。

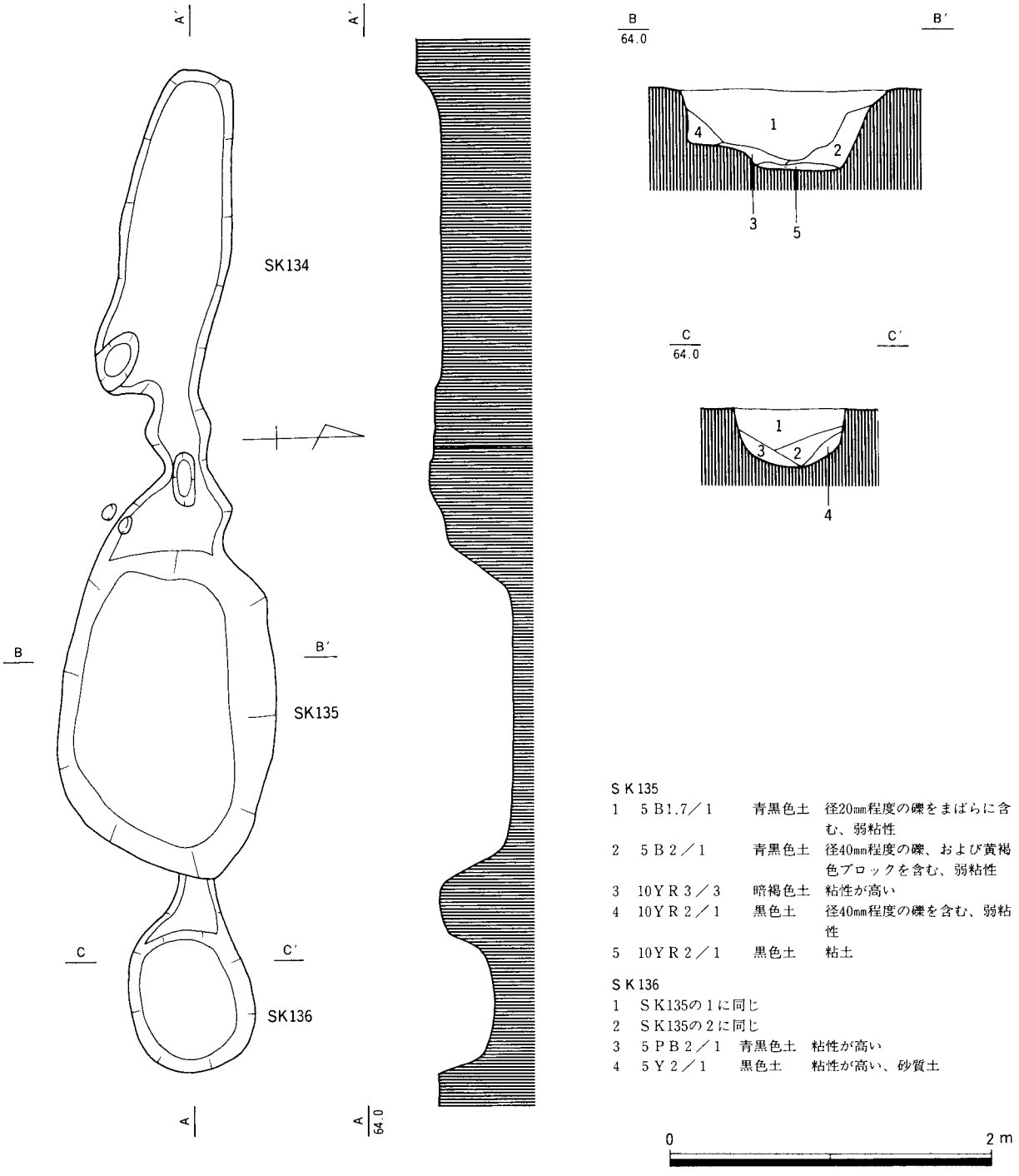
ＳＫ143

Ｆ24区～Ｆ25区にかけて位置する。平面形は隅丸方形を呈し、東西3.44ｍ、南北3.44ｍ、深さ約0.17ｍを測る。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。中央東寄りにピットが３個検出されたが、こ

れらは、ＳＢ７、ＳＢ10に伴うものである。また、北面に東西0.80ｍ、南北約1.00ｍの隅丸方形の落ち込みがみられたが性格は不明である。なお、焼土や炭化物などは検出されなかった。出土遺物からはII期の土坑と考えられるが、ピットと土坑の切り合い関係がセクションでは確認されなかったため、II期～III期の土坑としたい。

（出土遺物）

本遺構からは山茶碗３、瀬戸美濃（連房）１、合計４点が出土したが、いずれも細片のため図化していない。



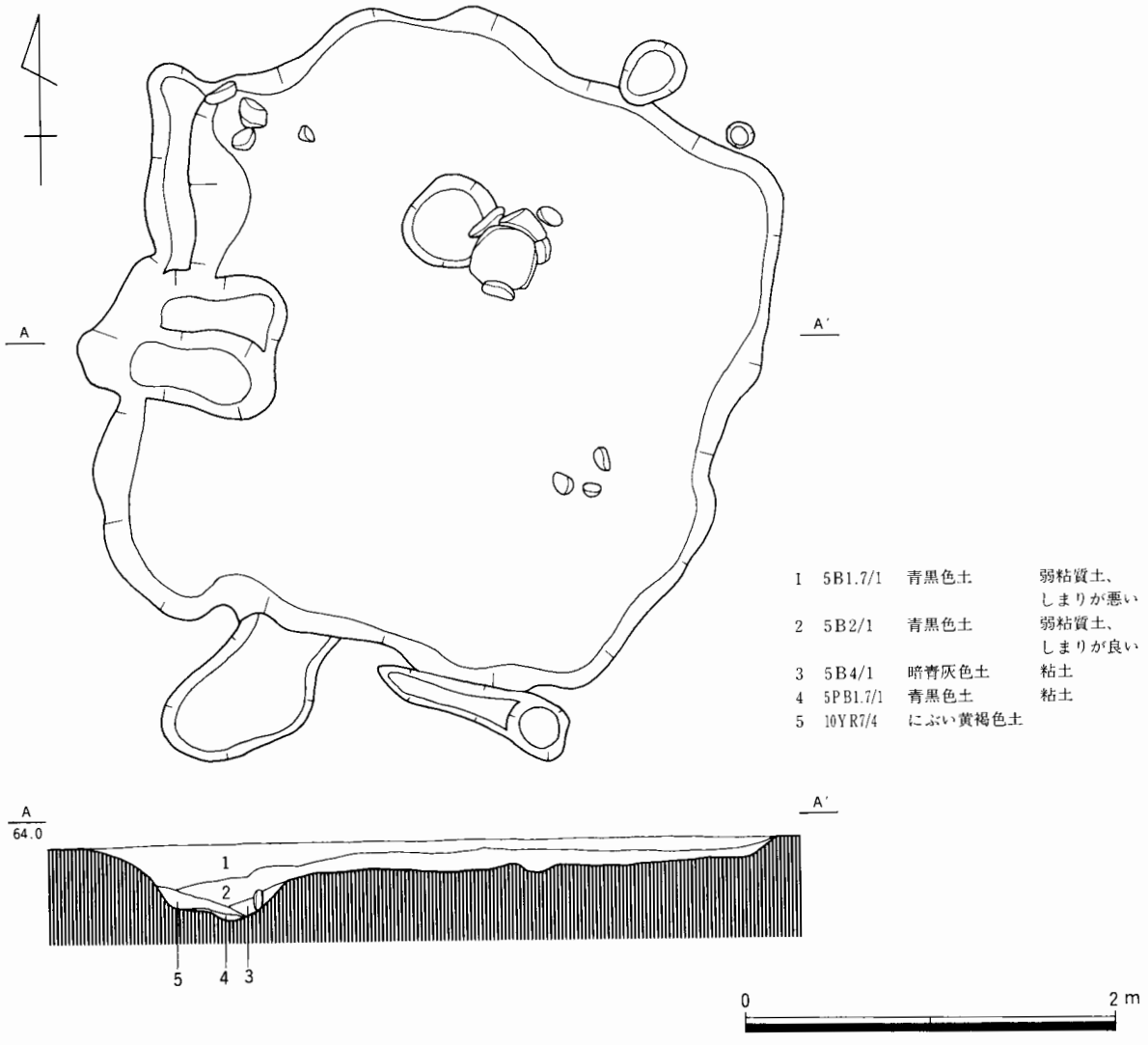
第40図　SK134・135・136実測図

ＳＸ27

Ｄ20区～Ｅ21区にかけて位置し、北側でわずかにＳＥ１に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸4.18ｍ、短軸2.30ｍ、深さ約0.15ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側はほぼ水平であるが、東側は凹凸が激しい。中央やや北よりにおいて東西方向に径約50cmの円礫と径約20cmの円礫および角礫が交互に並んで検出された。また、中央からやや西寄りの箇所では、0.6ｍの間だけ石列が抜けていた。石列は床面よりレベル的にやや上に位置していたが、埋土は単層であった。遺構の性格は不明である。なお、石列の方位はＮ90°Ｅであり、ＳＡ１に直交する方位である。出土遺物からII期～III期の遺構と考えられる。

（出土遺物）

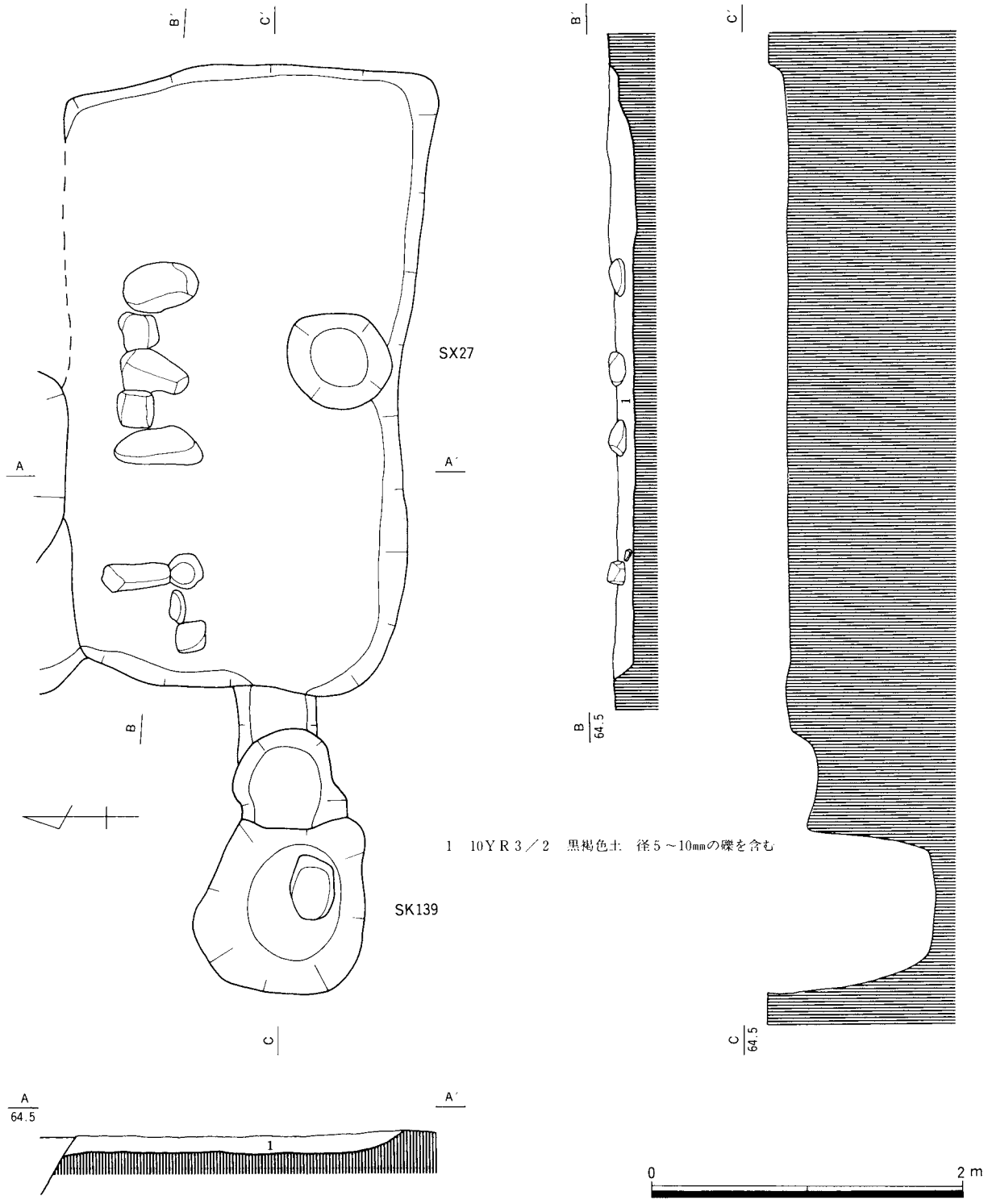
本遺構からは山茶碗10、瀬戸美濃（大窯）３、土師皿１、瀬戸美濃（連房）２、合計16点が出土している。このうち１点のみ図示した。



第41図　SK 143 実 測 図

山茶碗（133）

碗５類に属する。焼成があまいため白色を呈し、軟質である。



第42図　SX27・SK139実測図

ＳＫ139

Ｆ21区～Ｇ21区にかけて位置し、ＳＸ27と浅い溝状遺構により連結している。平面形は不整形を呈し、長軸1.20ｍ、短軸1.14ｍ、深さ1.07ｍを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は上層が黒褐色土（10YR3/2）であり、ＳＸ27および溝状遺構と同一である。中層から下層は粘性が高く、しまりが良い暗灰色土層（N3/0）と暗灰色土の中に灰色（N6/0）の粘土ブロックが認められる層、および灰白色（10YR8/2）のシルト層の３層が幾重にも重なる互層堆積を呈している。また、最下部には長径41.0cm、短径27.5cm、厚さ10.0cm、重量16.29kgを測り、上面に焼化面が残る円礫が存在し、円礫の周辺には木片が幾つか検出された。上層の埋土よりＳＸ27と同時期に存在していたと思われ、II期～III期の土坑と考えられる。なお、本遺構は自然科学分析により便所様遺構と推定されている。

（出土遺物）

本遺構からは山茶碗が５点出土しているがいずれも細片のため図化していない。

ＳＸ28、ＳＫ87

Ｃ19区～Ｄ20区にかけて位置し、ＳＫ87がＳＸ28を切っている。ＳＫ87は平面形がほぼ円を呈し、径0.90ｍ、深さ0.60ｍを測る。埋土は４層に分かれ、最下層は湧き水のため非常に粘性が高い。ＳＸ28は平面形が不定方形を呈し、深さ約0.2ｍである。壁面は非常に緩やかであり、底面はいくつかの小さな落ち込みと幅６cm程度の溝状の落ち込みが検出された。壁面と底面の状況から本遺構は「タマヤ」と推定される。[8)]出土遺物からいずれもII期～III期の遺構と考えられる。

（出土遺物）

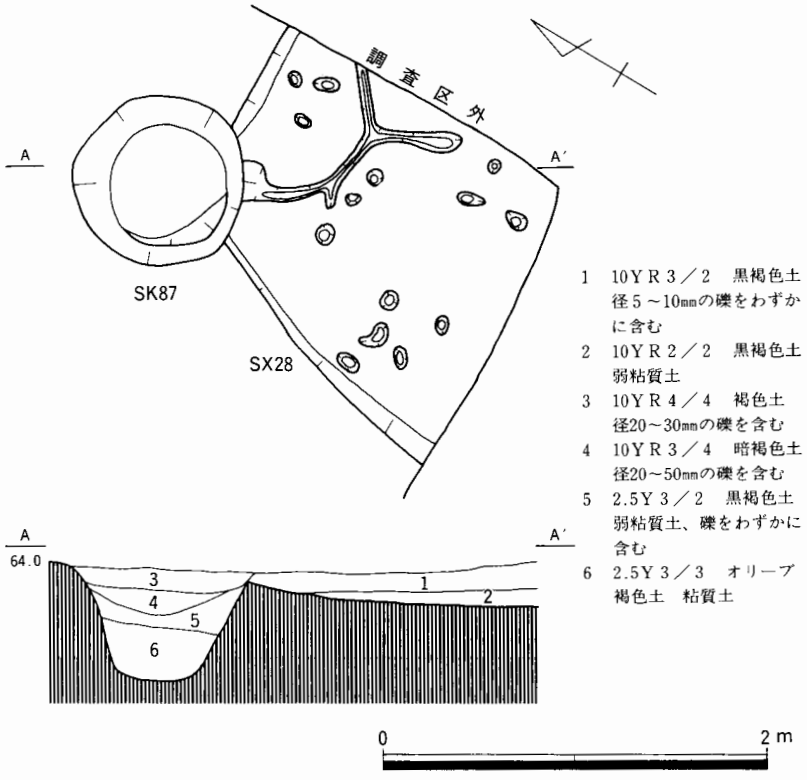
ＳＸ28より山茶碗３、土師皿９、合計12点が出土している。そのうち５点を図化した。

山茶碗（134、135）

いずれも碗である。134は碗４類か５類、135は碗９類に属する。

土師皿（136～138）

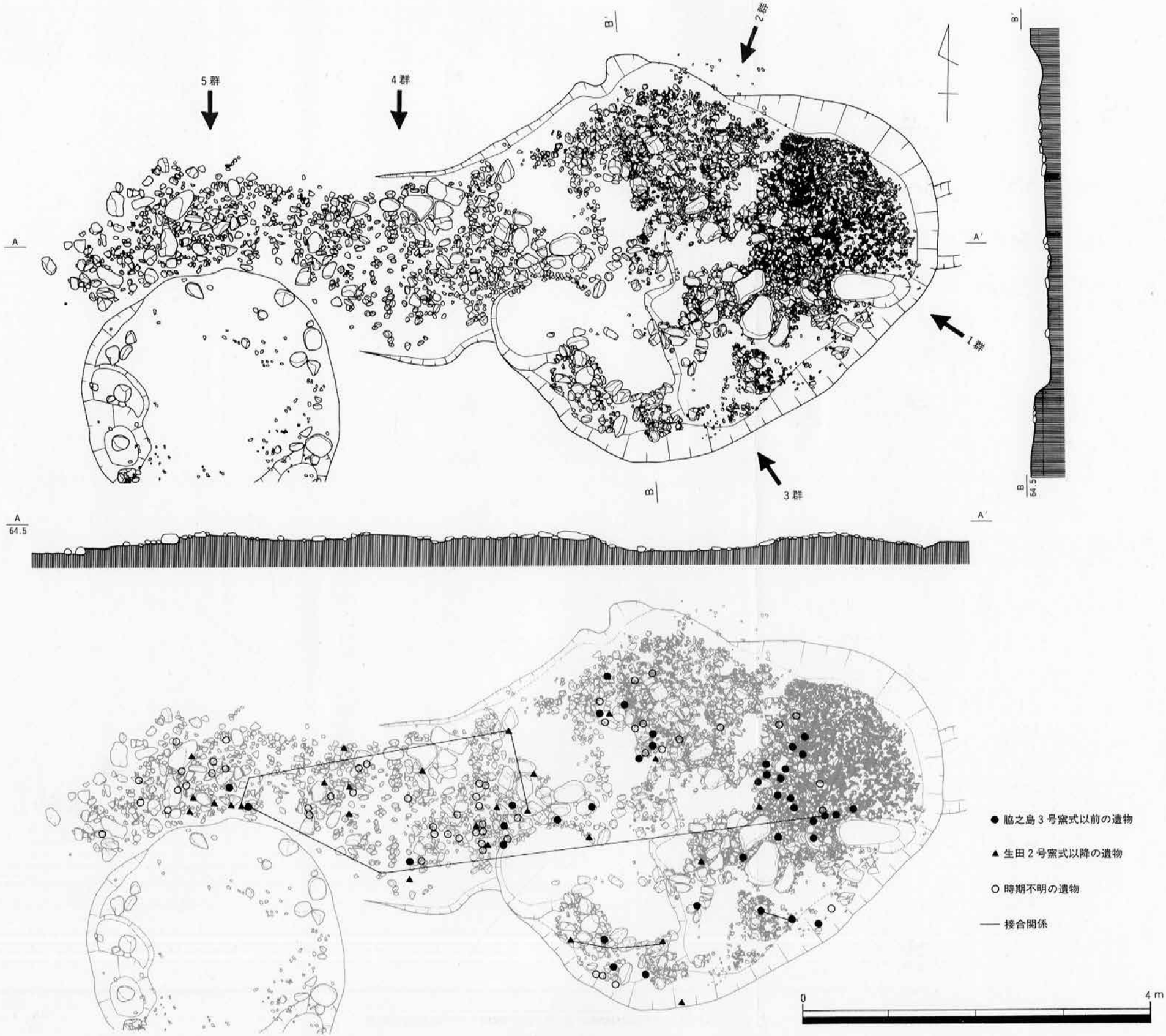
136、137はＩ－ａ－１類、138はＩ－ｂ－１類に属する。



第43図　SK87・SX28実測図

ＳＸ30

Ｄ４区～Ｆ４区にかけて位置し、ＳＤ13を切り、ＳＥ３に切られる集石遺構である。



第44図　SX30実測図・遺物分布図

平面形は柄鏡形を呈し、東西約10.4ｍ、南北2.00ｍ～4.50ｍを測る。また、東側のみ掘り込みが確認され、最大の深さ0.30ｍを測る。第４層直下に礫群が存在しており、礫上部の盛土は確認されなかった。礫の法量は径３㎝～30㎝までの範囲内であり、小さいものは角礫が多く、大きいものは円礫が多かった。礫のまとまりは大きく５つ存在し、東から順に１群、２群、３群、４群、５群とする。１群は東西約1.80ｍ、南北約2.30ｍであり、他の集石群にみられるような大きな礫は目立たない。２群は東西約2.40ｍ、南北約1.50ｍであり、中央部に径15㎝～20㎝のやや大きめの円礫が一列に並んでいる。３群は中央部の礫が攪乱により欠落しているが、東西約2.50ｍ、南北約1.80ｍ程度の規模と思われる。１群に比べ大きい礫が目立つ。４群は東西約2.50ｍ、南北約1.50ｍの規模であり、周縁部に大きい礫が位置している。５群は東西約2.30ｍ、南北約1.50ｍ程度の規模と思われる。南側の一部がＳＥ３に切られている。本遺構周辺の地形は西側よりも東側の方が高く、東側のみ掘り込みが確認されたことは礫を据える場を水平にしようとする意図があったのかもしれない。なお、１群～４群は礫の上部は標高64.5ｍでほぼ揃い、５群のみが10㎝程低い。礫の間から炭化物が多く検出されたが、焼土および焼化面は確認されなかった。また、集石群の下に第Ⅵ層を掘り込む土坑も確認されなかった。

出土遺物はⅡ期～Ⅲ期の遺物と近世陶器、縄文土器であるが、近世陶器と縄文土器は、流れ込みか混入と思われる。遺物は主に礫の上部や礫の間から出土し、その分布は遺構内全域に広がる。接合可能な遺物は４点のみであり、１例のみ１群内の遺物と５群内の遺物の接合が可能であった。出土遺物のうち時期を明確に分けることが可能なものでⅡ期とⅢ期に分け、その分布を考えると１群内と２群内にⅡ期の遺物が多く、４群内と５群内にⅢ期の遺物が多いことがわかる。また、３群は出土遺物が少ないこともあり定かではないが、Ⅱ期とⅢ期の遺物が混在している。廃棄後、どれほど遺物が移動したか定かではないが、出土地点から考えると本遺構は１群・２群→（３群）→４群・５群の順に作られたと推定される。遺構の性格は、群を形成する集石状況[9]から集石墓の可能性が高いと思われるが、主体部が存在しないことや骨片、焼土などが確認されなかったことなどから断定はできない。[10]なお、主軸はＮ１°Ｗであり、ＳＢ１を除く建物群とほぼ平行している。

（出土遺物）

本遺構からは縄文土器10、須恵器10、山茶碗57、古瀬戸35、常滑25、瀬戸美濃（大窯）11、土師皿14、瀬戸美濃（連房）21、土師質陶器８、鉄製品２、石製品８、瓦１、合計202点が出土している。そのうち21点を図示した。

山茶碗（139～144）

139は皿３類である。140は碗８類、141は碗４類、142、143、144は碗３類に属する。

古瀬戸（147、151～155）

147は縁釉小皿である。回転糸切り痕の残る底部から体部は開いて立ち上がり、口縁部は丸く収めてある。口縁部内外面に灰釉が施されている。

152は卸皿である。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部は直線的に立ち上がる。口縁部は外反しており、口縁部内面には浅い凹みを有する。なお、口縁部内外面に灰釉が施されている。

151、153～155は鉢、あるいは擂鉢である。151は口縁形態２類の鉢である。153は口縁形態６類の擂鉢である。154は底部外面に回転糸切り痕が残り、体部は直線的に立ち上がる。体部外面はヘラ削り調整が施され、轆轤目が顕著である。また、体部内面には一単位８条で、幅1.7㎝の擂目が体部下方から

中程まで放射状に施されており、底部内面には擂目は施されていない。155は体部が直線的に立ち上がり、外面には横位の指ナデ調整が施されている。擂目は一単位９条で、幅2.0cmを測る。底部内面の擂目の有無は不明である。153～155は全面に錆釉が施されているが、154、155は薄い。151は内面のみ灰釉が施されている。

常滑（149、150）

同一個体と思われる。口縁部は縁帯を下方に伸ばすことで縁帯の幅を広くしている。頸部にはヘラ状工具により蓮弁文風に文様が施されている。

須恵器（159、162）

159は坏である。体部は直線的に開いて立ち上がり、口縁部は丸く収めている。162は甕の胴部破片である。外面には擬斜格子目状の叩き目が、内面には同心円状の当て具痕がみられる。

瀬戸美濃（148、156）

148は菊皿である。高台は断面方形の付高台であり、若干外反している。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部はヘラで切り込みを入れて花弁を施している。また、体部内面は型打ちにより菊花を表している。体部外面下方を除き灰釉が施されており、口縁部周辺には銅緑釉が漬け掛けされている。

156は擂鉢を転用したものである。割れ面を磨き、平滑に、しかも円状に加工してある。用途不明であるが、とりあえず加工円盤の一種として報告しておきたい。

土師皿（145、146）

145はⅠ－ａ－２類、146はⅠ－ｃ－３類に属する。

石器・石製品（157、158）

157は持ち砥石である。表面に平滑な砥面を持つ。加熱により破損している。158は打製石斧である。表面に表皮を残し、礫のほぼ平らな部分をねらって幅広な横長の剝片を剝離し調整を加えている。素材自体が薄みで顕著な階段状剝離もあまり認められない。裏面の調整は形態を整える程度である。刃部側がやや開き気味であるが、いずれも形態的には短冊型の範疇で理解してよい。側縁の基部側1/3程度に特に磨滅痕が顕著であり、装着痕とみなしてよいのかもしれない。ホルンフェルス製である。

縄文土器（160、161）

160は底部破片である。平底を呈し、胴部は直線的にハの字に開いて立ち上がる。161は胴部破片である。外面に貝殻条痕が残存する。

ＳＸ33、ＳＸ36

Ｆ13区に位置する。いずれも平面形は不正円を呈し、南北方向に並列する。ＳＸ33は長軸1.76ｍ、短軸約1.40ｍ、深さ0.22mを測る。底面はほぼ水平であり、中央付近に径0.24ｍ、深さ0.21ｍのピットが検出された。また、中央から東寄りのところでは、小さな黒色塊がまばらに混入する硬化面が底面より６cm程隆起した状態で検出された。ＳＸ36は長軸1.75ｍ、短軸1.52ｍ、深さ0.40ｍを測る。南面の壁は緩やかな傾斜を保ちながら立ち上がるのに対し、他方向の壁は立ち上がりがきつい。北壁の立ち上がりが強い箇所は馬蹄形状に小さな黒色塊が付着し、その外側は土が暗赤褐色に変色し、硬化している。底面の最も落ち込んだ箇所には長軸50.0cmの大きな黒色塊が２つ並んで検出された。黒色塊については122頁を参考にされたい。なお、本遺構直上の包含層より円盤状を呈すると推定される土製

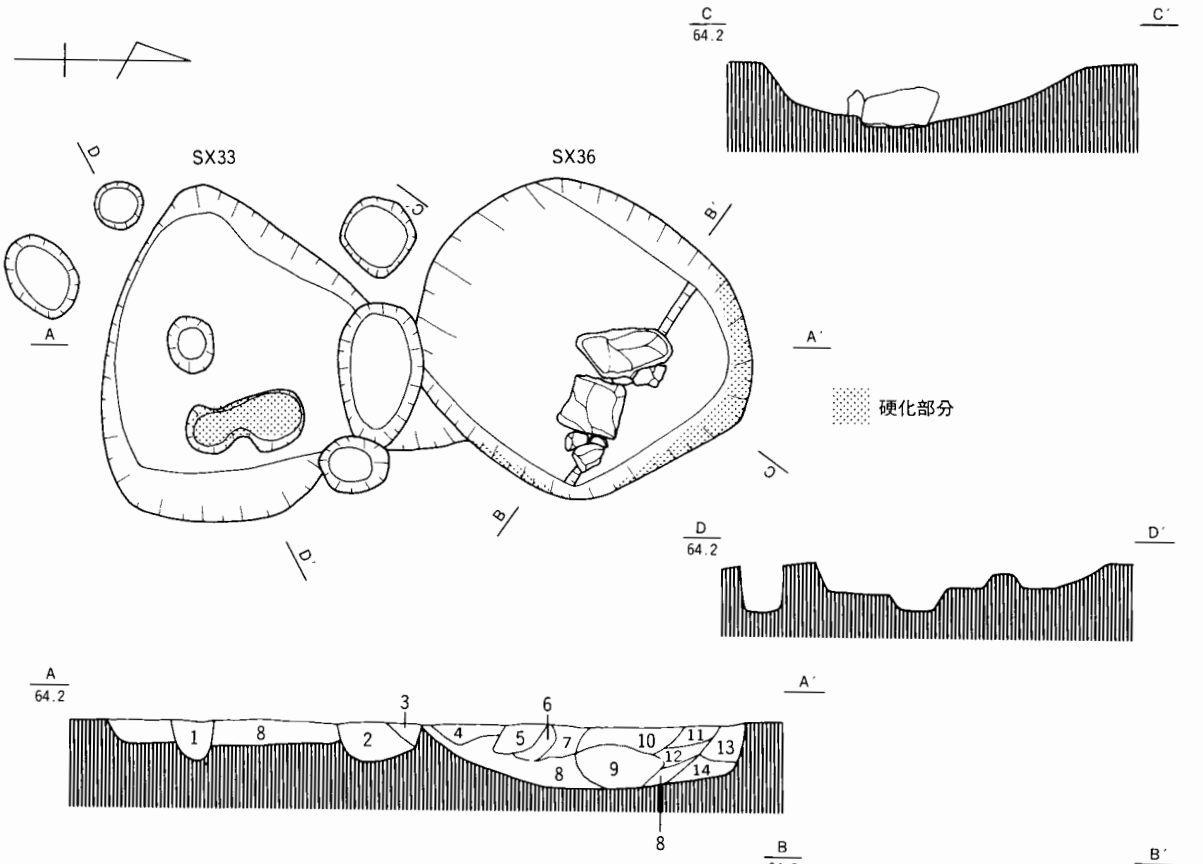
品（389）が出土した。胎土中に雲母を多く含んでおり、上面は被熱している。用途不明であるが、仮に鋳型と想定するならば、本遺構は何等かの鋳造遺構であった可能性も考えられる。出土遺物からII～III期の遺構と考えられる。

（出土遺物）

ＳＸ33より山茶碗７点、ＳＸ36より古瀬戸２点が出土している。そのうち１点のみ図示した。

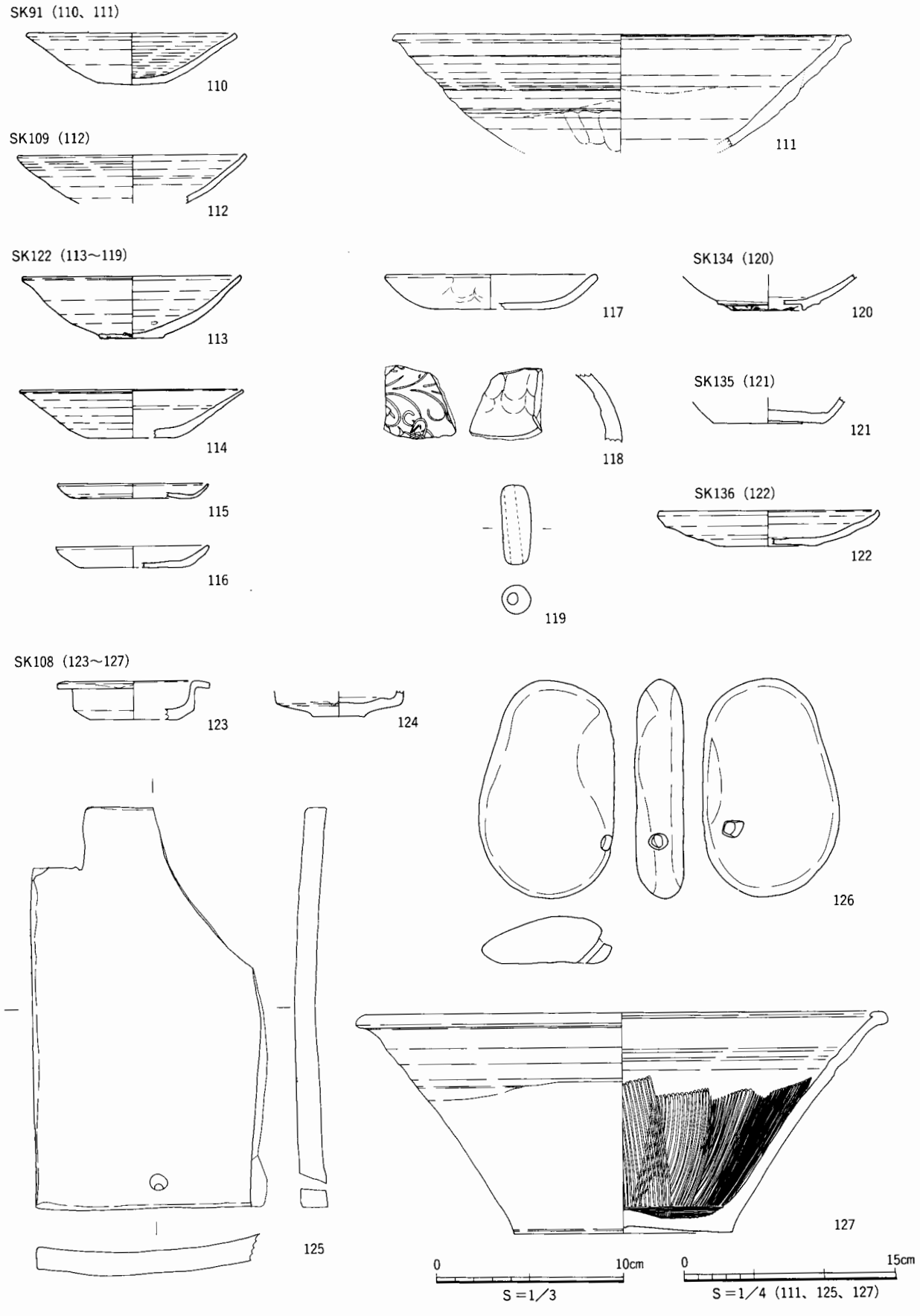
山茶碗（163）

皿３類に属する。底部内面の静止指ナデ調整、および底部外面の板目は顕著に残っている。また、口縁部周辺に一部煤が付着していることから、灯明皿として転用した可能性が高い。



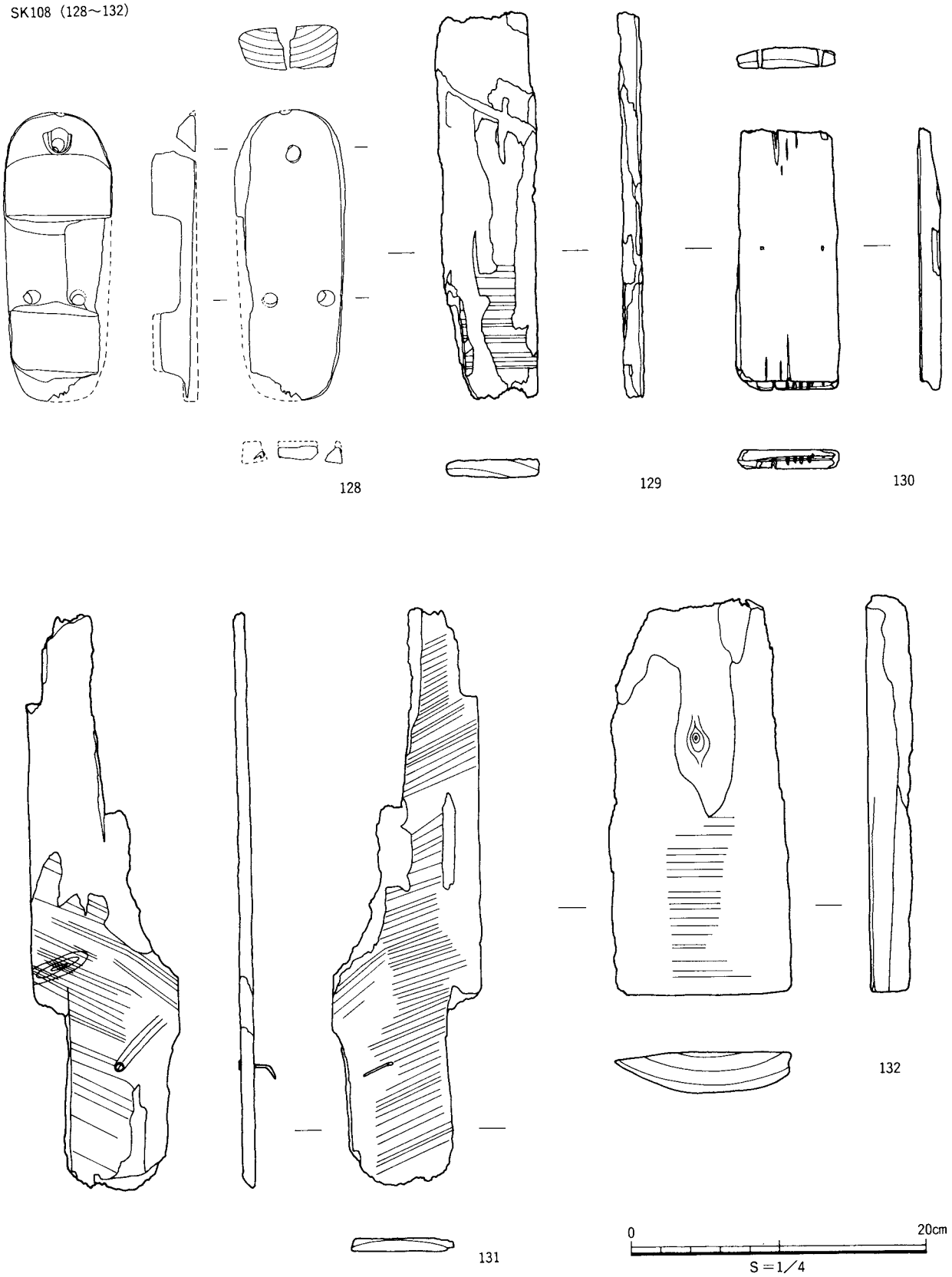
1	10YR3/1	黒褐色土	径40㎜程度の礫を含む、弱粘質土
2	10YR3/1	黒褐色土	褐色（10YR４／４）がブロック状にみられる、弱粘質土
3	10YR3/2	黒褐色土	にぶい黄褐色（10YR６／４）がブロック状に入る、弱粘質土
4	10YR3/1	黒褐色土	全体的に赤みを帯びる。しまりが悪い
5	10YR4/2	灰黄褐色土	褐色（10YR４／６）ブロックを含む、しまりが悪い
6	10YR4/4	褐色土	褐色（10YR４／６）ブロックを含む、しまりが悪い
7	N1.5/0	黒色土	極暗褐色（7.5YR２／３）ブロックを含む、しまりが悪い
8	10YR2/2	黒褐色土	径50㎜程度の礫を含む、弱粘質土
9	N1.5/0	黒色塊	
10	10YR5/4	にぶい黄褐色土	黒色土（N1.5／０）がわずかに混じる、弱粘質土
11	10YR6/4	にぶい黄褐色土	黒褐色土（10YR２／３）、黒色土（N1.5／０）が混じる、弱粘質土
12	10YR5/4	にぶい黄褐色土	黒色土（N1.5／０）がわずかに混じる、弱粘質土
13	N1.5/0	黒色土	黄褐色土（10YR４／２）ブロックを含み、非常に硬化している
14	10YR5/3	にぶい黄褐色土	黄褐色土（10YR５／８）がわずかに混じる、弱粘質土

第45図　SX33・36実測図

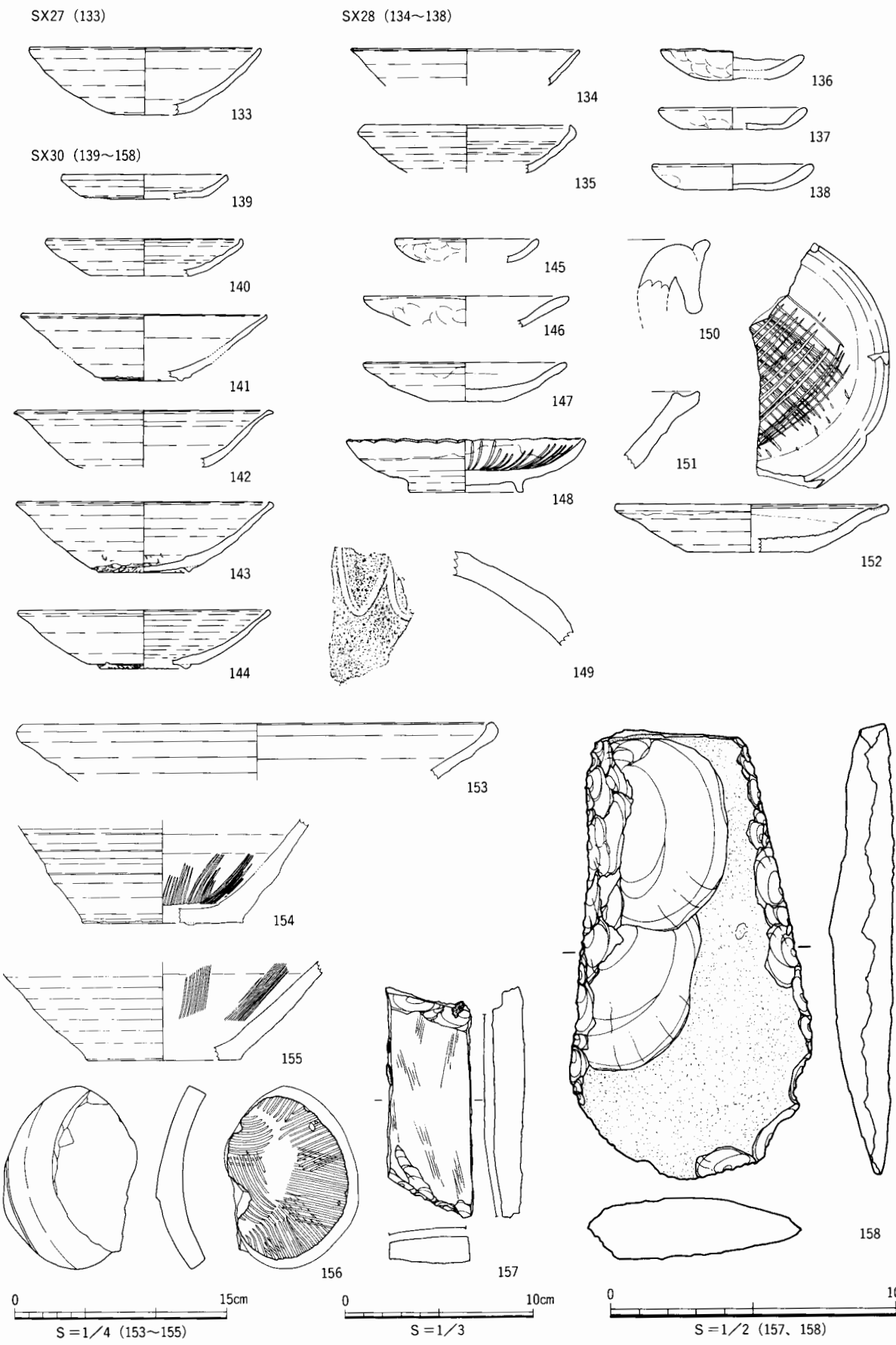


第46図　遺構出土遺物（９）

SK108 (128～132)



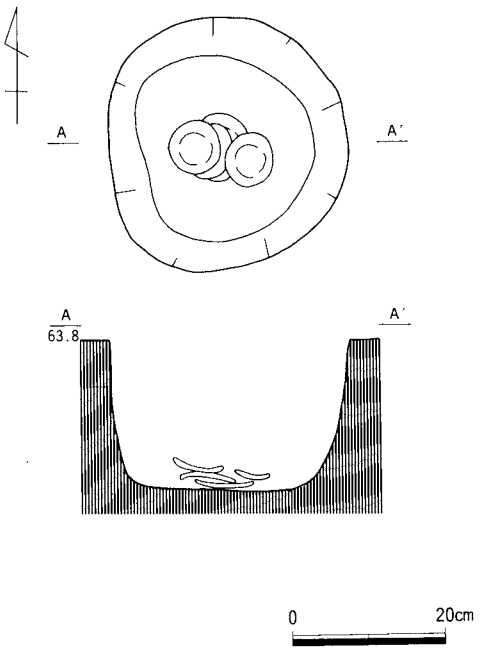
第47図　遺構出土遺物（10）



第48図　遺構出土遺物 (11)

P927

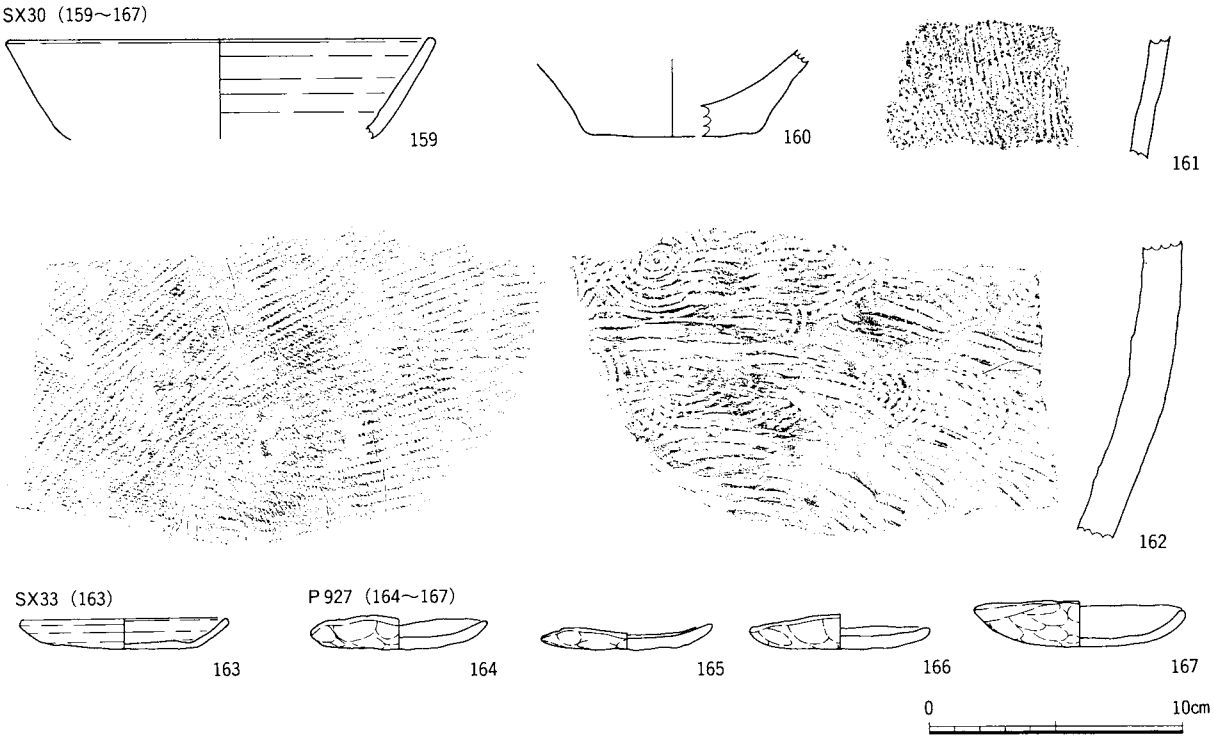
F24区に位置する土師皿埋納ピットである。平面形は円を呈し、直径約0.3m、深さ0.2mを測る。埋土は小礫がわずかに混じる黒褐色土の単層であり、土師皿を納めた後すぐに埋めたと思われる。土師皿は底面中央に合計4枚出土し、3枚が7cm前後、1枚が8.4cmを測る。最も大きい土師皿がピットの底面直上に位置し、上部2枚と下部1枚の土師皿が内面を上に向けており、その間の土師皿は底面を上に向けて検出された。なお、本ピットはSB8の北壁の柱列上に位置し、また、SB10の西壁の中央の西0.8mに位置するため、II期～III期のピットと推定される。



第49図　P 927 実 測 図

（出土遺物）

本遺構からは土師皿4点のみ出土した。いずれも完形である。164～166はⅠ－A－2類に属する。いずれも体部の立ち上がりがほとんどない。167はⅠ－B－2類に属する。なお、いずれも橙褐色を呈する。



第50図　遺構出土遺物（12）

溝（ＳＤ）

今回検出されたものは規模、形態ともに様々であるが、自然流路であるものが幾つか存在する。人為的につくられた溝はわずかであるが、いずれも場を区画するような機能は見出し得ない。

ＳＤ14

Ｅ８区～Ｈ10区にかけて位置する。幅約2.0m、深さ約0.2m～0.3mを測る。埋土は黒褐色の砂質粘土が主体であり、今回の基本層序のＶ層としているものである。自然に形成された落ち込みとして理解してよかろう。

（出土遺物）

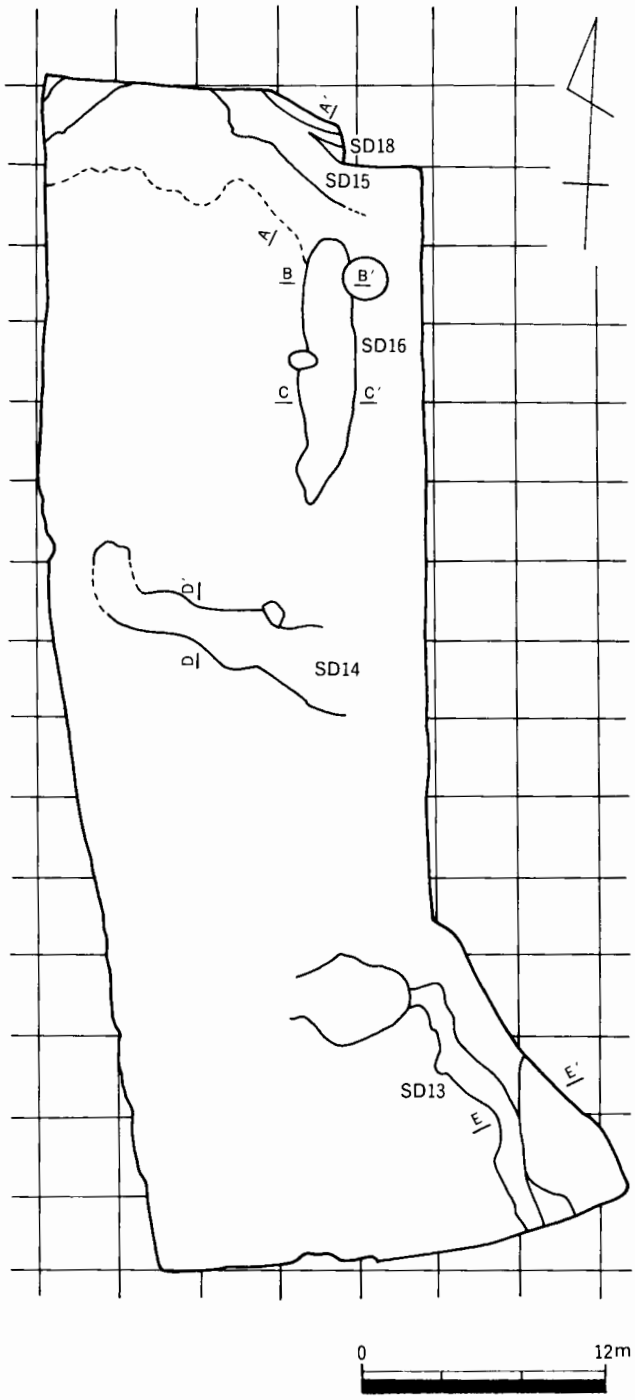
須恵器６、山茶碗４、古瀬戸２、常滑１、中国磁器１、土師皿１、土師器１、合計16点が出土した。そのうち須恵器の甕の体部破片（168）を図示した。

ＳＤ16

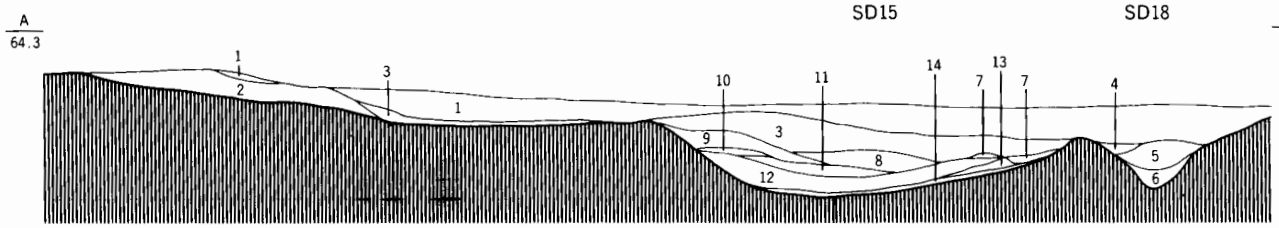
Ｅ10区～Ｅ14区にかけて位置する。Ｄ13区においてＳＥ２に切られる。最大幅2.80m、深さ0.7m前後を測る。埋土の時期は大きく３回に分かれると推定される。まず、９・10層が堆積した時期である。これらの層は粘性の高いシルト層であり、水がたまっていたが流れのないことを示す。次の時期が６層～８層までの堆積であり、礫を多く含む砂混じりの層である。セクションより西から流れ込んだことがわかる。そして、最後の時期が３層～５層までの堆積であり、人頭大の礫を投込んで埋めている。なお、主軸の方位はＮ１°Ｗである。上層より江戸時代末期～明治時代にかけての遺物が出土していることから溝の時期はIII期～IV期と考えられる。

（出土遺物）

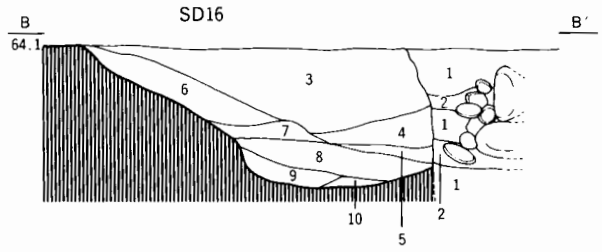
本遺構からは縄文土器59、瀬戸美濃（連房）１、石器１、合計61点が出土している。そのうち12点を図示した。

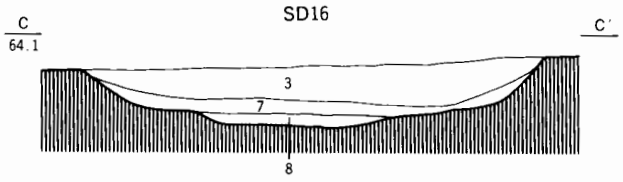


第51図　溝　分　布　図

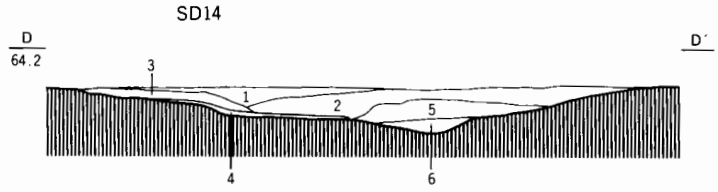


1	10YR3／1	黒褐色土	径10～50の礫を含む砂質土
2	10YR4／4	褐色土	弱粘質土
3	10YR4／2	灰黄褐色土	砂質土
3	10YR4／2	灰黄褐色土	鉄分の沈着が激しい
4	N3／0	暗灰色土	径1～5㎜の礫を含む弱粘質土
5	N4／0	灰色土	砂質土、粘性は高い
6	5B5／1	青灰色土	砂質土、粘性は高い
7	5B2／1	青黒色土	粘質土
8	N4／0	灰色土	砂質土、5層に類似
9	10YR2／1	黒色土	弱粘質土
10	N5／0	灰色土	径10～50㎜の礫を含む砂質土
11	N6／0	灰色土	径1～5㎜の礫を含む砂質土
12	5B1.7／1	青黒色土	粘質土
13	N7／0	灰白色土	砂質土
14	7.5YR7／8	黄橙色土	径10～30㎜の礫を含む、鉄分の沈着

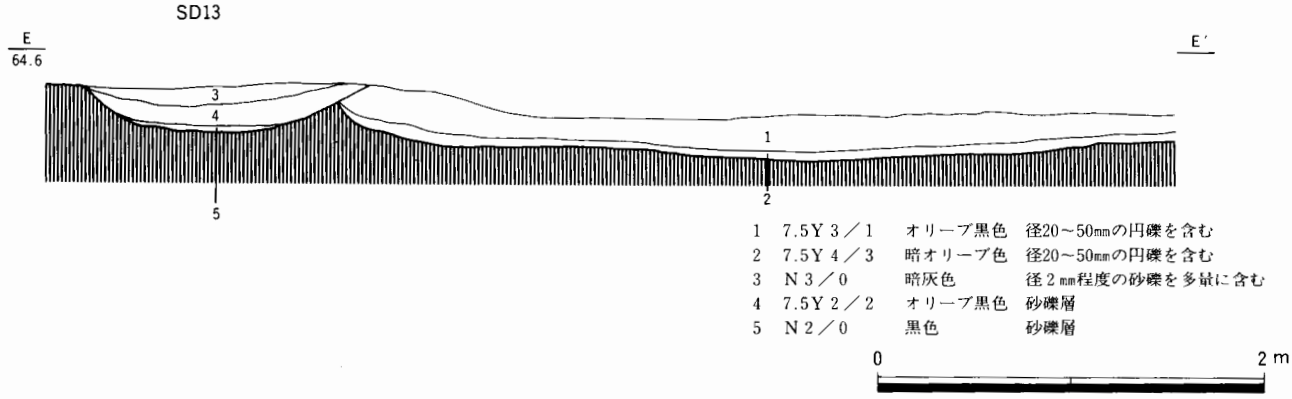




1	10YR7／6	明黄橙色土	砂質土、弱粘性
2	10YR3／2	黒褐色土	径20～30㎜の礫を含む弱粘質土
3	10YR3／3	暗褐色土	径20～50㎜の礫を含む砂質土
4	10YR4／3	にぶい黄褐色土	径30～70㎜の礫を含む砂質土
5	10YR3／4	暗褐色土	砂質土、粘性が高い
6	10YR6／1	褐灰色土	径20㎜程度の礫を含む砂質土
7	10YR3／1	黒褐色土	径50～100㎜の礫をわずかに含む砂質土
8	10YR3／2	黒褐色土	径30～200㎜の礫を含む強粘質土
9	10YR5／1	褐灰色土	径1～2㎜の礫を多量に含む
10	10YR5／2	灰黄褐色土	9層より大きな礫を含む



1	5B3／1	暗青灰色土	粘質土
2	5PB3／1	暗青灰色土	粘質土、鉄分の沈着が目立つ
3	10YR4／1	褐灰色	鉄分の沈着が目立つ
4	10YR5／6	黄褐色土	鉄分の沈着が目立つ
5	5B4／1	暗青灰色土	径10～30㎜の礫を含む、黄褐色ブロックが混じる
6	7.5YR3／4	暗褐色土	径20～40㎜の礫を含む砂質土



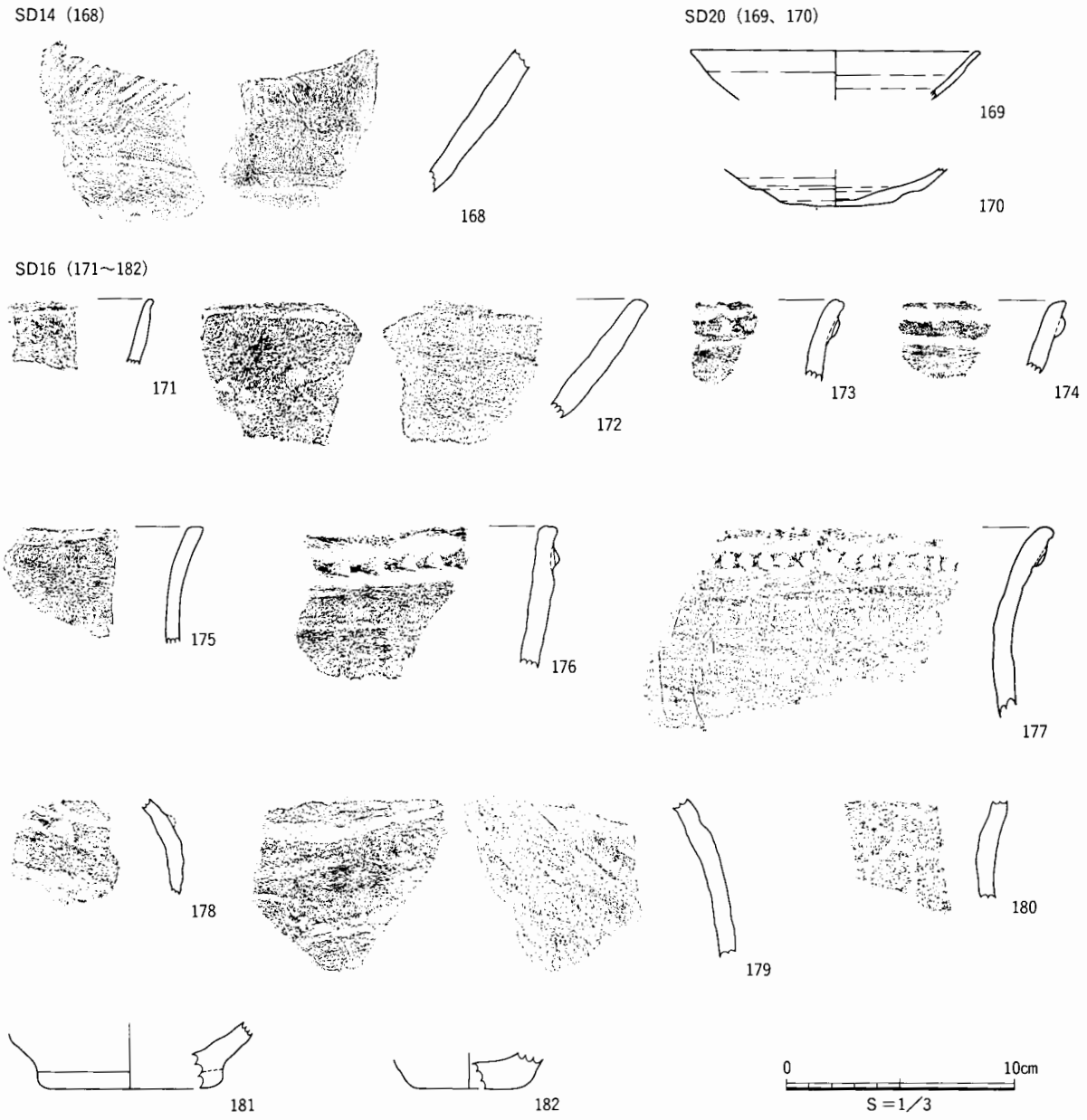
1	7.5Y3／1	オリーブ黒色	径20～50㎜の円礫を含む
2	7.5Y4／3	暗オリーブ色	径20～50㎜の円礫を含む
3	N3／0	暗灰色	径2㎜程度の砂礫を多量に含む
4	7.5Y2／2	オリーブ黒色	砂礫層
5	N2／0	黒色	砂礫層

第52図　構セクション図

縄文土器（171～182）

171、172は深鉢、鉢である。171はやや丸みを帯びた口縁部をもつ。外面には櫛状工具による浅い条痕がわずかに残存している。172は鉢ないしは浅鉢と考えられる。外面では口縁部で横位、それ以外では斜位のケズリが認められる。内面はすべてナデによって調整が施される。

173～177は甕である。173の刻目突帯にはヘラ状工具による押引きが認められるが、その形状はD字状よりむしろ横長のO字状に近い。また、他の刻目突帯を有する土器に比して突帯の断面形状がやや低いことも異なる点として指摘できる。口縁端部には凹面が認められる。174は口縁端部の平坦面が内傾するのが特徴的で、素文突帯を有す。175は無突帯の甕で、口縁端部の平坦面が顕著である。176は口縁端部の凹面を有することなど173と共通する要素が多く認められる。突帯上の押引きはヘラ状工具によるD字状のものが認められる。突帯の上下端には棒状工具による調整によってか凹面が形成され



第53図　遺構出土遺物（13）

ており、口縁端部の調整と近似し、突帯の表現を強調する効果をあげている。177は口縁部の大半が残存する本遺跡出土の縄文土器の中では最も良好な資料である。強く外反する口縁部を有し、口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯上下端の調整は176と共通し棒状工具による調整が認められ、176よりさらに顕著となり沈線状を呈している。突帯上の刻目は押引きとはならずに刻みであり、他の突帯表現に比べて異なる。口縁端部においては凹面がなく丸みをもって仕上げられている。

178～180は胴部破片である。178は胴部中位の破片で内傾する器形を示しており、甕の肩部である可能性が高い。179も178と同様の器形を呈し、一本横位に認められる凹線を重視すれば甕の肩部とも考えられよう。外面には浅い条痕が残り、内面はナデによる調整が施される。180は弯曲する部位が認められるが器形は不明である。

181、182は底部破片である。いずれも残存する部位が小さく、器形などは不明である。２点とも平底を呈するものと思われる。

ＳＤ19、ＳＤ20

Ｇ25区～Ｇ27区にかけて位置する。幅約0.2m、深さ0.1m～0.2mを測る。ＳＫ134の南北から溝が走り始め、やや丸みを帯びるプランを呈しながら、調査区外に延びる。調査区西壁において両者の幅は6.62mを測る。出土遺物からII期～III期にかけての溝と考えられる。

（出土遺物）

ＳＤ19から土師皿5、ＳＤ20から山茶碗4、合計９点が出土している。そのうち２点を図示した。

山茶碗（169、170）

169は碗４類か５類の口縁部破片である。170は底部がやや突出しているが、碗６類の底部破片である。

第２節　第１次遺構面の遺構と遺物

本遺構面で検出された遺構は土坑86基、ピット101基、不明遺構26基、溝状遺構12基、合計225基を数える。しかし、本遺構面は2/3以上が現在の攪乱により削平されており、本来は相当数の生活の痕跡が存在したと思われる。なお、主要な遺構のみ以下に記す。

ＳＫ３

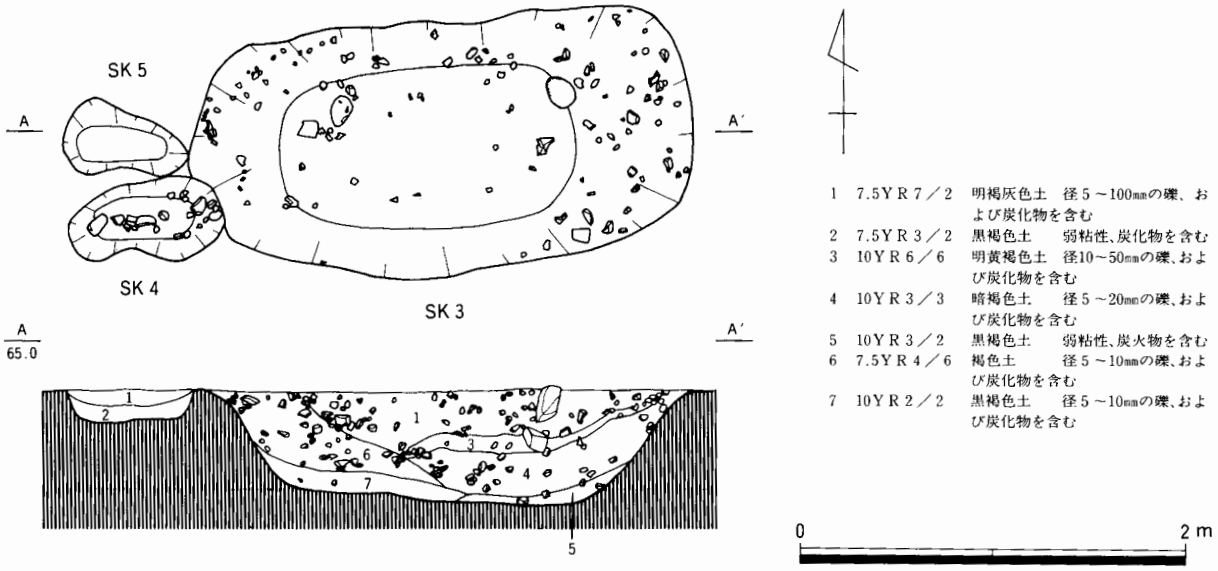
Ｅ２区～Ｆ２区に位置する。ＳＫ５に隣接し、西側でわずかにＳＫ４に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.64ｍ、短軸1.35ｍ、深さ0.60ｍを測る。埋土は６層に分かれ、いずれの層にも炭化物と径3cm～5cmの礫が含まれていた。また、南壁において被熱面が確認できた。遺物は遺構確認面より3cmほど掘り下げたところで185が検出された。また、径15cm～25cmの角礫が南北方向に４つ並んで検出され、最も北側の礫の下より193が検出された。185はその礫の南西隅に位置する。185は内面を上に向けて検出されたのに対し、193は倒れた状態で口縁部を北東方向に向けて検出された。また、190、191は遺構の底面直上にて約40cm四方の範囲で瓦の破片とともに散乱して検出された。底部破片がレベル的には最も高く、底部外面を上にして出土した。遺構の性格は被熱面や炭化物の存在、鉄鎌の出土、193の内部に鉄（製品？）が詰め込まれていることなどから火葬墓としての可能性が高いと推定される。[11)]

（出土遺物）

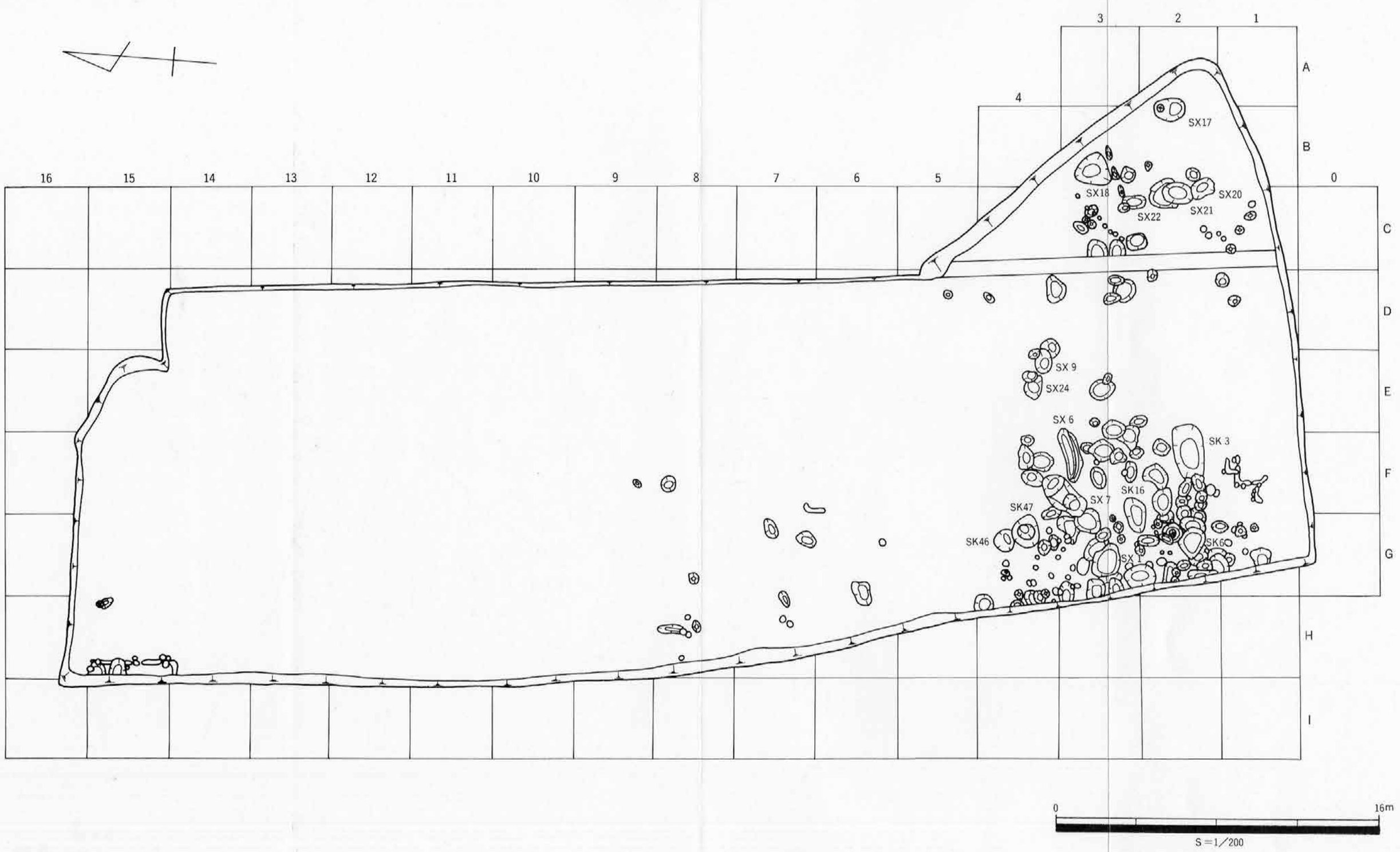
本遺構からは須恵器１、古瀬戸１、瀬戸美濃（大窯）１、土師皿４、瀬戸美濃（連房）90、伊万里４、唐津２、信楽７、土師質陶器34、鉄製品22、石器３、瓦３、合計172点が出土した。鉄（製品）が多く、破片数では全体の13％を占め、他の土坑と比べると特異である。

出土遺物のうち14点を図示した。

瀬戸美濃（183、184、187、188、192、193）



第54図　ＳＫ３実測図



第55図　第１次遺構面　遺構配置図

183、184は小坏である。183は体部下方に丸みをもち、口縁部が直立する。高台周辺を除き透明釉が施されている。184は断面逆三角形の貼付高台を有し、体部中程に最大径をもち口縁部は内弯する。体部外面下方を除き灰釉が施されている。

187は大皿である。体部は大きく開いて緩やかに立ち上がり、口縁部は外反気味である。全面に長石釉が施されているが、内面は長石釉の上に全面に鉄絵が施され、外面は鉄絵で3本の線が描かれている。

188は練鉢である。削り出し高台であり、高台内の削り込みは浅く、高台接地面の幅は広い。高台周辺を除き灰釉が施されているが、底部内面は重ね焼きのため釉が拭い取られている。

192は擂鉢である。底部の器壁は薄く、体部は直線的に立ち上がる。擂目は一単位18条で、幅3.5cmを測る。内面の体部と底部の境は明確な段を有し、底部内面周縁には同心円状の擂目が施されている。なお、全面に錆釉が施されているが、底部外面の釉は拭い取られている。

193は花瓶と思われる。底部は回転ヘラ削り痕が残り、偏平である。体部はやや膨らみをもって立ち上がり、体部外面上方には何本かの稜が入る。体部外面に鉄釉、内面に灰釉が施されており、底部外面は露胎である。なお、頸部を打ち欠き、内部に板状の鉄（製品）が詰め込まれている。さびぶくれのため器種が判別できないが、さほど大きな個体ではないと思われる。本遺構から鉄鎌が出土しており、また、ＳＥ4からは包丁が出土しているので何等かの生活用具と推定される。

唐津（185）

碗である。高台は断面逆三角形の削り出し高台であり、高台内の削り込みは深い。体部下方は丸みを帯びており、上方は直線的に開いて立ち上がる。文様は鉄絵であり、体部内外面に2本づつ横線が、また、外面には横線の間に笹絵が描かれている。なお、全面に暗緑色を呈する灰釉が施されており、高台端部のみ釉が拭い取られている。

信楽（194）

陶器の人形である。裏面には指圧痕が残り、表面には灰釉が施されている。

在地産（189）[12)]

行平である。体部は緩やかに開いて立ち上がり、体部上半で屈曲する。口縁部は外折し、端部を上方につまみあげ受け口状となっている。体部外面には鉄絵で文様が描かれている。なお、体部外面下方および口縁部内面を除いて長石釉が施されており、体部外面下方に煤が付着している。

土師器（190、191）

同一個体である。底部は平底であり、体部は開き気味に立ち上がると思われる。口縁部は内弯しており、端部は内側に折り返され内傾して面取りされている。体部外面は平滑に磨かれているが、内面は指圧痕と粘土の接合痕が顕著に残っている。なお、胎土中には雲母が多く含まれている。

古瀬戸（186）

袴腰形香炉である。体部下方が膨らみ腰部を形成し、上方が直立する。また、口縁部は外反し、端部は外傾気味に面取りされる。体部外面下方を除き鉄釉が施されている。

鉄製品（195～199）

195～197は鎌、198、199は刀子の類であると思われる。いずれも欠損しており法量は不明である。鎌の刃部は直線的で幅が広く、茎部との境が明瞭である。刀子はいずれも刃先端部に相当すると思わ

れる。

ＳＫ16

Ｆ３区に位置する。平面形は不正楕円を呈し、長軸1.55ｍ、短軸9.2ｍ、深さ0.26ｍを測る。埋土は大きく５層に分かれ、最下層のみ鉄分の沈着がみられ、炭化物が検出された。また、第２層には径10cm～60cmの礫が多くみられ、遺物が幾つか検出された。

（出土遺物）

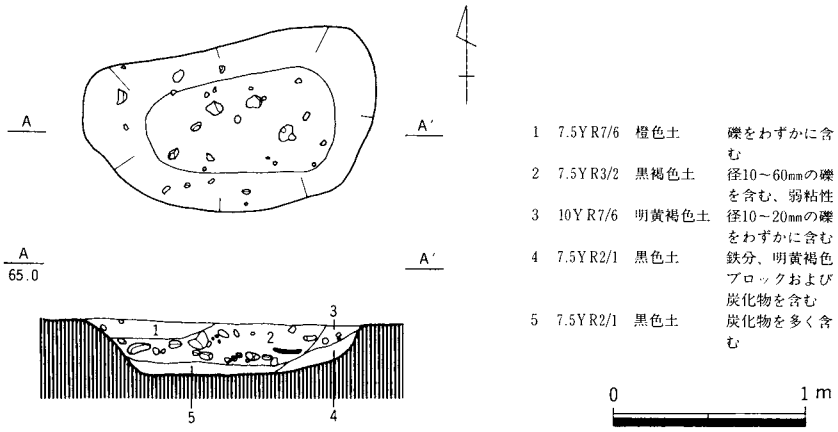
本遺構からは須恵器３、山茶碗３、常滑１、土師皿５、瀬戸美濃（連房）６、石器２、合計20点が出土した。そのうち２点を図示した。

山茶碗（200）

碗７類に属する。

石製品（201）

持ち砥石である。表面および側縁部に平滑な砥面を持ち、加熱により破損している。



第56図　SK 16 実 測 図

ＳＫ17

Ｅ３区に位置し、西側でＳＫ18に、北東側でＳＫ21に切られる。平面形は不正円を呈し、長径1.04ｍ、短径0.93ｍ、深さ0.30ｍを測る。３層のみ炭化物が検出された。

（出土遺物）

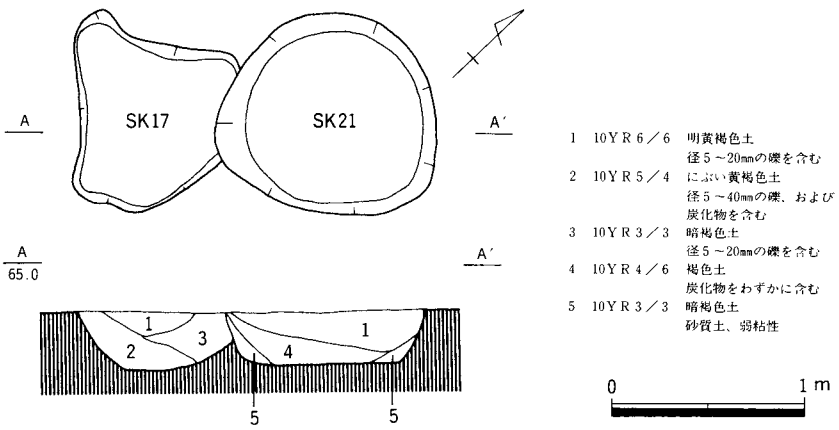
本遺構からは山茶碗２、瀬戸美濃（連房）６、合計８点が出土したが、いずれも細片のため図化していない。

ＳＫ21

Ｅ２区～Ｆ３区にかけて位置し、南西側でＳＫ17を切る。平面形はほぼ円形を呈し、長軸1.18ｍ、短軸1.06ｍ、深さ0.28ｍを測る。埋土は３層に分かれ、いずれの層も径0.5cm～5.0cmの小礫が含まれていた。

（出土遺物）

本遺構からは山茶碗１、土師皿１、瀬戸美濃（連房）



第57図　SK17・21実測図

8、伊万里1、土師質陶器1、合計12点が出土した。そのうち1点のみ図示した。

山茶碗（209）

碗6類に属する。体部は丸みを帯びて立ち上がる。

SK32

G3区～F4区にかけて位置し、南側でSX4に、北西側でP34に切られる。平面形は不正楕円形を呈し、長軸1.26m、深さ0.66mを測る。埋土は6層に分かれるが、他の土坑群とは違い埋土中に礫がほとんど混じらない状態であった。

（出土遺物）

本遺構からは瀬戸美濃（連房）2、瓦1、合計3点が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

SK42

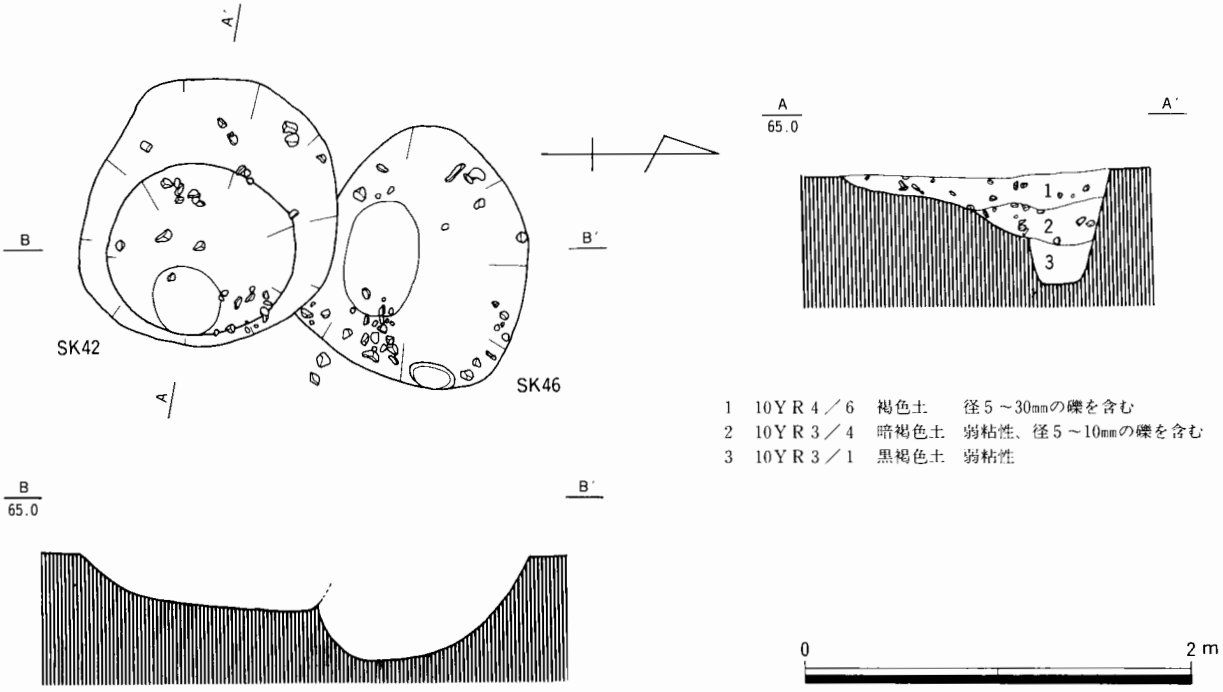
G4区に位置し、南西側でSK36に隣接し、北側でSK46を切る。平面形はほぼ円形を呈し、長軸1.40m、短軸1.32m、深さ0.58mを測る。埋土は3層に分かれ、上部2層に礫および炭化物が確認された。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器1、山茶碗10、古瀬戸2、常滑2、土師皿3、瀬戸美濃（連房）2、土師質陶器2、合計22点が出土している。そのうち7点を図示した。

山茶碗（202～207）

202～206は碗である。202は5類、203は5類あるいは6類、204は6類、205は3類、206は8類に属



第58図　SK42・46実測図

する。207は皿である。３類に属する。

土師皿（208）

Ⅰ－ｃ－２類に属する。

ＳＫ46

Ｇ４区にかけて位置し、南側でＳＫ42に切られる。平面形は不正円を呈し、長軸1.40ｍ、深さ0.55ｍを測る。

（出土遺物）

本遺構からは山茶碗３点が出土しているが、いずれも細片のため図化していない。

ＳＫ73

Ｂ３区に位置し、東側でＰ98に切られる。平面形は不正円であり、長軸1.10ｍ、短軸1.08ｍ、深さ0.30ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がっており、底面ほぼ中央は若干凹んでいる。埋土は２層に分かれ１層内には多くの角礫が検出された。遺物はそのほとんどが１層の礫の間から出土した。

（出土遺物）

本遺構からは常滑２、伊万里１、土師質陶器９、合計12点が出土した。そのうち３点を図示した。

伊万里（210）

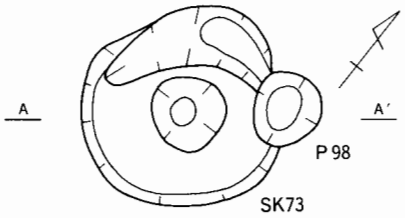
染付碗である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部に至る。外面の文様は呉須絵で、草花文が描かれている。なお、全面に透明釉が施されている。

土師質陶器（211）

火舎と思われる。体部は内反り気味に伸び、口縁部内面に大きな突起を有する。また、口縁部内面には煤が付着しており、特に突起先端部に付着が激しい。

常滑（212）

甕である。縁帯と頸部が密着し、縁帯上部が折り返しの部分より下位に位置する。また、縁帯部がほぼ垂直であることから頸部が内側に膨れている。

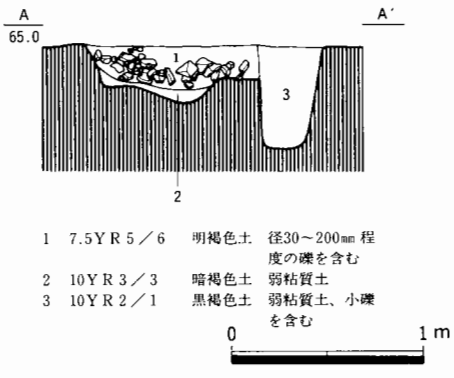


ＳＸ１

Ｇ３区に位置し、西側でＳＫ23を、東側でＳＸ２を切っている。平面形は不正円を呈し、長軸1.85ｍ、短軸1.57ｍ、深さ0.23ｍを測る。埋土は４層に分かれ、上層において径10㎝程度の円礫が多くみられ、なかには20㎝以上の礫も検出されたがいずれも流れ込みと思われる。遺物は下層の黒褐色粘質土から多く出土し、215は高台を上方にむけて検出された。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器４、山茶碗１、古瀬戸２、瀬戸美濃（大窯）１、土師皿２、瀬戸美濃（連房）26、石器１、合計37点



第59図　SK73 実 測 図

が出土している。このうち5点を図示した。

須恵器（213）

甕である。頸部は外反気味であり、口縁端部を丸く収めている。頸部外面には櫛により波状文が施されている。

瀬戸美濃（214～216）

214は練鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外側に折り返され玉縁状に調整されている。なお、体部外面の轆轤目は顕著であり、全面に灰釉が施されている。

215は菊皿である。高台は断面長方形の貼付高台であり、ほぼ直立している。高台脇は強い指ナデ調整を施しており、体部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部はヘラで切り込みを入れて花弁を施しており、体部内面には型打ちにより菊花が表現されている。また、底部内面にはピン痕が1ヵ所みられる。なお、高台周辺を除き灰釉が施され、さらに口縁部周辺に銅緑釉が漬け掛けされている。

216は灰釉丸碗である。高台は断面方形の貼付高台であり、高台端部は一条の凹みを有する。高台周辺を除き灰釉が施されている。

石器（217）

打製石斧である。表面に表皮を残し、礫のほぼ平らな部分をねらって幅広な横長の剝片を剝離し調整を加えている。素材自体に厚みがあり、特有な階段状剝離が認められる。なお、刃部の磨滅も顕著に認められる。流紋岩製である。

ＳＸ3

Ｇ3区に位置し、西側でＳＸ2を切り、東側でＳＸ4に隣接する。平面形は不正円を呈し、長軸0.82m、短軸0.76m、深さ0.34mを測る。埋土は3層に分かれ、上層のみ礫を含む。

（出土遺物）

本遺構からは瀬戸美濃（大窯）1、瀬戸美濃（連房）5、合計6点が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。

ＳＸ4

Ｇ3区に位置し、西側でＳＸ3に隣接し、東側でＳＸ7に切られる。平面形は不正円を呈し、長軸1.36m、短軸1.10m、深さ0.35mを測る。検出時において20cm～30cmの礫が多数散在しており、他の土坑とはやや性格が異なると考えられる。埋土は4層に分かれ、上層のみ礫、および炭化物が含まれていた。

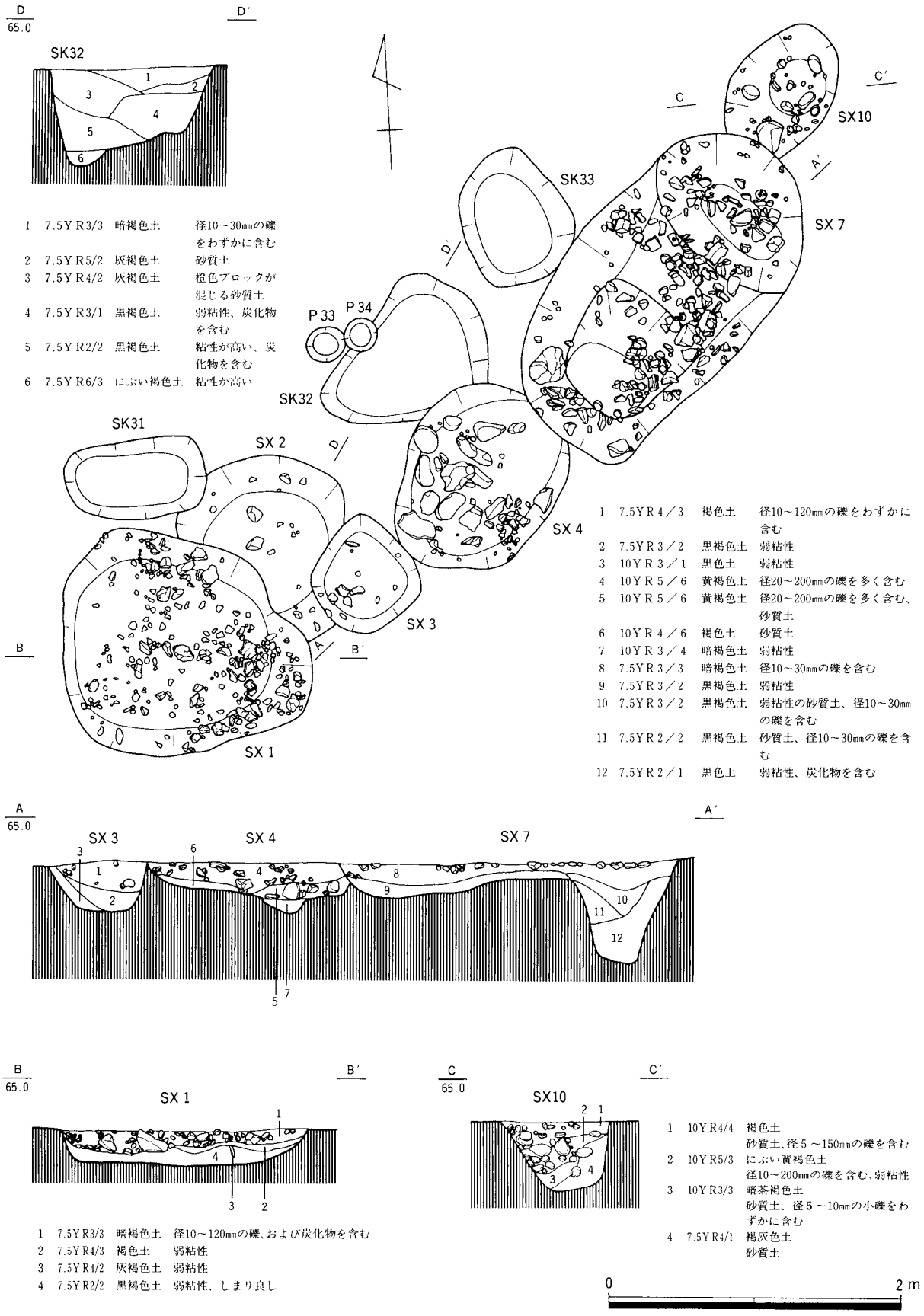
（出土遺物）

本遺構からは山茶碗2、瀬戸美濃（連房）5、伊万里1、合計8点が出土している。そのうち2点を図示した。

瀬戸美濃（218、219）

218は灰釉丸碗である。高台は精緻な断面長方形の貼付高台である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、体部外面の轆轤目は顕著に残る。なお、高台周辺を除き灰釉が施されている。

219は加工円盤である。飴釉と灰釉を左右にかけ分けた腰折碗の底部を転用していると思われる。



第60図　F４グリッド付近遺構実測図

ＳＸ７

Ｇ３区～Ｆ４区に位置し、西側でＳＸ４を、東側でＳＸ10を切る。平面形は楕円を呈し、長軸2.41ｍ、短軸1.35ｍ、深さ0.78ｍを測る。遺構面直上において径10㎝～30㎝の角礫が「コ」の字状に列をなして検出され、その礫の間に遺物が散在していた。埋土は５層に分かれ、上層のみ礫が含まれており、下層は炭化物を若干含む砂層であった。底面は西側では浅い皿状を呈するが東側ではやや掘り込みが深く、様相が異なるものの断面で切りあい関係はみられなかった。本遺構の性格は不明であるが、出土遺物のうち火具（混炉、火鉢、七厘等）が目立つことは遺構の性格の一つとして捉らえられるであろう。

（出土遺物）

本遺構からは山茶碗４、常滑２、瀬戸美濃（連房）72、土師質陶器50、石製品１、瓦12、合計141点が出土している。このうち土師質陶器（主に火具）は全破片数のうち35.5％を占め、かなり高い割合を示している。

出土遺物のうち９点を図示した。

瀬戸美濃（220～223、226、227）

220は小坏である。体部下方は丸みをもち、上方は内弯気味に立ち上がる。体部外面中程に、呉須絵と鉄絵により横線が描かれている。なお、全面に透明釉が施されている。

221は箱型湯呑である。高台は断面逆三角形の貼付高台であり、体部は直立して立ち上がる。文様は呉須絵であり、底部内面に五弁花、体部外面に丸文と格子文、体部外面下方に３本の横線および体部内面に１本の横線が描かれている。なお、全面に透明釉が施されている。

222は髪油壺である。高台は断面方形の付高台であり、体部は下方に稜をもち、頸部まで緩やかにすぼまる。体部外面の文様は呉須絵であり、五弁花を２ヵ所に描いている。なお、全面に透明釉が施されているが、高台端部のみ釉が拭い取られている。

226は擂鉢である。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部外面のヘラ削り調整は顕著に残っている。擂目は一単位が18条であり、幅4.1㎝を測る。底部内面には同心円状の擂目と不定方向に伸びる擂目がみられる。なお、全面に錆釉が施されている。

223、227は徳利である。223は底部には回転ヘラ削り痕が残り、砂粒が付着している。体部は直立して立ち上がり、体部内面の轆轤目は顕著に残っている。なお、内面に灰釉、外面に柿釉が施されているが、底部周辺の釉は拭い取られている。227は蛇の目高台を有し、１ヵ所に押印がみられるが文字の判読はできない。体部下方は丸みを帯びて立ち上がり、上方はすぼまり頸部にいたる。体部内面から頸部内面にかけては棒状工具によるねじり込み痕が顕著に残っている。なお、高台端部を除き飴釉が施されている。

土師質陶器（224、225）

224は火鉢と思われる。体部がほぼ直立し、口縁部は外傾して面取りされている。体部外面には棒状工具により文様が施され、体部内面には指圧痕が残り、口縁部直下に約５㎝の幅で帯状に煤が付着している。

225は甕である。口縁部を外側に張り出し、上面に幅3.3㎝の平坦面を形成している。口縁部上面および内面に炭化物が付着している。

石製品（228）

花崗岩製の石臼の上臼である。上面はなだらかに凹んでおり、下面は1.4cmから1.7cmの間隔で溝が掘り込まれている。

ＳＸ10

Ｅ４区に位置し、西側でＳＸ７に切られる。平面形は不正円を呈し、長軸約1.00ｍ、短軸0.67ｍ、深さ0.46ｍを測る。表面および上層において径5cm～20cm程度の角礫や円礫が検出され、遺物の大部分はその礫の間から出土した。

（出土遺物）

本遺構からは山茶碗１、古瀬戸２、常滑１、瀬戸美濃（連房）11、信楽１、土師質陶器１、合計17点が出土した。そのうち１点のみ図示した。

瀬戸美濃（234）

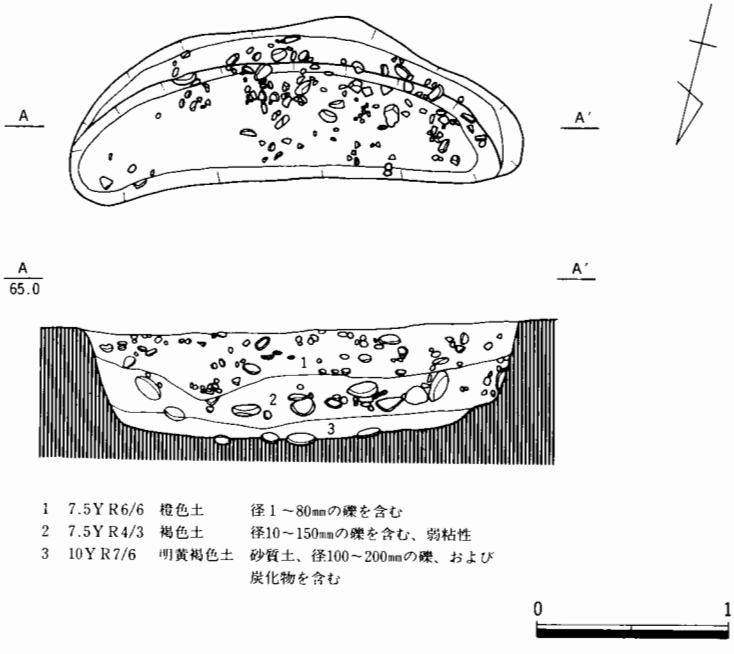
徳利である。撫で肩の肩部から頸部が直立して伸びる。体部外面の文様は呉須絵で、唐草文風の文様が描かれている。体部内面は轆轤目が顕著に残り、棒状工具によるねじり込み痕がみられる。なお、体部内面を除き透明釉が施されている。

ＳＸ６

Ｆ３区～Ｅ４区に位置する。平面形は不正楕円を呈し、長軸2.36ｍ、短軸0.80ｍ、深さ0.60ｍを測る。埋土は３層に分かれ、いずれも径3cm～20cm程度の礫および炭化物が含まれていた。北壁はほぼ垂直に立ち上がるのに対し、南壁は段をなして立ち上がり、南壁および底面に被熱による硬化面が確認された。このことはＳＫ３と類似し、本遺構が火葬墓的な性格を有すると推定される。

（出土遺物）

本遺構からは瀬戸美濃（連房）３、石器１、合計４点が出土しているが、いずれも細片のため図示していない。



第61図　ＳＸ６　実　測　図

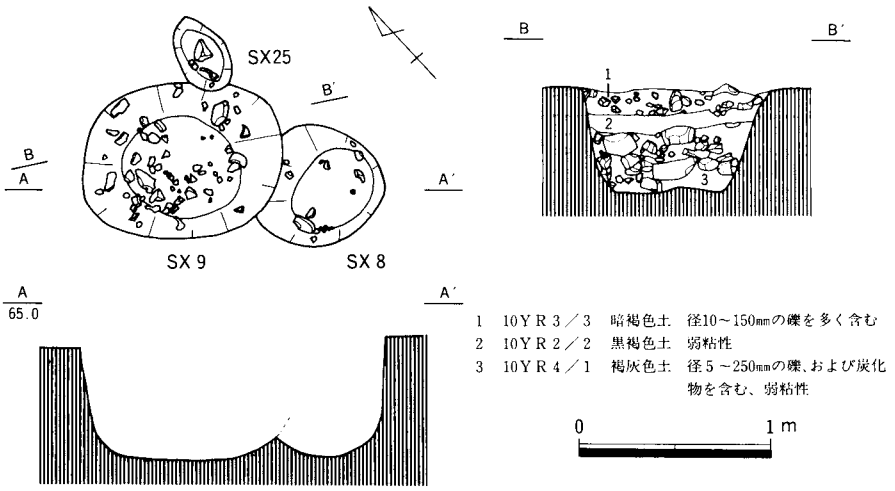
ＳＸ９

Ｅ４区に位置し、北側でＳＸ25に切られ、南東側でＳＸ８を切る。平面形は不正円を呈し、長軸1.23ｍ、短軸0.82ｍ、深さ0.53ｍを測る。埋土は３層に分かれ、最下層には径5cm～30cmの礫が多く含まれており、炭化物が混入していた。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器１、山茶碗

2、古瀬戸３、常滑４、土師皿１、瀬戸美濃（連房）６、土師質陶器２、瓷器系陶器１、合計20点が出土している。そのうち４点を図示した。



第62図　SX８・９実測図

瀬戸美濃（230、233）

230は徳利である。底部外面に回転ヘラ削り痕が残り、体部は丸みを帯びて立ち上がる。体部外面には轆轤目が顕著に残る。なお、底部外面を除き錆釉が施されている。

233は擂鉢である。体部は直線的に伸び、口縁形態は10類に属する。全面に錆釉が施されている。

瓷器系陶器（231）

甕である。白色粒、黒色粒が多く混じり、常滑に比べやや砂っぽい胎土である。口縁部は断面Ｎ字状を呈し、縁帯の幅は3.1cmを測る。

古瀬戸（232）

直縁大皿である。体部は直線的に伸び、口縁部は丸く収めてある。体部外面下方を除き灰釉が施されている。

ＳＸ11

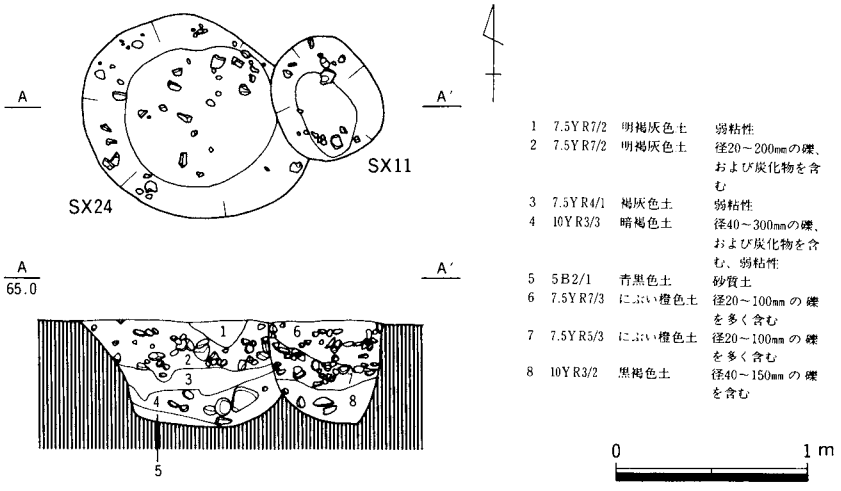
Ｅ４区に位置し、西側でＳＸ24を切る。平面形は楕円を呈し、長軸0.65ｍ、短軸0.51ｍ、深さ0.55ｍを測る。上層において礫が多数みられたが、下層は礫をわずかしか含まない弱粘性の黒褐色土であった。なお、遺物は上層の礫の間から出土した。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器１、山茶碗１、常滑１、瓷器系陶器２、合計５点が出土したが、いずれも細片のため図示していない。

ＳＸ24

Ｅ４区に位置し、東側でＳＸ11に切られる。平面形は不正円を呈し、長軸1.23ｍ、短軸1.04ｍ、深さ0.56ｍを測る。



第63図　SX11・24実測図

埋土は５層に分かれ、礫を含む層と含まない層が交互に堆積していた。遺物はすべて上層の礫を含む層からの検出であり、また、近世の遺構面でありながら中世の遺物が多く、他からの混入と推定される。

（出土遺物）

本遺構からは縄文土器１、山茶碗６、古瀬戸７、常滑８、瀬戸美濃（大窯）１、瀬戸美濃（連房）３、土師質陶器１、合計27点が出土した。このうち３点を図示した。

山茶碗（259）

碗２類の底部破片である。高台内面はヘラ状工具により垂直に調整されている。

古瀬戸（260、261）

260は擂鉢である。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部は直線的に立ち上がる。擂目は一単位が８条であり、幅2.5cmを測る。

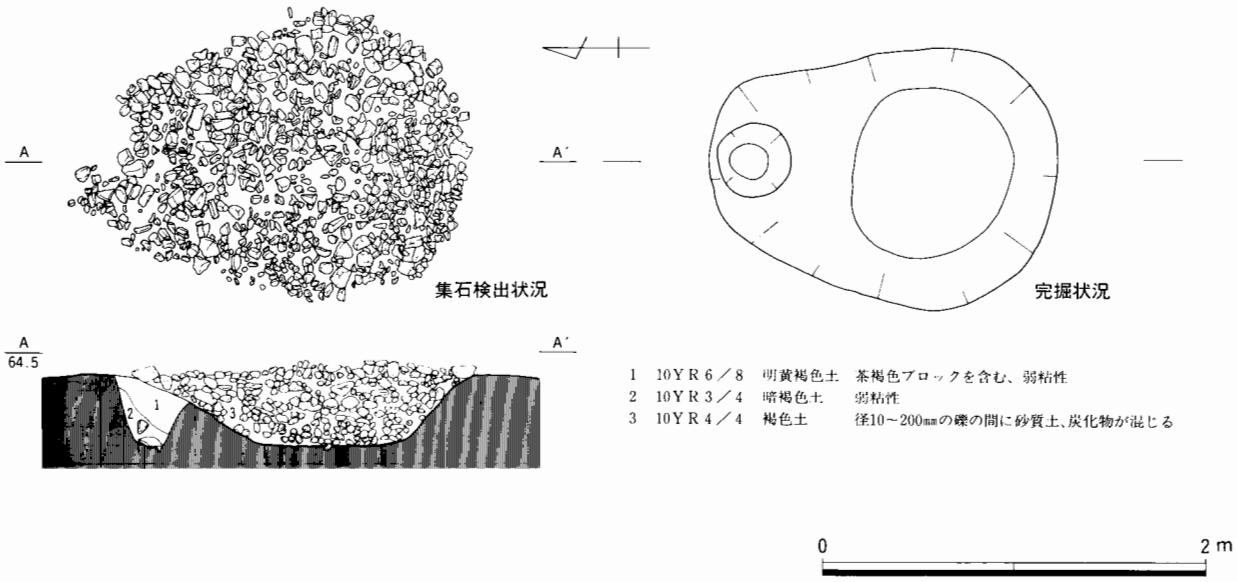
261は折縁深皿である。体部は直線的に立ち上がり、外面の轆轤目は顕著に残る。口縁部は外折し、上面に一条の浅い凹みがみられる。なお、全面に灰釉が施されている。

ＳＸ17

Ａ２区～Ｂ２区に位置し、Ｐ98の上から掘り込んでいる。平面形は不正楕円を呈し、長軸2.05ｍ、短軸1.5ｍ、深さ0.46ｍを測る。掘り込み内は径1cm～20cmの円礫や角礫が乱雑に詰め込まれた状態であり、礫の間に粘性のない明茶褐色土とともに炭化物が若干検出された。遺物は礫の間から散乱して出土しており、礫とともに廃棄されたと推定される。また、山茶碗を除く大部分が18世紀中葉～後半にかけてのものであり、遺構の年代は18世紀後半と考えられる。なお、遺構の性格は不明である。

（出土遺物）

本遺構からは須恵器18、山茶碗23、古瀬戸７、常滑14、中国磁器１、瀬戸美濃（大窯）５、土師皿４、瀬戸美濃（連房）83、土師質陶器5、合計160点が出土した。これらのうち、瀬戸美濃（連房）の



第64図　SX17 実 測 図

みを抽出し用途別の組成をみると、供膳具が73.6%、調理具が12.3%となる。供膳具がやや多いものの、本遺跡出土の近世陶器の組成比と大差ないと思われる。

出土遺物のうち13点を図示した。

瀬戸美濃（237～239、241～248）

237、238は菊皿である。いずれも高台は断面長方形の付高台であり、高台脇は丁寧な指ナデが施されている。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部はヘラで切り込みを入れて花弁を施している。また、体部内面は型打ちにより菊花を表しており、ピン痕が3ヵ所にみられる。237は高台周辺を除き灰釉が施され、口縁部周辺に銅緑釉が漬け掛けされている。また、238は体部下方を除き灰釉が施されている。

239は灰釉丸碗である。断面長方形の付高台から体部下方が丸みを帯びて立ち上がり、上方はほぼ直立する。全面に灰釉が施されているが、高台端部のみ釉が拭い取られている。

241は加工円盤である。灰釉丸碗の底部を転用している。

242～244は擂鉢である。口縁形態は242が12類、243が8類に属する。擂目は243が一単位18条で、幅4.9cm、244が一単位17条で、幅4.3cmを測る。なお、いずれも全面に錆釉が施されている。

245、246は練鉢である。245は高台が断面方形の付高台であり、体部は丸みを帯びて立ち上がる。底部内面にはピン痕が現存では2ヵ所にみられる。246は高台が断面方形の削り出し高台であり、高台脇には2条の沈線が施されている。なお、いずれも高台周辺を除き灰釉が施されているが、246の底部内面は重ね焼きのため、一部釉が拭い取られている。

247、248は鬢水入れである。楕円形を呈し、体部は直立、あるいは内傾して立ち上がる。体部外面の文様は摺絵で、247は七宝つなぎ、248は菊花文を表現している。なお、底部外面を除き灰釉が施されている。

山茶碗（236）

碗6類に属する。

中国磁器（240）

白磁の碗である。高台は断面逆台形の削り出し高台である。高台周辺は露胎である。

ＳＸ20～22

Ｂ1区～Ｃ2区に位置し、ＳＸ21がＳＸ20、ＳＸ22を切っている。平面形はＳＸ20が不正円を呈し、長軸1.30ｍ、短軸1.00ｍ、深さ0.55ｍ、ＳＸ21が不正円を呈し、長軸1.50ｍ、短軸1.42ｍ、深さ0.45ｍ、ＳＸ22が不正楕円を呈し、長軸2.31ｍ、短軸1.50ｍ、深さ0.40ｍを測る。いずれも検出時において径10cm以下の礫がまばらにみえており、埋土、深さ等も類似していることから同様な性格をもつ遺構と推定される。

（出土遺物）

ＳＸ20からは須恵器2、山茶碗8、古瀬戸6、瀬戸美濃（連房）3、合計19点、ＳＸ21からは、須恵器1、山茶碗6、古瀬戸3、常滑2、瀬戸美濃（大窯）2、土師皿4、瀬戸美濃（連房）4、合計22点、ＳＸ22からは、山茶碗7、古瀬戸3、常滑1、瀬戸美濃（大窯）1、土師皿1、瀬戸美濃（連房）7、合計20点が出土している。これらのうち10点を図示した。

山茶碗（249、258）

249は碗である。碗６類に属する。

258は加工円盤である。碗の体部破片を転用している。

古瀬戸（250）

折縁深皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は上方につまみ上げる。また、口縁部内面には小突起を有する。体部外面下方はヘラ削り調整が施されており、口縁部周辺に灰釉が施されている。

土師皿（251）

Ⅰ－ａ－２類に属する。体部外面は指圧痕が明瞭に残らず、むしろ平滑調整に近いことから、時期的にやや新しいと思われる。

瀬戸美濃（252～254、256、257）

252は仏餉具である。脚部上方からハの字状に開き、端部を丸く収めてある。脚部外面下半および脚部内面を除き灰釉が施されている。

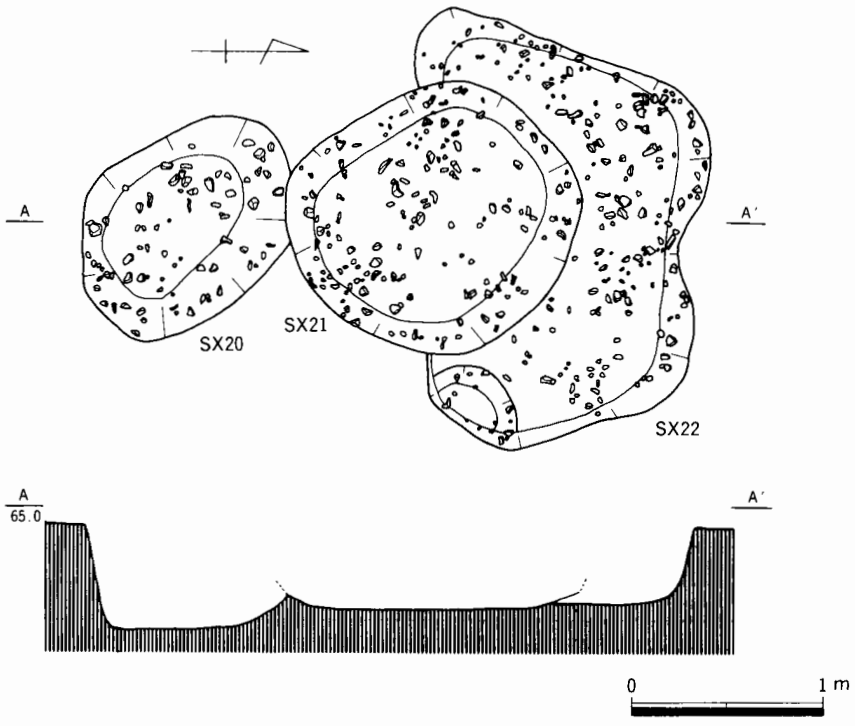
253は擂鉢である。口縁形態７類に属する。

254は天目茶碗である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内弯気味となり端部が尖がる。体部外面下方を除き鉄釉が施されている。

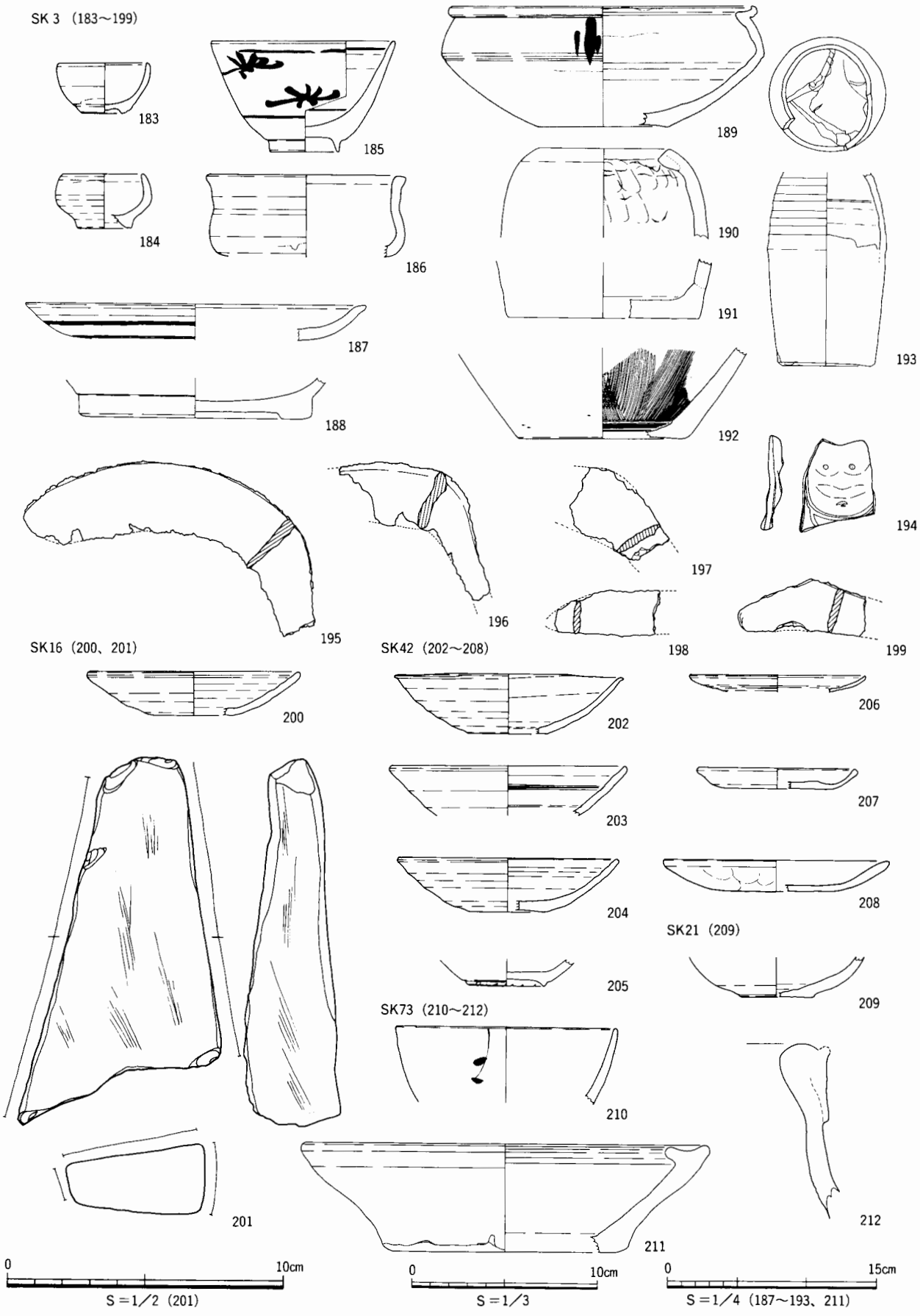
256、257は菊皿である。256は体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部はヘラで切り込みを入れて花弁を施している。また、体部内面は型打ちにより、外面は丸ノミ状工具により菊花を表している。257の高台は断面長方形の付高台であり、端部が外側に開いている。257は高台周辺を除き灰釉が施されており、底部内面にはピン痕がみられる。

常滑（255）

甕である。頸部は内傾し、口縁部は外側に折り返され、頸部に密着する縁帯を形成している。縁帯は幅4.2cmを測り、下方は外側に引き出されている。

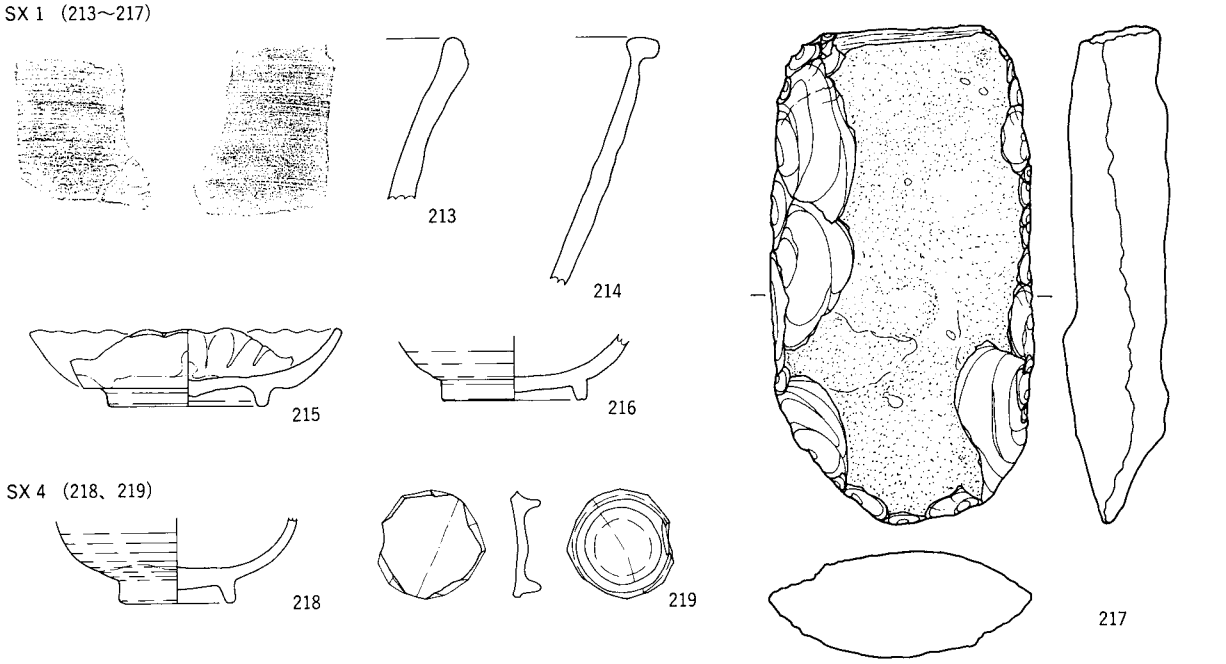


第65図　SX20・21・22実測図



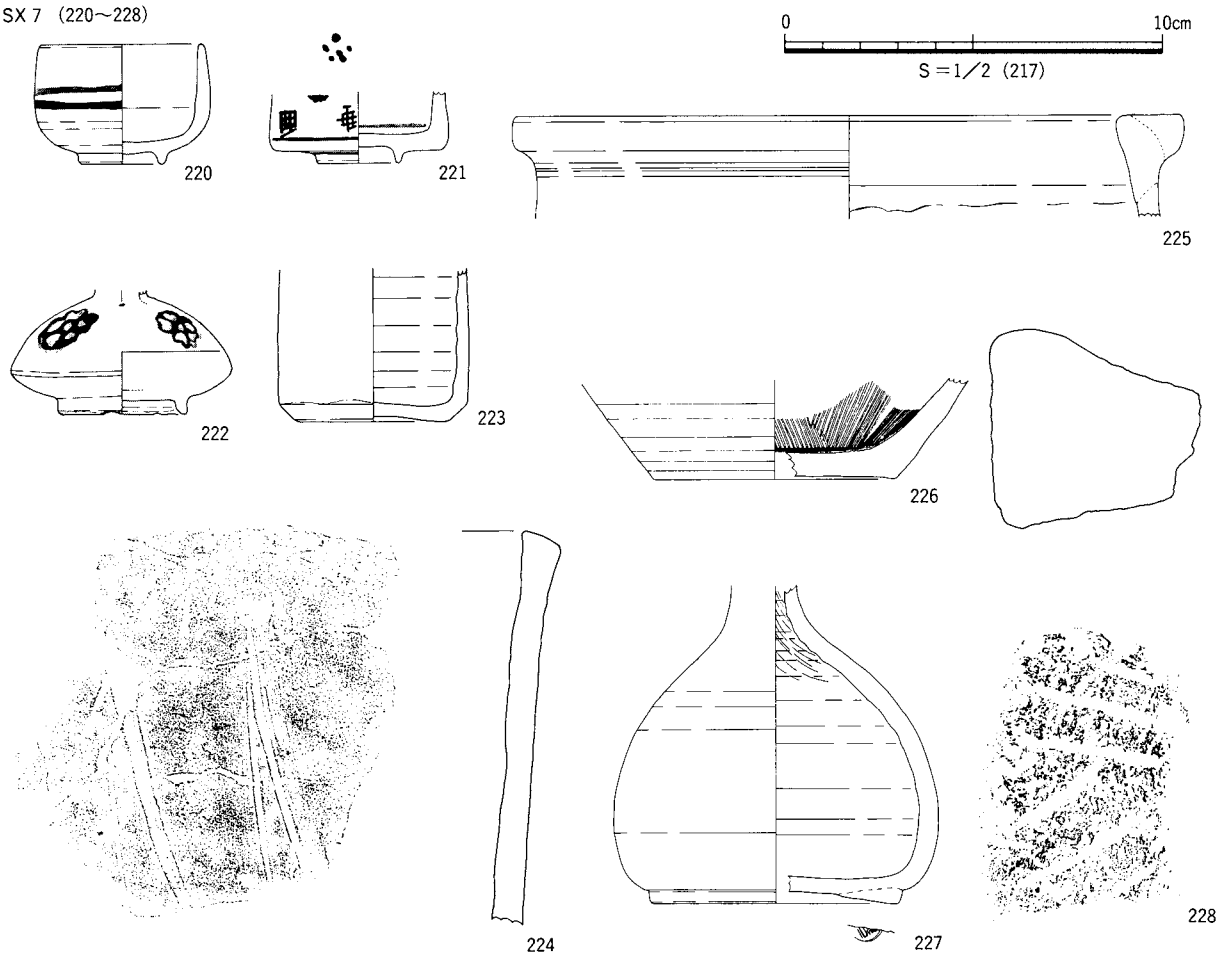
第66図　遺構出土遺物 (14)

SX 1 (213～217)



SX 4 (218、219)

SX 7 (220～228)



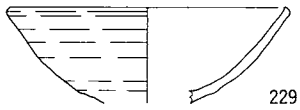
0 10cm
S＝1／2 (217)

0 10cm
S＝1／3

0 15cm
S＝1／4 (225～227)

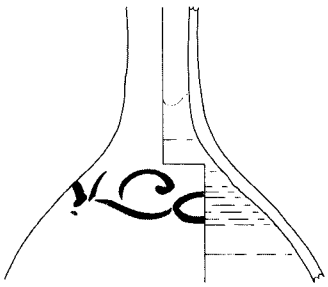
第67図　遺構出土遺物 (15)

SX 8 (229)



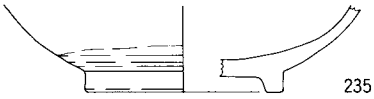
229

SX10 (234)



234

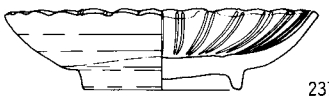
SX12 (235)



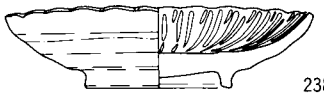
235

SX17 (236～246)

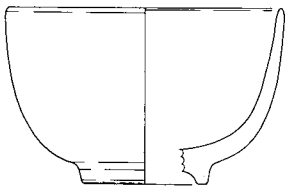
236



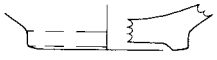
237



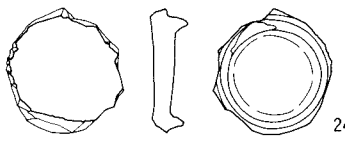
238



239

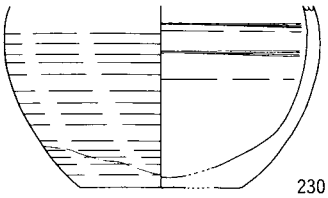


240



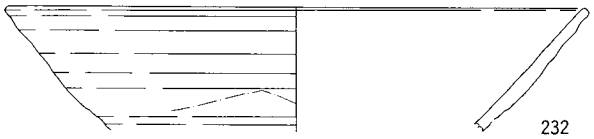
241

SX 9 (230～233)

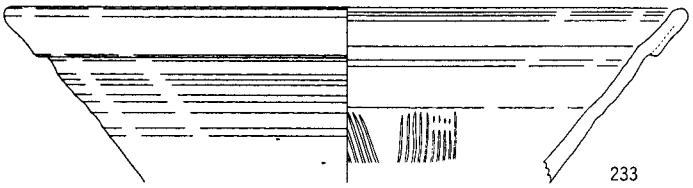


230

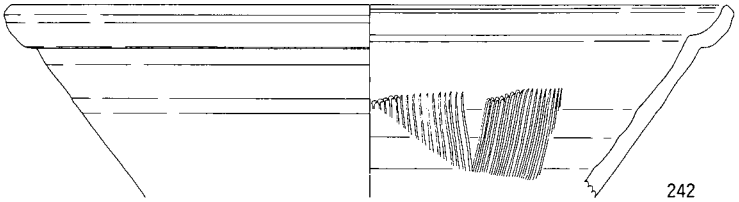
231



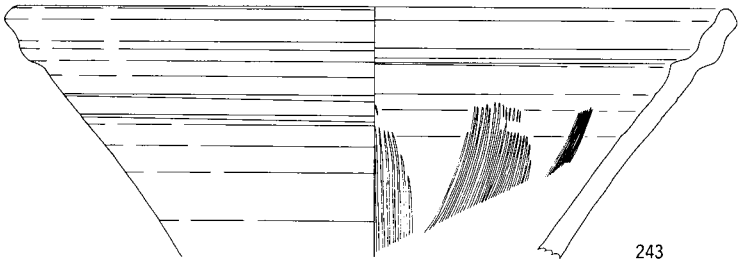
232



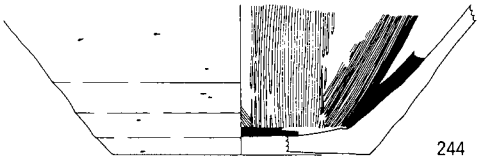
233



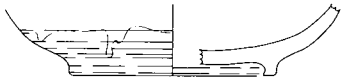
242



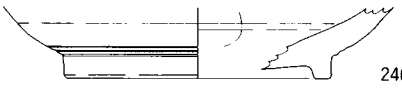
243



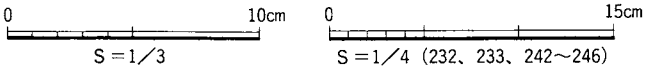
244



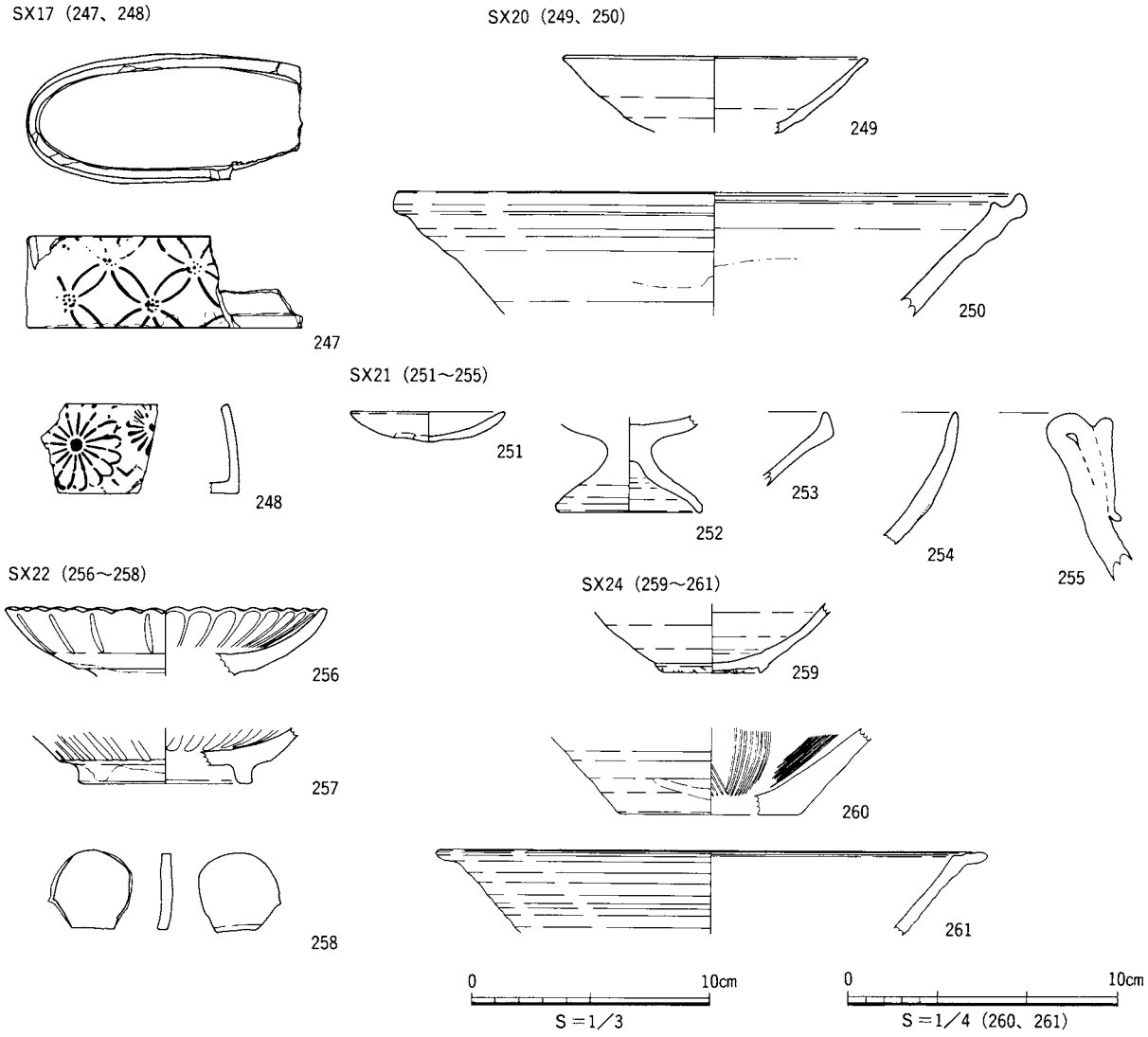
245



246



第68図　遺構出土遺物 (16)



第69図　遺構出土遺物（17）

第3節　その他の遺構出土の遺物、包含層出土の遺物

ここでは第1節、第2節で表記しなかった遺構出土の遺物と包含層出土の遺物について記載する。なお、主だった遺物のみの記載であり、山茶碗等は遺物観察表を参照されたい。

土師皿（297、298）

297はⅠ－b－2類に属する。表面は全面黒色であり、有機物が付着している。このような土師皿は本遺跡で1点のみである。

298はⅠ－b－1類に属するが、口縁部外面のナデがみられず、口縁端部が尖がり気味である。

古瀬戸（299、300、307～309、326、342、347）

299、300は縁釉小皿である。いずれも底部外面に回転糸切り痕が残り、口縁部は丸く収めてある。299は体部の器壁が厚いのに対し、300は器壁が薄く、開いて立ち上がる。なお、いずれも口縁部周辺に灰釉が漬け掛けされている。

307～309は平碗である。高台は断面逆台形の削り出し高台であり、高台内の削り込みは浅い。307、308は体部が直線的に立ち上がり、口縁部はやや内弯し端部を尖がり気味に調整してある。309は口縁部まで直線的に伸び、端部を面取り気味に調整してある。いずれも体部下方は回転ヘラ削り調整がなされ、体部外面下方を除き灰釉が施されている。

326は折縁中皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は肥厚する。口縁部内面下方には小突起を有する。現存している箇所は全面に灰釉が施されている。

342は擂鉢である。口縁形態6類に属する。注口部は外面を2方向から指でつまみ、内面を1方向から指で強くなでることにより形成されている。

瀬戸美濃（301～306、315、321、327、336、338、357、387）

301は重圏皿である。体部外面中程に稜をもち、口縁部を尖らせている。体部内面には同心円状に3本の小突起がみられる。なお、釉は施されていない。

302～306は灯明皿である。304、306は油皿、302、303、305が受皿である。306の口縁部には煤が広い範囲にわたって付着している。受皿はいずれも桟の1ヵ所がU字形に切り込まれている。302以外は全面に錆釉が施されており、底部外面の釉は拭い取られている。302は口縁部周辺および内面に灰釉が施されている。

315、321、327は丸皿である。315の底部内面には摺絵で梅文が描かれている。321の文様は呉須絵で、体部内面に斜格子、底部内面に五弁花が描かれている。327は高台が精緻な断面逆三角形を呈する付高台であり、口縁部が内弯し、端部を尖らせている。高台端部および底部外面を除き灰釉が施されている。

334は徳利である。体部はほぼ直立して伸びており、肩部に稜をもつ。頸部は外傾しており、口縁端部は丸く収めてある。また、体部内外面の轆轤目は顕著に残り、体部中程の3ヵ所に凹みを有する。なお、全面に灰釉が施されている。

336、338は蓋である。336は合子の蓋とされている。[13]台部外面に回転糸切り痕が残り、天井部は笠状に開き、中央部が凹んでいる。なお、天井部上面に灰釉が施されている。338も合子の蓋とされている。[14]天井部が偏平であり、口縁部は内側に折り返されている。天井部上面および口縁部外面に灰釉が施さ

れている。

357は水甕である。高台は断面長方形の付高台であり、高台接地面の幅は広い。体部は下方で稜をもち、やや内反り気味に立ち上がる。口縁部は中央が凹み、端部が若干下り気味に張り出す。体部外面には流水文が彫られ、高台周辺を除き灰釉と緑釉が施されている。なお、底部内面にはピン痕が6ヵ所に残っていたと思われる。

387は陶錘である。体部中程に最大径をもち、端部は両面ともヘラ状工具によりカットされている。なお、全面に錆釉が施されている。

在地産（331、332、353）

331は壺である。高台は断面方形の付高台であり、外反して付けられている。体部は丸みを帯びており、頸部から口縁部にかけて短く垂直に立ち上がる。体部外面には丸ノミ状工具により流水文らしきものが施されている。なお、高台内面を除き鉄釉が施されている。

332は土瓶である。上げ底の底部から大きく膨らんで体部を形成し、頸部は短く垂直に立ち上がる。体部外面には鉄絵と青色の釉薬により花文らしき文様が施されている。また、体部上方に把手が2ヵ所付くと思われる。なお、底部外面周辺および体部内面中程を除き灰釉が施されており、体部外面下方には煤が多量に付着している。

353は擂鉢である。体部は直線的に伸び、口縁形態は8類に属する。擂目は一単位が16条で、幅4.0cmを測る。体部内面中程には〇字状の押印が1ヵ所にみられる。なお、全面に錆釉が施されている。

信楽（314）

丸皿である。高台は断面逆三角形の精緻な付高台である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は尖がり気味である。全面に白色系の釉が施されているが、高台端部は釉が拭い取られている。

伊万里（316、317、324、325、341）

316は丸皿である。高台は断面長方形の付高台であり、細くて高い。また、高台径が2.6cmと非常に小さい。底部内面には鳥が飛んでいる様子が描かれているが、摺絵か染付けかは不明である。

317は染付瓶である。外面には呉須絵で一重網目文が描かれている。なお、内面は露胎である。

324、325は染付碗である。いずれも文様は呉須絵である。324は口縁部内面に四方襷文が描かれ、体部内面に横線が2本引かれる。また、体部外面は青磁釉が施されている。325は体部外面に風景画と草花文が描かれ、体部下方に1本、高台外面に2本、底部外面に1本、合計4本の横線が引かれる。なお、高台端部には砂目積みの痕跡がみられる。

341は蓋である。文様は呉須絵で、口縁部内面には四方襷文、天井部内面には五弁花が描かれ、その間に横線が2本引かれる。また、つまみ内部には方形枠の中に変形字が描かれている。なお、天井部外面とつまみ外面には青磁釉が施されている。

縄文土器（360～374）

360～365は深鉢・鉢である。器形は該当する破片が小片であるために詳細は不明な点もあるが、砲弾型もしくは単純に底部から外方に伸びる器形を呈すると思われる。口縁部に平坦面をもつ資料が多く（360、362～364）、後述する甕と近似する要素が認められる。361は口縁端部が尖がり気味に仕上げられ、平坦面は認められない。362は平坦面が内傾しているのが特徴的である。365は鉢ないしは浅鉢かもしれない。調整は磨滅が激しく観察が困難であった。判明する資料のみ簡単に述べておく。361で

は微妙に櫛状工具による条痕が口縁部に残存する。363は外面はケズリ、内面はナデによる調整が認められる。364は外面においてケズリが顕著に認められ、その方向は口縁部付近で横位、それ以下では斜位となる。365は内面でわずかに粗いミガキが観察できる。

366、367は甕である。366はいわゆる刻目突帯を有する甕である。突帯上にはヘラ状工具によるD字状の押引きが認められる。口縁端部は平坦面というよりは凹面を呈している。内面には指頭圧痕が顕著に残る。367は器形から無突帯の甕と判断して本類した。口縁端部は366と同じく凹面をなすが、むしろ沈線に近い。

368～372は胴部破片である。調整は外面において貝殻条痕（368、371）・ケズリ（369、370、372）の2種が認められ、内面においてもナデ（368～370）・ケズリ（372）の2種が認められる。

373、374は底部破片である。2点とも底部から外反しながら胴部に至る器形を示す。373は単純な平底と思われる。374は上げ底の可能性がある。

石器（375～377）

375は未製品である。裏面部（図左側）を中心に粗い調整を加えている。サヌカイト製である。376は石錐である。折断面を持つやや厚い剝片に錐部を作り出している。錐部の先端部を欠損しており、その断面は菱形状を呈している。チャート製である。377は打製石斧である。表面に表皮を残し、礫のほぼ平らな部分をねらって幅広な横長の剝片を剝離し調整を加えている。素材自体が薄みで顕著な階段状剝離もあまり認められない。なお、刃部の磨滅痕は顕著に認められる。流紋岩製である。

須恵器（378～381）

378は蓋である。先端部が下方に下がり、内面に返りを有する。なお、平坦部外面はヘラ削りが行われている。

379は坏身である。受部はほぼ水平につきだし、口縁部は直立する。なお、底部外面は回転ヘラ削りが行われている。

380は長頸瓶か平瓶である。体部は直線的に開いて立ち上がり、上方で屈曲する。なお、体部外面下方は回転ヘラ削りが行われている。

381は甕である。頸部上半は大きく外反する。口縁部は肥厚し、下方が鋭く突出し上方は内側に折り返されている。

その他（385,386）

385は硯である。長方形を呈し、上方および左右の側面は垂直にカットしてあるが、下方の側面は未調整である。底面に「升」と「香」、右側面に「乃」と「水」という文字が刻まれている。なお、瓦を転用している。

386は「寛永通宝」である。銭貨は今回の調査では1枚のみ出土した。

石製品（392～394）

392、393は持ち砥石である。392は方柱状を呈し、使い込まれて中央部がくびれている。砂岩製であり、下部を破損する。393は表面および側縁部、裏面部に平滑な砥面を持ち、ほぼ完形品とみなして良いのかもしれない。394は置き砥石と考えられる。幅広な平滑面を持っていたと想定されるが、加熱により破損している。平滑面には刃痕と思われる使用痕が認められ、鎌、鍬などの金属製品を対象物としていたと考えられる。泥岩製である。

1）それぞれ大～小の様々な形態を持つが、認定基準としては凹･凸面状をなす人為的に磨かれた面を持つものを砥石とした。出土したものの殆どが欠損しており、完形状態の復元は困難であるが、重量を推定して500ｇを基準に「置き砥石」と「持ち砥石」とに便宜上区分した。また、出土した９点のうち７点は加熱により原型をとどめず破損しており、廃棄形態を考える上で一つの示唆を示しているかもしれない。

2）木製品については東京都立大学教授山田昌久氏から御教示をいただいた。また、樹種の同定は藤根久氏によるものである。

3）内面の調整痕は同心円状のナデ、螺旋状のナデとも呼ばれるが、本報告では、多治見市建設部・多治見市教育委員会　1989「東町１・２号窯発掘調査報告書」で使われている用語を用いる。

4）下記の文献に従った。

（山茶碗）

多治見市教育委員会　1993「小名田小滝古窯跡群　多治見市特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

藤澤良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター　研究紀要第３号』

（古瀬戸）

藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ｘ』

（中国陶磁）

横田賢次郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」

『九州歴史資料館研究論集４』

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.２』

（瀬戸美濃）

藤澤良祐　1987・1988「本業焼の変遷（１）～（４）」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅵ～Ⅶ』

田口昭二　1983「美濃焼」『考古学ライブラリー17』ニューサイエンス社

（伊万里）

大橋康二　1993「肥前陶磁」『考古学ライブラリー55』ニューサイエンス社

（在地産）

美濃市教育委員会　1991「美濃市西南部古窯址群」

（須恵器）

各務原市教育委員会　1984「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」

岐阜市教育委員会　1981「老洞古窯跡群発掘調査報告書」

（石臼）

伊吹町教育委員会　1994「石臼生産遺跡」『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』

5）計測方法については第Ⅵ章第２節を参照されたい。

6）これらは今回の調査で出土した砥石が加熱により破損している状況と類似性があると思われる。

7）静岡県川合遺跡でも井戸を便所に転用した報告がなされている。（森勇一　1994「昆虫考古学のすすめ（３）」『考古学フォーラム４』）

8）下記の文献を参考とした。

関市教育委員会　1984「重竹遺跡　－その３－　東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

9）『東海の中世墓』（財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター　1994）での集石墓２類ないしは３類に相当すると思われる。なお、集石墓２類は14世紀から15世紀まで造営され、集石墓３類は15世紀を中心として、16世紀に下るものもわずかにあるとされており、本遺構の時期と一致している。

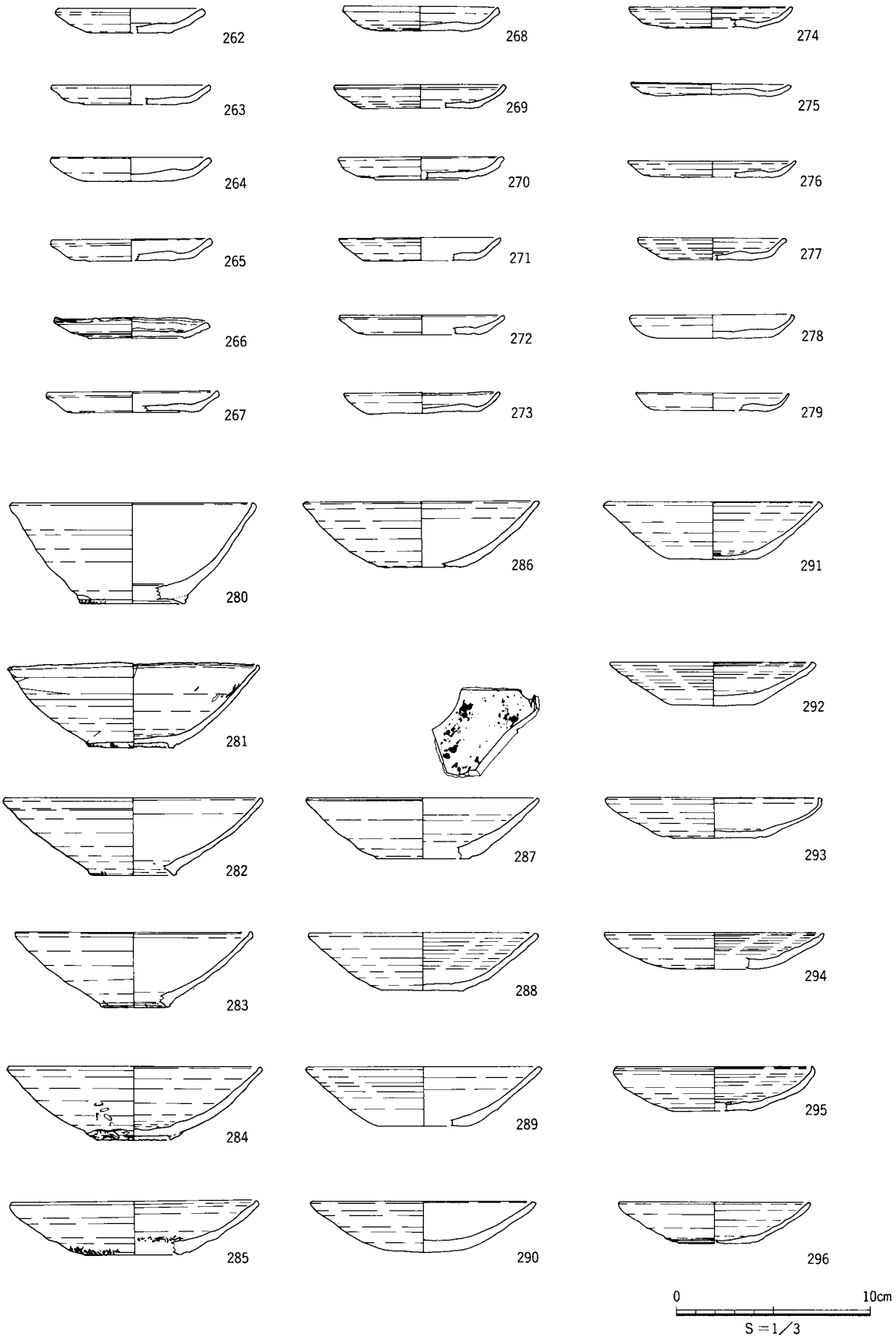
10）集石墓とするならば磐田市教育委員会　1993『一の谷中世墳墓群遺跡』本文編で述べられている集石墓群の形成過程の３、つまり１方向にスライド的に造られていく形成過程に相当する。

11）発掘調査に参加された方によると美濃市周辺は戦前まで墓に鉄鎌を埋納する風習がみられたそうである。

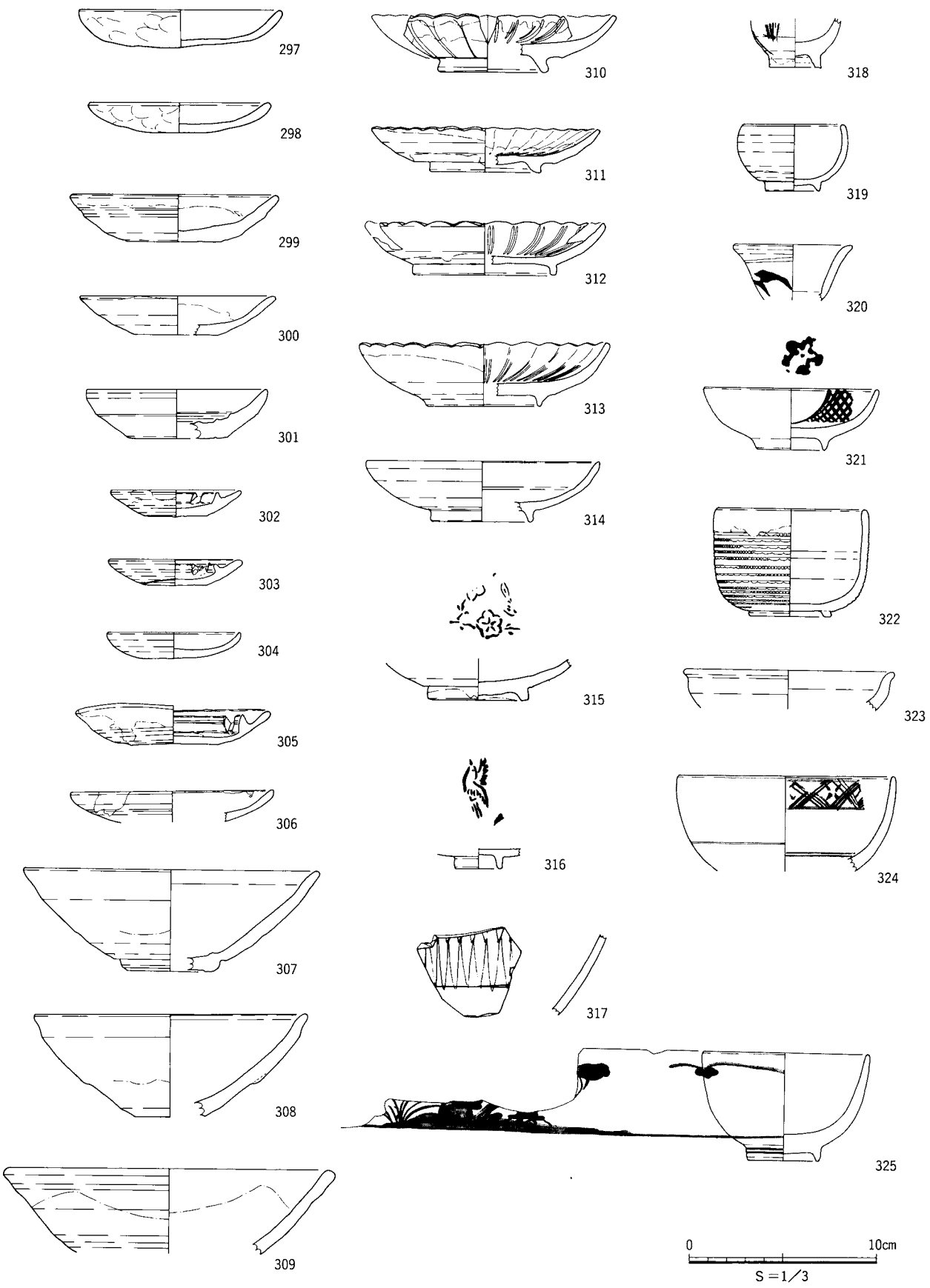
12）美濃市亀蔵庵窯出土遺物の中に類似品がみられるが、亀蔵庵窯の遺物は緑色の絵付けがなされており、瀬戸からの搬入品とされている（前註４より）。本遺跡出土の遺物は、胎土が瀬戸美濃産とは様相が異なるという田口昭二氏からの御指摘を受けているため、ここでは在地産として取り扱う。

13）愛知県瀬戸市教育委員会　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1995「暁窯跡－第３・４・５号窯跡の調査－」

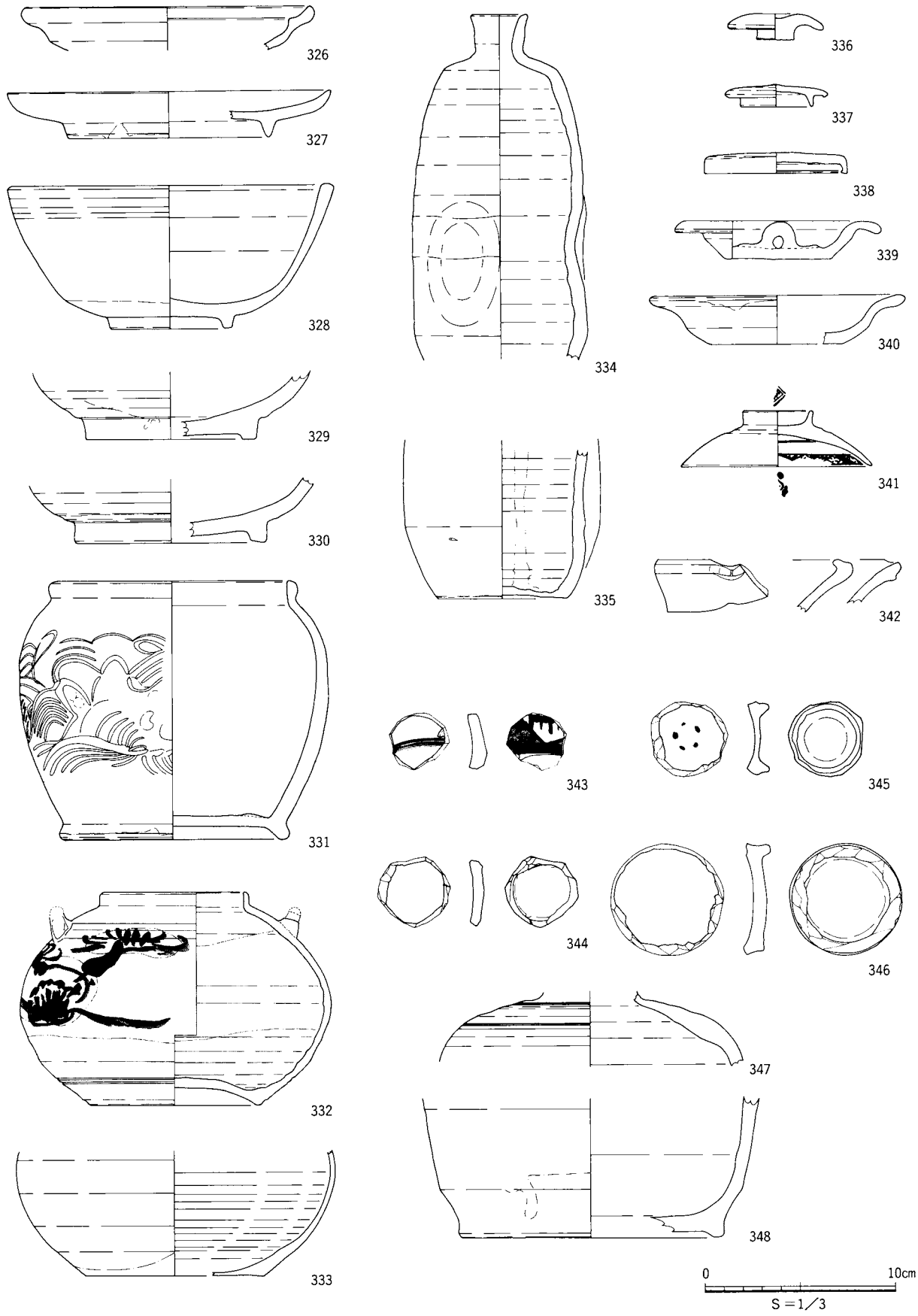
14）東京都建設局　新宿内藤町遺跡調査会　1992「内藤町遺跡－放射５号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－」



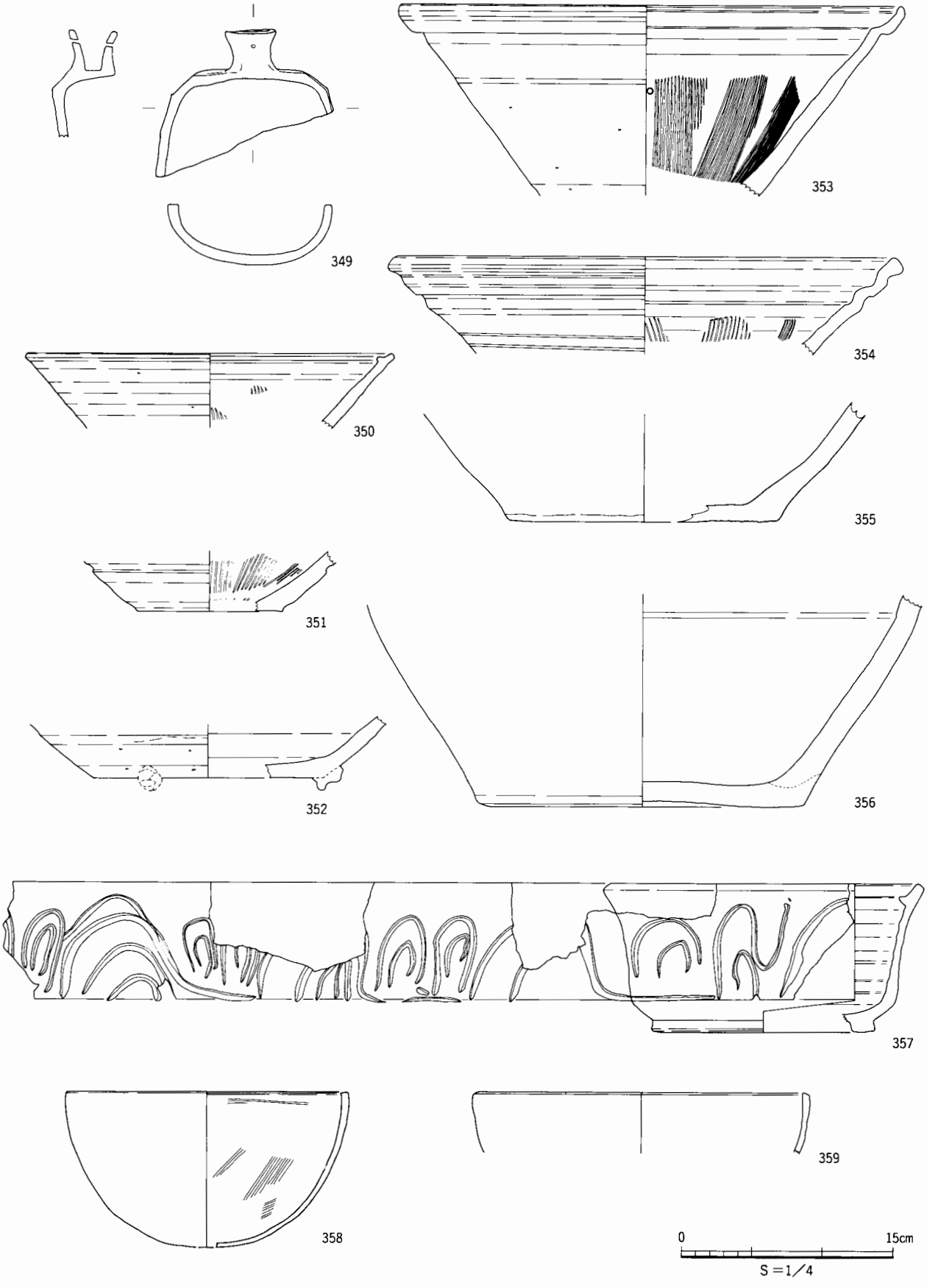
第70図　その他の遺構・包含層出土遺物（1）



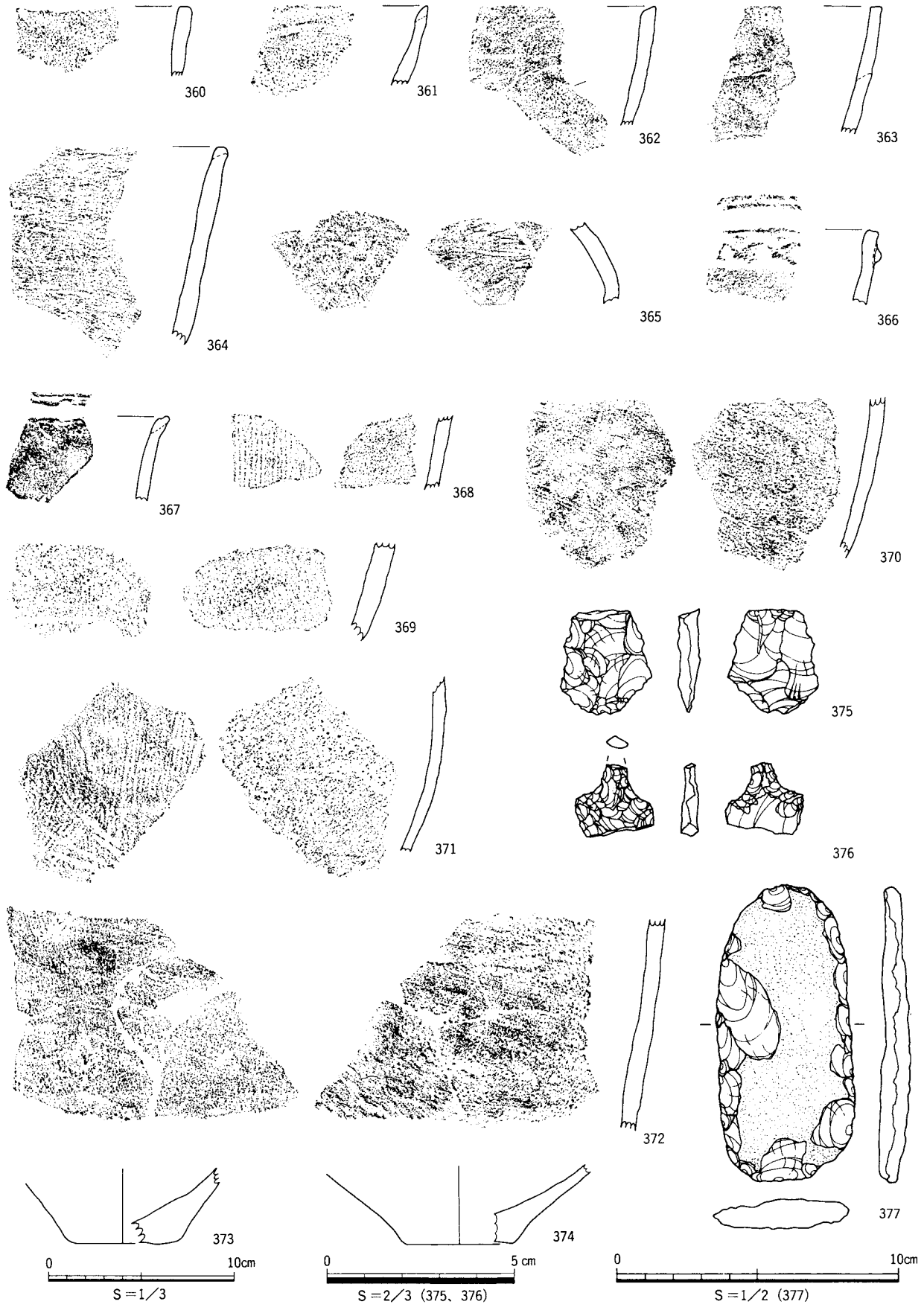
第71図　その他の遺構・包含層出土遺物（２）



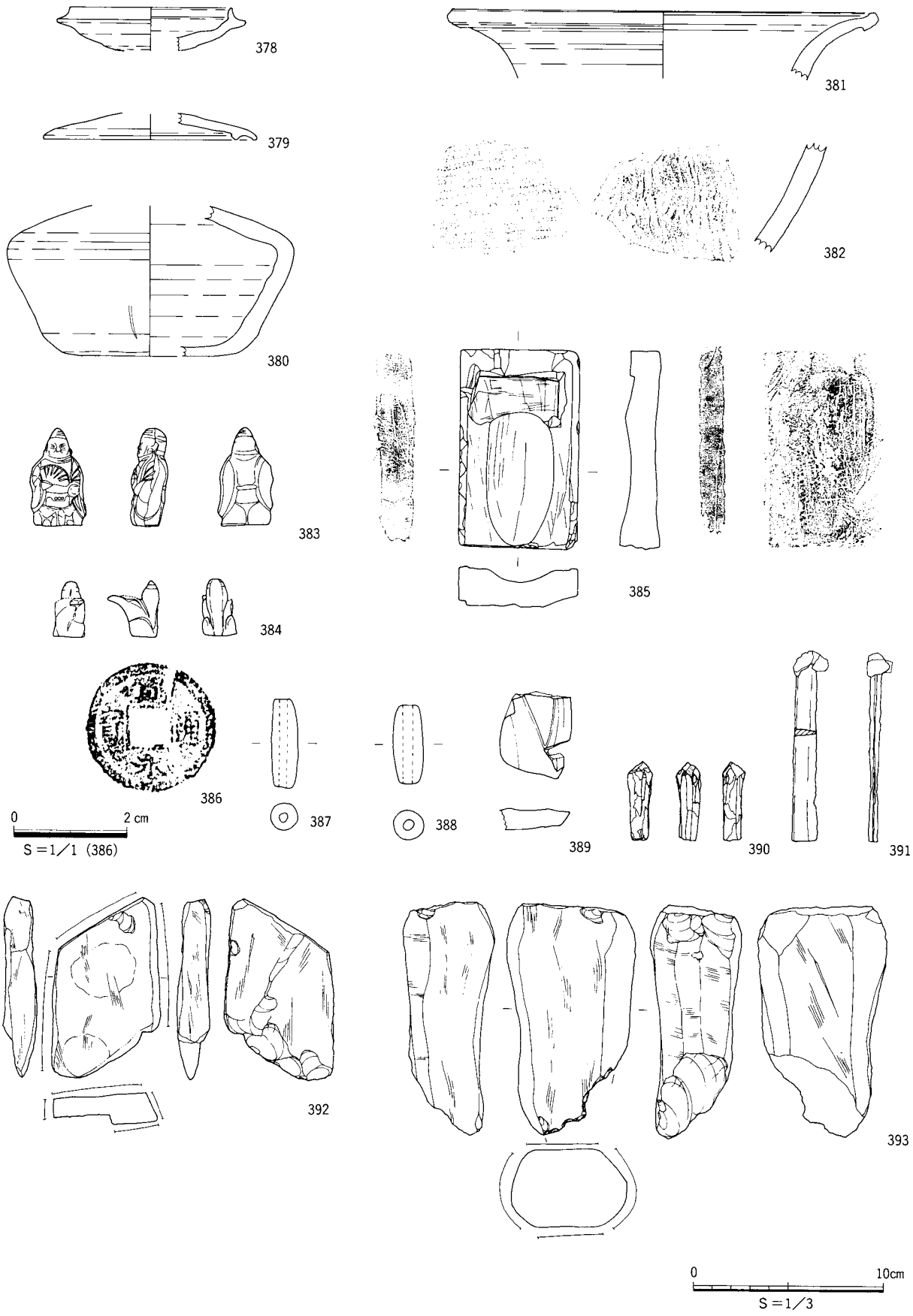
第72図　その他の遺構・包含層出土遺物（３）



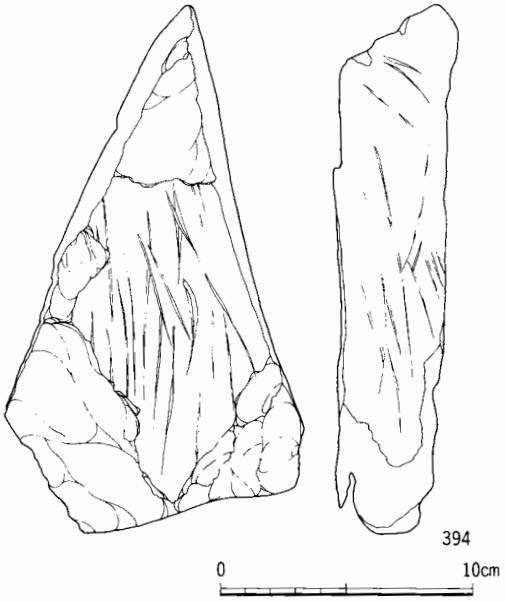
第73図　その他の遺構・包含層出土遺物（４）



第74図　その他の遺構・包含層出土遺物（５）



第75図　その他の遺構・包含層出土遺物（６）



第76図　その他の遺構・包含層出土遺物（７）

表の凡例（第１表～第16表）

1　土坑一覧表について
- 土坑が複数のグリッドにまたがる場合、多くかかっているグリッドを記載した。また、多くのグリッドに均等にかかっている場合は南東側のグリッドを記載した。
- 平面形は円形、楕円形、隅丸方形、不整形の４種類に分類した。
- II期～III期の遺構は時期が確定できるもの以外はすべてII～IIIと記載した。

2　遺構出土遺物破片数について
- 数値はすべて接合前の破片数を示す。
- 石製品とした中に石器も含まれる。また、木製品の中には端材も含まれるが、小片はカウントしていない。同様に鉄製品の中には鉄滓も含まれ、小片はカウントしていない。
- 土師質陶器とは近世の土師皿以外の赤褐色系の土器・陶器を指す（ここでは主に火具、神仏具、ミニチュアなどが該当する）。

3　遺物計測表について
- 法量で（　）が付してあるものは復元値を示す。
- 残存率は口縁部残存率（ｘ／12）を示す。

第1表　土坑一覧表(1)

No	グリット	大きさ(cm)			平面形	切り合い	時期
		長軸	短軸	深さ		＞切る、＜切られる	
SK 1	G 1	123	—	22	楕円形		V
SK 2	G 2	127	—	54	隅丸方形	＞SK68、SK48	V
SK 3	F 2	264	135	60	隅丸方形	＜SK4	V
SK 4	F 2	82	43	23	不整形	＞SK3	V
SK 5	F 2	65	39	26	不整形	＞SK59	V
SK 6	G 2	133	124	16	隅丸方形	＞SK62、SK55、SK67	V
SK 7	G 2	—	48	27	楕円形	＞SK9	V
SK 8	G 2	—	47	31	楕円形	＞SK9、＜SK7	V
SK 9	G 2	—	64	33	楕円形	＜SK7、SK8	V
SK10	F 2	83	82	20	円形		V
SK11	F 2	89	73	28	楕円形	＞SK65、＜SK12	V
SK12	F 2	113	107	17	不整形	＞SK11	V
SK13	G 3	132	94	51	隅丸方形		V
SK14	E 3	93	59	43	楕円形		V
SK15	G 2	106	49	30	楕円形	＞SK83	V
SK16	G 3	155	92	26	楕円形		V
SK17	F 3	104	93	30	不整形	＜SK21	V
SK18	F 3	67	54	26	円形		V
SK19	F 3	88	63	32	不整形	＜P14	V
SK20	F 3	88	84	19	不整形	＞SX5	V
SK21	E 3	118	106	28	円形	＞SK17	V
SK22	G 3	64	—	50	楕円形	＞SK23	V
SK23	G 3	—	—	24	楕円形	＜SK22、SK25、SX1	V
SK24	F 3	83	69	42	楕円形		V
SK25	G 3	101	—	51	隅丸方形	＞SK23	V
SK26	E 3	125	90	46	楕円形	＜P97	V
SK27	E 3	58	53	30	円形		V
SK28	F 3	—	46	13	楕円形	＜SX5	V
SK29	F 3	37	37	10	円形		V
SK30	G 3	70	61	33	円形		V
SK31	G 3	97	54	21	隅丸方形	＞SX2	V
SK32	G 3	126	100	66	不整形	＜SX4、P34	V
SK33	F 4	86	72	21	楕円形		V
SK34	G 3	95	—	24	楕円形	＜P35、SK38	V
SK35	G 4	77	50	44	楕円形	＜SK36、P30	V
SK36	G 4	70	69	48	円形	＞SK35	V
SK37	G 4	41	36	51	円形		V
SK38	G 4	36	35	40	円形	＞SK34、SK39	V
SK39	H 4	47	40	15	円形	＜SK38	V
SK40	H 4	69	38	53	楕円形	＞SK43、＜P77	V
SK41	F 4	88	86	75	円形	＜SX12	V
SK42	G 4	140	132	58	円形	＞SK46	V
SK43	H 4	65	47	52	楕円形	＜SK40	V
SK44	H 4	63	—	38	楕円形		V
SK45	H 4	40	28	37	楕円形		V
SK46	G 4	140	115	55	円形	＜SK42	V
SK47	H 4	—	103	50	楕円形		V
SK48	G 2	—	—	23	円形	＞SK66、SK82、＜SK2、SK68	V
SK49	F 8	80	77	30	円形		V
SK50	G 8	52	48	52	円形		V
SK51	G 7	90	40	52	隅丸方形		V
SK52	H 7	78	43	44	楕円形		V
SK53	G 1	70	70	29	不整形	＞P64、P67、＜P65	V
SK54	G 1	85	28	32	楕円形		V
SK55	G 2	40	—	20	円形	＞SK56、SK57、＜SK6	V
SK56	G 2	—	—	18	楕円形	＜SK55、SK56、SK57、SK58	V
SK57	F 2	56	39	24	楕円形	＞SK56、SK58、SK59、＜SK55	V
SK58	F 2	38	36	15	円形	＞SK56、＜SK57、SK60	V
SK59	F 2	48	47	11	円形	＜SK5、SK57	V
SK60	F 2	36	28	20	円形	＞SK58	V

第２表　土坑一覧表（２）

No	グリッド	大きさ(cm)			平面形	切り合い	時期
		長軸	短軸	深さ		＞切る、＜切られる	
SK61	F 2	46	44	24	円形	＞P58	V
SK62	G 2	111	111	18	円形	＜SK6、SK63、P90	V
SK63	G 2	64	48	23	楕円形	＞SK62	V
SK64	G 2	39	37	28	円形	＞SK83、P99	V
SK65	G 2	78	65	27	楕円形	＜SK11、P91	V
SK66	G 2	82	72	27	円形	＜SK48、SK68、SK82	V
SK67	G 2	88	87	46	円形	＜SK6、SK68、SK69	V
SK68	G 2	80	59	30	楕円形	＞SK48、SK66、SK67、＜SK2	V
SK69	G 2	69	53	46	楕円形	＞SK67	V
SK70	B 2	83	83	33	円形		V
SK71	C 3	104	87	29	隅丸方形		V
SK72	C 3	94	49	35	隅丸方形	＜P94	V
SK73	B 3	110	108	30	円形	＜P98	V
SK74	D 3	130	114	35	楕円形	＜SK75、SK76	V
SK75	D 3	101	56	34	楕円形	＞SK74	V
SK76	D 3	106	76	34	楕円形	＞SK74	V
SK78	C 3	—	69	26	楕円形		V
SK79	C 3	—	95	29	楕円形		V
SK80	D 4	108	98	32	不整形		V
SK81	G 4	50	26	27	楕円形	＜P22	V
SK82	G 1	68	45	20	楕円形	＞SK66、＞SK48	V
SK83	G 2	60	—	27	円形	＜SK15、SK64、P99	V
SK84	H15	—	74	22	隅丸方形	＞P6、SD9	V
SK85	H15	—	93	30	隅丸方形	＜P7、P8	V
SK86	H15	—	62	28	楕円形	＜P11	V
SK87	D20	90	90	60	円形	＞SX28	III
SK89	E21	108	57	34	不整形		II～III
SK90	C22	—	118	34	不整形	＞SK91、SK99	III
SK91	C22	120	98	44	楕円形	＞SK90、SK92、＜SK99	III
SK92	C22	95	—	15	不整形	＜SK91	III
SK93	D23	112	—	33	円形	＜SX29	II～III
SK94	C24	108	98	11	不整形	＜SX29、P146	II～III
SK95	D24	120	82	11	楕円形	＜P150、P151	II～III
SK97	D28	—	94	22	不整形	＞SK98	II～III
SK98	D28	162	116	37	不整形	＜SK97	II～III
SK99	D22	—	—	32	不整形	＞SK90、SK91	III
SK100	C 2	104	89	32	楕円形	＞SD13	II～III
SK101	E 1	385	—	61	楕円形		II～III
SK102	F 2	207	67	15	隅丸方形	＜P352	II～III
SK103	C 2	124	39	12	楕円形	＜P216	II～III
SK104	D 3	138	96	34	不整形	＜P253	II～III
SK105	D 3	104	69	17	不整形		II～III
SK106	E 3	102	74	20	楕円形		II～III
SK107	H10	—	144	10	楕円形		II～III
SK108	G11	394	203	38	不整形	＞P510、P511	V
SK109	F12	312	232	20	不整形		II～III
SK111	H14	—	184	15	不整形	＜P508	II～III
SK112	H14	94	64	20	隅丸方形	＜P575	II～III
SK113	H11	172	67	103	楕円形		V
SK115	F20	400	127	9	不整形	＜P729、P734、P739	II～III
SK116	G21	223	88	7	不整形	＞SK117	II～III
SK117	G21	—	49	6	不整形	＜SK116、P738	II～III
SK118	F21	432	79	9	不整形	＞P739	II～III
SK119	H21	72	46	57	隅丸方形		III
SK120	F22	141	66	46	不整形		II～III
SK121	E22	142	57	23	不整形	＜P823	II～III
SK122	F22	207	179	20	隅丸方形	＞SK123	II
SK123	F23	100	43	8	楕円形	＜SK122	II
SK124	F23	172	95	10	不整形	＜P902	II～III
SK125	F23	112	70	29	不整形	＞SK126	II～III

第3表　土坑一覧表(3)

No	グリッド	大きさ(cm)			平面形	切り合い	時期
		長軸	短軸	深さ		＞切る、＜切られる	
SK126	F23	93	68	30	不整形	＞P840、＞SK125	II～III
SK127	E23	76	68	28	不整形		II～III
SK128	G23	119	32	4	不整形		II～III
SK129	H23	—	78	11	不整形		II～III
SK130	H23	—	—	7	不整形		II～III
SK132	G24	110	21	7	不整形		II～III
SK133	G26	130	106	31	円形		II
SK134	G26	212	72	16	隅丸方形		II
SK135	F26	212	136	45	楕円形		II
SK136	E27	88	77	34	楕円形		II
SK137	G20	139	60	22	不整形	＜P713	II
SK138	H20	126	88	5	隅丸方形	＜P704	II～III
SK139	E20	120	114	107	不整形		II～III
SK140	F20	84	72	27	不整形		II～III
SK141	D22	108	36	14	不整形	＞P1075	II～III
SK142	E23	321	83	37	不整形	＜P922、P1033	II
SK143	F24	344	344	17	隅丸方形	＜P948	II
SX 1	G 3	185	157	23	不整形	＞SX2、SK23	V
SX 2	G 3	133	112	35	円形	＜SX1、SX3、SK3	V
SX 3	G 3	82	76	34	円形	＞SX2	V
SX 4	G 3	136	110	35	楕円形	＞SK32、＜SX7	V
SX 5	F 3	121	89	10	楕円形	＞SK28、＜SK20	V
SX 6	F 3	236	80	60	楕円形		V
SX 7	F 3	241	135	78	楕円形	＞SX4、SX10	V
SX 8	E 4	70	64	33	円形	＜SX9	V
SX 9	E 4	108	82	53	楕円形	＞SX8、＜SX25	V
SX10	F 4	100	67	46	楕円形	＜SX7	V
SX11	E 4	65	51	55	円形	＞SX24	V
SX12	F 4	104	91	44	楕円形	＞SK41	V
SX13	G 6	108	80	60	隅丸方形		V
SX14	G 7	90	65	40	楕円形		V
SX15	H 8	133	30	45	不整形	＜P14	V
SX17	B 2	205	150	46	楕円形	＞P98	V
SX18	B 3	142	141	37	不整形		V
SX19	C 3	72	40	35	楕円形		V
SX20	C 2	130	100	55	楕円形	＜SX21	V
SX21	C 2	150	142	45	円形	＞SX20、SX22	V
SX22	C 2	231	150	40	不整形	＜SX21	V
SX24	E 4	123	104	56	楕円形	＜SX11	V
SX25	E 4	41	25	59	楕円形	＞SX9	V
SX26	F 4	52	45	40	不整形		V
SX27	E20	418	230	15	隅丸方形	＜SE1	II～III
SX28	D19	—	—	20	隅丸方形	＜SK87	II
SX29	D24	224	38	29	不整形	＞SK93、SK94	III
SX30	D 4	1040	450	30	不整形		II～III
SX31	F 9	141	80	6	不整形		II～III
SX32	F 6	61	50	28	円形		II～III
SX33	F13	176	140	22	円形	＜P613	II～III
SX36	F13	175	152	40	円形		II～III

第４表　遺構出土遺物破片数（１）

遺構	縄文	須恵器	山茶碗	古瀬戸	常滑	中国磁器	瀬戸美濃（大窯）	土師皿	土師器鍋	瀬戸美濃（連房）	伊万里	唐津	信楽系	土師質陶器	鉄器	石器	木器	その他	合計
P 1										2									2
P 3			1							3									4
P 8								2		2	3			1					8
P 11								1		1									2
P 14		7																	7
P 15								2		3						1			6
P 21			1																1
P 59			4																4
P 78										1									1
P 80				1			1	1		2									5
P 88			2																2
P 89										1									1
P 92			1																1
P 93										1									1
P 100			1																1
P 106			2																2
P 108			5																5
P 114		1	6	1															8
P 123				1				1		1									3
P 125			1																1
P 129			1	1															2
P 130			12																12
P 137			2		1														3
P 142			5																5
P 144			2							1									3
P 150			2																2
P 155			1							1									2
P 164							1												1
P 335			1																1
P 363		1												1					2
P 371										1									1
P 438			4																4
P 439	1			1															2
P 441			1																1
P 453								1											1
P 464			1							1					1				3
P 482					1														1
P 533		1	1							2									4
P 552		1																	1
P 614			2																2
P 617			2																2
P 713			1																1
P 735			4																4

第5表　遺構出土遺物破片数（2）

遺構	縄文	須恵器	山茶碗	古瀬戸	常滑	中国磁器	瀬戸美濃(大窯)	土師皿	土師器鍋	瀬戸美濃(連房)	伊万里	唐津	信楽系	土師質陶器	鉄器	石器	木器	その他	合計
P 745																	1		1
P 753			2																2
P 762								1											1
P 763								1									1		2
P 768			2					5											7
P 779		1	2					1											4
P 781								1											1
P 783																	1		1
P 785								1											1
P 791				1															1
P 794			4							1							1		6
P 795			2																2
P 797			1																1
P 814			1																1
P 815			1																1
P 822			11	1			1	2		1								不明1	17
P 823			1																1
P 825			1					1											2
P 837								1									1		2
P 839			1																1
P 840			3																3
P 842			2																2
P 852			2																2
P 853			1																1
P 856			1	1															2
P 857			4																4
P 863			1																1
P 866			2											1					3
P 871			1																1
P 896			1																1
P 897			1																1
P 903			3	1				1											5
P 916			3																3
P 922			6																6
P 927								4											4
P 928			5																5
P 930			3																3
P 938																		焼土塊4	4
P 941			4																4
P 943			2	2															4
P 944			1																1
P 948			1																1
P 949																1			1
P 960								1											1

第６表　遺構出土遺物破片数（３）

遺構	縄文	須恵器	山茶碗	古瀬戸	常滑	中国磁器	瀬戸美濃（大窯）	土師皿	土師器鍋	瀬戸美濃（連房）	伊万里	唐津	信楽系	土師質陶器	鉄器	石器	木器	その他	合計
P 973																	1		1
P1026																2			2
P1033								1											1
P1034								1											1
P1042			4	1												1			6
P1046								3									1		4
P1050			1																1
P1057																	1		1
P1058			2																2
P1069			5																5
P1075			4	1															5
P1080			2																2
P1083																	1		1
P1096			4					8											12
P1098								1											1
P1099																	1		1
P1100																	1		1
P1101																	1		1
P1102			1																1
P1108																1			1
SD 6										1									1
SD 7							1												1
SD10			1																1
SD11			1	1															2
SD12				1															1
SD14		6	4	2	1	1		1										土師器1	16
SD16	59									1						1			61
SD19								5											5
SD20			4																4
SE 1	1		15	1	1		7	9		276	32		10	6			7	瓦30	395
SE 2															1				1
SE 3		3	11		2	1		16		116	10		7	6	1	2		瓦1	176
SE 4					1		1			23	4			8		1	4	包丁1、瓦4	47
SE 5		2	12					3						2		2			21
SK 1					1					1					1				3
SK 3		1		1			1	4		90	4	2	7	34	22	3		瓦3	172
SK 6				1			1			11	1		1	1					16
SK 9										1	1								2
SK10				1															1
SK11				2			2												4
SK12										2	2			3					7
SK13			1	1	1					2	1								6
SK16		3	3		1			5		6						2			20

第7表　遺構出土遺物破片数（4）

遺構	縄文	須恵器	山茶碗	古瀬戸	常滑	中国磁器	瀬戸美濃（大窯）	土師皿	土師器鍋	瀬戸美濃（連房）	伊万里	唐津	信楽系	土師質陶器	鉄器	石器	木器	その他	合計
SK17			2							6									8
SK18								1		2									3
SK20			2		1			3		1									7
SK21			1					1		8	1			1					12
SK24			1	1						2									4
SK25		1																	1
SK30			3		1														4
SK31										1									1
SK32										2								瓦1	3
SK33			1								1								2
SK35								1											1
SK36										2									2
SK41			2	1				1		15				1	3				23
SK42		1	10	2	2			3		2				2					22
SK44										3									3
SK46			3																3
SK48	1									3				1					5
SK54			1																1
SK58			1																1
SK62		1	2		1			1		2	1								8
SK63	1		1																2
SK66		1	2	2			1	3		13	1								23
SK70			4																4
SK71															5				5
SK72								1		2									3
SK73					2						1			9					12
SK74			1					1		3									5
SK76										2									2
SK80		1								4	1								6
SK82				1						2								瓦1	4
SK89				2	2														4
SK91			3	2			1	2											8
SK92										1									1
SK96		1	2					1											4
SK97				1															1
SK100					2					1									3
SK101			1							1									2
SK102			4	2															6
SK107				1															1
SK108				1						19				4	6	3	29	瓦33	95
SK109			1																1
SK113			1																1
SK115			5				1												6

第8表　遺構出土遺物破片数（5）

遺構	縄文	須恵器	山茶碗	古瀬戸	常滑	中国磁器	瀬戸美濃（大窯）	土師皿	土師器鍋	瀬戸美濃（連房）	伊万里	唐津	信楽系	土師質陶器	鉄器	石器	木器	その他	合計
SK116			2																2
SK120			5														1		6
SK122		1	26	4			1	14		3						2			51
SK125			3																3
SK126			6					1		1									8
SK127			9	2															11
SK133								4											4
SK134			2																2
SK135						1													1
SK136			4																4
SK139			5																5
SK140			1																1
SK141			7					1											8
SK142								1											1
SK143			3							1									4
SX 1		4	1	2			1	2		26						1			37
SX 2										2									2
SX 3							1			5									6
SX 4			2							5	1								8
SX 6										3						1			4
SX 7			4		2					72				50		1		瓦12	141
SX 8			2					1		2									5
SX 9		1	2	3	4			1		6				2				瓷器系陶器1	20
SX10			1	2	1					11			1	1					17
SX11		1	1		1													瓷器系陶器2	5
SX12										1									1
SX15		3	1																4
SX17		18	23	7	14	1	5	4		83				5					160
SX18			4																4
SX20		2	8	6						3									19
SX21		1	6	3	2		2	4		4									22
SX22			7	3	1		1	1		7									20
SX23		1			1														2
SX24	1		6	7	8		1			3				1					27
SX25		1	8	1															10
SX27			10				3	1		2									16
SX28			3					9											12
SX29			1	1															2
SX30	10	10	57	35	25		11	14		21				8	2	8		瓦1	202
SX33			7																7
SX36				2										0					2
包含層	134	38	434	35	133	2	16	70	28	1164	75		16	30	5	13		瓦12、銭貨1	2206
合計	208	114	932	153	213	6	61	232	28	2077	140	2	42	178	47	46	53	109	4641

第9表　遺物計測表（1）

挿図番号	出土地区	遺物名	器種	法量（cm）			残存率	備考	登録番号
				口径	底径	器高			
22-1	P1069	山茶碗	碗	(13.0)	—	—	3.2		62
2	P857	山茶碗	碗	—	3.4	—	—		63
3	P853	山茶碗	碗	(13.0)	—	—	1.7		72
4	P794	山茶碗	皿	8.2	5.3	0.9	9.7	墨書あり	48
5	P897	山茶碗	碗	(13.1)	(4.9)	2.8	0.4		21
6	P1108	石製品	石臼	—	—	—	—		404
7	P108	山茶碗	碗	—	(6.2)	—	—		105
8	P125	山茶碗	皿	(8.0)	(6.4)	1.1	2.8		85
9	P130	山茶碗	碗	(12.9)	(5.0)	3.0	3.6		27
10	P130	山茶碗	皿	(9.1)	(6.0)	1.2	3.8		28
11	SK29	山茶碗	碗	(12.8)	—	—	0.6		84
12	SX29	古瀬戸	平碗	(16.0)	—	—	1.0		83
13	P949	石製品	石臼	—	—	—	—		405
30-23	SE1	瀬戸美濃(連房)	紅皿	(4.8)	(1.6)	1.4	5.5		185
24	SE1	瀬戸美濃(連房)	紅皿	5.2	(1.1)	2.2	7.4		186
25	SE1	瀬戸美濃(連房)	紅皿	(5.5)	(2.7)	1.4	5.9		187
26	SE1	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	(10.4)	(4.6)	2.0	1.5		172
27	SE1	土師皿	皿	(9.6)	—	—	6.0		82
28	SE1	瀬戸美濃(連房)	端反皿	(14.1)	6.7	3.2	1.3		192
29	SE1	瀬戸美濃(連房)	丸皿	—	6.7	—	—		196
30	SE1	伊万里	広東茶碗	(10.0)	5.0	5.1	3.2		191
31	SE1	伊万里	広東茶碗	(10.1)	5.1	5.3	11.8		167
32	SE1	瀬戸美濃(連房)	広東茶碗	11.8	6.0	5.7	12.0		170
33	SE1	瀬戸美濃(連房)	染付碗	—	(4.3)	—	—		193
34	SE1	瀬戸美濃(連房)	染付丸碗	10.5	4.0	5.5	8.5		179
35	SE1	瀬戸美濃(連房)	鎧湯呑	(7.6)	3.7	6.3	2.5		174
36	SE1	瀬戸美濃(連房)	鎧湯呑	(8.3)	—	—	2.5		175
37	SE1	瀬戸美濃(連房)	鎧湯呑	—	4.0	—	—		176
38	SE1	瀬戸美濃(連房)	灰釉茶碗	8.8	3.8	4.6	7.3		181
39	SE1	伊万里	小坏	8.0	3.2	5.1	8.3		180
40	SE1	瀬戸美濃(連房)	柳茶碗	8.7	3.9	5.4	5.5		168
41	SE1	瀬戸美濃(連房)	柳茶碗	(9.8)	(3.8)	5.7	7.0		182
42	SE1	瀬戸美濃(大窯)	天目茶碗	(12.1)	4.7	6.2	2.0		164
43	SE1	瀬戸美濃(連房)	箱型湯呑	(7.0)	4.2	5.5	6.0		160
44	SE1	瀬戸美濃(連房)	箱型湯呑	6.9	4.0	5.8	5.0		159
45	SE1	伊万里	染付碗	—	4.0	—	—		194
46	SE1	瀬戸美濃(連房)	箱型湯呑	6.7	3.4	5.5	9.6		178
31-47	SE1	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	(36.8)	15.5	13.0	2.4		149
48	SE1	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	34.4	—	—	—		150
49	SE1	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	(36.8)	—	—	0.7		152
50	SE1	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	(37.4)	—	—	0.8		151
51	SE1	瀬戸美濃(連房)	練鉢	(31.0)	13.5	17.4	1.0		153
52	SE1	瀬戸美濃(連房)	練鉢	—	10.6	—	—		156
53	SE1	瀬戸美濃(連房)	練鉢	—	10.6	—	—		154
54	SE1	瀬戸美濃(連房)	徳利	—	(10.8)	—	—		163
55	SE1	瀬戸美濃(連房)	徳利	—	(8.7)	—	—		190
56	SE1	在地産	土鍋	(19.4)	—	—	2.0		157
57	SE1	在地産	土鍋	(17.9)	—	—	2.1		158
58	SE1	在地産	土鍋	—	—	—	—		401
59	SE1	瀬戸美濃(連房)	瓶掛	—	(14.5)	—	—		166
60	SE1	瀬戸美濃(連房)	有耳壺	—	—	—	—		165
32-61	SE1	瀬戸美濃(連房)	十能	—	—	—	—		169
62	SE1	在地産	土瓶	9.4	7.1	13.0	12.0		155
63	SE1	瀬戸美濃(連房)	半銅	—	—	11.4	1.5		189
64	SE1	信楽	仏飾具	—	5.1	—	—		162
65	SE1	瀬戸美濃(連房)	秉燭	(6.4)	3.9	44	—		171
66	SE1	瀬戸美濃(連房)	香炉	11.8	—	—	1.7		177
67	SE1	瀬戸美濃(連房)	香炉	—	6.4	—	—		161
68	SE1	瀬戸美濃(連房)	落とし蓋	8.4	6.2	1.7	4.5		183
69	SE1	伊万里	染付蓋	(9.0)	(3.2)	2.7	0.8		173
70	SE1	瀬戸美濃(連房)	落とし蓋	11.8	5.9	2.3	7.0		184
71	SE1	瀬戸美濃(連房)	戸車	—	—	—	—		188

第10表　遺物計測表（2）

挿図番号	出土地区	遺物名	器種	法量（cm）			残存率	備考	登録番号
				口径	底径	器高			
72	SE1	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		195
73	SE3	土師皿	皿	7.6	—	—	10.5		297
74	SE3	土師皿	皿	(9.2)	(5.7)	1.3	0.5		298
75	SE3	土師皿	皿	10.0	—	1.7	5.5		296
76	SE3	瀬戸美濃(連房)	丸皿	(10.7)	(4.9)	2.5	2.8		230
77	SE3	瀬戸美濃(連房)	丸皿	12.2	6.6	2.6	9.0		244
78	SE3	瀬戸美濃(連房)	菊皿	(13.5)	—	—	2.2		245
79	SE3	瀬戸美濃(連房)	香炉	(7.0)	—	—	4.1		242
80	SE3	瀬戸美濃(連房)	小坏	(8.4)	(4.4)	3.7	2.0		243
81	SE3	伊万里	染付丸碗	(10.4)	—	—	3.0		236
82	SE3	瀬戸美濃(連房)	丸碗	(9.7)	—	—	1.8		229
83	SE3	瀬戸美濃(連房)	腰折碗	(11.8)	—	—	2.0		240
84	SE3	青磁	端反碗	(14.0)	—	—	1.0		237
85	SE3	瀬戸美濃(連房)	折縁碗	(16.6)	(5.9)	3.9	1.8		241
86	SE3	瀬戸美濃(連房)	染付丸碗	(15.8)	—	—	2.8		238
87	SE3	常滑	甕	—	—	—	0.3		228
33-88	SE3	石製品	石臼	—	—	—	—		235
89	SE3	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		246
90	SE3	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		247
91	SE3	瀬戸美濃(連房)	大皿	(32.2)	—	—	1.4		239
92	SE3	瀬戸美濃(連房)	笠原鉢	—	(14.6)	—	—		234
93	SE3	瀬戸美濃(連房)	練鉢	—	15.1	—	—		232
94	SE3	瀬戸美濃(連房)	練鉢	—	(14.6)	—	—		233
95	SE3	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	—	16.0	—	—		231
96	SE4	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	(7.4)	(2.8)	1.7	5.4		259
97	SE4	瀬戸美濃(連房)	香炉	(6.2)	(4.9)	3.3	1.2		398
98	SE4	土師質陶器	ミニチュア?	(3.9)	—	3.5	2.2		394
99	SE4	瀬戸美濃(連房)	仏飾具	(6.6)	4.6	4.7	8.3		5
100	SE4	瀬戸美濃(連房)	仏花瓶	—	—	—	—		396
101	SE4	瀬戸美濃(連房)	仏花瓶	—	4.8	—	—		260
102	SE4	瀬戸美濃(連房)	仏花瓶	—	—	—	—		257
103	SE4	瀬戸美濃(連房)	徳利	—	10.0	—	—		258
104	SE4	常滑	甕	—	14.2	—	—		256
34-105	SE4	瓦	軒平瓦	—	—	—	—		397
106	SE4	鉄製品・木製品	包丁?	—	—	—	—	残存長20.7cm	406
107	SE2	鉄製品	釘	—	—	—	—	残存長3.7cm	409
108	SE5	山茶碗	皿	(9.0)	(5.7)	1.5	1.5		197
109	SE5	山茶碗	碗	—	(5.0)	—	—		198
46-110	SK91	山茶碗	碗	(11.2)	(3.6)	2.7	1.2		120
111	SK91	古瀬戸	折縁深皿	(21.4)	—	—	1.2		13
112	SK109	山茶碗	碗	(12.3)	—	—	0.6		57
113	SK122	山茶碗	碗	(11.8)	(3.4)	3.3	0.5		209
114	SK122	山茶碗	碗	(12.0)	(4.6)	2.6	0.3		208
115	SK122	山茶碗	皿	(8.1)	(5.8)	0.8	2.7		211
116	SK122	土師皿	皿	(8.2)	(5.5)	1.1	1.8		207
117	SK122	土師皿	皿	(11.4)	(6.0)	1.9	1.5		206
118	SK122	古瀬戸	壺類・瓶類	—	—	—	—		212
119	SK122	土師器	土錘	—	—	—	—		210
120	SK134	山茶碗	碗	—	(4.0)	—	—		74
121	SK135	白磁	皿	—	5.8	—	—		87
122	SK136	山茶碗	碗	(11.8)	(5.2)	1.9	2.1		18
123	SK108	瀬戸美濃(連房)	蓋	(8.2)	(4.8)	2.0	1.0		219
124	SK108	瀬戸美濃(連房)	湯呑・香炉	—	2.7	—	—		218
125	SK108	瓦	平瓦	—	—	—	—		395
126	SK108	石製品	石製品	—	—	—	—		399
127	SK108	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	37.7	15.5	15.7	6.8		220
48-133	SX27	山茶碗	碗	(12.2)	(4.0)	3.4	0.9		199
134	SX28	山茶碗	碗	(12.1)	—	—	0.9		111
135	SX28	山茶碗	碗	(11.5)	—	—	1.3		110
136	SX28	土師皿	皿	7.4	3.5	1.7	10.5		114
137	SX28	土師皿	皿	(7.4)	(5.0)	1.2	3.5		112
138	SX28	土師皿	皿	(8.5)	(5.0)	1.4	1.8		113

第11表　遺物計測表（3）

挿図番号	出土地区	遺物名	器種	法量（cm）			残存率	備考	登録番号
				口径	底径	器高			
139	SX30	山茶碗	皿	(8.8)	(6.3)	1.3	4.1		142
140	SX30	山茶碗	碗	(10.4)	(4.8)	1.9	1.8		141
141	SK30	山茶碗	碗	(13.0)	(4.2)	3.5	0.5		140
143	SX30	山茶碗	碗	(13.6)	(4.8)	3.7	0.5		139
144	SX30	山茶碗	碗	(13.4)	(4.7)	4.1	1.0		138
145	SX30	土師皿	皿	(7.4)	—	—	2.5		143
146	SX30	土師皿	皿	(10.8)	—	—	3.0		144
147	SX30	古瀬戸	縁釉小皿	(10.8)	3.8	2.1	1.0		127
148	SX30	瀬戸美濃(連房)	菊皿	12.7	6.1	2.9	6.4		135
149	SX30	常滑	甕	—	—	—	—		129
150	SX30	常滑	甕	—	—	—	1.0		130
151	SX30	古瀬戸	鉢	—	—	—	1.3		133
152	SX30	古瀬戸	卸皿	(14.4)	(6.4)	2.5	4.3		126
153	SX30	古瀬戸	擂鉢	(33.0)	—	—	—		132
154	SX30	古瀬戸	擂鉢	—	11.2	—	—		14
155	SX30	古瀬戸	擂鉢	—	(8.9)	—	—		128
156	SX30	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		131
50-159	SX30	須恵器	坏	(17.2)	—	—	1.6		136
160	SX30	縄文土器		—	—	—	—		145
161	SX30	縄文土器		—	—	—	—		146
162	SX30	須想器	甕	—	—	—	—		134
163	SX33	山茶碗	皿	8.4	5.8	1.3	8.5		365
164	P927	土師皿	皿	7.1	2.2	1.9	12.0		8
165	P927	土師皿	皿	6.9	2.0	1.1	12.0		11
166	P927	土師皿	皿	7.2	4.1	1.5	12.0		10
167	P927	土師皿	皿	8.4	2.4	1.9	12.0		9
53-168	SD14	須恵器	甕	—	—	—	—		77
169	SD20	山茶碗	碗	(12.7)	—	—	1.6		69
170	SD20	山茶碗	碗	—	(4.3)	—	—		70
171	SD16	縄文土器	深鉢・鉢	—	—	—	—		383
172	SD16	縄文土器	深鉢・鉢	—	—	—	—		385
173	SD16	縄文土器	甕	—	—	—	—		384
174	SD16	縄文土器	甕	—	—	—	—		382
175	SD16	縄文土器	甕	—	—	—	—		390
176	SD16	縄文土器	甕	—	—	—	—		386
177	SD16	縄文土器	甕	—	—	—	—		391
178	SD16	縄文土器		—	—	—	—		388
179	SD16	縄文土器		—	—	—	—		393
180	SD16	縄文土器		—	—	—	—		387
181	SD16	縄文土器		—	—	—	—		389
182	SD16	縄文土器		—	—	—	—		392
66-183	SK3	瀬戸美濃(連房)	小坏	(5.1)	(2.3)	2.7	2.3		281
184	SK3	瀬戸美濃(連房)	小坏	(4.3)	(3.0)	3.0	1.5		280
185	SK3	唐津	碗	(10.1)	3.7	6.1	3.9		286
186	SK3	古瀬戸	香炉	(10.8)	—	—	1.0		284
187	SK3	瀬戸美濃(連房)	大皿	(24.5)	—	—	2.6		285
188	SK3	瀬戸美濃(連房)	練鉢	—	16.8	—	—		279
189	SK3	在地産	行平	(16.6)	(7.0)	6.5	1.0		288
190	SK3	土師質陶器	大鉢	9.2	—	—	5.0		147
191	SK3	土師質陶器	火鉢	—	(13.4)	—	—		148
192	SK3	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	—	(12.0)	—	—		287
193	SK3	瀬戸美濃(連房)	徳利	—	7.0	—	—		400
194	SK3	信楽	人形	—	—	—	—		282
195	SK3	鉄製品	鎌	—	—	—	—	残存長16.6cm	410
196	SK3	鉄製品	鎌	—	—	—	—	残存長10.2cm	408
197	SK3	鉄製品	鎌	—	—	—	—	残存長5.7cm	412
198	SK3	鉄製品	刀子	—	—	—	—	残存長5.6cm	413
199	SK3	鉄製品	刀子	—	—	—	—	残存長6.9cm	411
200	SK16	山茶碗	碗	(11.6)	(4.3)	2.4	2.0		108
202	SK42	山茶碗	碗	(12.4)	(4.4)	3.2	3.2		2
203	SK42	山茶碗	碗	(12.9)	—	—	0.8		38
204	SK42	山茶碗	碗	—	(4.1)	—	—		35

第12表　遺物計測表（4）

挿図番号	出土地区	遺物名	器種	法量（cm）			残存率	備考	登録番号
				口径	底径	器高			
205	SK42	山茶碗	碗	(9.4)	—	—	1.4		22
206	SK42	山茶碗	碗	(12.1)	(4.0)	2.9	1.1		23
207	SK42	山茶碗	皿	(8.7)	(5.5)	1.2	0.8		37
208	SK42	土師皿	皿	(12.2)	—	1.7	2.0		36
209	SK21	山茶碗	碗	—	(3.8)	—	—		93
210	SK73	伊万里	染付碗	(12.0)	—	—	0.8		289
211	SK73	土師質陶器	火舎	(29.2)	(17.6)	7.8	1.1		291
212	SK73	常滑	甕	—	—	—	0.3		290
67-213	SX1	須恵器	甕	—	—	—	0.7		223
214	SX1	瀬戸美濃（連房）	練鉢	—	—	—	0.7		224
215	SX1	瀬戸美濃（連房）	菊皿	(12.5)	6.3	3.1	0.8		222
216	SX1	瀬戸美濃（連房）	灰釉丸碗	—	5.8	—	—		221
218	SX4	瀬戸美濃（連房）	灰釉丸碗	—	(4.6)	—	—		106
219	SX4	瀬戸美濃（連房）	加工円盤	—	—	—	—		107
220	SX7	瀬戸美濃（連房）	小坏	(6.6)	3.4	4.8	5.0		250
221	SX7	瀬戸美濃（連房）	箱型湯呑	—	3.4	—	—		251
222	SX7	瀬戸美濃（連房）	髪油壺	—	5.2	—	—		6
223	SX7	瀬戸美濃（連房）	徳利	—	5.9	—	—		249
224	SX7	土師質陶器	火鉢	—	—	—	1.5		217
225	SX7	土師質陶器	甕	(35.4)	—	—	1.3		255
226	SX7	瀬戸美濃（連房）	擂鉢	—	(12.6)	—	—		248
227	SX7	瀬戸美濃（連房）	徳利	—	(13.0)	—	—		253
228	SX7	石製品	石臼	—	—	7.7	—		252
68-229	SX8	山茶碗	碗	(11.3)	—	—	1.4		121
230	SX9	瀬戸美濃（連房）	徳利	—	6.4	—	—		277
231	SX9	瓷器系	甕	—	—	—	0.3		276
232	SX9	古瀬戸	直縁大皿	(30.8)	—	—	1.0		275
233	SX9	瀬戸美濃（連房）	擂鉢	(36.0)	—	—	0.8		274
234	SX10	瀬戸美濃（連房）	徳利	—	—	—	—		216
235	SX12	瀬戸美濃（連房）	片口	—	(7.9)	—	—		295
236	SX17	山茶碗	碗	(12.2)	(4.2)	3.5	0.4		81
237	SX17	瀬戸美濃（連房）	菊皿	12.6	6.3	3.3	6.8		264
238	SX17	瀬戸美濃（連房）	菊皿	12.4	5.9	3.3	5.0	SK66出土遺物と接合	265
239	SX17	瀬戸美濃（連房）	灰釉丸碗	(11.2)	(5.0)	7.0	2.1		268
240	SX17	白磁	碗	—	(6.4)	—	—		273
241	SX17	瀬戸美濃（連房）	加工円盤	—	—	—	—		270
242	SX17	瀬戸美濃（連房）	擂鉢	(38.4)	—	—	1.8		263
243	SX17	瀬戸美濃（連房）	擂鉢	(38.5)	—	—	2.2		261
244	SX17	瀬戸美濃（連房）	擂鉢	—	(13.4)	—	—		262
245	SX17	瀬戸美濃（連房）	練鉢	—	(10.3)	—	—		267
246	SX17	瀬戸美濃（連房）	練鉢	—	(13.9)	—	—		266
69-247	SX17	瀬戸美濃（連房）	餐水入れ	—	—	—	6.0		12
248	SX17	瀬戸美濃（連房）	餐水入れ	—	—	3.7	—		272
249	SX20	山茶碗	碗	(12.8)	—	—	0.5		200
250	SX20	古瀬戸	折縁深皿	(27.0)	—	—	1.0		201
251	SX21	土師皿	皿	(6.5)	—	1.3	2.8		95
252	SX21	瀬戸美濃（連房）	仏飾具	—	(6.1)	—	—		94
253	SX21	瀬戸美濃（大窯）	擂鉢	—	—	—	1.1		97
254	SX21	瀬戸美濃（大窯）	天目茶碗	—	—	—	0.6		96
255	SX21	常滑	甕	—	—	—	1.0		98
256	SX22	瀬戸美濃（連房）	菊皿	(13.7)	—	—	2.7		202
257	SX22	瀬戸美濃（連房）	菊皿	—	(7.0)	—	—		203
258	SX22	山茶碗	加工円盤	—	—	—	—		205
259	SX24	山茶碗	碗	—	4.1	—	—		226
260	SX24	古瀬戸	擂鉢	—	(9.8)	—	—		225
261	SX24	古瀬戸	折縁練鉢	(30.8)	—	—	0.7		227
70-262	包含層	山茶碗	皿	(7.9)	(4.5)	1.3	2.2	2類	306
263	SK126	山茶碗	皿	(8.4)	(4.9)	1.3	5.2	2類	19
264	包含層	山茶碗	皿	(8.4)	(4.6)	1.0	4.2	2類	308
265	SX25	山茶碗	皿	(8.5)	(4.6)	1.1	2.6	3類	24
266	SK114	山茶碗	皿	8.3	5.1	1.1	12.0	2類	4
267	SX18	山茶碗	皿	(9.1)	(6.3)	1.1	1.8	2類	25

第13表　遺物計測表（5）

挿図番号	出土地区	遺物名	器種	法量（cm）			残存率	備考	登録番号
				口径	底径	器高			
268	SK141	山茶碗	皿	(8.1)	(4.6)	1.2	1.0	2類	116
269	P335	山茶碗	皿	(9.0)	(6.0)	1.2	1.5	2類	88
270	SK141	山茶碗	皿	(8.6)	(4.7)	1.2	3.5	2類	115
271	S779	山茶碗	皿	(8.4)	(5.7)	1.2	4.8	2類	71
272	SX25	山茶碗	皿	(8.7)	(5.7)	1.0	1.1	2類	26
273	包含層	山茶碗	皿	8.1	5.8	1.1	12.0	4類	303
274	包含層	山茶碗	皿	(8.4)	(4.6)	1.0	3.2	4類	307
275	P823	山茶碗	皿	8.3	5.0	7.0	8.5	5類	15
276	SK141	山茶碗	皿	(8.7)	(6.2)	0.8	2.4	5類	117
277	P840	山茶碗	皿	(7.6)	(4.0)	1.1	0.6	6類	65
278	包含層	山茶碗	皿	(8.5)	(5.7)	1.2	2.5	6類	309
279	包含層	山茶碗	皿	(7.9)	(5.8)	0.9	4.3	6題	310
280	P1069	山茶碗	碗	(13.0)	(5.6)	5.2	1.2	1類	17
281	SK125	山茶碗	碗	13.3	4.3	4.5	12.0	2類	3
282	SK102	山茶碗	碗	(13.6)	(4.6)	4.1	2.2	2類	1
283	SK102	山茶碗	碗	(12.3)	(3.6)	3.9	3.5	2類	45
284	P1069	山茶碗	碗	(12.8)	(3.5)	4.0	1.0	3類	100
285	包含層	山茶碗	碗	(13.0)	(5.0)	2.8	1.3	4類	301
286	SD10	山茶碗	碗	(12.3)	(3.9)	3.5	0.8	5類	20
287	包含層	山茶碗	碗	(12.1)	(4.8)	3.2	0.3	5類、内面に朱付着	327
288	包含層	山茶碗	碗	(11.9)	(4.2)	3.0	1.8	6類	302
289	P941	山茶碗	碗	(12.2)	(4.6)	3.1	0.4	6類	51
290	包含層	山茶碗	碗	(11.7)	(3.5)	2.7	0.5	6類	319
291	包含層	山茶碗	碗	(11.3)	(4.5)	3.0	2.2	6類	300
292	包含層	山茶碗	碗	(10.6)	(4.2)	2.2	1.4	7類	304
293	SK129	山茶碗	碗	(11.1)	(4.2)	2.2	6.5	7類	124
294	包含層	山茶碗	碗	(11.2)	(4.4)	1.9	1.2	8類	299
295	包含層	山茶碗	碗	(10.4)	(3.8)	2.3	2.5	8類	305
296	P795	山茶碗	碗	(9.9)	(3.7)	2.6	2.6	8類	16
71-297	SK142	土師皿	皿	(9.9)		1.6	2.2		68
298	P1046	土師皿	皿	(11.5)	—	1.3	4.8		59
299	包含層	古瀬戸	緑釉小皿	(11.3)	(5.1)	2.5	0.3		324
300	包含層	古瀬戸	緑釉小皿	(10.6)	(4.5)	2.1	5.0		325
301	SD7	瀬戸美濃(大窯)	灯明皿	(9.8)	(4.5)	2.6	1.5		86
302	包含層	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	7.1	3.4	1.4	7.0		317
303	包含層	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	7.2	3.3	1.4	12.0		318
304	包含層	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	7.3	3.5	1.4	8.0		312
305	包含層	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	10.5	4.8	2.3	12.0		7
306	包含層	瀬戸美濃(連房)	灯明皿	(10.9)	—	1.7	3.2		331
307	SK127	古瀬戸	平碗	(15.9)	(4.8)	5.5	0.6		89
308	包含層	古瀬戸	平碗	(14.8)	—	—	1.0		73
309	包含層	古瀬戸	平碗	(17.8)	—	—	2.6		323
310	包含層	瀬戸美濃(連房)	菊皿	(13.3)	(5.7)	3.2	1.3		329
311	包含層	瀬戸美濃(連房)	菊皿	(12.3)	(5.9)	2.5	2.6		330
312	包含層	瀬戸美濃(連房)	菊皿	(13.0)	(7.6)	2.9	2.3		326
313	包含層	瀬戸美濃(連房)	菊皿	(13.6)	(6.2)	3.5	3.8		328
314	包含層	信楽	丸皿	(12.5)	(5.5)	3.3	3.0		340
315	包含層	瀬戸美濃(連房)	丸皿	—	5.4	—	—		313
316	包含層	伊万里	丸皿	—	2.6	—	—		333
317	SP100	伊万里	染付瓶	—	—	—	—		40
318	SK80	伊万里	小坏	—	2.8	—	—		33
319	包含層	瀬戸美濃(連房)	小坏	(5.6)	(2.8)	3.6	2.5		335
320	SK9	伊万里	小坏	(6.4)	—	—	4.0		104
321	包含層	瀬戸美濃(連房)	小鉢	(9.4)	3.6	3.3			337
322	包含層	瀬戸美濃(連房)	鎧湯呑	8.2	4.4	5.8	5.5		320
323	P839	瀬戸美濃(大窯)	天目茶碗	(11.3)	—	—	1.1		50
324	包含層	伊万里	青磁染付碗	(11.8)	—	—	1.8		348
325	包含層	伊万里	染付碗	(9.0)	4.0	5.9	4.3		350
72-326	SK102	古瀬戸	折縁中皿	(15.6)	—	—	1.2		46
327	包含層	瀬戸美濃(連房)	盤	(17.2)	(10.7)	2.5	1.0		347
328	包含層	瀬戸美濃(連房)	片口	(17.3)	6.5	7.6	1.4		351
239	SK6	瀬戸美濃(連房)	片口	—	(9.0)	—	—		34

第14表　遺物計測表（6）

挿図番号	出土地区	遺物名	器種	法量（cm）			残存率	備考	登録番号
				口径	底径	器高			
330	SK82	瀬戸美濃(連房)	片口	—	(10.2)	—	—		61
331	包含層	在地産	壺	(13.0)	11.9	13.9	2.6		355
332	包含層	在地産	土瓶	7.9	8.9	11.5	5.4		362
333	包含層	瀬戸美濃(連房)	土瓶	—	9.4	—	—		213
334	包含層	瀬戸美濃(連房)	徳利	3.0	—	—	—		354
335	包含層	瀬戸美濃(連房)	徳利	—	6.8	—	—		357
336	包含層	古瀬戸	蓋	(4.8)	—	—	6.0		342
337	包含層	瀬戸美濃(連房)	蓋	5.4	3.9	1.2	8.7		336
338	包含層	瀬戸美濃(連房)	蓋	7.5	7.2	1.1	3.9		343
339	包含層	瀬戸美濃(連房)	落し蓋	10.8	5.6	2.1	5.0		311
340	包含層	瀬戸美濃(連房)	蓋	(13.4)	(7.0)	2.6	1.4		341
341	包含層	伊万里	青磁染付蓋	(11.1)	(3.6)	3.0	4.3		349
342	SK89	古瀬戸	擂鉢	—	—	—	0.8		294
343	包含層	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		346
344	包含層	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		345
345	包含層	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		344
346	SP155	瀬戸美濃(連房)	加工円盤	—	—	—	—		125
347	包含層	古瀬戸	壺	—	—	—	—		321
348	包含層	瀬戸美濃(連房)	銭甕	—	13.9	—	—		356
73-349	包含層	瀬戸美濃(連房)	十能	—	—	—	—		352
350	SK127	古瀬戸	擂鉢	(26.4)	—	—	1.3		90
351	SK89	古瀬戸	擂鉢	—	(10.4)	—	—		293
352	包含層	古瀬戸	折縁深皿	—	16.4	—	—		322
353	包含層	在地産	擂鉢	36.0	—	—	1.4		359
354	包含層	瀬戸美濃(連房)	擂鉢	(36.7)	—	—	0.8		353
355	SK89	常滑	甕	—	(19.0)	—	—		292
356	包含層	常滑	甕	—	(23.0)	—	1.0		358
357	包含層	瀬戸美濃(連房)	水甕	(30.2)	(21.1)	14.0	5.5		361
358	包含層	土師器	内耳鍋	(20.0)	—	(11.4)	3.5		363
359	包含層	土師器	内耳鍋	—	—	—	—		376
74-360	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		374
361	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		373
362	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		371
363	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		381
364	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		366
365	包含層	縄文土器	深鉢	—	—	—	—		370
366	包含層	縄文土器	甕	—	—	—	—		375
367	包含層	縄文土器	甕	—	—	—	—		402
368	包含層	縄文土器		—	—	—	—		372
369	包含層	縄文土器		—	—	—	—		377
370	包含層	縄文土器		—	—	—	—		368
371	包含層	縄文土器		—	—	—	—		367
372	包含層	縄文土器		—	—	—	—		379
373	包含層	縄文土器		—	—	—	—		378
374	包含層	縄文土器		—	—	—	—		369
75-378	SX15	須恵器	蓋	11.4	—	—	1.2		43
379	包含層	須恵器	坏	(8.6)	—	—	0.7		315
380	P14	須恵器	平瓶	—	(9.8)	—	—		214
381	包含層	須恵器	甕	(22.7)	—	—	1.2		314
382	P114	須恵器	瓶	—	—	—	—		30
383	包含層	瀬戸美濃(連房)	人形	—	—	—	—	高さ5.2cm	338
384	包含層	瀬戸美濃(連房)	人形	—	—	—	—		339
385	包含層		硯	—	—	—	—	長さ10.6cm、幅6.3cm、厚さ2.2cm	316
386	包含層		銭貨	—	—	—	—	直径2.3cm	360
387	包含層	瀬戸美濃(連房)	陶錘	—	—	—	—	長さ4.7cm、重さ10.4ｇ	332
388	P866	土師器	土錘	—	—	—	—	長さ4.1cm、重さ10.1ｇ	119
389	SX36	土製品	鋳型？	約15	—	1.1	1.0		380
390	包含層		骨	—	—	—	—	残存長4.2cm	403
391	SK13	銅製品		—	—	—	—	残存長10.1cm、幅1.3cm	407

第15表　木 器 計 測 表

番号	遺構	材	樹種	残存長(cm)	残存幅(cm)	備考	登録番号
1	P745	柱根	ヒノキ属	12.4	6.5		32
2	P763	柱根	ヒノキ属？	27	18.5		29
3	P794	柱根	ヒノキ属？	43.8	17.3		42
4	P837	柱根	ヒノキ属	14.5	19		30
5	P973	杭	ヒノキ属	19.7	4.3		43
6	P1046	板材	モミ属	14	10		50
7	P1057	柱根	ヒノキ属	23.7	9.4		31
8	P1083	杭	クリ	37.6	5.2		33
9	P1099	杭	アカガシ亜属	15.8	4.8		49
10	P1100	杭	クリ	10.9	2.4		44
11	P1101	杭	ヒノキ属	14.3	3.5		52
12	SE1	木片	アカマツ	6.1	2		39
13	SE1	木片	アカマツ	19.8	1.6		40
14	SE1	木片	ヒノキ属	21.3	2.6		35
15	SE1	木片	ヒノキ属	5.6	2		36
16	SE1	木片	ヒノキ属？	6.6	1.5		38
17	SE1	木片	ヒノキ属？	6	2.2		41
18	SE1	木片	マツ属複維管束亜属	7.4	1.1		37
19	SE4	板材	スギ	6.5	6.3		45
20	SE4	板材	スギ	6.7	4.9		46
21	SE4	木片	クリ	7.5	1.8		48
22	SE4	木片	ハンノキ属	17.8	0.8		47
23	SK108	下駄	スギ	19.5	7.2		51
24	SK108	角材	スギ	13	3.8		25
25	SK108	角材	スギ	16.2	3		26
26	SK108	角材	ヒノキ属	31	1.6		6
27	SK108	建築部材	アカマツ	17.7	7	縦挽き痕有り	17
28	SK108	建築部材	アカマツ	39.3	10	釘付随、縦挽き痕有り	23
29	SK108	建築部材	スギ	20.5	5.1	釘付随	18
30	SK108	板材	アカマツ	26.2	6.7	縦挽き痕有り	14
31	SK108	板材	スギ	18.6	2.9		3
32	SK108	板材	スギ	9	3.3		5
33	SK108	板材	スギ	11	2.8		8
34	SK108	板材	スギ	28.6	7.5		16
35	SK108	板材	ヒノキ属	13.3	6		1
36	SK108	板材	ヒノキ属	10.1	1.9		9
37	SK108	板材	ヒノキ属	16	4.1		15
38	SK108	板材	ヒノキ属	26.1	12	縦挽き痕有り	22
39	SK108	板材	マツ属複維管束亜属	7.4	3.6		2
40	SK108	板材	マツ属複維管束亜属	15	5.5		4
41	SK108	板材	マツ属複維管束亜属	11.7	4.8		7
42	SK108	板材	マツ属複維管束亜属	30.8	4.9	縦挽き痕有り	10
43	SK108	木片	アカマツ	9.5	2.1		12
44	SK108	木片	サクラ属	9.5	8.4	炭化材	28
45	SK108	木片	スギ	18	9.3		21
46	SK108	木片	スギ	21.1	5.3		24
47	SK108	木片	ヒノキ属	9	2.3		13
48	SK108	木片	ヒノキ属	23.1	12.2		20
49	SK108	木片	マツ属複維管束亜属	6.4	2.1		11
50	SK108	木片	マツ属複維管束亜属	19.2	7.3		27
51	SK108	木片	モミ属	16.5	3.7		19
52	SK120	柱根	ヒノキ属	28.7	21.5		34

第16表　石 器 計 測 表

番号	遺物名	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
74—375	剥片	(3.0)	(2.6)	(0.7)	(4.8)	
74—376	石錐	(2.0)	(2.1)	(0.5)	(2.2)	
48—158	打製石斧	(16.0)	(8.6)	(2.2)	(371.9)	
67—217	打製石斧	(13.5)	(7.0)	(2.9)	(381.4)	
74—377	打製石斧	(10.7)	(5.1)	(1.2)	(77.6)	
48—157	砥石	(8.0)	(3.0)	(1.1)	(39.0)	
66—201	砥石	(13.5)	(7.5)	(3.6)	(329.5)	
75—392	砥石	(12.2)	(6.8)	(4.8)	(488.0)	
75—393	砥石	(9.6)	(5.8)	(1.7)	(109.8)	
76—394	砥石	(20.5)	(12.0)	(5.0)	(1180.0)	

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　下巾上遺跡のプラント・オパール

鈴木　　茂（パレオ・ラボ）

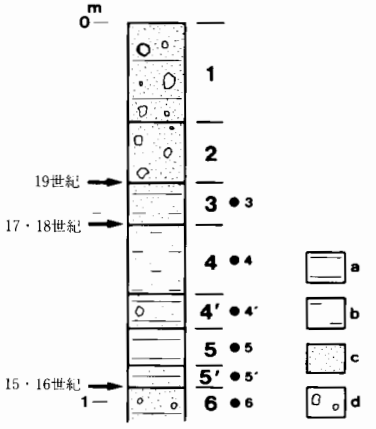
岐阜県美濃市に所在する下巾上遺跡において、「稲作」を検討する目的で試料を採取した。イネを含むイネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、珪酸を多量に吸収し、細胞内に沈着させることが知られており（藤原　1976）、葉に形成された機動細胞珪酸体（プラント・オパール）についてはイネを中心とした形態分類の研究が進んでいる（藤原　1978など）。こうしたことから、供した試料においてイネのプラント・オパールが抽出されるか否かにより、稲作についての検討が可能となる。このように、プラント・オパール分析は稲作の検討に有効である。ここでは、採取した試料についてプラント・オパール分析を行い、下巾上遺跡における稲作の有無について検討を行った。

１．試料と分析方法

プラント・オパール分析に供した試料は、第77図に示した土層断面の３層以下の６層準より採取した６点である。堆積物についての簡単な記載を示すと、１層は礫混じりの黒褐色粘土質砂で、本層は客土層である。２層は礫混じりの黄～黒灰色砂で、19世紀面を覆う堆積層である。３層は黄～黄灰色の粘土質～シルト質細粒砂で、炭化物や礫が点在しており、下位層とは波状に接している。本層は17･18世紀面を覆う堆積層である（試料３）。４層は淡黒灰～淡黒褐色の砂質シルトで、団粒状をなし、小空隙や礫（直径6㎜）が認められる（試料４）。４'層は礫混じりの黒褐色あるいは褐色の砂質粘土で、礫の大半は風化しており、団粒状をなしている（試料４'）。５層は黒～黒灰色の粘土で、粘性が高く、団粒状をなしている（試料５）。５'層は淡黒褐色の砂質粘土で、礫が認められ、15･16世紀面を覆う堆積層である（試料５'）。６層は礫混じりの淡黄褐色砂～粘土で、小空隙や細根様のものが認められる（試料６）。

これら６試料について次のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーに採り、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30％の過酸化水素水を20～30cc加え、脱有機物処理を行う。次に水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により20μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが300個に達するまで行った。



第77図　試料採取地点の地質柱状図
ａ：粘土ｂ：シルトｃ：砂　ｄ：礫

2．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第17表）、その分布を第78図に示した。なお、以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの個数である。

検鏡の結果、全試料を通してイネのプラント・オパールは検出されなかった。最も多く検出されたのはネザサ節型で、下位より上位に向い増加し、試料４、４'では250,000個を越えている。個数的にはかなり少ないが、クマザサ属型にも同様の傾向が認められる。ウシクサ属もほぼ同様の傾向で、上位層で多く、試料４'においては突出して検出されている（約22,000個）。これらとは反対に、ヨシ属は下位層で多く検出され（15,000個前後）、上位の試料３、４では急減している。その他、キビ族などが若干検出されている。

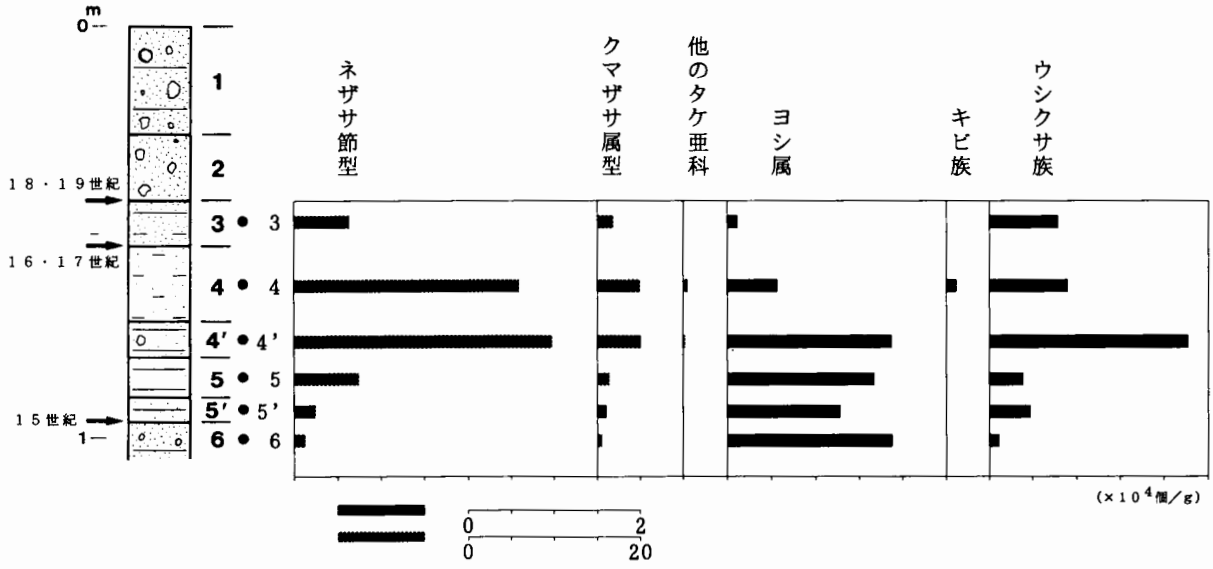
3．稲作および遺跡周辺のイネ科植物

以上のように、どの試料からもイネのプラント・オパールは検出されず、少なくとも試料採取地点付近においては稲作が行われていた可能性はほとんど無いと判断されよう。

遺跡周辺のイネ科植物についてみると、16世紀前後の試料においてヨシ属が比較的多く検出され、

第17表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個／g）	ネザサ属型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	他のタケ亜科（個／g）	ヨシ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	不明（個／g）
3	0	63,400	18,100	0	1,100	0	7,900	15,900
4	0	259,800	49,700	4,500	5,600	1,100	9,000	26,000
4'	0	295,400	50,300	1,300	18,500	0	22,500	34,400
5	0	74,100	14,100	0	16,600	0	3,800	15,300
5'	0	24,400	10,400	0	12,800	0	4,600	18,600
6	0	12,500	5,200	0	18,700	0	1,000	12,500



第78図　プラント・オパール分布図

遺跡周辺ではヨシなどが生育する湿地的な環境であったと推測される。また、こうした湿地的な環境の周辺にはネザサ節型やウシクサ族（ススキやチガヤなど）が生育していたと予想される。

18世紀以降においては、湿地的環境は狭まり、ヨシなどはその生育地を急激に減少させた。代わってネザサなどやウシクサ族が分布域を広げ、遺跡周辺では渇いた草地的な環境へ変化したとみられる。4、4'層は団粒状で、小空隙がみられるなど、これらの堆積物はかなり土壌化作用をうけている様相がうかがわれる。このように18世紀頃、遺跡周辺では湿地的な環境から比較的渇いた草地的な環境への変化があったと推測される。また、試料4および4'層におけるネザサ節型やウシクサ族の突出した出現については、それら植物の増加とともに、周辺部からのそれらのプラント・オパールの大量供給があったのでないかと思われる。これらの層準におけるクマザサ属型の増加もこれと同様であると考える。クマザサ属などについては、遺跡周辺の森林の下草としての存在が考えられ、そうした生育地よりクマザサ属型のプラント・オパールが供給されたものと推測される。

引　用　文　献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—．　考古学と自然科学、　9、　p.15-29.

藤原宏志（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—．　考古学と自然科学、　11、　p.9-20.

第２節　下巾上遺跡の植物遺体群集

新山　雅広・吉川　純子（パレオ・ラボ）

１．は　じ　め　に

下巾上遺跡は岐阜県美濃市に所在する。遺跡では15～16世紀・17～18世紀・19世紀の３つの遺構面が確認されており、また18世紀のトイレと推定される遺構が確認された。そこでこのトイレ遺構（ＳＥ４）の堆積物を試料として、当時の遺跡周辺の植生を解明する目的で花粉化石および大型植物化石の検討を行った。

２．試料と分析方法

ａ．花粉化石

花粉化石群集の検討は、18世紀のトイレと推定される遺構の堆積物より採取された試料について行った。試料は、オリーブ黒色砂質粘土で多くの植物遺体を含む。

花粉化石の抽出は、試料約３ｇを15％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について樹木花粉総数が200以上になるまで同定･計数した。その計数結果をもとに、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、各分類群の出現率を百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

ｂ．大型植物化石

大型植物化石の検討は、花粉化石群集の検討に用いた試料と同様に18世紀のトイレと推定される遺構の堆積物より採取された試料について行った。

試料は、0.25㎜目の篩で水洗篩別し、実体顕微鏡下で同定し、分類群別に個数を数えた。産出した分類群と個数を表に示す。

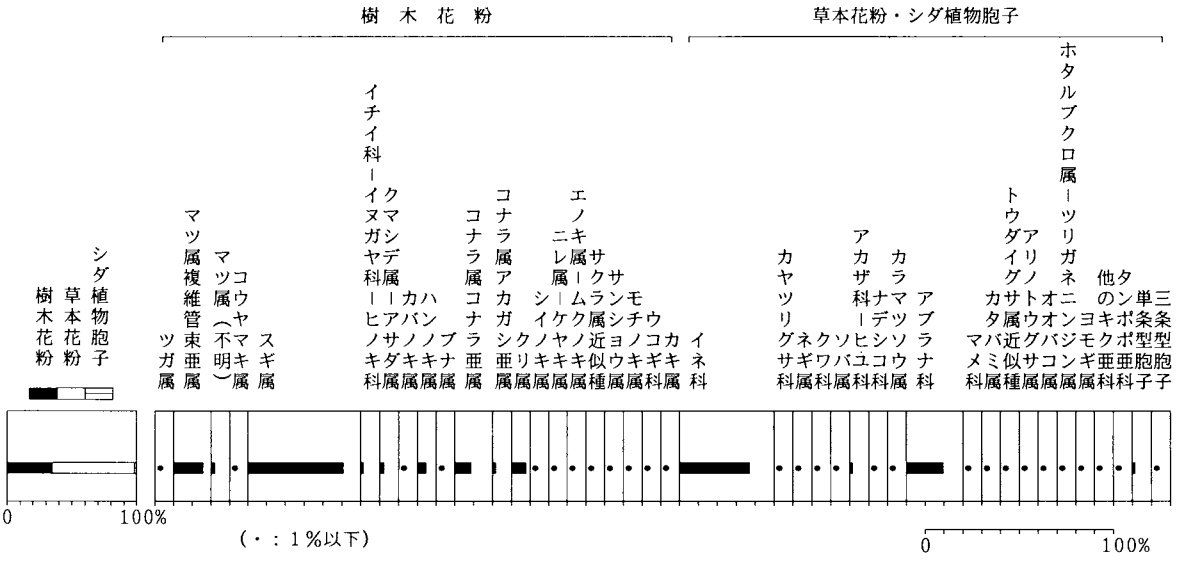
３．結果

ａ．花粉化石群集の記載

同定された分類群数は樹木花粉20、草本花粉18、形態分類で示したシダ植物胞子２である。樹木花粉の占める割合は約35％と低率である。その中でスギ属が約50％と最も高率で出現し、マツ属複維管束亜属が約16％、コナラ属コナラ亜属が約９％、クリ属が約８％、ハンノキ属が約５％で出現する。他に、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クマシデ属―アサダ属、コナラ属アカガシ亜属、カキ属と

第18表　花粉化石一覧表

和名	学名	
樹木		
ツガ属	*Tsuga*	3
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	77
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	10
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	3
スギ属	*Cryptomeria*	248
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	7
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	11
カバノキ属	*Betula*	1
ハンノキ属	*Alnus*	22
ブナ属	*Fagus*	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	42
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	8
クリ属	*Castanea*	38
シイノキ属	*Castanopsis*	4
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	2
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	1
サンショウ属	*Zanthoxylum*	3
モチノキ属	*Ilex*	1
ウコギ科	Araliaceae	3
カキ属	*Diospyros*	3
草本		
イネ科	Gramineae	519
カヤツリグサ科	Cyperaceae	7
ネギ属	*Allium*	1
クワ科	Moraceae	5
ソバ属	*Fagopyrum*	12
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	22
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1
アブラナ科	Cruciferae	274
マメ科	Leguminosae	4
カタバミ属	*Oxalis*	1
トウダイグサ属近似種	cf. *Euphorbia*	2
アリノトウグサ属	*Haloragis*	7
オオバコ属	*Plantago*	1
ホタルブクロ属－ツリガネニンジン属	*Campanula - Adenophora*	1
ヨモギ属	*Artemisia*	7
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6
タンポポ亜科	Liguliflorae	11
シダ植物		
単条型胞子	Monolete spore	19
三条型胞子	Trilete spore	6
樹木花粉	Arboreal pollen	490
草本花粉	Nonarboreal pollen	884
シダ植物胞子	Spores	25
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1399
不明花粉	Unknown pollen	50



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

第79図　花粉化石分布図

いった分類群も低率で出現する。草本花粉では、イネ科が約37%、アブラナ科が約20%と比較的高い出現率を示す。他に、ソバ属、アカザ科—ヒユ科といった分類群も低率で出現する。

b．大型植物化石の記載

同定された分類群数は樹木が3、草本が10である。樹木ではアラカシ、クワ属、カキノキが、草本ではスゲ属A、スゲ属B、イネ、イヌビエ近似種、アワ近似種、コナスビ、カタバミ属、ナデシコ科、シソ属、タンポポ亜科が産出し、イヌビエ近似種、カタバミ属、タンポポ亜科が比較的多産する。

［種実の形態記載］

アラカシ：果実は楕円球形、どんぐり上部に輪状紋があり、これは突出せず薄く肩に広がる。柱頭は急に舌状に開く。

クワ属：種子は丸い三角形で褐色、光沢はない。細く突出したへそがある。

カキノキ：種子は偏平な水滴型、生の種子は褐色だが、時間を経たものは渋のため黒色になり、ざらつく。

スゲ属A：果実は1.2㎜で偏平な2面形、果皮は薄く軟らかく、黒色で全体に大変細かい突起がある。

スゲ属B：果実は2.2㎜、三稜形で果皮は厚く軟らかく、黄褐色。

イネ：穎は黄褐色、全体に瓦状の模様がある。

第19表　種実一覧表

分類群名	部位	
アラカシ	果実	1
クワ属	種子	1
カキノキ	種子	4
スゲ属A	果実	3
スゲ属B	果実	1
イネ	穎片	1
イヌビエ近似種	穎	175
アワ近似種	穎	2
コナスビ	種子	5
カタバミ属	種子	90
ナデシコ科	種子	2
シソ属	果実	4
タンポポ亜科	果実	37
不明A		72
不明B		230

アワ近似種：穎は約2㎜、黄褐色でレンズ形、全体に丸っこく光沢がある。

イヌビエ近似種：穎はやや縦に長いレンズ形、縦に数本筋があり、穎には軟毛がある。

コナスビ：種子は偏三角錐、黒色でやや堅く、全体に細かい突起がある。

カタバミ属：種子は偏平な下半が膨らんだレンズ形、黒色で薄く軟らかく表面には荒い波状のしわがある。

ナデシコ科：種子は偏平な円形、赤褐色、薄く軟らかく全体に荒い突起がある。

シソ属：果実は下にやや突出した球形、全体に荒い網目がある。

タンポポ亜科：果実は長い円柱形、縦に数本の溝とはっきりした稜がある。

不明A：長さは0.6㎜前後、褐色でやや堅く、偏平な楕円形や偏四角形で一方に裂け目がある。表面には中央がくぼんだ網目が一面にある。

不明B：長さは1.2㎜、黒褐色で水滴型、表面はややざらつき縦に一本筋が入る。

4．考　　察

花粉化石と大型植物化石の産出状況から、18世紀の周辺植生の復元を試みる。まず、花粉化石の産

出状況から、周辺には針葉樹のスギ属、マツ属複維管束亜属を主とする森林があったと言えるが、樹木花粉の占める割合が低率であり、周辺植生は貧弱なものであったのだろう。そこにはコナラ属コナラ亜属、クリ属、ハンノキ属、クマシデ属—アサダ属といった落葉広葉樹やコナラ属アカガシ亜属(大型植物化石ではアラカシの果実が産出)、シイノキ属といった常緑広葉樹も生育していた。また、花粉化石でカキ属が、大型植物化石でカキノキが産出しており、遺跡付近でカキノキが栽培されていたのかもしれない。草本では、花粉化石の産出状況からイネ科、アブラナ科、アカザ科—ヒユ科、ソバ属、クワ科など人と係わりの深い植物が生育していたと考えられる。具体的には、アブラナ科ではアブラナ（ナタネ）などが、アカザ科—ヒユ科ではアカザ、ヒユなどが有用であり、これらが栽培、利用されていた可能性がある。イネ科に関しては、大型植物化石でイネの穎片、アワ近似種の穎が産出したのでこれらの栽培が考えられるが、イヌビエ近似種の穎が大量に産出しており、比較的高率で産出したイネ科花粉の大半はイヌビエ近似種起源のものであるのかもしれない。また、便宜的に草本花粉に含めてあるクワ科に関しては、大型植物化石で樹木であるクワ属の種子が産出しており、クワ科花粉は樹木起源である可能性があるが、栽培（養蚕）に関しては考古学からの情報が得られておらずはっきりしたことは言えない。なお、大型植物遺体処理時に多量の昆虫遺体が得られている。これらの昆虫の多くは、大型のアリの頭部や胸部および腹部であり、他にコメツキムシ科前胸背板、エンマコガネ属前胸腹板なども検出される（森勇一氏私信による）。[1)]

5．お　わ　り　に

18世紀の下巾上遺跡周辺の植生は、針葉樹のスギ属、マツ属複維管束亜属を主とした貧弱なものであった。今回の分析では、人と係わりの深い分類群が花粉化石でも大型植物化石でも得られ、当時の人々の利用・栽培していた植物がある程度推測できた。それらは、カキノキ、イネ、アワ、ソバ、アカザ科—ヒユ科（アカザ、ヒユなど)、アブラナ科（アブラナなど）といった植物であったのだろう。

1）アリ属について、岐阜大学教育学部教授山内克典氏に同定を依頼したところ、クロヤマアリ属、トビイシロアリ属、トビイロケアリ属、オオズアリ属が確認された。これらのアリは平地の開けた草地に生息するアリである。

第３節　黒色塊および山茶碗付着顔料の蛍光Ｘ線分析

菱田　　量（パレオ・ラボ）

１．は　じ　め　に

下巾上遺跡からは、馬蹄形に硬化部分が検出されたＳＸ36から硬質の黒色塊が検出された。また、内面に赤色顔料が付着した山茶碗が出土した。ここでは、これら黒色塊と山茶碗付着赤色顔料の成分を調べるために蛍光Ｘ線分析を行った。

２．方法および結果

試料は、ＳＸ36の馬蹄形堀込み内から検出された黒色塊と赤色顔料が付着する山茶碗である。このうち黒色塊は手割りで平面を作り測定面とした。また、山茶碗は、赤色顔料が付着する面を測定面とした。

測定は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計（SEA-2001L：セイコー電子工業㈱製、Be薄型－Ｘ線管球（Rh））で特性Ｘ線を計測した（第80図および第81図）。

試料の測定条件は、黒色塊が測定時間：500sec、照射径：10mm、電流：5μA、電圧：50KV、測定雰囲気：真空である。また、測定時間：500sec、照射径：10mm、電流：13μA、電圧：50KV、測定雰囲気：真空である。

ａ．ＳＸ36出土黒色塊

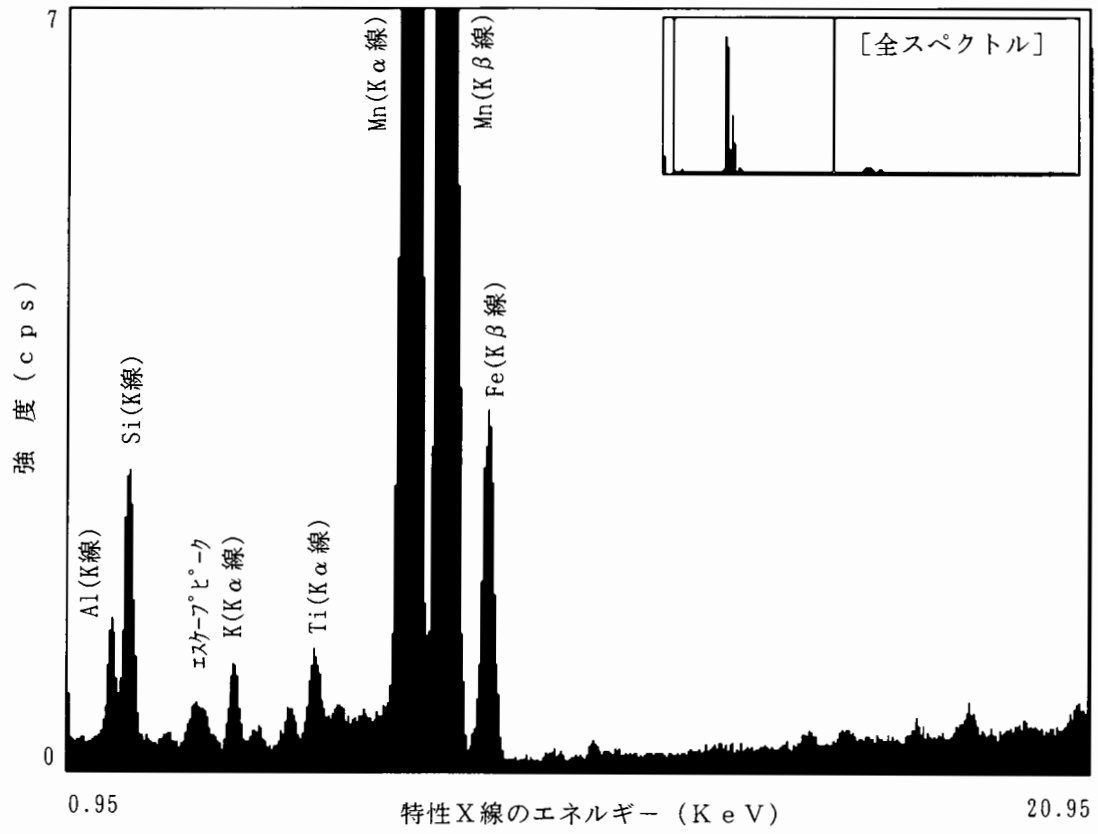
測定の結果、マンガン（Mn（Kα線）およびMn（Kβ線））のピークが明瞭に検出された。これ以外の元素は、鉄（Fe（Kβ線））、アルミニウム（Al（K線））、ケイ素（Si（K線））、カリウム（K（Kα線）およびK（Kβ線））、チタン（Ti（Kα線）およびTi（Kβ線））などが検出された（第80図）。半定量分析では、ケイ素が約31％、マンガンが約27％、鉄が8％程度それぞれ検出された。このうちマンガンはカコウ岩の数百倍の含有量を示すものである。マンガンは、水田などの低地性堆積物中で濃集することがあるが、掘込み内にブロック状に入ることから、人工的要素は高い。なお、風化作用や堆積作用によって常温常圧の酸化条件の下でできる酸化マンガン鉱などがある（嶋崎、1976）。また、軟マンガン鉱は、古くからガラスの不純物（鉄）による茶色の着色を消すために用いられている（近角ほか、1982）。

ｂ．山茶碗付着赤色顔料

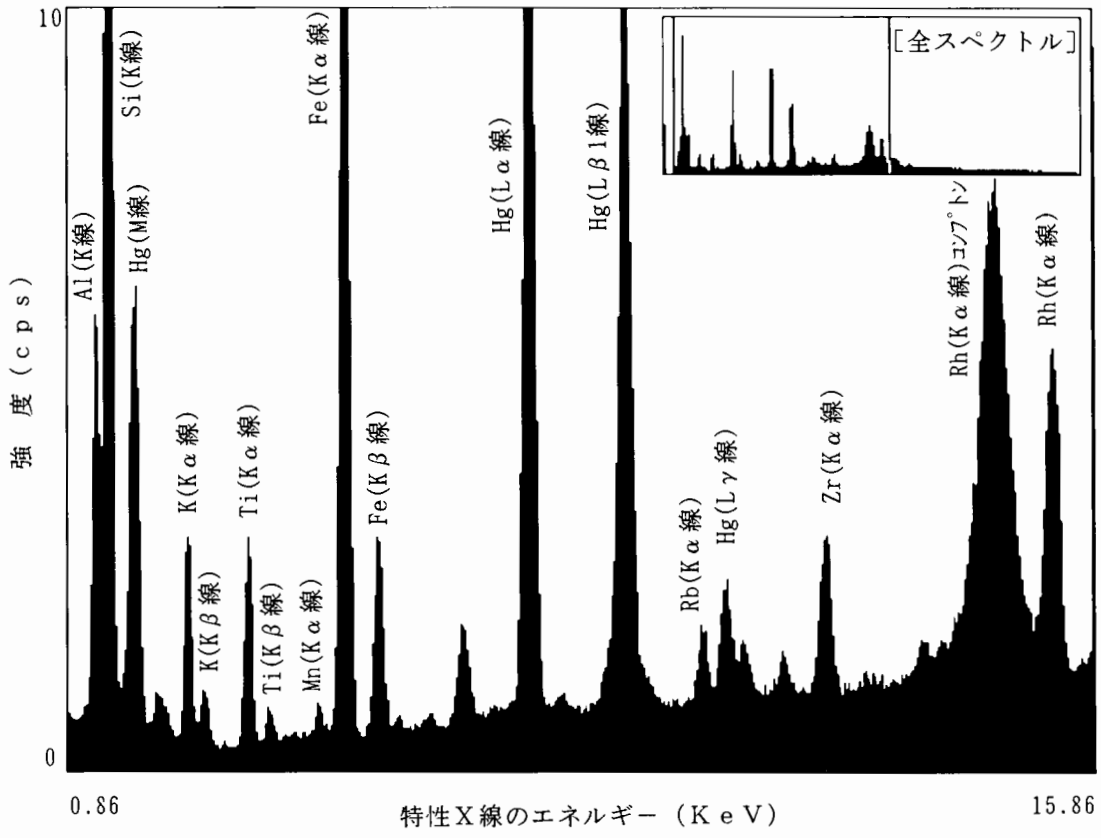
測定の結果、水銀の４本のピーク（Hg（Lα線）、Hg（Lβ1線）、Hg（Lγ線）、Hg（M線））が明瞭に認められた。このことから、この赤色顔料は朱であることが判明した。なお、他にアルミニウム（Al（K線））、ケイ素（Si（K線））、カリウム（K（Kα線））、チタン（Ti（Kα線）およびTi（Kβ線））、マンガン（Mn（Kα線））、鉄（FeKα線およびFeKβ線）などが認められた（第81図）。

引　用　文　献

嶋崎吉彦（1976）：地学辞典、平凡社、p1055.
近角聡信・木越邦彦・田沼静一（1982）：最新元素知識、東京書籍、263p.



第80図　SX36出土黒色塊の蛍光X線スペクトル図



第81図　山茶碗の内面に付着する赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

第4節　便所様遺構の土壌分析について

財団法人岐阜県公衆衛生検査センター

1．は　じ　め　に

美濃市下巾上遺跡の発掘調査により、土坑が検出された。これらの土坑の機能を明らかにするために、埋土を採取し、土壌中の遺物を顕微鏡等により観察するとともに、土壌中の成分分析を行い、便所様遺構としての可能性を検討した。

上開田村平遺跡及び上原遺跡の便所様遺構の土壌分析では、便所であることを証明するために、哺乳類の糞便に特有なコプラスタノールの検出及び脂肪酸組成の確認、消化しきれなかった食物残渣の確認、便所特有の昆虫や寄生虫卵の存在の確認をするとともに、土壌の性状分析を行った結果、寄生虫卵やコプラスタノールを検出し、便所である可能性が示唆された。

そこで、下巾上遺跡の遺構の土壌についても上開田村平遺跡及び上原遺跡の調査と同様の分析を行った。

2．試料採取位置および試料名

遺構名	試料No.	種　　類
ＳＫ135	1	土坑の底部
ＳＫ139	2	土坑の中央
	3	土坑の底部
ＳＥ４	4	土坑の外側
	5	土坑の外側
	6	土坑の底部
	7	土坑底部の下側

3．調　査　項　目

1）顕微鏡による観察

寄生虫卵及び遺物

2）土壌中の脂質の分析

(1)　ステロール

コプラスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロール

(2)　脂肪酸

パルミチン酸、ヘキサデセン酸、ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸、アラキジン酸、エイコサジエン酸、アラキドン酸、エイコサペンタエン酸、リグノセリン酸、ネルボン酸

3）土壌中の一般性状分析

水分、ｐＨ、電気伝導率、強熱減量、元素分析(炭素、水素、窒素)、金属類(ケイ素、カルシウム、

マグネシウム、鉄、アルミニウム、チタン、リン、ナトリウム、カリウム、マンガン)、水溶性陰イオン（硫酸イオン、塩素イオン)、無機態窒素（アンモニア態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素)

4．調　査　方　法

1）顕微鏡による観察

土壌をウォーターフローテーションにより処理し、選別した区分について顕微鏡観察を行った。

ウォーターフローテーションとは、円筒形の水槽内に土壌を入れ、下の水槽側面から水道水を噴出させて泡を発生させ、粘土を分解し、同時に浮遊してくる微細遺物を水槽の上部からあふれさせて採集するものである。

ウォーターフローテーションによりあふれた水を500μｍのふるいに通し、通過した水に飽和食塩水を等量入れ、静置した後、上澄について寄生虫卵および花粉等を400倍の顕微鏡で観察した。次に、500μｍのふるい上の残渣は炭化種子、材骨及び昆虫等の有無について実体顕微鏡で観察した。また、ウォーターフローテーションにより円筒内に残った土壌についても2000μｍおよび500μｍのふるいで篩分けし、顕微鏡観察を行った。

2）脂質の分析

(1) 脂肪の抽出

土壌約200ｇに３倍量のクロロホルム—メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理する。上澄液をろ過後、残渣に再度クロロホルム—メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をし、この操作をさらに２回繰り返して脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層をエバポレーターで減圧濃縮して残留脂肪を分離、秤量する。秤量後、クロロホルムに再溶解し、半量をステロール分析用に、残り半量を脂肪酸分析用とする。

(2) ステロール

脂肪抽出液に、内部標準溶液（５α-コレスタン）を正確に加え、クロロホルムを揮散させる。これに１Ｎ水酸化カリウムエタノール溶液５mℓを加え、冷却管を付して静かに約１時間ケン化する。ケン化終了後、室温に冷却し、容量50mℓの分液漏斗に移し、10mℓの水で試験管を洗いながら、分液漏斗に入れ、さらにエチルエーテル10mℓを加えて振り混ぜる。静置後、下層を先の共栓付き試験管に取り、これにエチルエーテル10mℓを加え振り混ぜる。

エーテル層を分液漏斗に移し、さらにこれを繰り返す。抽出液を水で洗浄し、無水硫酸ナトリウムで脱水後、エーテル層を別の共栓付き試験管に少しずつ移す。エーテルを揮散させた後、エタノール１mℓに溶解し、ガスクロマトグラフィー（ＧＣ）用試料とし、ＧＣに導入して測定した。

測定機器及び条件は次のとおりである。ＧＣ：島津製ＧＣ—14Ａ、検出器：ＦＩＤ、
カラム：ＳＰＢ—１、30ｍ×0.53㎜Ｉ.Ｄ.、膜厚0.50μｍ、カラム温度：200℃から300℃まで毎分10℃の速度で昇温、流速：５mℓ／min。

(3) 脂肪酸

脂肪抽出液のクロロホルムを揮散し、内部標準物質としてマルガリン酸を正確に加える。ついで、0.5Ｎ水酸化ナトリウムメタノール溶液６mℓを加え、冷却器を付して油滴が消失し、均一な溶液となる

まで約10分間水浴上で加熱する。加熱を続けながら冷却器の上部から三フッ化ホウ素メタノール試薬7mℓを加え2分間沸騰を続ける。さらにヘキサン5mℓを冷却器上部から加え、1分間沸騰を行った後、加熱を止める。

冷却器を外し、ヘキサン溶液がフラスコの首に達するまで塩化ナトリウム飽和水溶液を加える。約1mℓのヘキサン溶液を試験管に移し、少量の無水硫酸ナトリウムを加えて脱水し、これをＧＣ用試料とし、ＧＣに導入して測定した。

測定機器及び条件は次のとおりである。ＧＣ：島津製ＧＣ—14Ａ、検出器：ＦＩＤ、カラム：ＳＵＰＥＬＣＯＷＡＸ10、30ｍ×0.53㎜Ｉ.Ｄ.、膜厚0.50μｍ、カラム温度：210℃から240℃まで毎分5℃の速度で昇温、流速：5mℓ／min。

3）一般性状分析

(1) 水分

土壌をあらかじめ恒量にした容器にとり、乾燥器で105℃、2～3時間乾燥、放冷後、重量を秤量し、残留物の重量から固形物量を求めたのち、100から固形物量を減じ求めた。

(2) ｐＨ

土壌に水を2.5倍量入れ攪拌後、懸濁液についてガラス電極ｐＨ計を用いて測定した。

(3) 電気伝導率

土壌に水を5倍量入れ、1時間攪拌後、懸濁液について電気伝導度計を用いて測定した。

(4) 強熱減量

土壌を風乾後、あらかじめ恒量にした容器にとり、マッフル炉で600℃、1～2時間灰化、放冷後、重量を秤量し、残留物の重量から強熱残分を求める。強熱残分を100から減じ求めたものが強熱減量である。

(5) 元素分析

土壌を燃焼ボードにとり、元素分析装置に導入、試料を800℃で燃焼させ、その時発生する燃焼ガスから炭素、水素、窒素の含量を求めた。

測定機器は、柳本製ＣＨＮコーダー、ＭＴ－5型を用いた。

(6) 水溶性陰イオン

土壌に水を5倍量入れ攪拌後、ろ過し試料溶液とする。試料溶液をイオンクロマトに導入、測定した。

測定機器及び条件は次のとおりである。イオンクロマト：柳本製Ｌ—5000(ノンサプレッサー方式)、検出器：電気伝導度、カラム：Ｓｈｏｄｅｘ ＩＣ—524、10cm×4.6㎜Ｉ.Ｄ.、溶離液：2.5ｍＭフタル酸、流速：1.5mℓ／min。

(7) 無機態窒素

① アンモニア態窒素

土壌約10ｇに2Ｎ塩化カリウム液100mℓを正確に加えて1時間振り混ぜた後、静置し、上澄液を傾斜法によってろ過し、試料液とする。試料液一定量を正確にとり、セミミクロ蒸留法によって蒸留し、4％ホウ酸液でアンモニアを補集する。

アンモニア補集液を１／50Ｎ硫酸標準液で滴定した。

② 亜硝酸態窒素

土壌約20ｇに硝酸カルシウム0.2ｇと蒸留水100mℓを加え10分間振り混ぜた後、静置、ろ過し試料液とする。

試料液一定量を正確にとり、スルファニルアミド液１mℓを加えて混合、５分後Ｎ―（１―ナフチル）―エチレンジアミン液１mℓを加えてよく混合、20分間放置した後、定容、波長520nmで比色定量した。

③ 硝酸態窒素

土壌約10ｇを蒸留フラスコにとり、４％ホウ酸液５mℓを吸収液として蒸留する。留出したアンモニアを１／200Ｎ硫酸標準液で滴定する。次に、新しく４％ホウ酸液５mℓを吸収液とし、蒸留フラスコにスルファミン酸液１mℓを加え、よく振り混ぜて亜硝酸態窒素を分解した後、デバルタ合金粉末0.2ｇを添加し、前と同様にして蒸留を行い、留出液を滴定し、前の滴定値を差し引いて硝酸態窒素量とした。

(8) 金属類

風乾土壌をテフロン製容器にとり、塩酸及びフッ化水素酸を加え、圧力分解装置を用い、室温で１日加圧分解した後、４％ホウ酸溶液で定容、ろ過し、試料溶液とした。

試料溶液を発光分光分析法により測定を行った。

測定機器及び条件は次のとおりである。高周波プラズマ発光分光分析装置：NIPPONJARRELL-ASH製ＩＣＰ―575II、高周波出力：1.4kW、アルゴンガス：18ℓ／min、補助ガス(プラズマガス)：1.0ℓ／min、キャリアーガス：1.5ℓ／min。

５．調　査　結　果

１）土壌の顕微鏡観察

顕微鏡観察は、No.１～No.７の試料につき行った。その結果は次のとおりである。

いずれの試料からも寄生虫卵等便所様遺構としての特徴的なものは認められなかった。

２）脂　　質

脂質は、構造的な違いから誘導脂質、単純脂質及び複合脂質に大別される。これらの脂肪群のうち、ステロール、脂肪酸は動植物によって少しずつ組成が異なる。ステロール及び脂肪酸の主な存在部位を第20表および第21表に示した。

ステロールは、炭素数27（コレステロール、コプラスタノール）のものは動物に、炭素数28（エルゴステロール、カンペステロール)のものは微生物に、炭素数29(スチグマステロール、シトステロール）のものは植物に多く含有する。

脂肪酸は、炭素の鎖がまっすぐにのびた飽和型（パルミチン酸、ステアリン酸など）と鎖の途中に二重結合のある不飽和型（オレイン酸、リノール酸、リノレン酸など）がある。飽和型脂肪酸の多い脂肪は獣肉・食肉脂に属する。また、不飽和型脂肪酸の多い脂肪は、植物油・魚油に属する。

第20表　ステロール存在部位

ステロール		主な存在
コプラスタノール	C27	動物の糞
コレステロール	C27	各種動物
エルゴステロール	C28	酵母、バッカク
カンペステロール	C28	アブラナ、ダイズ
スチグマステロール	C29	ダイズ、カラバルマメ
シトステロール	C29	高等植物

注）数字は炭素数である。

第21表　脂肪酸存在部位

脂　肪　酸		主　な　存　在
パルミチン酸	C16：0	一般動植物脂質、木ロウ
ヘキサデセン酸	C16：1	魚油、乳脂、種子油、細菌脂質
ステアリン酸	C18：0	一般動植物脂質、牛脂
オレイン酸	C18：1	一般動植物脂質
リノール酸	C18：2	一般動植物脂質
リノレン酸	C18：3	一般動植物脂質
アラキジン酸	C20：0	落花生油、なたね油
エイコサジエン酸	C20：2	魚油
アラキドン酸	C20：4	肝臓、脳、副腎、卵脂質
エイコサペンタエン酸	C24：5	油
リグノセリン酸	C24：0	脳複合脂質、みつロウ
ネルボン酸	C24：1	脳糖脂質、さめ肝油

注）数字は炭素数と二重結合の数である。

ステロール及び脂肪酸の分析結果を表3に、ステロール組成及び脂肪酸組成を表4と図2及び3に示した。

ステロールの分析結果は次のとおりである。

コプラスタノールは、No.1～No.6より検出され、28～350μg／kgで最大値はNo.5であった。

コレステロール、カンペステロール、スチグマステロール及びシトステロールは、すべての試料より検出された。

コレステロールは、530～3,000μg／kgの範囲で、平均値は1,500μg／kg、最大値はNo.2であった。

カンペステロールは、55～650μg／kgの範囲で、平均値は290μg／kg、最大値はNo.5であった。

スチグマステロールは、140～780μg／kgの範囲で、平均値は366μg／kg、最大値はNo.7であった。

シトステロールは、200～2,300μg／kgの範囲で、平均値1,300μg／kg、最大値はNo.2であった。

ステロール組成は、No.2およびNo.6が類似していた。組成は、コレステロールが約50%、シトステロールが約40%、その他のステロールが10%ずつ含まれていた。また、No.4およびNo.5ではコプラスタノールが多く検出され約10%を占めていた。

脂肪酸は、パルミチン酸、ヘキサデセン酸、ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸およびアラキジン酸の6種類が検出された。これらは主に中級脂肪酸で、そのうちパルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸が多く検出された。

主な脂肪酸の分析結果は次のとおりである。

パルミチン酸950～4,200μg／kg、平均値1,900μg／kg、ステアリン酸　530～2,400μg／kg、平均

値1,200μｇ／kg、オレイン酸280～2,200μｇ／kg、平均値1,040μｇ／kgであった。

脂肪酸組成は、No.１、No.２、No.３及びNo.６のパターンが類似していた。組成は、パルミチン酸が約40％と一番多く、次にステアリン酸、オレイン酸がそれぞれ約25％であった。

パルチミン酸が一番多いのは、オレイン酸、リノール酸などの不飽和脂肪酸が長い年月の間に一部分解しパルミチン酸が生成したためと思われる。また、オレイン酸は主として動物脂肪に多く含まれるが、根、茎、種子などの植物脂肪にも一部含まれる。

中野益雄の「残留脂肪分析の現状」には、第85図に示すように植物、動物及び魚の脂肪酸組成があり、植物にはエルカ酸、動物にはリグノセリン酸、魚にはエイコサジエン酸が特有に検出されているが、これらの組成と類似しているものは今回の試料の中にはなかった。

３）一般性状分析

分析結果を第24表および第25表に示す。結果は次のとおりである。

ＰＨは、5.6～6.8の範囲で、平均値6.2でいずれも微酸性であった。

強熱減量や炭素は有機物量を表すが、強熱減量は6.2～9.1％、炭素は1.1～3.9％といずれの試料もほぼ同様な値であった。

金属は、主成分はけい素、アルミニウム及び鉄で、けい素は31～38％、アルミニウムは3.6～5.6％、鉄は2.1～4.5％の範囲でいずれの試料もほぼ同様な数値であった。

便所様遺構の特徴的な項目として硝酸態窒素、亜硝酸態窒素、アンモニア態窒素、硫酸イオン及び塩素イオンについて分析を行った。

無機態窒素は、土中ではアンモニア態窒素から亜硝酸態窒素を経て硝酸態窒素に分解される。アンモニア態窒素は、5.1～12mg／kg、亜硝酸態窒素は0.01～0.09mg／kg、硝酸態窒素は0.53～1.6mg／kgといずれの試料も同様な値であった。

６．ま　と　め

便所様遺構の土壌分析を行った結果をまとめると次のとおりである。

顕微鏡観察の結果、寄生虫卵等便所遺構に出現する特徴的なものは検出されなかった。

脂肪酸分析では、組成パターンは土中の植物腐植によくみられるもので特徴のあるものはなかったが、ステロール分析では、コプラスタノールが検出されており、糞便の残留の可能性が十分に示唆された。

一般性状分析では、主成分は一般土壌とほぼ同様な組成であり、アンモニア態窒素や塩素イオンなどについても特に特徴を示す結果は得られなかった。

便所様遺構の土壌を顕微鏡観察、残存脂肪の組成分析、一般性状分析により解析を行った結果、寄生虫卵は発見できなかったが、コプラスタノールの検出により便所であったと推定される。

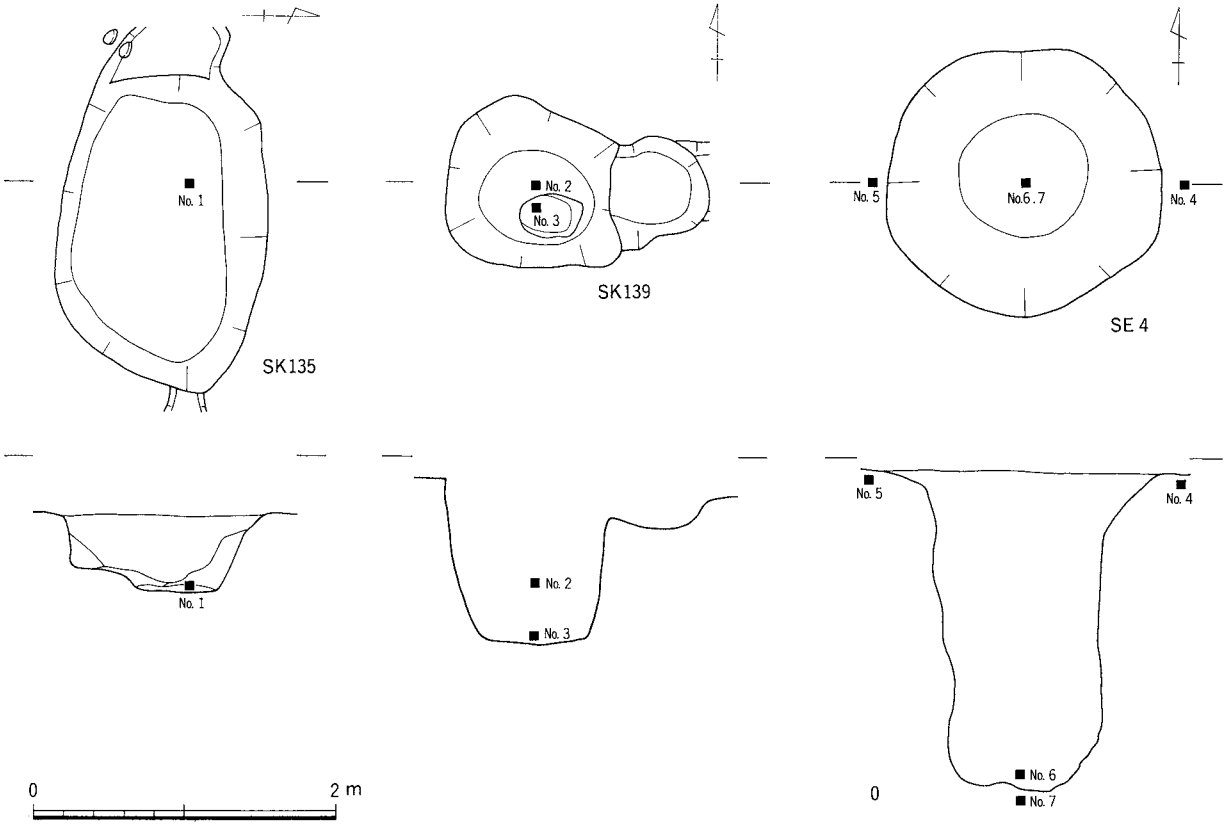
参　考　文　献

１）中野益男：「残留脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、pp.124　(1984)

２）中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「中野Ａ遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」、『函館市中野Ａ遺跡』、pp.275～280、(財)北海道埋蔵文化財センター　(1991)

３）中野益男、伊賀　啓、根岸　孝、安本教傳、畑　宏明、矢吹俊男、佐原　真、田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、

『脂質生化学研究』、第26巻、pp.40　(1984)
4）粉川昭平、金原正明、金原正子：「藤原京跡の便所遺構」、pp.8～15、奈良国立文化財研究所　(1992)
5）「上開田村平遺跡の便所様遺構の土壌分析について」、(財)岐阜県公衆衛生検査センター(1994)
6）「上原遺跡の便所様遺構の土壌分析について」、(財)岐阜県公衆衛生検査センター(1994)



第82図　試料採取位置図

第22表　ステロールおよび脂肪酸分析結果

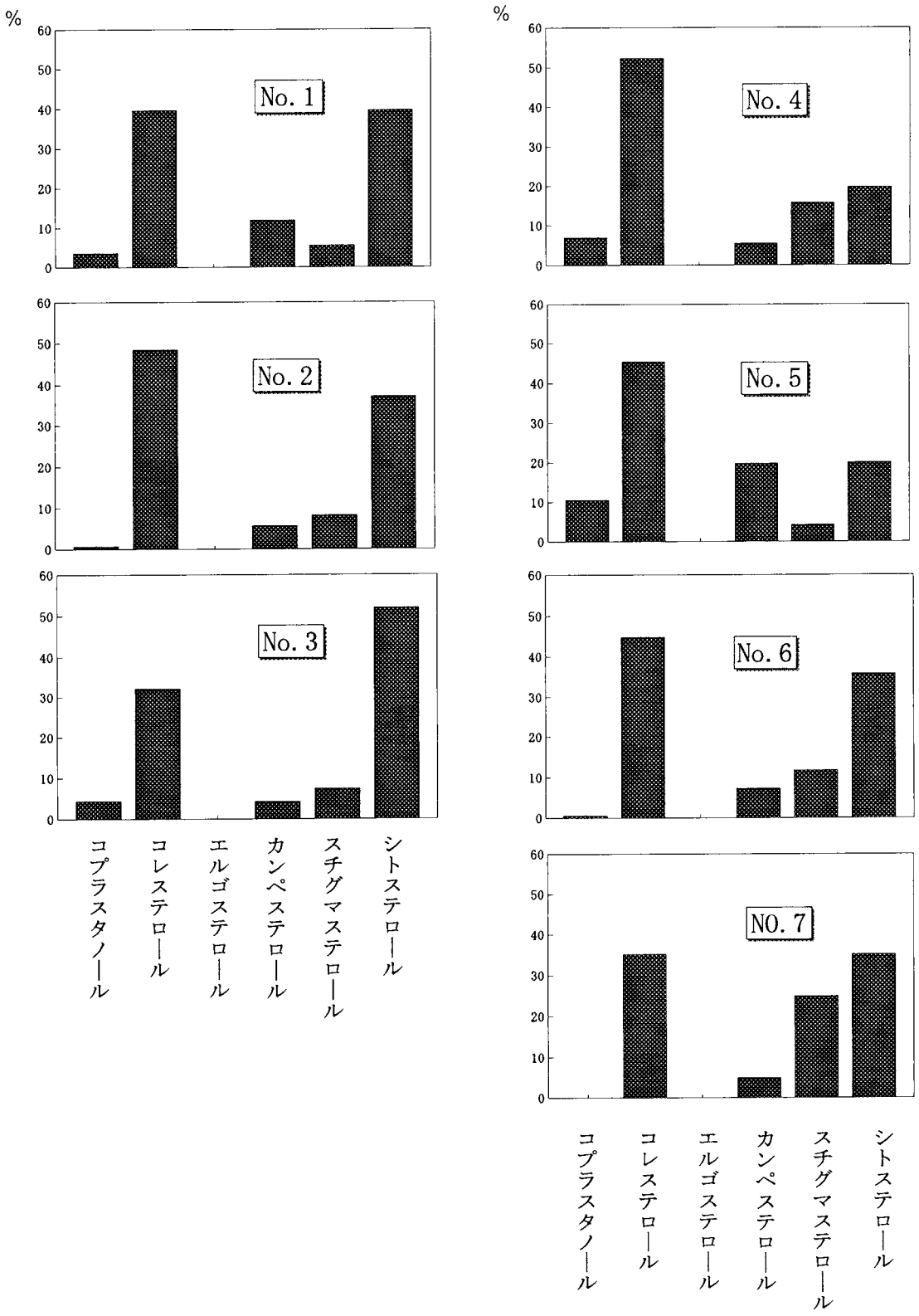
遺　構　名	SK135	SK139		SE4			
試　料　No.	1	2	3	4	5	6	7
脂　肪　量（%）	0.017	0.005	0.012	0.006	0.005	0.014	0.008
ステロール（μg/kg）							
コプラスタノール	99	44	180	70	350	28	ND
コレステロール	1100	3000	1300	530	1500	2000	1100
エルゴステロール	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
カンペステロール	330	350	170	55	650	320	150
スチグマステロール	150	510	300	160	140	520	780
シトステロール	1100	2300	2100	200	660	1600	1100
脂肪酸（μg / kg）							
パルミチン酸	2200	1500	2200	1600	950	4200	1100
ヘキサデセン酸	360	210	230	150	110	340	180
ステアリン酸	1200	830	1300	940	530	2400	640
オレイン酸	1100	890	1300	1200	280	2200	300
リノール酸	140	120	130	130	62	100	49
リノレン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
アラキジン酸	280	170	490	84	91	420	550
エイコサジエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
アラキドン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
エイコサペンタエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
エグノセリン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ネルボン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND

注）NDとは不検出の意味である。

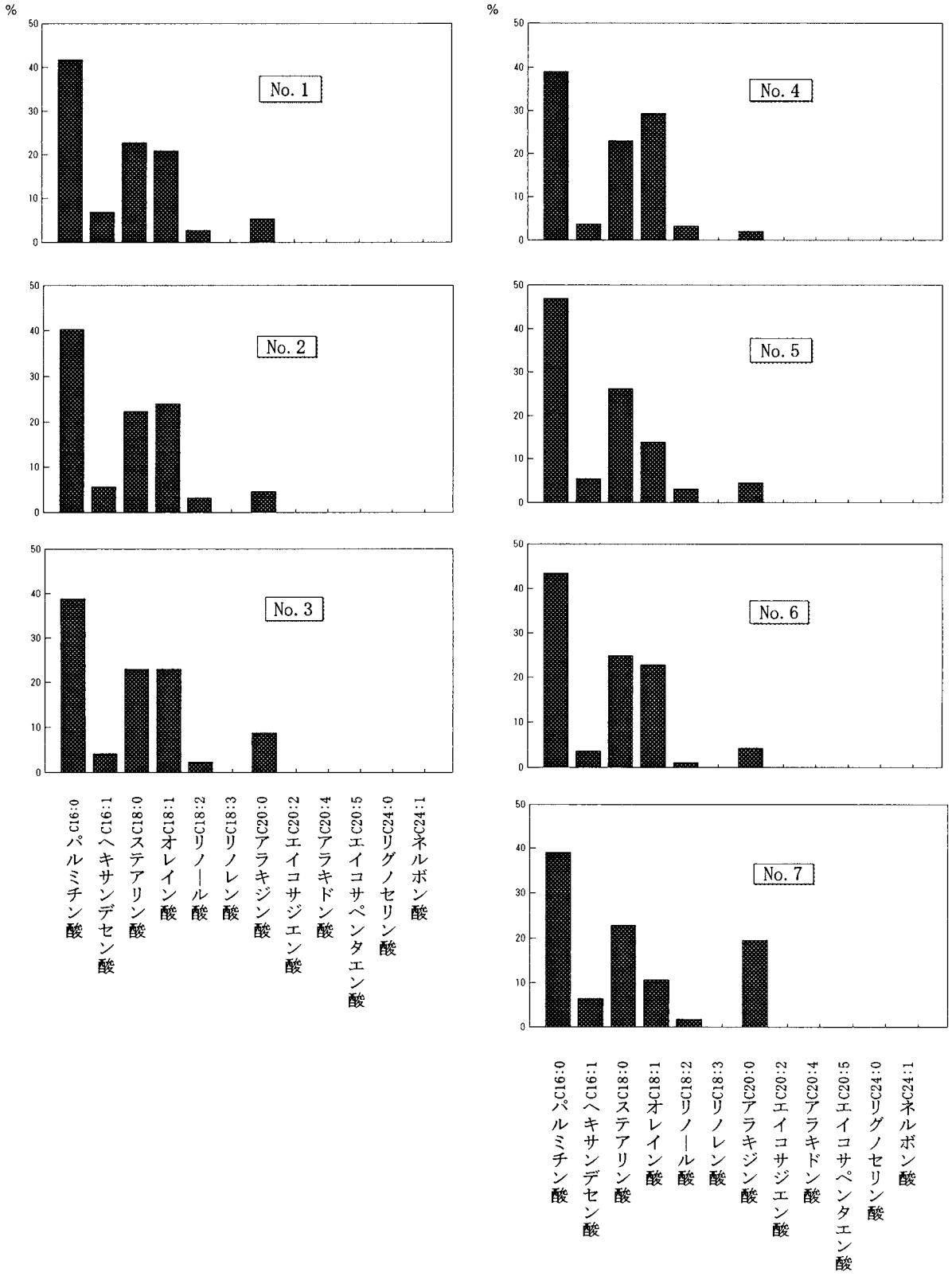
第23表　ステロール組成および脂肪酸組成

遺　構　名	SK135	SK139		SE4			
試　料　No.	1	2	3	4	5	6	7
脂　肪　量（%）	0.017	0.005	0.012	0.006	0.005	0.014	0.008
ステロール（μg/kg）							
コプラスタノール	3.6	0.7	4.4	6.9	10.6	0.6	0.0
コレステロール	39.6	48.4	32.1	52.2	45.5	44.8	35.1
エルゴステロール	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
カンペステロール	11.9	5.6	4.2	5.4	19.7	7.2	4.8
スチグマステロール	5.4	8.2	7.4	15.8	4.2	11.6	24.9
シトステロール	39.6	37.1	51.9	19.7	20.0	35.8	35.1
脂肪酸（μg / kg）							
パルミチン酸	41.7	40.3	38.9	39.0	47.0	43.5	39.0
ヘキサデセン酸	6.8	5.6	4.1	3.7	5.4	3.5	6.4
ステアリン酸	22.7	22.3	23.0	22.9	26.2	24.8	22.7
オレイン酸	20.8	23.9	23.0	29.2	13.8	22.8	10.6
リノール酸	2.7	3.2	2.3	3.2	3.1	1.0	1.7
リノレン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
アラキジン酸	5.3	4.6	8.7	2.0	4.5	4.3	19.5
エイコサジエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
アラキドン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
エイコサペンタエン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
エグノセリン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ネルボン酸	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND

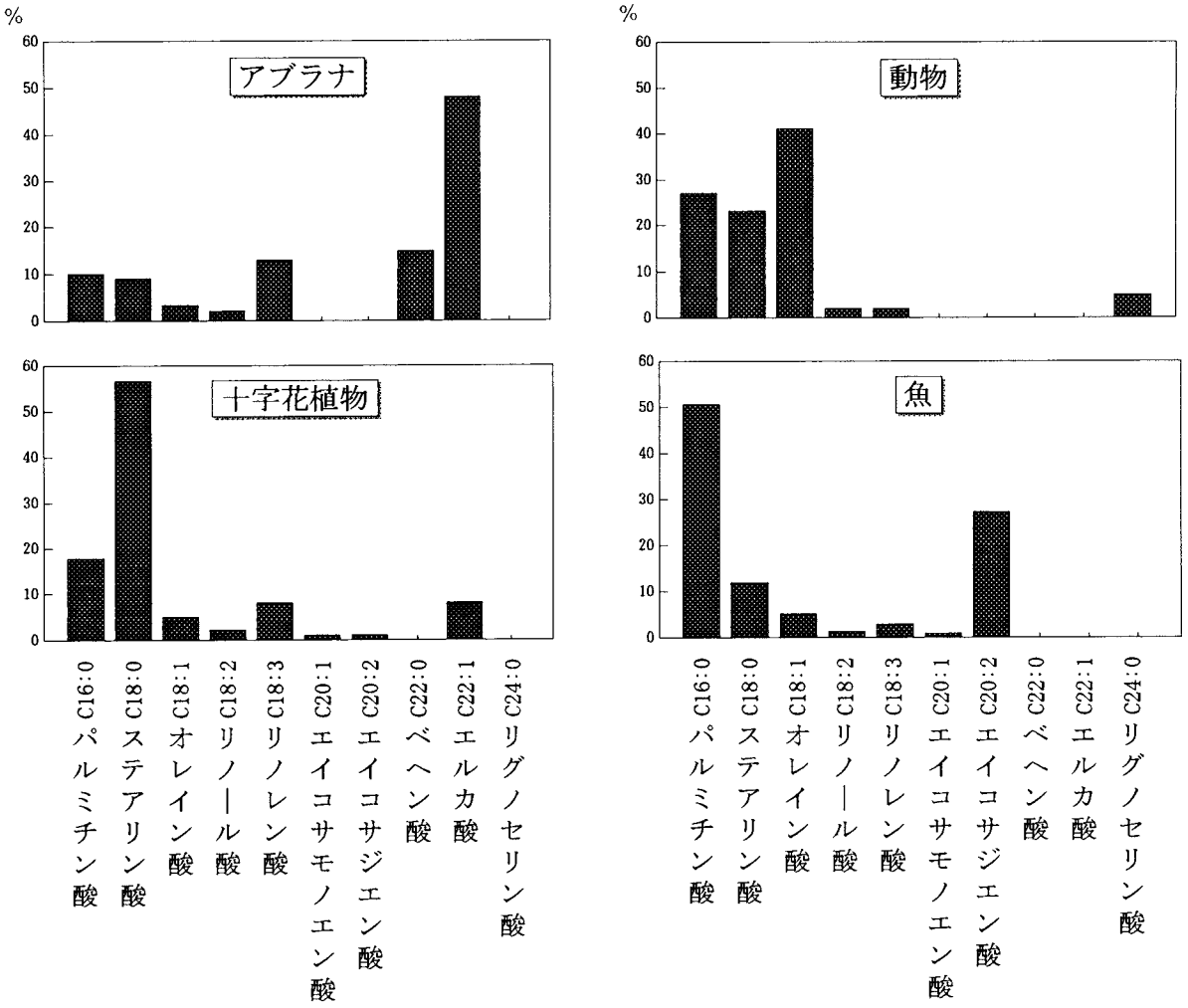
注）NDとは不検出の意味である。



第83図　ステロール組成


%
No. 1
No. 2
No. 3
No. 4
No. 5
No. 6
No. 7
C16:0 パルミチン酸
C16:1 ヘキサンデセン酸
C18:0 ステアリン酸
C18:1 オレイン酸
C18:2 リノール酸
C18:3 リノレン酸
C20:0 アラキジン酸
C20:2 エイコサジエン酸
C20:4 アラキドン酸
C20:5 エイコサペンタエン酸
C24:0 リグノセリン酸
C24:1 ネルボン酸

第84図　脂肪酸組成



第85図　動植物等の脂肪酸組成

第24表　一般性状分析結果

遺構名		SK135	SK139		SE4			
試料	No.	1	2	3	4	5	6	7
水分	%	32.7	25.7	26.8	26.0	20.1	34.0	33.7
pH		6.6	6.8	6.5	5.6	5.6	5.9	6.3
電気伝導率	ms/m	1.4	1.3	1.5	1.8	1.1	1.8	2.2
強熱減量	%	9.1	6.7	7.5	6.9	6.2	7.3	7.1
炭素	%	3.9	1.9	2.6	1.4	1.7	1.9	1.1
水素	%	1.1	0.82	0.79	0.89	0.78	1.0	0.93
全窒素	%	0.28	0.14	0.18	0.10	0.13	0.18	0.10
けい素	%	35	34	35	33	38	32	31
アルミニウム	%	5.2	3.6	4.0	4.7	4.5	5.6	5.4
鉄	%	2.2	2.1	2.3	3.9	3.1	4.5	2.7
マグネシウム	%	0.44	0.34	0.36	0.47	0.47	0.48	0.39
カリウム	%	1.1	0.82	0.69	1.0	0.98	0.96	0.66
リン	%	0.14	0.090	0.12	0.072	0.050	0.16	0.064
ナトリウム	%	0.019	0.017	0.021	0.028	0.021	0.033	0.034
カルシウム	%	0.26	0.20	0.25	0.082	0.062	0.066	0.084
チタン	%	0.038	0.033	0.057	0.040	0.032	0.11	0.15
マンガン	%	0.037	0.075	0.016	0.013	0.013	0.039	0.019
硝酸態窒素	mg/kg	1.4	1.6	1.5	0.74	0.87	0.53	0.67
亜硝酸態窒素	mg/kg	<0.01	<0.01	0.02	0.02	0.05	<0.01	0.09
アンモニア態窒素	mg/kg	5.6	6.5	9.6	5.1	8.8	12	12
硫酸イオン	mg/kg	10	11	10	31	11	19	27
塩素イオン	mg/kg	6.2	10	7.3	6.8	7.8	5.6	7.5

第25表　主成分組成

遺構名		SK135	SK139		SE4			
試料	No.	1	2	3	4	5	6	7
強熱減量	%	9.1	6.7	7.5	6.9	6.2	7.3	7.1
SiO_2	%	74.9	72.8	74.9	70.6	81.3	68.5	66.3
Al_2O_3	%	9.8	6.8	7.6	8.9	8.5	10.6	10.2
Fe_2O_3	%	3.1	3.0	3.3	5.6	4.4	6.4	3.9
MgO	%	0.7	0.6	0.6	0.8	0.8	0.8	0.6
K_2O	%	1.3	1.0	0.8	1.2	1.2	1.2	0.8
P_2O_5	%	0.3	0.2	0.3	0.2	0.1	0.4	0.1
Na_2O	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
CaO	%	0.4	0.3	0.4	0.1	0.1	0.1	0.1
TiO_2	%	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2

第VI章　ま　と　め

今回の下巾上遺跡の調査では中世から近世にかけての集落跡が検出された。近世の遺構面では土坑や井戸などが検出されたが、建物は１棟しか検出されなかった。中世の遺構面では土坑、柵列、掘立柱建物などとともに集石墓、便所（肥溜め？）と想定される遺構が検出されたことは集落の空間配置を考える上で貴重な資料といえよう。

本章では遺構と遺物の分析を行い、本遺跡の性格を考えてみたい。

第１節　遺構の変遷について

第IV章の冒頭でも記したが、本遺跡は主に遺構の切り合い関係や出土遺物から５つの時期に分けることが可能である。ここでは、II期をさらにIIａ期とIIｂ期に分け、都合６小期の変遷を述べたい。

Ｉ期

当期に該当する明確な遺構は検出されていない。１区においてピット群に切られる状態で自然流路がみられるのみである。

IIａ期

当期は集落が形成された時期である。ＳＢ６、ＳＢ８はいずれも桁行３～４間、梁行１間の東西掘立柱建物であり、北東隅に２間×１間、あるいは１間×１間の付随施設を有する。付随施設の下には方形のプランを呈する土坑がみられ、ＳＫ143は判然としないが、ＳＫ122は付随施設内に納まる法量であり、埋土の状態から考えてもＳＢ６と同時期に存在したと思われる。この２棟の掘立柱建物はＳＡ１、ＳＡ５、ＳＡ８により方形に囲まれており、ＳＡ５とＳＡ８の距離は約22ｍを測る。ＳＡ１はさらに１区まで延びているので、他にも掘立柱建物が存在していた可能性は十分考えられる。ＳＡ８の南側にはＳＫ134～136が位置している。これらの遺構は先にも述べた通り便所としての可能性が高い遺構である。ここで私見を述べさせていただくと、便所と決定するためには寄生虫卵の有無が最も有力な手がかりとなるが、下巾上遺跡の便所と推定された３つの遺構（ＳＫ135、ＳＫ139、ＳＥ４）はいずれも寄生虫卵が検出されなかった。かわりにコプラスタノールが検出されたため、便所と推定されている(第Ｖ章参照)。分析をしていただいたサンプル量が少なかったため、寄生虫卵が検出されなかったとも考えられるが、コプラスタノールは動物の糞に存在するものなので、現在の肥溜めのような遺構にも当然存在するのだろう。確かにＳＫ135やＳＫ139は隣の遺構と細くて浅い溝により連結しており他の土坑と様相が異なるが、便所と決定するには判断材料が少ないと思われるので、ここでは便所様遺構という言葉を使用したい。ＳＫ134の南北両側から始まるＳＤ19とＳＤ20は丸みを帯びたプランを呈し、性格不明であるが、排水の用途でもあったのであろうか。ＳＫ133はＳＫ134の南側に位置し、水溜遺構と推定される。これらＳＤ19、ＳＤ20、ＳＫ133はいずれも便所様遺構と関連があると思われ、方形区画内に位置するものの２棟の掘立柱建物と距離をおいて存在している。また、方形区画外に位置するが、ＳＥ５が区画の北東隅、ＳＸ27が区画の南東隅に位置する。ＳＸ27の性格については馬屋、タマヤ、鍛冶生産に関わるものなどの諸説が挙げられる。[1)]本遺構に連結する状態でＳＫ139が存在し、自然科学分析から便所様遺構と推定されたため、ＳＸ27は馬屋、ＳＫ139は馬の排泄物

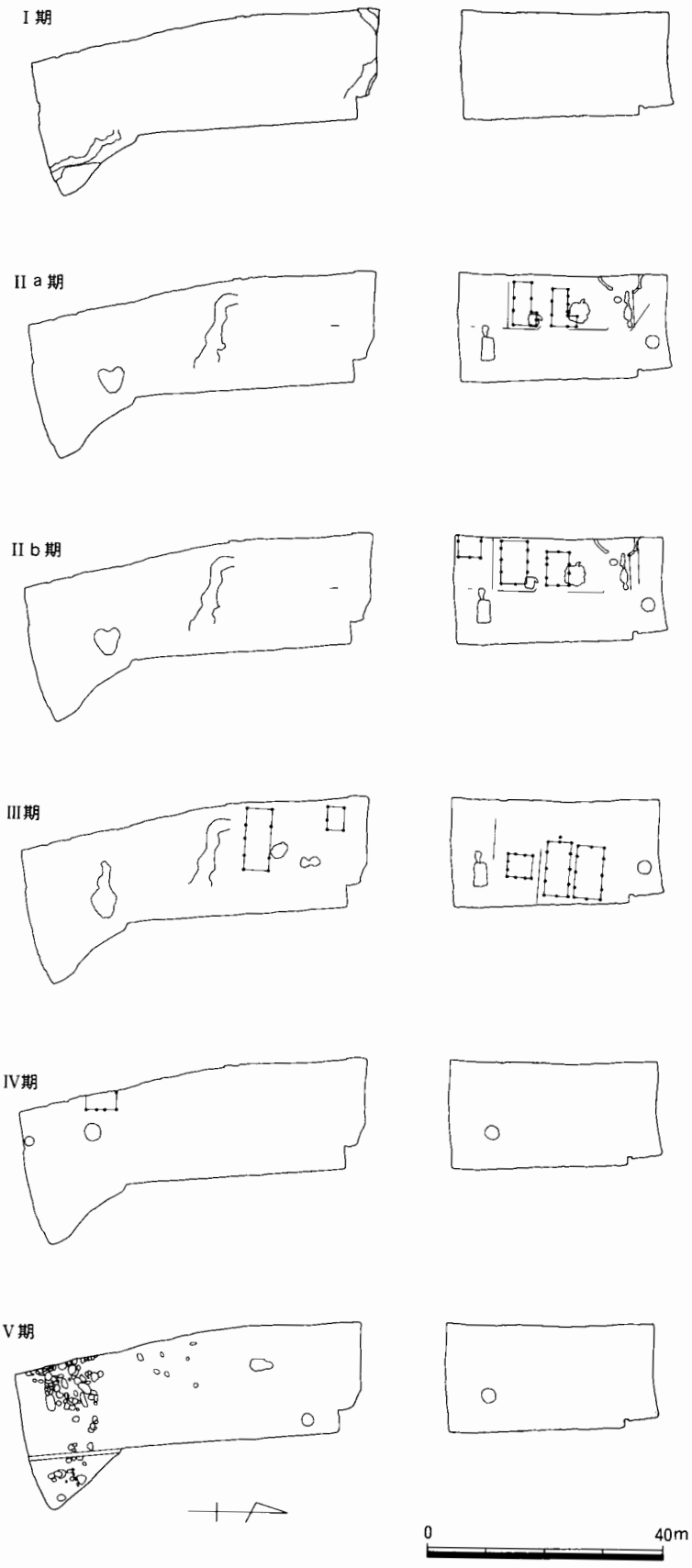
を溜めておく遺構（肥溜め）と想定されるが、ＳＸ27には覆い屋が検出されなかった[2]ことなど、あくまで想定の域であることを留意したい。その他、建物とやや距離をおいてＳＸ30が存在する。ＳＸ30は集石墓と推定され、居住空間より0.3ｍ～0.6ｍ標高が高い場所に位置している。

IIｂ期

当期は掘立柱建物の作り替えが行われた時期である。桁行３～４間×梁行１間の掘立柱建物から桁行３間×梁行２間のやや大きな建物に替えられたと推定される。また、２区南端に新たに梁行２間の掘立柱建物が作られたと思われる。いずれの建物も南北に長いＳＡ１を意識しており、IIａ期と同じような形態の集落であったと推定される。また、建物の作り替えに伴いＳＡ５が消滅し、ＳＡ７が出現した。ＳＡ７の最も西の２つのピットは他のピットより大きくて深く、しかも柱根の最下部がほとんど腐った状態で検出されたことから簡易な門としての機能を有していた可能性もある。また、ＳＡ２が消滅し、ＳＡ３が出現している。仮にＳＡ７からＳＡ３までを一つの区画とするとその距離は25.4ｍを測る。その他の遺構はIIａ期から引き続き使用していたと思われるが、ＳＫ122とＳＫ143は消滅したか否かは判断できない。

III期

当期はII期とは大きく様相が異



第86図　遺構変遷図

なる時期である。II期にみられた掘立柱建物と柵列は姿を消し、桁行４間×梁行２間（ＳＢ２のみ１間の可能性がある）の掘立柱建物３棟、桁行２間×梁行１間の掘立柱建物１棟、桁行３間×梁行３間の掘立柱建物１棟、合計５棟の建物が検出された。また、南北方向に走る柵列はみられず、東西方向に延びるものが２列確認された。しかし、いずれも場を囲むという機能は見出せられない。II期にみられたＳＫ122、ＳＫ143などは建物との切り合い関係などから判断して、III期には消滅していたと推定される。また、ＳＫ135を中心とする便所様遺構とその関連遺構、ＳＸ27やＳＫ139、ＳＥ５は存続時期の明確な判断ができないため、III期まで存在していたか否かは不明である。しかし、便所様遺構とその関連遺構は建物との向き、および空間配置のうえでIII期まで存続していなかったと想定されるが、出土遺物はやや新しい要素を有する山茶碗を伴っているので断定はできない。また、新たに出現した土坑としてＳＫ109、ＳＸ33、ＳＸ36が挙げられる。ＳＫ109は性格が不明であるが、ＳＸ33、ＳＸ36は何等かの鋳造遺構の可能性もある。これは本遺跡で砥石がたくさん検出されたことと関係があるのかもしれない。ＳＸ30はこの段階になって西側に付け加えられたと思われる。なお、土師皿埋納ピット（Ｐ927）の帰属時期は美濃地方の土師皿の年代観が確立していない現段階では断定できない。しかし、本遺跡でIIａ期～IIｂ期まで遡る可能性が高いＳＸ28出土の土師皿と本遺構出土の土師皿は外面の調整や口縁端部の形態が違うこと、また、大窯第１段階までの遺跡である関市山王遺跡の土師皿とＳＸ28の土師皿が類似すること、大窯第３段階の丸皿、稜皿と共伴して出土した美濃市上巾上遺跡ＳＸ-05の土師皿と本遺構（Ｐ927）の土師皿が類似していることなどから想定して、本遺構の土師皿はＳＸ28の土師皿よりもやや後出していると思われ、ここではIII期の遺構として捉らえたい。

IV期

当期は主に18世紀代が主体となる時期である。III期とIV期の間にやや時間幅があり、その間は湿地的環境であったと推定される(第Ｖ章参照)。IV期の遺構として掘立柱建物１棟、井戸２基、便所様遺構１基などが挙げられ、集落が存在していたと推定されるが、全容の解明には至っていない。

Ｖ期

当期は18世紀末～19世紀中頃までが主体となる時期である。土坑群が大部分であり、土坑の性格としてごみ穴、あるいは火葬墓的なものもある。建物址は検出されなかったが、ＳＥ１から大量の陶磁器が出土したことや、ＳＫ108から建築部材や瓦が出土したことから集落が存在していたと推定される。なお、IV期･Ｖ期は調査区の東側約100ｍに郡上街道が通っていたと推定されているが、街道との関連は見出せなかった。

第２節　遺物について

本節では出土遺物を時期毎に計量し、その結果から推定されることを述べてみたい。

１．計量方法[3)]

計量方法にはいろいろあるが、本遺跡では口縁部計測法、破片数計測法、個体識別法の３つを使用して計量を行った。口縁部計測法として、本報告では円周5㎜単位、放射線30度単位で多重の同心円を12分割し、残存する口縁周の長さ（口縁残存率、例えば1.3/12など）を復元した口縁周の長さで割ったものを個体数として算出する方法を用いた。口縁残存率は小数点以下第１位まで求め、0.3/12以下の破片は分類や口径の判断が困難であるため計量の対象から除外した。また、破片数計測法は、口縁

部や体部破片の接合前の破片数をすべてカウントする方法である。産地の特定が可能な遺物については産地毎の総数を求めるのに適しているが、各破片から時期を求めるには限界があるため、口縁部計測法の補則資料としてここでは用いた。なお、個体識別法は接合後の破片数をカウントする方法である。

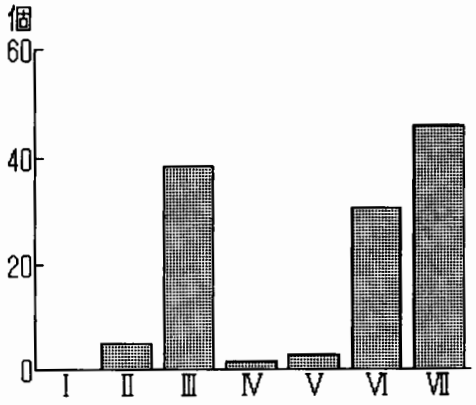
なお、今回の計量に関していくつか問題点が挙げられる。一つは山茶碗の皿の分類である。筆者自身、東濃型の山茶碗の皿で明和段階以降の口縁部形態の認識があいまいであるため、今回は「半ノ木古窯跡群の変遷」(藤澤1990)にある皿の形態変化に準じて計量を行った。しかし、細片はどうしても時期比定が困難となり、算出した個体数はやや信頼性に欠けると思われる。さらに、大畑大洞段階と大畑大洞新段階の碗と皿の分類が破片では不可能であったため、各々両者を足して2で割った数値をグラフでは使用している。[4]二つめに土師皿の口径の認定があいまいな点が挙げられる。本遺跡出土の土師皿はすべて非ロクロ成形であるため歪んだ部分が多く、その残存率の算出が必ずしも正確であるとは言えない。三つめに耐用年数の問題が挙げられる。遺物の年代観はすべて窯式編年に準じているため、消費地においてどれだけ年代観にズレが生じるのか考慮に入れていない。[5]四つめに木製品の存在が挙げられる。城館あるいはそれに付随する集落以外の消費地の計量を行うと、大部分の遺跡で16世紀段階の遺物の総出土量が前段階に比べ極端に減少している。[6]ここで山茶碗に替わる食膳具として木製品の存在が挙げられる[7]が、遺跡に残らないものの計量を行うことは不可能であるため、ある時期以降の出土遺物総数が少ないからといって、その時期に集落が衰退したとは必ずしも断定できず、計量分析から遺跡の性格を読み取る危険性が示唆される。これら四つの課題が挙げられたが、計量には必ず前提条件や方法の限界性がつきまとい、絶対に有効と言える方法論は存在しないと思われる。そのため、補足資料などを用いてデータの信頼性を高めてゆくのだが、今回の遺物の計量は遺跡の性格付けのための一手段であり、あくまで大要把握を目的としていることを留意したい。

2．時期別の遺物量の変化

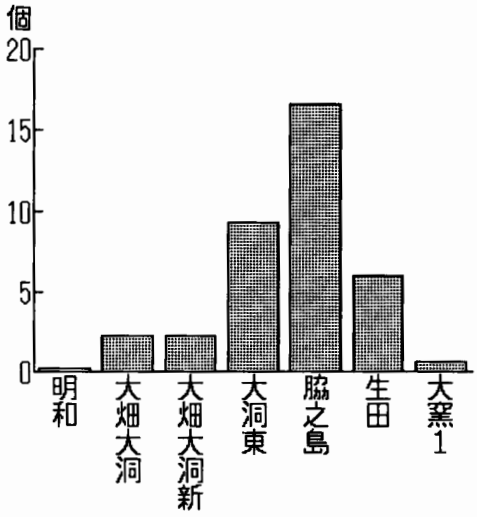
本遺跡の出土遺物は大半が中近世に属するため、ここでは13世紀以降の遺物の概要を述べたい。第87図は13世紀から19世紀までの約700年間をおよそ100年の単位で七区分し、それぞれの時期の総個体数を示したものである。ここでは遺構の切り合い関係などは考慮しておらず、また、土師皿や加工円盤のように時期が不定のものは除外している。なお、時期区分は以下のように行った。[8]

Ⅰ期…　　～13世紀後半（　～明和1号窯期）
Ⅱ期…13世紀後半～14世紀後半（大畑大洞4号窯期～大畑大洞4号窯期新）
Ⅲ期…14世紀後半～15世紀末　（大洞東1号窯期～生田2号窯期）
Ⅳ期…15世紀末　～16世紀末　（大窯第1小期～大窯第7小期）
Ⅴ期…17世紀初頭～17世紀末　（本業焼第Ⅰ段階）
Ⅵ期…18世紀初頭～18世紀後半（本業焼第Ⅱ段階）
Ⅶ期…18世紀後半～19世紀後半（本業焼第Ⅲ段階）

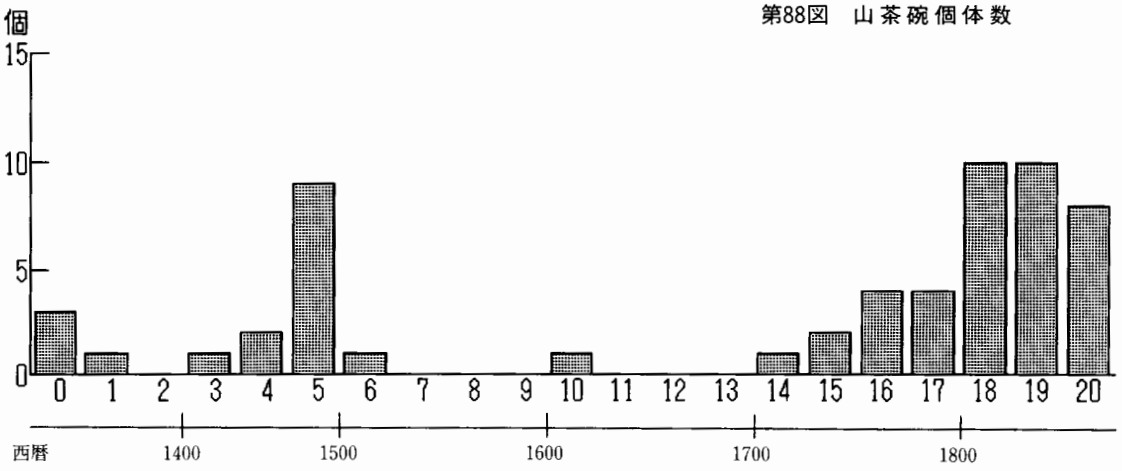
第87図によるとⅡ期から遺物量が増し始め、Ⅲ期においてピークに達する。そしてⅣ期とⅤ期に極端に減少しており、Ⅵ期からⅦ期にかけてもう一度ピークがみられる。これら3時期のピークは遺構面が3枚存在することと一致している。また、Ⅳ期とⅤ期に遺物量が減少することは、先にも述べたように美濃地方の中近世集落と同一の現象である。そして、その理由として生産地の動向や陶磁器に



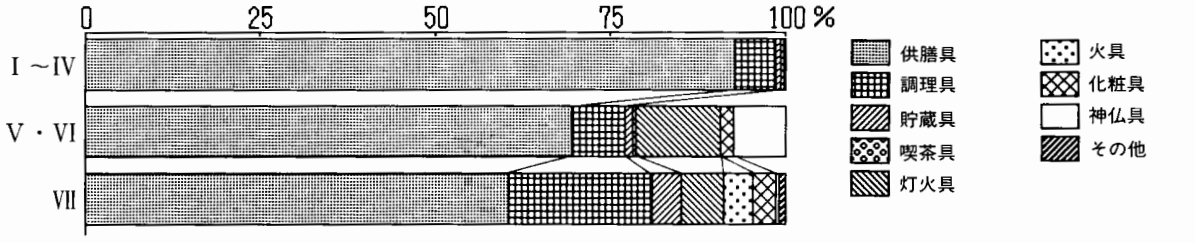
第87図　時期別総個体数



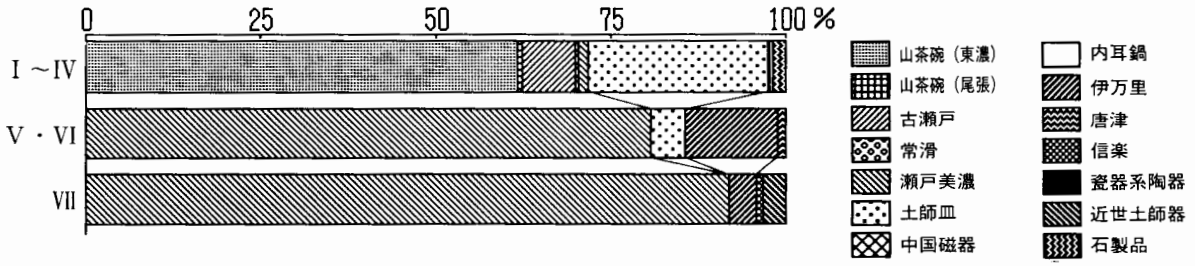
第88図　山茶碗個体数



第89図　鉢・擂鉢個体数



第90図　時期別用途組成



第91図　時期別産地組成

第26表　時期別総個体数

時期	個体数	口縁部破片数
I	0.31	4
II	4.96	59
III	38.22	398
IV	1.72	23
V	2.82	30
VI	30.51	282
VII	46.07	355
合計	124.61	1151

（土師皿を除く）

第27表　山茶碗個体数

時期	個体数	口縁部破片数
明和	0.31	4
大畑大洞	2.315	26.5
大畑大洞新	2.315	26.5
大洞東	9.33	102
脇之島	16.65	178
生田	5.98	48
大窯I	0.62	7
合計	37.52	392

第28表　鉢・擂鉢個体数

タイプ	個体数1	個体数2
0	0.07	3
1	0.07	1
2	0	0
3	0.04	1
4	0.14	2
5	0.44	9
6	0.09	1
7	0	0
8	0	0
9	0	0
10	0.06	1
11	0	0
12	0	0
13	0	0
14	0.08	1
15	0.21	2
16	0.45	4
17	0.31	4
18	1.18	10
19	0.90	10
20	1.04	8
合計	5.01	54

（個体数1—口縁部計測法による）
（個体数2—個体識別法による）

第29表　時期別用途組成

用途	I～IV個体数	I～IV口縁部破片数	V～VI個体数	V～VI口縁部破片数	VII個体数	VII口縁部破片数	総個体数
供膳具	56.45	537	23.2	238	27.91	220	107.56
調理具	3.47	38	2.58	31	9.49	86	15.54
貯蔵具	0.43	6	0.34	4	1.86	17	2.63
喫茶具	0.08	1	0.19	3			0.27
灯火具	0.23	2	3.97	11	2.85	12	7.05
火具					1.87	13	1.87
化粧具			0.67	5	1.52	3	2.19
神仏具			2.38	20	0.18	1	2.56
その他	0.03	1			0.39	3	0.42
合計	60.69	585	33.33	312	46.07	355	140.09

第30表　時期別産地組成

産地	I～IV個体数	I～IV口縁部破片数	V～VI個体数	V～VI口縁部破片数	VII個体数	VII口縁部破片数	総個体数	総破片数
山茶碗（東濃）	37.52	392					37.52	922
山茶碗（尾張）	0.29	5					0.29	10
土師皿	15.49	101	1.67	9			17.16	232
古瀬戸	4.67	60					4.67	153
常滑	0.33	4					0.33	213
瀬戸美濃	0.87	12	26.95	272	42.34	327	70.16	2077
中国磁器	0.12	2					0.12	6
内耳鍋	0.31	2					0.31	28
伊万里			4.40	30	1.93	7	6.33	140
唐津			0.31	1			0.31	2
信楽					0.41	4	0.41	42
瓷器系陶器	0.03	1					0.03	1
近世土師器					1.39	17	1.39	180
石製品	1.05	6					1.05	17
合計	60.68	585	33.33	312	46.07	355	140.08	4562

替わる食膳具としての木製品の存在などが挙げられるが、本遺跡の場合は、自然科学分析（第Ⅴ章参照）で述べられているように第３次遺構面が廃絶した後は湿地的環境であったと推定されているので、Ⅳ期からⅤ期にかけて人々の居住空間に該当していなかったと思われる。[9]

さて、先程２度のピークがみられると述べたが、それらについて時期設定を細かくして分析してみたい。第88図は山茶碗、第89図は鉢・擂鉢の総量の時期別変化を表している。なお、山茶碗は口縁部計測法、鉢・擂鉢は個体識別法を使用してグラフ化しているので個体数に差が生じている。山茶碗は大畑大洞段階の前半と後半が同じ数値であるが、これは先に述べたように各々を足して２で割ったためであり、実際は後半の方が多かったと思われる。そのように考えると明和段階から序々に遺物量が増し、脇之島段階でピークに達し、生田段階から大窯段階にかけて減少していく傾向が読み取れる。また、鉢・擂鉢では14世紀中頃が多く、14世紀後半から15世紀前半にかけては少なくなるが、15世紀後半にはピークを迎えている。また、16世紀から17世紀にかけてはほとんど出土しておらず、18世紀から序々に増え始め19世紀にピークを迎える。両者を比較してみると、中世において山茶碗は15世紀中頃（脇之島段階）に、鉢・擂鉢は15世紀後半（生田段階～大窯第１小期段階）にそれぞれピークを迎えており、時期的には少し差があるが[10]大まかにみて15世紀中頃から後半にかけて遺物量が最も増大したとしてよいと思われる。また、擂鉢が比較的遺構の廃絶年代に近い年代観を示すのであれば[11]、本遺跡にみられる中世集落は15世紀末から16世紀初頭にかけて極めて短時間のうちに衰退、あるいは廃絶してしまったと想定される。近世は擂鉢からしか言及できないが、17世紀末までの遺物量がほとんどみられないことは当時まで本遺跡周辺が湿地的環境であったためであると思われる。天目茶碗などの17世紀前半の遺物は伝世的な要素を有していたのかもしれない。18世紀からの遺物量の増加は第87図と同じ様相であり、Ⅵ期から集落が新たに営まれ始めたことの裏付けとなろう。

３．時期別の遺物組成

第90・91図は時期別の産地組成と用途組成を表している。時期をⅠ期～Ⅳ期、Ⅴ期～Ⅵ期、Ⅶ期の大きく３つに分けてグラフ化した。これは土師皿の時期比定が困難なことや、遺物総数が少ない時期があるためである。ちなみに３つの時期はそれぞれの遺構面の時期にほぼ対応している。なお、いずれも口縁部計測法により算出した個体数をグラフ化した。

産地組成のうち中世で最も多いものは山茶碗で、以下、土師皿、古瀬戸の順になる。全体に占める割合はそれぞれ62.3%、25.6%、7.7%である。山茶碗が最も多いのは生産地を有する美濃地方の中世集落と同じ様相であると言える。また、土師皿が25.6%を占めていることはやや特異な例として捉らえられる。というのは、「土師皿の機能は具体的には、飲食器の皿、盃と灯明具としての灯明皿である。素焼きの土師皿は、飲食器としては一度使うと汚れが染み込むので、再使用しないのが原則で、清浄の象徴として伝統的な儀式や、宴会の膳等のハレの場で使われた」「土師皿の階層による使用の違いは、階層性の重要な指標である」[12]とされているからである。ちなみに福井県一乗谷における土師皿の比率は、朝倉館は95%以上、武家屋敷は50%前後とされている。岐阜県においても同様のことが考えられ、岐阜市千畳敷では80%～90%、[13]16世紀初頭に守護所であったとされている岐阜市城之内遺跡では92.6%という比率を示している。逆に加茂郡東白川村陰地遺跡では山茶碗や古瀬戸など中世陶器が26.53個体（口縁部破片数441点）出土しているにもかかわらず、土師皿が１点も出土していない。また、美濃加茂市尾崎遺跡でも中世陶器が156.75個体（口縁部破片数1537点）出土しているにもかかわらず、

土師皿は１個体のみであった。[14]つまり、美濃地方においても土師皿の比率から階層性を想定することが可能であると思われる。ここで、下巾上遺跡の土師皿に目を向けると、本遺跡出土の土師皿は煤の付着がほとんどみられないため、大部分が飲食器として使用されていたと思われる。その比率が50％までいかないにしろ、25.6％の比率であることは、ハレの場を意識できた階層の人々の居住空間であったことが想定される。また、土師皿は寺社との関連も指摘されており、中世の土器（山川1994では土師皿と瓦器を指している）がまとまって出土する遺跡には寺社が隣接、あるいは近接するとされている。そのため、土師皿の比率が階層性を反映するという考えとは別に、寺社との関連性が高い遺跡は非日常的な行事が多くなるため、必然的に土師皿の出土量が増すという考えもある。[15]下巾上遺跡の場合は、近くに白髭神社が位置する（第II章参照）。白髭神社がいつ建立されたのかは不明であるが、神社内に五輪塔がみられ、幾つか山茶碗が表面採集できたので、中世の段階ですでに当地に存在していたと思われる。また、今回の調査で検出された遺構には中世墓と想定されるＳＸ30の存在や出土遺物の中に朱塗りの山茶碗の破片（287）があること、土師皿のうち有機物を内外面に付着させたものがあることなどは特異な例として捉らえられ、本遺跡が宗教、あるいは寺社と何等かの関連性があったとも推定される。[16]このような背景を想定しても土師皿がある程度出土したことが理解できよう。

近世の産地組成で最も比率が高いものは瀬戸美濃陶器であり、Ｖ・VI期で80.9％、Ⅶ期で91.9％を占めている。これは中世における山茶碗と同様に、生産地に近いという地理的要因に基づいていると思われる。しかし、その中で伊万里や唐津、信楽などが出土していることは近世の流通機構が発達していたことの裏付けであり、土瓶や擂鉢、火具などの在地産の遺物が出土していることは広域流通窯と地元の窯の製品が相互補完的な役割をなし、当時の人々に使用されていたことを示していると思われる。[17]

次に用途別組成について述べてみたい。Ｉ期からIV期にかけては供膳具が圧倒的に多く全体の93.0％を占める。[18]次いで多いものが調理具であり、全体の5.7％を占める。Ｖ・VI期でも供膳具が多く、全体の69.6％を占める。次いで多いものが灯火具、調理具、神仏具であり、それぞれの全体に占める割合は11.9％、7.7％、7.1％である。また、Ⅶ期でも比率的には低くなるが供膳具が最も多く、全体の60.6％を占める。次いで多いものが調理具、灯火具であり、それぞれの全体に占める割合は20.6％、6.2％である。この結果から中世と近世との用途組成の大きな違いは、近世において供膳具以外の器種が豊富になることであり、灯火具や神仏具などを使用する生活様式へ変化したことが想定される。

第３節　ま　と　め

今回の調査では中近世集落の一様相を覗くことができた。特に中世集落では時期毎の遺構の変遷をたどることができ、遺構・遺物の面から15世紀後半に本遺跡が転換期にあったことが推測できた。ここで中世集落について少し私見を述べてまとめとしたい。

柱穴が建物の建て替えのたび毎に改めて掘り返されることを前提とすると、建物の耐用年数は大まかに30年程度とする考えがある（橘田1991）。[19]これが正しいとすると、下巾上遺跡の場合は中世の段階でおそらくII a 期からIII期まで３回の建て替えが行われており、建て替えの間にそれほど時間を費やしていないとするならば、約100年間集落が存続したことになる。集落の廃絶を16世紀初頭とすると建

物が建てられた時期は14世紀末から15世紀初頭となり、山茶碗の出土量が多い段階の大洞東段階から生田段階までの間に対応している。しかし、逆にそれ以前の遺物、つまり明和段階から大畑大洞新段階までの約100年間の遺物が出土していることは、建物の耐用年数がもう少し長いのか、あるいは今回の調査区周辺にも中世集落が存在していたためか、あるいは建物の建て替えの時に同一の柱穴を使用したためであると推定される。

また、集石墓の開始時点を13世紀後半とし、それが全国的傾向であるならば[20]、本遺跡のＳＸ30もその傾向に沿っていると言えよう。また、集石墓とは様相が異なるが、前期屋敷墓を擁する建物群に顕著にみられる傾向として「建物群は一定の区画内にある程度計画的に配置され、建物の建て替えはその区画内で行われる。建物の建て替えは１回以上が普通でだいたい２、３回ぐらい行われる。区画内には建物の他に井戸・土器埋納ピットなどがある」（橘田1991）とされている。集石墓と前期屋敷墓は性格が異なるが、前期屋敷墓を擁する集落形態と本遺跡のIIａ期からIII期の集落の様相は非常に類似していると言える。前期屋敷墓が全国的な範囲で普及したのであれば、それに伴う集落形態も同様に全国的に普及したと考えられ、本遺跡の中世集落も集石墓と同様に全国的な流れの中で捉らえられると思われる。

なお、末筆ではありますが、発掘調査から遺物整理に至るまで諸作業に携わっていただいた多数の方々に深甚なる謝意を表します。

1）発掘調査中に長瀬仁氏により本遺構は馬屋ではないか、という御教示をいただいた。また、関市教育委員会1984「重竹遺跡―その３―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」を参考とした。

2）あるいはＳＸ27で検出された石列が覆い屋と関連するのかもしれない。

3）宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集を参考とした。

4）多治見市教育委員会　1993「小名田小滝古窯跡群」では明和段階以降の山茶碗の皿の型式変化の指標として器高値の低下・底部内面外縁の輪状の段が顕著となり、その内面が盛り上がってゆくこと・底部内面の静止指ナデ調整の有無などを挙げている。また、藤澤良祐　1990「半ノ木古窯跡群の変遷」『尾呂―愛知県瀬戸市　定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』瀬戸市教育委員会では明和段階の皿の形状にばらつきがあるとし、全体の中で統一して言えることとして底部内面中央の静止指ナデ調整が認められるものの深く凹むことなく平滑に仕上げられていることを指摘している。

5）その一例として岐阜市教育委員会　1991「千畳敷II　財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録」の中の一論が挙げられる。ここでは、大窯の陶器で同一遺構面で一括性が高いと予想されているにもかかわらず、碗・皿類に比べ擂鉢が新しい年代観を示していることに着目し、生産地の年代観が正しい限り、消費地で遺跡の年代を大窯陶器の碗・皿類で求める時はその伝世等を考慮した慎重な検討が必要であるとし、擂鉢は比較的遺構の廃絶年代に近い年代観を示す可能性が高いことを示唆している。

6）筆者自身の美濃地方の集落の計量分析による。例外として、藤橋村の戸入村平遺跡では16世紀段階で出土遺物量がピークに達し、その以後19世紀まで安定して遺物がみられる。

7）藤澤良祐　1990「山茶碗と中世集落」『尾呂―愛知県瀬戸市　定光寺カントリークラブ増設現事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』瀬戸市教育委員会などを参考とした。

8）東濃型の山茶碗の年代観は「小名田小滝古窯跡群」（多治見市教育委員会　1993）で示された編年試案と「山茶碗研究の現状と課題」（藤澤　1994）で示された編年に若干の誤差がみられるが、本報告では藤澤氏の年代観に従っている。

9）第３次遺構面を調整している際、直径４㎝程の円形の穴が１区南側を中心に多数確認された。これらの分析をパレオ・ラボに依頼したところ、ヨシ属の植物の株跡であることが判明し、当時期に湿地的環境であったことの裏付けとなった。

10）これは註５であるように、碗・皿類と鉢・擂鉢の耐用年数の問題などが絡んでくると思われるが、ここではあえて言及しない。

11）註５参照。

12）小野正敏　1991「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社を参考とした。

13）註５の文献を参考とした。

14）城之内遺跡、陰地遺跡、尾崎遺跡の出土遺物の計量はいずれも口縁部計測法により筆者自身が行った。また、城之内遺跡の組成比は1988～1989にかけて岐阜県教育委員会が発掘調査を行った資料のみを対象とし、92.6%という数値は本報告書の時期分類におけるIII期とIV期（14紀後半～16世紀末）の総出土遺物個体数に対する土師皿の比率を表している。なお、岐阜県教育委員

会　1990「城之内遺跡　長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書」・財団法人　岐阜県文化財保護センター　1993「尾崎遺跡」「陰地遺跡」を参考とした。

15）山川均　1994「土器をまとめてすてること―「中世土器集積」の具体的解釈に関する試み―」『文化財学諸論集』文化財論集刊行会・尾野善裕　1994「生焼け山茶碗と土師器皿―山茶碗生産地域におけるロクロ成形土師器皿の生産―」『考古学フォーラム4』を参考とした。また、土師皿の組成比の在り方については内堀信雄氏、尾野善裕氏に御教示をいただいた。

16）現在までの朱塗りの山茶碗が出土している遺跡は宗教関連の遺跡が多いと田口昭二氏から御教示をいただいた。また、多治見市教育委員会　1983「大畑大洞古窯跡群発掘調査報告書」では大洞東段階の小型の碗、および脇之島段階から生田段階までの無高台碗が寺社跡、城館跡などから検出されているので、食器というよりはむしろ祭祀用として使用されていた公算が強いとしている。これは註15の文献の中で述べられているVI段階の瓦器椀の用途が「非日常的な行事に関わった用いられ方」もしくは「祭具・中世墓の副葬品として使用されたに留まる」としたことに類似していると思われる。仮にこの論が正しいとするならば、下巾上遺跡が宗教と結び付きが強い集落であったことの大きな裏付けとなろう。

17）在地産は口縁部だけでは瀬戸美濃産と区別できず、第91図ではすべて瀬戸美濃産としてグラフ化している。

18）ここでは土師皿も供膳具として計量している。また、山茶碗の碗・皿類は供膳具以外の用途があったと思われるが、口縁部だけでは判断できないためすべて供膳具とした。

19）橘田正徳　1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究IV』

20）磐田市教育委員会　1993「一の谷中世墳墓群遺跡」本文編、勝田至　1994「中世民衆の墓制と死穢」『歴史手帖第22巻12号』

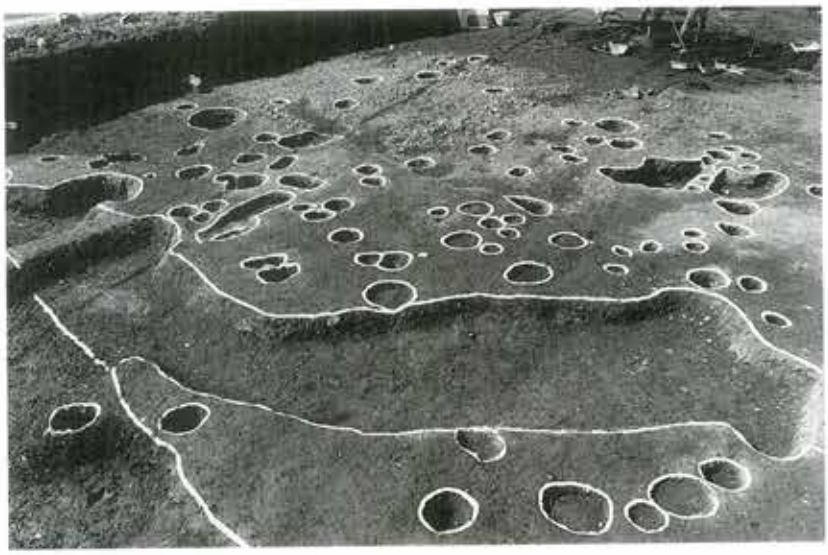
図　　版

図版 1

遺跡近景（南より）

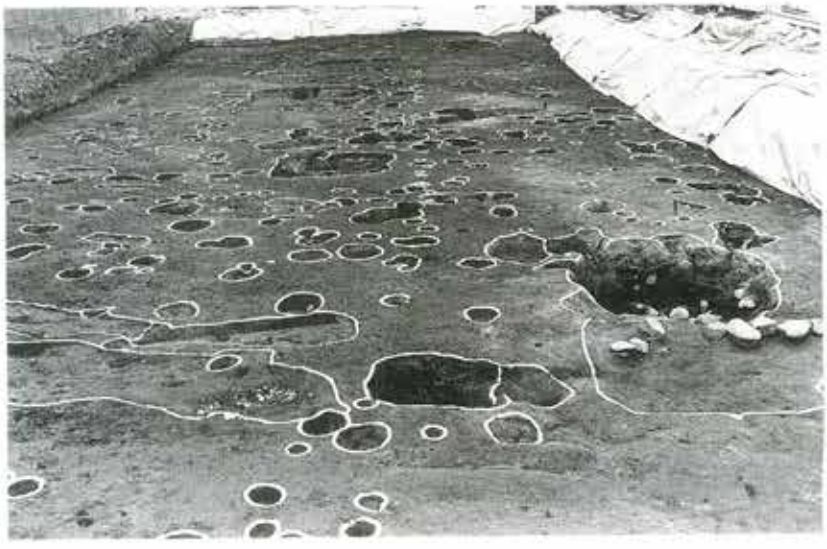
遺跡近景（北より）

図版 2



第 2 次・第 3 次遺構面
1 区南東部（北東より）

第 2 次・第 3 次遺構面
1 区（南より）



第 2 次・第 3 次遺構面
2 区（南より）

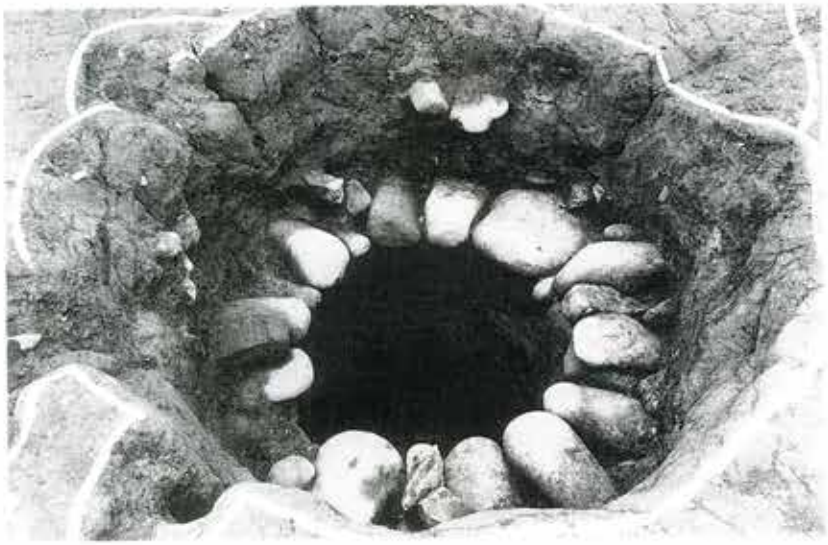
第 1 次遺構面土坑群（西より）

第 1 次遺構面土坑群（南より）

第 1 次遺構面土坑群（北より）

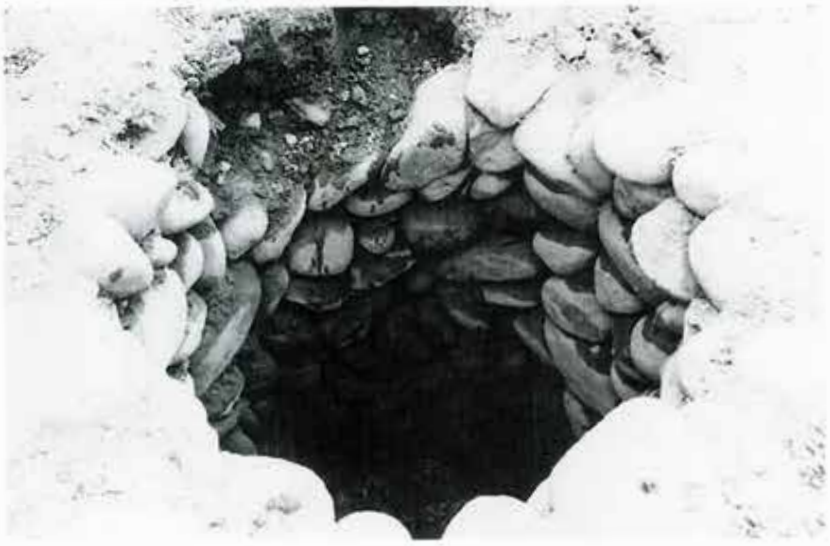
図版 4

P 794　柱根（南より）



SE 1（西より）

SE 1（西より）



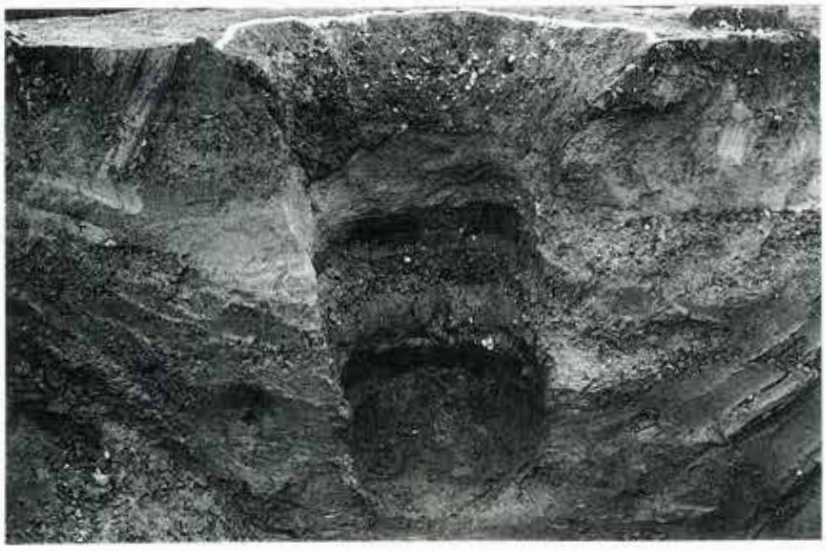
SE 2 （南より）

SE 3 （北より）

SE 3 （南より）

図版 6

SE 4 （南より）



SE 4 （北より）

SE 5 （東より）

SK108（南より）

SK108　遺物出土状況
（北より）

SK109（西より）

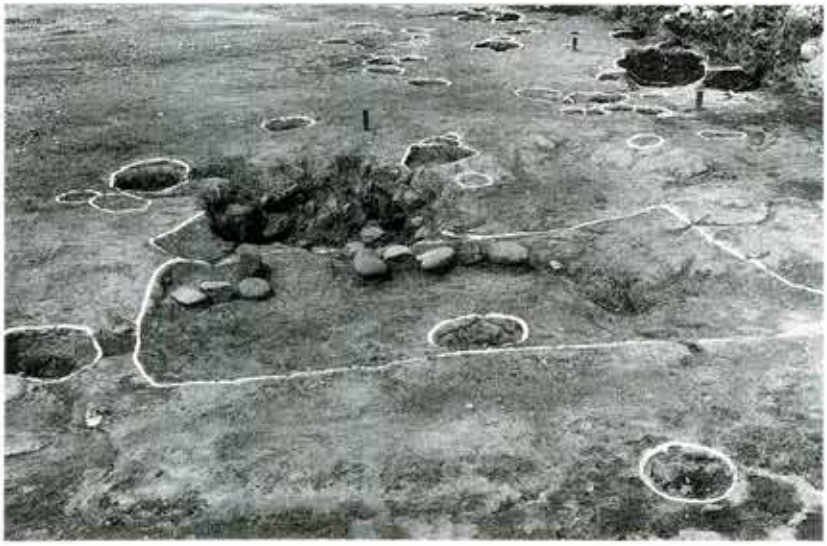
図版 8

SK122（西より）

SK122（南より）

SK133（南より）

SK143（南より）

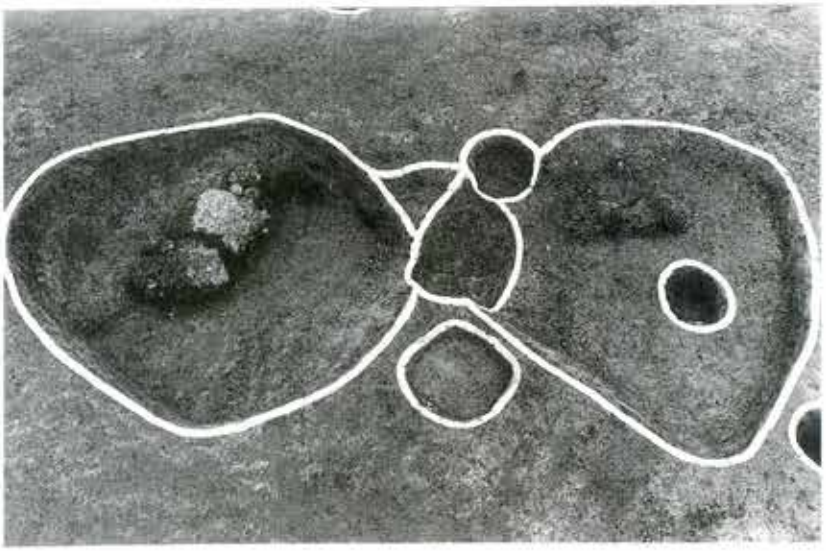


SX27（南より）

SX28（北西より）

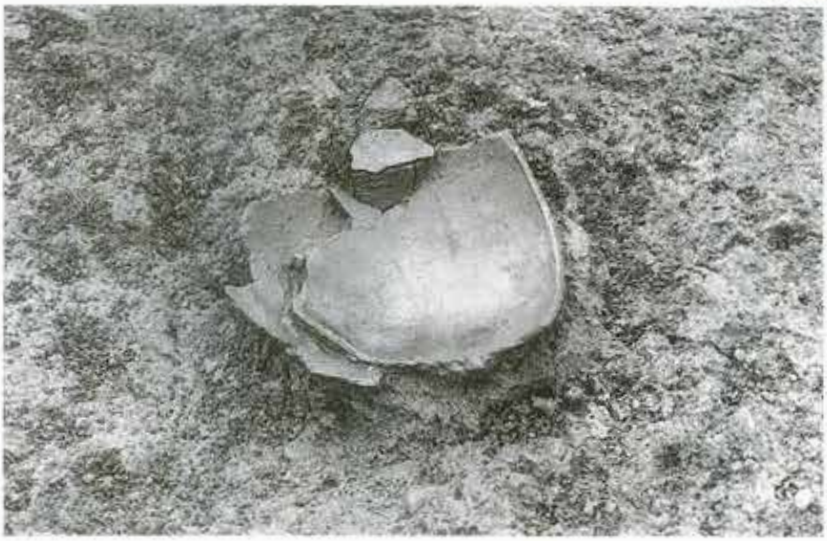
図版 10

SX30（南より）



SX33・36（西より）

SD16（南より）



内耳鍋出土状況（南より）

SK 3 （北より）

SK 3 遺物出土状況（南より）

図版 12

SX 6（北より）

SX17（南東より）

SX 7 遺物出土状況（南より）

調査前風景（南より）

作業風景（1）

作業風景（2）

図版 14

281

287

46

44

43

35

322

39

38

41

40

185

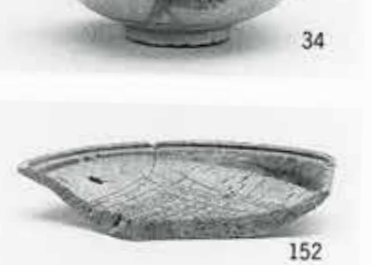
42

325

31

32

34


152

238

237

148

339

70

99

64

305

303

302

304

65

247

385

222

193

193

334

227

358

328

53

62

332

331

図版 16

127

47

357

51

131

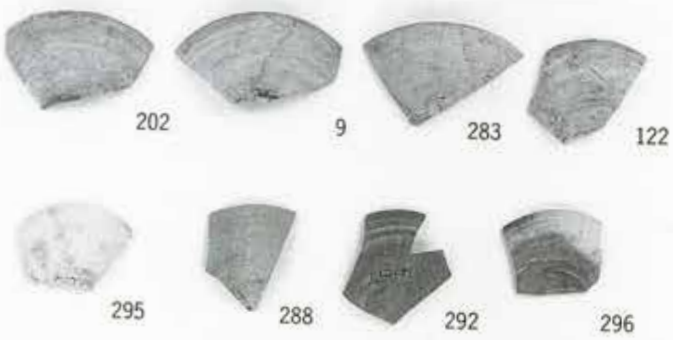
18

128

15

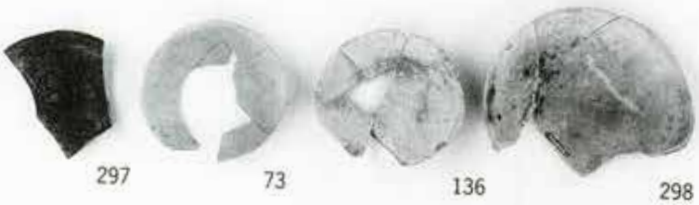
14

山茶碗・皿

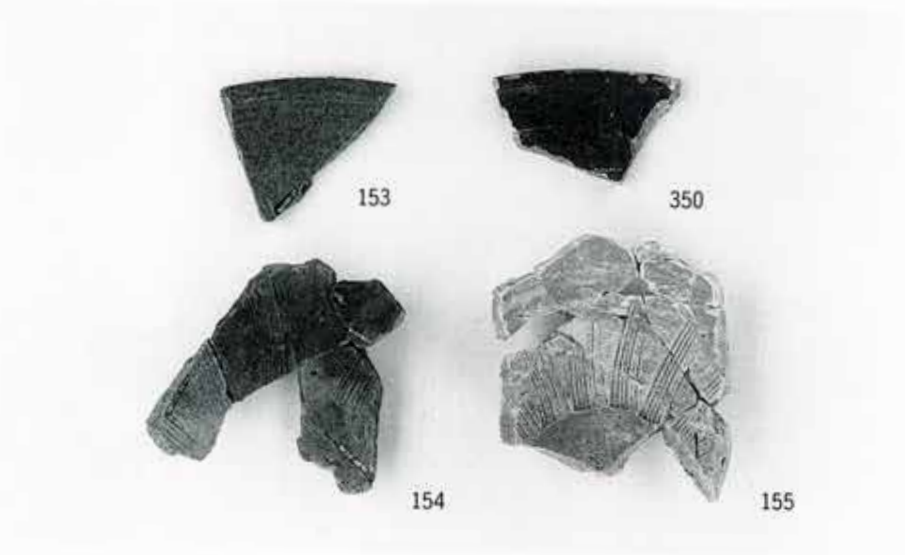


山茶碗・碗

土師皿

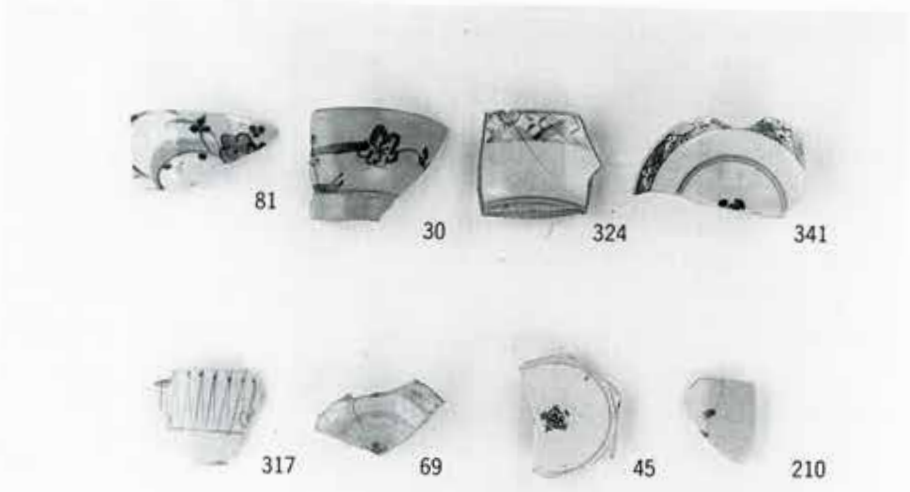


図版 18



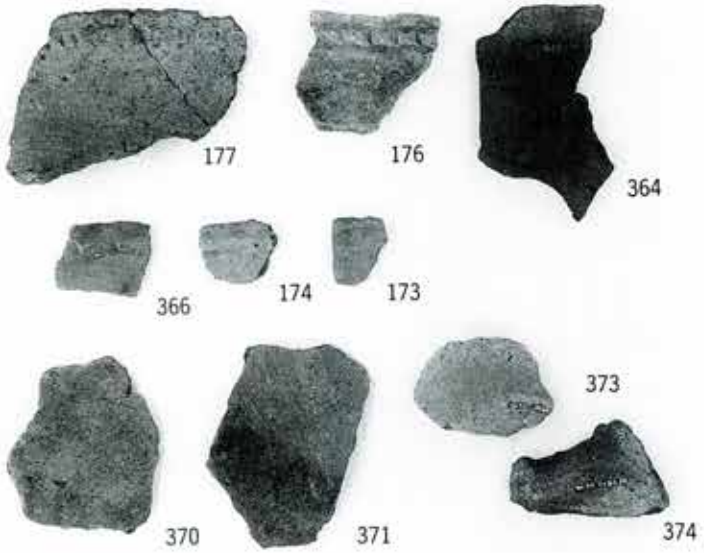
中世擂鉢

常滑



伊万里

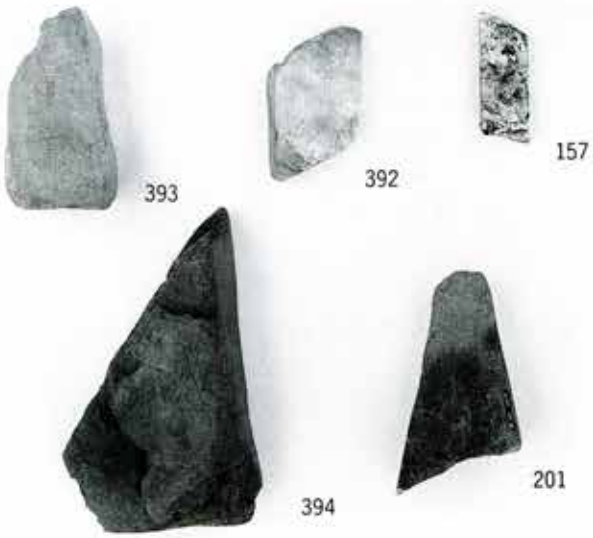
縄文土器


177
176
364
366
174
173
373
370
371
374

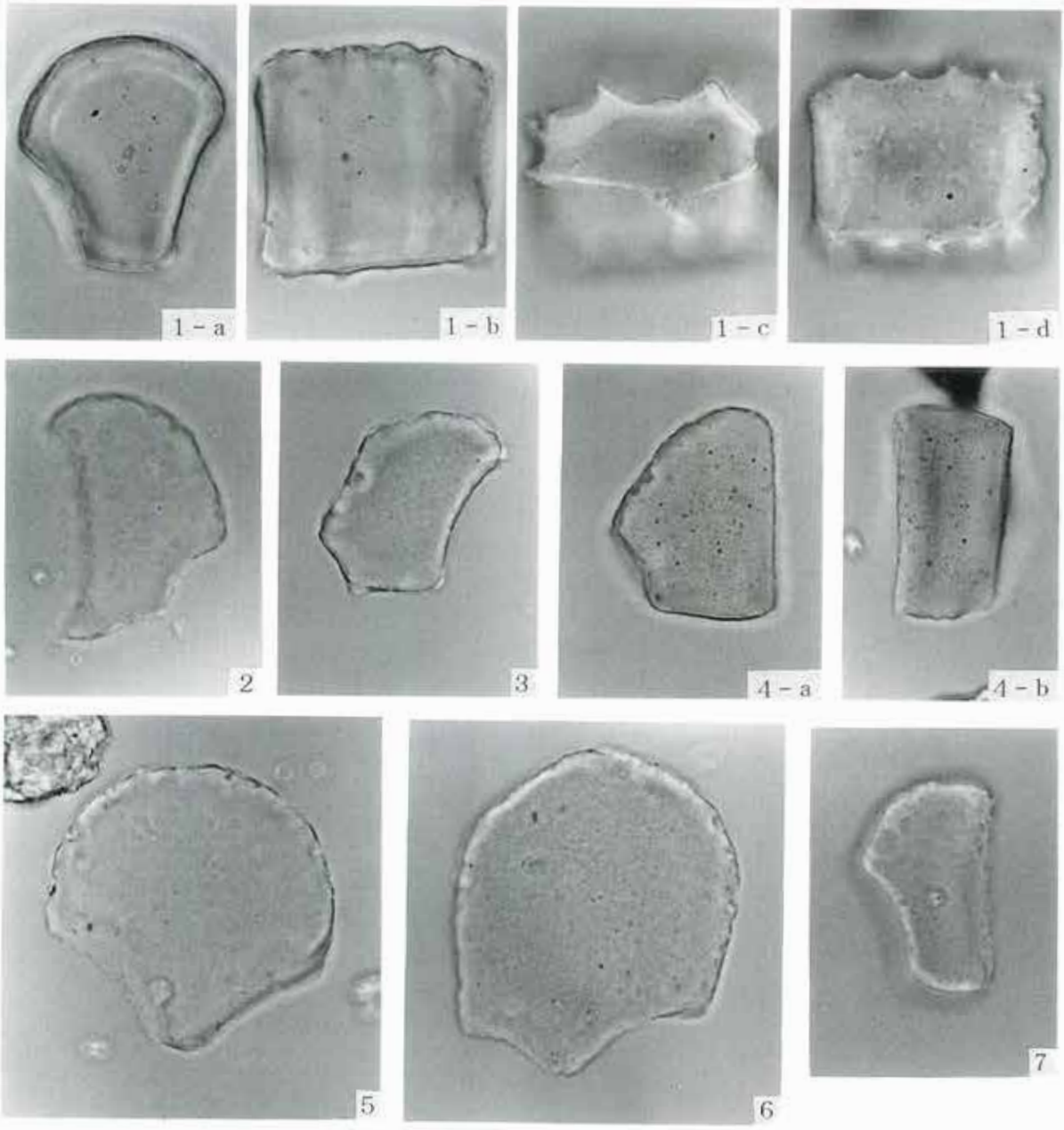
打製石斧

158
217
377

砥石


393
392
157
394
201

図版 20



30μm

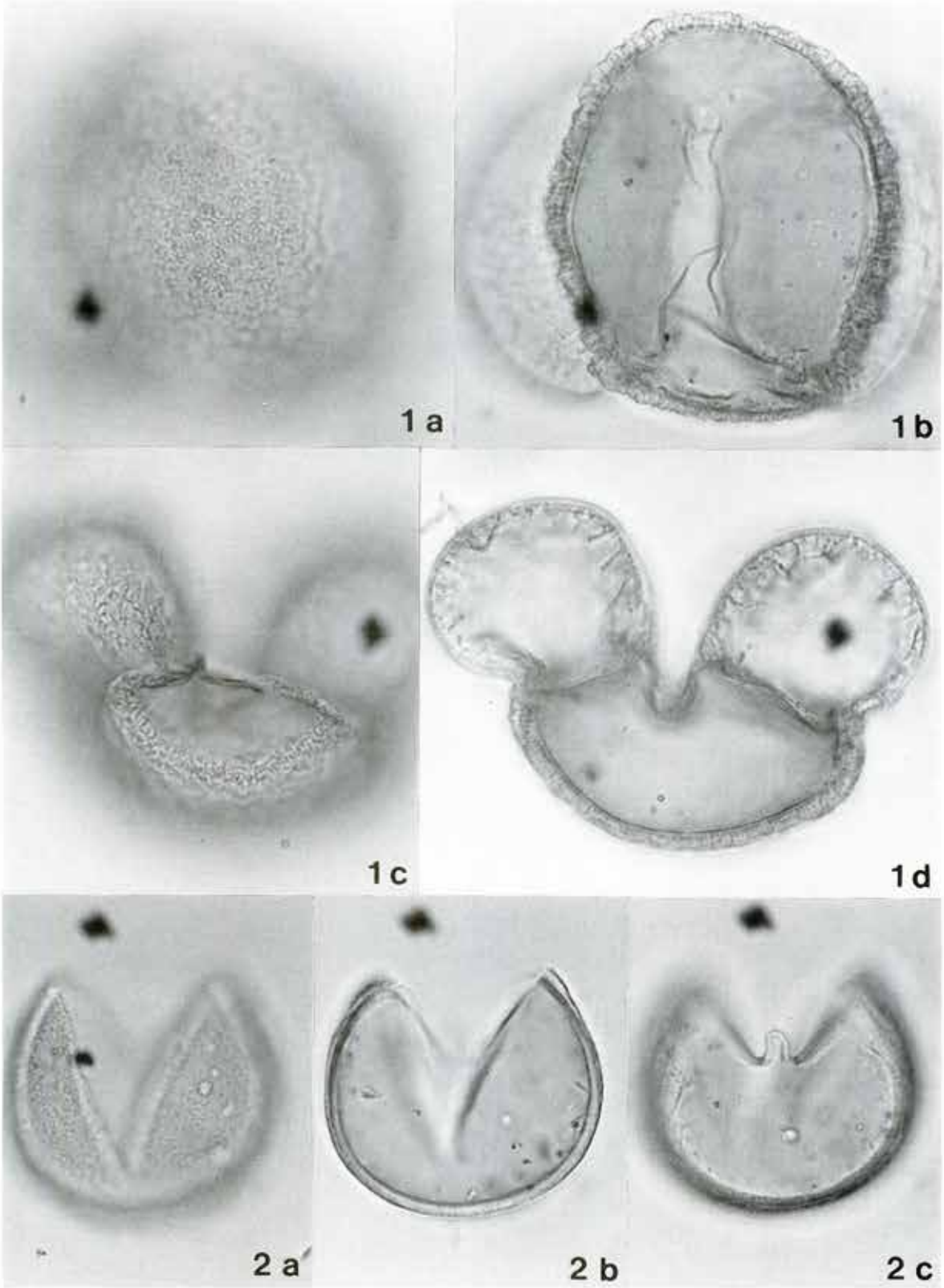
プラント・オパール

1：ネザサ節型(1－a：断面、1－b：側面、1－c：表面、1－c：裏面)試料4

2～4：クマザサ属型（2，3，4－a：断面、4－b：側面)試料4'

5、6：ヨシ属　5：試料4'，6：試料6

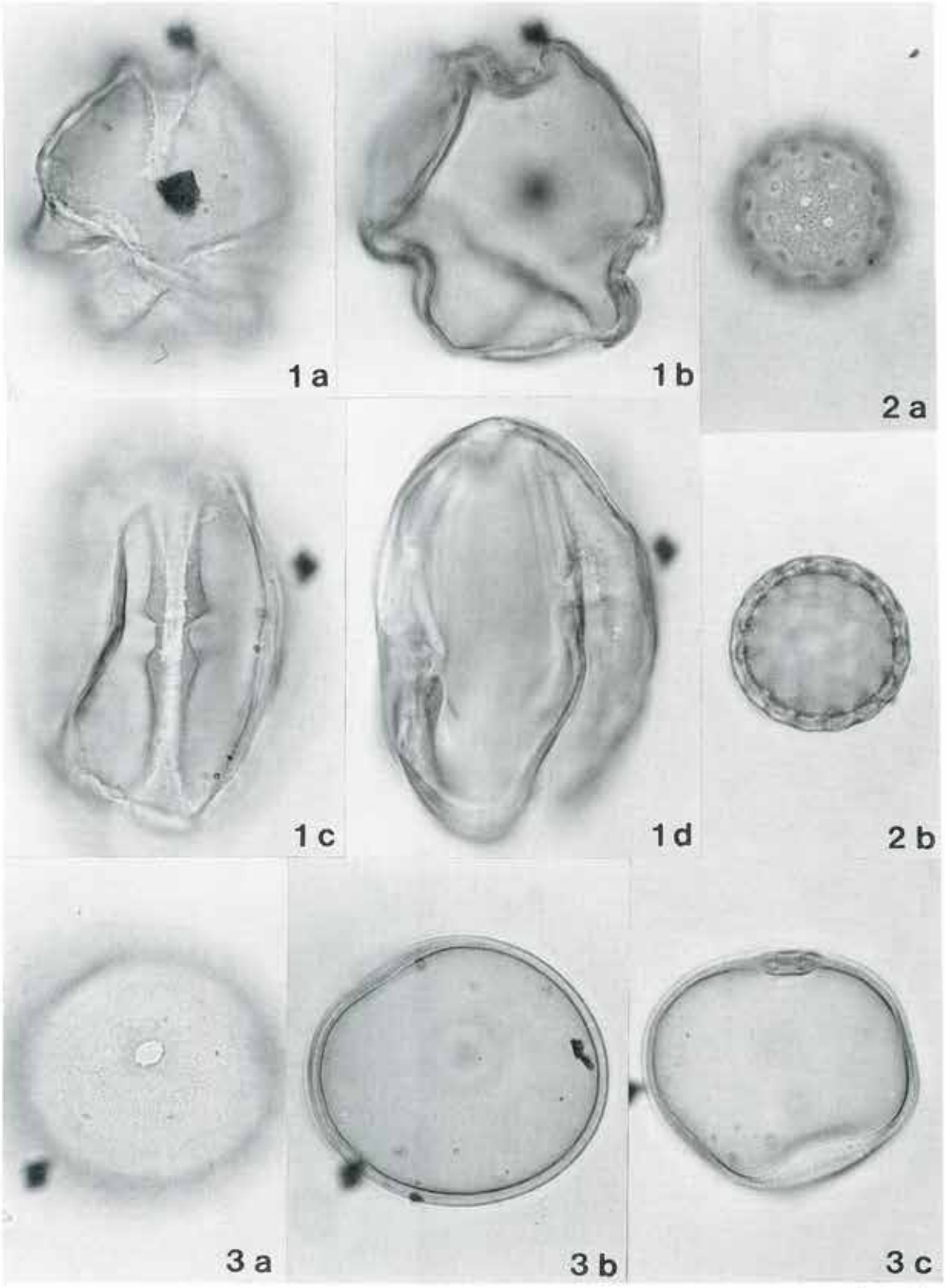
7：ウシクサ族（断面）　試料4'



花 粉 化 石

1：マツ属複維管束亜属、PAL.MN 439
2：スギ属、PAL.MN 442

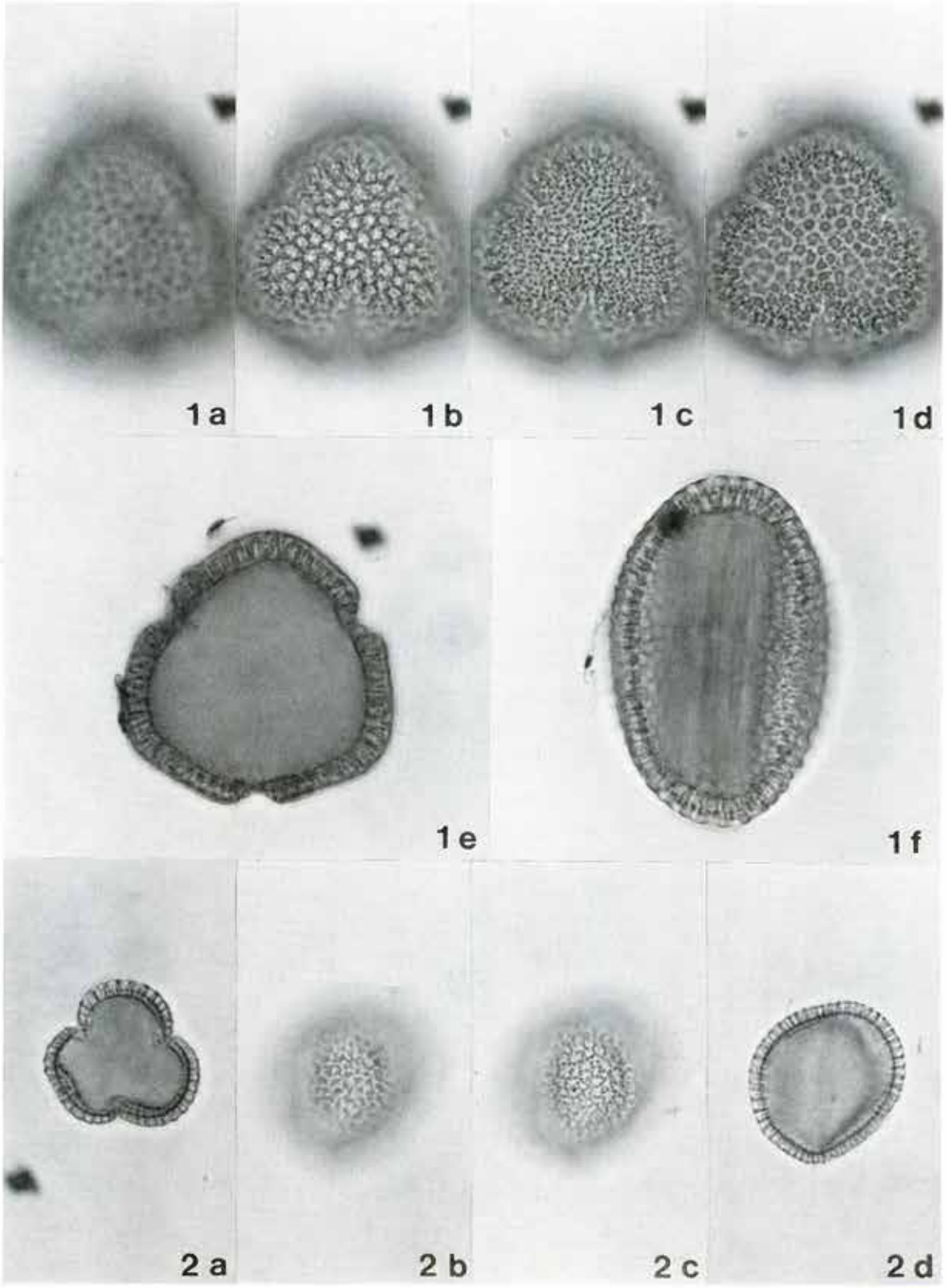
図版 22



10 μ m

花 粉 化 石

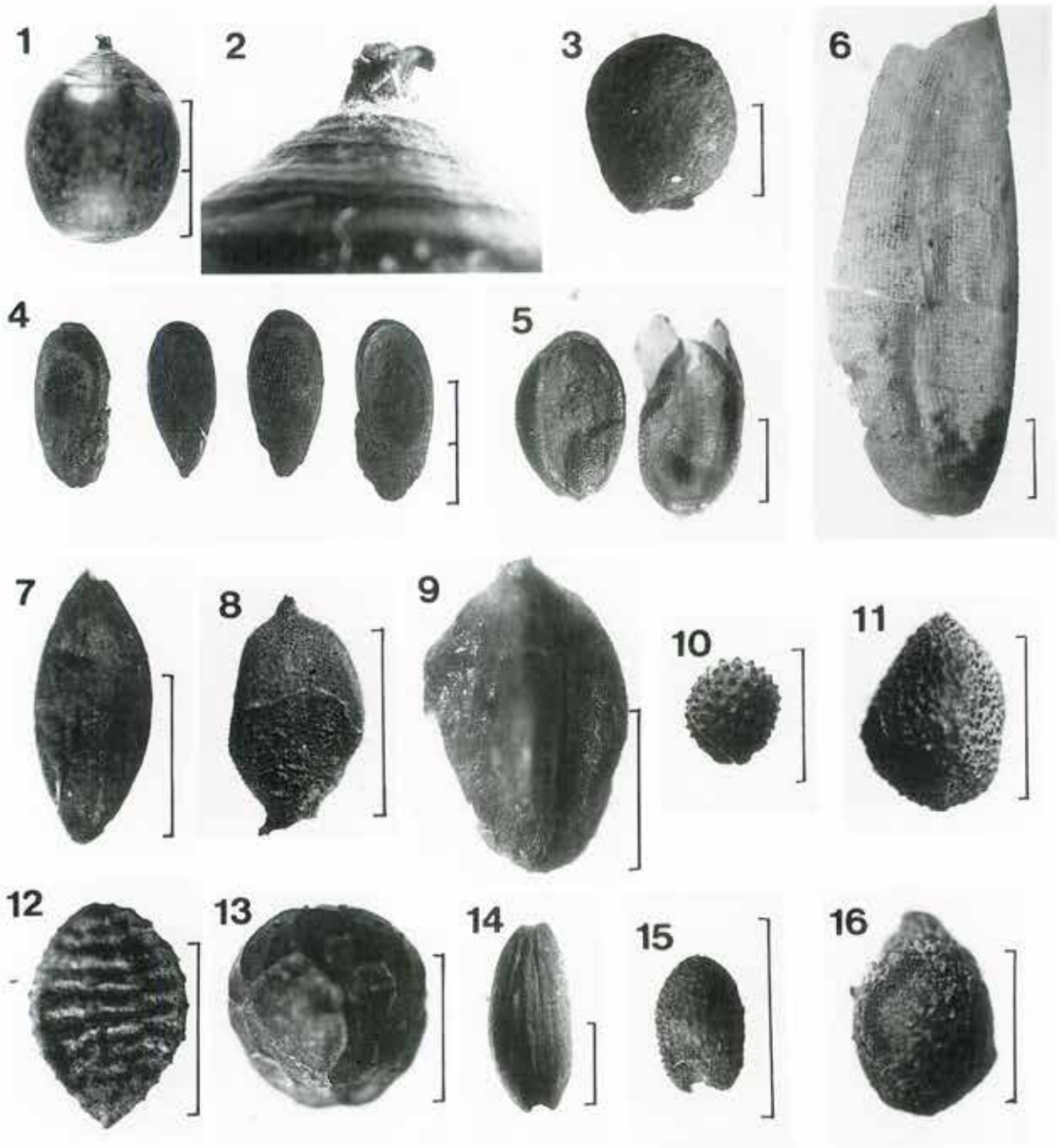
1：カキ属、PAL.MN 443
2：アカザ科—ヒユ科、PAL.MN 440
3：イネ科、PAL.MN 438



花 粉 化 石

1：ソバ属，PAL.MN 455
2：アブラナ科，PAL.MN 447

図版 24



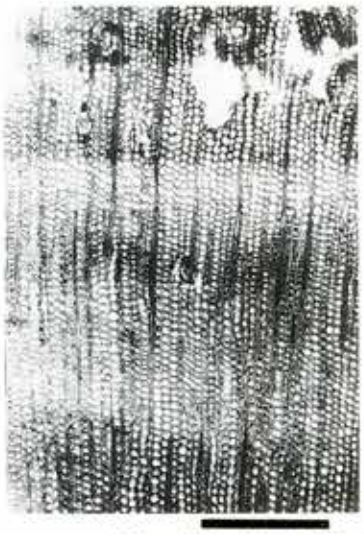
出土種実（スケールは 1 mm、1、4は 1 cm）

1．アラカシ、果実　2．アラカシ、花柱　3．タワ属、種子　4．カキノキ、種子　5．アワ近似種、穎　6．イネ、籾　7．イヌビエ近似種、穎　8．スゲ属A、果実　9．スゲ属B、果実　10．ナデシコ科、種子　11．コナスビ、種子　12．カタバミ属、種子　13．シソ属、果実　14．タンポポ亜科、果実　15．不明A　16．不明B

1 a．アカマツ（横断面）
SK108杭　No.12　bar：0.5mm

1 b．同（接線断面）bar：0.2mm

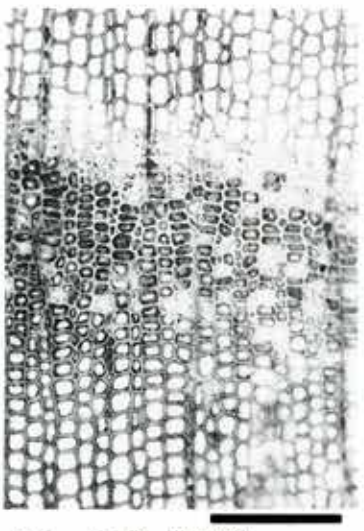
1 c．同（放射断面）bar：0.1mm



2 a．マツ属複維管束亜属（横断面）
SK108杭　No.10　bar：0.5mm

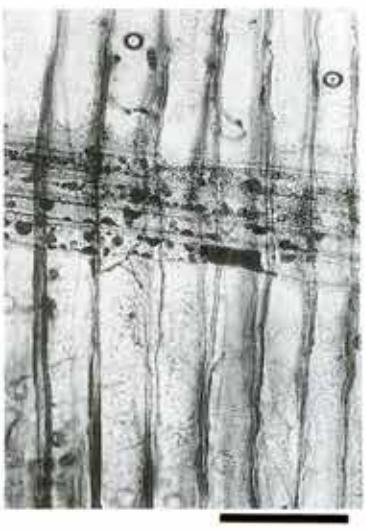
2 b．同（接線断面）bar：0.2mm

2 c．同（放射断面）bar：0.1mm



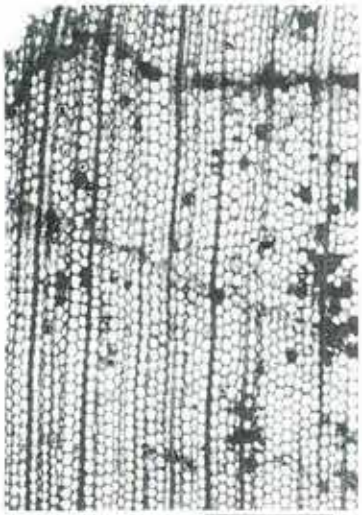
3 a．モミ属（横断面）
SP1346板　No.50　bar：0.2mm

3 b．同（接線断面）bar：0.2mm



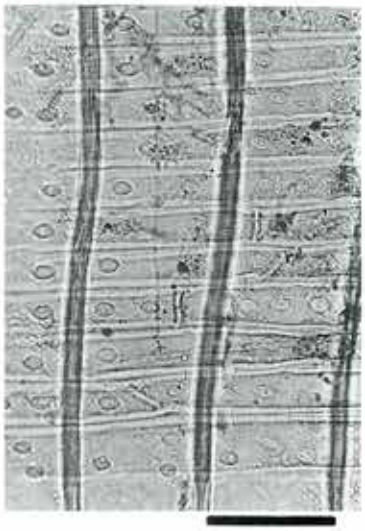
3 c．同（放射断面）bar：0.1mm

図版 26　出土木材樹種の顕微鏡写真

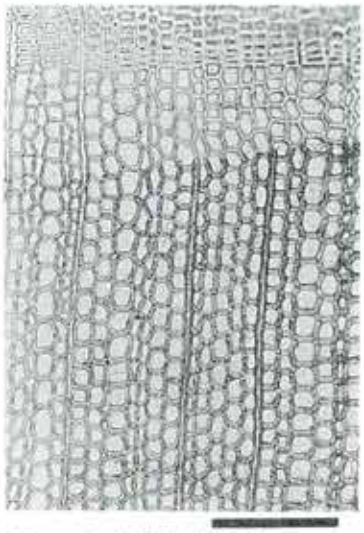


4 a．スギ属（横断面）
SK108建築部材　No.8　bar：0.5mm

4 b．同（接線断面）bar：0.2mm

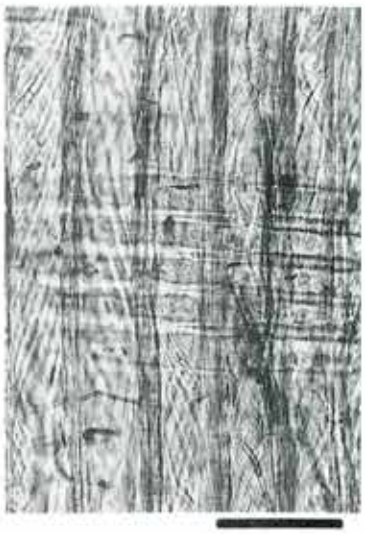


4 c．同（放射断面）bar：0.05mm

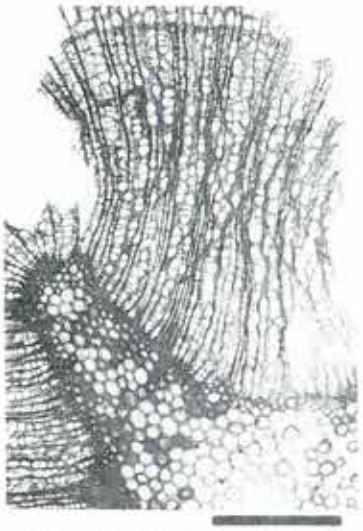


5 a．ヒノキ属（横断面）
SK108板　No.9　bar：0.2mm

5 b．同（接線断面）bar：0.2mm



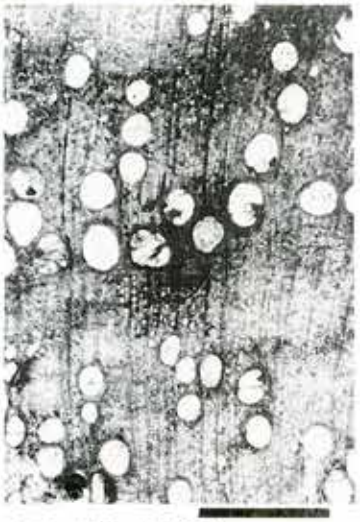
5 c．同（放射断面）bar：0.05mm



6 a．ハンノキ節（横断面）
SE 4 木片　No.47　bar：0.5mm

6 b 同．（接線断面）bar：0.2mm

6 c．同（放射断面）bar：0.1mm

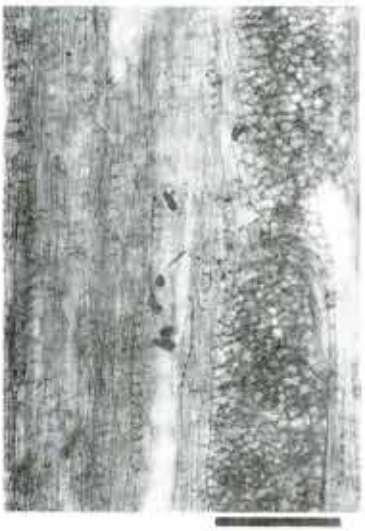


7 a．クリ（横断面）
SP1400杭　No44　bar：0.5mm

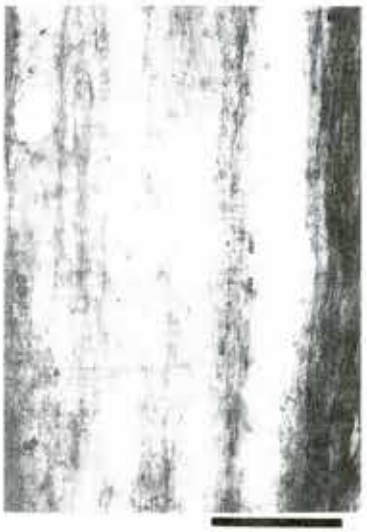
7 b．同（接線断面）bar：0.2mm

7 c．同（放射断面）bar：0.2mm

8 a．アカガシ亜属（横断面）
SP1399杭　No49　bar：0.5mm



8 b．同（接線断面）bar：0.2mm



8 c．同（放射断面）bar：0.2mm

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもはばえいせき
書名	下巾上遺跡
副書名	国道156号線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	小野木学，佐野康雄，藤田英博
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒500　岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）Tel058(264)1111(814)
発効年月日	西暦1995年10月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
下巾上遺跡（しもはばえ）	岐阜県美濃市（ぎふけんみのし） 大字松森字下巾上（おおあざまつもりあざしもはばえ）	207	G27M 08717	35° 31′ 28″	136° 54′ 40″	19940609 ～ 19941220	2,200㎡	国道156号線道路拡幅工事に伴う。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下巾上遺跡	集落跡	鎌倉時代 室町時代 江戸時代	掘立柱建物 柵列 井戸 集石墓 土坑	山茶碗 古瀬戸陶器 中国磁器 瀬戸美濃陶磁器 肥前陶磁器 常滑陶器	

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第24集

下　巾　上　遺　跡

国道156号線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書

1995年9月25日　印刷
1995年10月1日　刊行

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）
印　　刷　西濃印刷株式会社

「下巾上遺跡」報告書正誤表

以下の点に関して誤りがありました。訂正をお願いします。

ページ	訂正箇所	誤	正
4	6行目	もの思われる	ものと思われる
67	第52図	構セクション図	溝セクション図
110	5行目	SK30	SX30
139	3行目	補則資料	補足資料
144	下から9行目	調整している	調査している